に設けられたものであつて、儒書には黒印、佛書には朱印を捺して區別した。

鎌倉時代の佛教　源平合戰以來は、榮枯盛衰定めなき世となり且つ簡素を尊ぶ時勢に應じて、佛教にも平易な新宗派が起つた。高倉天皇の御代、法然は淨土宗を開いたが、その弟子親鸞は、淨土眞宗（一向宗）を唱へ、共に未來の信仰を說いて專ら念佛を敎へ、殊に親鸞は僧侶の肉食妻帶を許し、その女曾信尼は東・西本願寺の基を開いた。後深草天皇の御代に至つて、日蓮は法華宗を創めて法華經の功德を說いたが、何れも入り易くして當時の民情にかなひ次第に民間に行はれた。

この頃また宋から禪宗が傳へられた。その臨濟派は、後鳥羽天皇の御代榮西により、曹洞派はその弟子道元によつて齎らされた。禪宗は概して眞理を研究し、精神を鍛練することを主としたから、貴族や武士の社會に喜ばれ、特に臨濟派は幕府の保護を受けて榮え、京都・鎌倉に多くの禪寺が建立されたのである。

○久遠寺　日蓮の開いたもので山梨縣身延山にある。

○智恩院　法然の開いたところで京都市にある。

○永平寺　道元の開いたもので福井縣吉田郡にある。

美術工藝の新傾向　建築界では禪宗の渡來と共に、新たに宋風の寺院建築が取り入れられ、實用を主とする武家造も行はれた。彫刻では運慶・湛慶父子が名高く、勇健な大作を殘し、繪畫は軍事を描いた繪卷物、肖像畫などの大和繪が行はるゝことゝなり、土佐光長・藤原隆信、その子信實などは、繪畫の名手として知られた。また時代の必要に伴つて、武器の製作が進み、粟田口吉光・岡崎正宗などの刀鍛冶が出づるや、日本刀の精妙古今に比類なしと稱せられ、甲冑の製作では、明珍家が著はれた。また僧道元と共に入宋した加藤景正は、歸朝の後瀨戸燒を創め、陶磁器の製法も著しく進歩の跡を見せた。

第三節　北條氏の越權

幕府の專權　北條時政は、源氏の外戚として、早くから幕府の重要な政務に與つたが、後には幕府の執權として、獨り權勢を擅り專橫の振舞も少くなかつた。その子義時に至つて、源氏の正統が絕えたから、源氏に緣故ある藤原頼經を、京都から迎へて將軍にいたゞき、北條氏は執權として依然政治を私したが、この後將軍は有名無實となり、北條氏が權を專らにするに至つた。

承久の亂　當時京都では後鳥羽上皇が院政を行はれたが、かねて政權を朝廷に回復せんと志し給ふ折柄、義時が勢ひを恃んで屢々上皇の御旨に叛き奉つたから、順德上皇と御謀らひの上、承久三年義時追討の院宣を下し給ふに至つた。こゝにおいて義時は弟時房、子泰時等に大軍を授けて、京都に攻め上らしめた。このとき泰時は大義を說いて、父義時を誡めたけれど、義時はこれを用ひずして古今にその例なき惡逆を行つた。承久の變といふのがこれである。即ち御企てに與つた人々を刑し、更に後鳥羽上皇を隱岐に、順德上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に遷し奉り、亂後一族を京都に留めて、京都及び關西を鎭護せしめた。これが六波羅探題の始めである。

泰時等の民政　義時に次いで泰時が執權となるに及びよく民を愛し、最も公正なる政を行つた。即ち幕府の政所に評定衆を置いて、政務を評定せしめ、後堀河天皇の貞永元年には、貞永式目五十一ヶ條を定め、後の武家法制の模範となるやうな制度を立てた。泰時の孫時頼もまた、勤儉公正にして深く心を民政に注いだから、天下は安穩に治まつた。義時に惡逆の行ひがあつたに拘らず、北條氏がよく民心を收めて政權を保つことを得たのは、是等の民政によるもので、國は富み兵は强く、元寇の國難を攘ひ得たのも、一は人々が北條氏の威令に服した結果である。なほ時頼のとき藤原氏出身の將軍を廢し、京都から後嵯峨天皇の皇子宗尊親王を迎へて、將軍に仰ぎ奉つたのも、泰時執權のときであつた。

○後鳥羽帝仙宮の跡　島根縣隱岐島島前の海士村にある。

○順德帝の御火葬場　新潟縣佐渡島の眞野村にある。

蒙古の來寇　土御門天皇の御代、今の蒙古地方に起つた蒙古族は、後その王世祖忽必烈の代に至り、亞細亞から歐羅巴にわたる廣大な領土を統べ、東は高麗を從へ、南は宋を壓し、龜山天皇の御代遂に我國にも國書を送つて入貢を促した。ときの執權北條時宗は、斷然これを斥け、兵備を整へてその來寇に備へた。蒙古はやがて國號を元と改め、後宇多天皇の文永十一年、高麗の兵をあはせ、對馬・壹岐を經て、筑前の博多に迫つた。ときに少貳・大友・島津・菊池等九州の豪族は、奮戰してこれを防いだが、たまたま大風吹き起り、敵艦は多く海に沈んだ。これが文永の役である。此後時宗は、燃え立つ如き國民の意氣に投じて、異國征伐をさへ企てたが、やが

て弘安四年、元は再び來寇した。我將士は力戰して一歩も上陸せしめず、却つて奇襲を加へ敵艦を苦しめつゝある間に、またもや神風が吹き荒れて、敵軍は殆んど撃滅せられた。これが弘安の役である。元の來寇は實に我國未曾有の大國難であつたから亀山上皇・後宇多天皇は痛く叡慮を惱ませ給ひ、畏くも亀山上皇は、御身を以て國難に代らんことを、伊勢神宮に祈らせ給ふたが、時宗の果決と、將士の勇武と國民憂國の至誠とはよく天に通じて遂に強敵を挫いた。然しこれがため幕府の財政は亂れ、北條氏の勢ひが漸くさ

蒙古塚

衰へるやうになつた。

○蒙古塚　福岡縣糟屋郡志賀島にあり、我軍が蒙古人を斬り埋葬して祭つたところである。

兩統迭立　曩に亀山天皇は、御父後嵯峨天皇の御意を承け、御兄後深草天皇の讓りを受けられ、後に御位を御子後宇多天皇に傳へ給ふた。この御血統を大覺寺統と申すのである。然るに後深草上皇は御不平であらせられたから、幕府の計らひを以て、上皇の御血統をも皇位にのぼし奉ることゝし、これを持明院統と申した。かくて皇統は二つに分れ、朝臣も自から二派の別を生じて、自然その間に爭ひを惹起したから幕府もこれが處置に窮し、執權北條貞時は、己むなく兩皇統が交る〳〵御位に即き給ふことゝした。當時藤原氏の攝關家もまた近衞・九條・二條・一條・鷹司の五家に分れ、これを五攝家と稱したが、その勢力も著しく衰退した。

第四節　建武中興

後醍醐天皇　第九十六代後醍醐天皇は英明にわたらせられ、豫て北條氏が、陪臣にして政權を專らにすることを憤り給ひ後鳥羽上皇の御志をついで、政權を朝廷に回復せんと思召

された。時に鎌倉幕府は、元寇以來財政は困難となり、人心も漸く離れつゝあつたが、たま〳〵執權北條高時は、遊樂を事として政治を顧みず、これに乘じて正中元年、日野資朝等の朝臣は討幕を企てたけれど失敗に終つた。その後幕府は立太子のことについて、勅命を奉じなかつたので、天皇はいよ〳〵御憤り遊ばされ、遂に北條氏討伐を企て給ふに至つた。これを知つた高時は大いに驚き、二階堂貞藤の諫をも用ひず、元弘元年大兵を上京せしめ、天皇を笠置の行宮に攻め奉り、翌年畏くも隱岐に遷し奉つた。

護良親王　時に河内の豪族楠木正成は、勅命を奉じて赤坂城に義兵を擧げ、天下に先んじて勤王を唱へ、笠置を陷れて群り來る賊の大軍を引きうけ、千早城に立籠つて大いにこれを破つた。この間に皇子護良親王もまた、吉野に據つて四方に令し、勤王の軍を募らせ給ふた。

○千早城址　大阪府南河内郡千早村にある。

勤王の士興る　茲において肥後の菊池武時をはじめ、諸國に勤王の士が起り、後醍醐天皇も伯耆に移り給ひ、名和長年をたよつて船上山を行宮と定められた。

北條氏滅亡　次いで賊將足利高氏も、官軍に降つて京都の六波羅を陷れ、また新田義貞も義兵を上野に擧げ、三方から鎌倉を攻めて北條氏を滅ぼした。ときに元弘三年にして、鎌倉幕府は頼朝以來約百四十年で滅亡した。

○生品明神　群馬縣新田郡生品村にあり、新田義貞がこの社頭で義兵を擧げたところである。

○東勝寺址　神奈川縣鎌倉町にあり北條氏が滅亡したところで、高時の墓と傳へられたものも林間にある。

建武中興　後醍醐天皇は、六波羅陷落の報を得られて行宮を發し、兵庫より楠木正成を先頭に京都に還幸あらせられた。かくて記錄所を置き、親臨して政を御聽きになり、雜訴決斷所を設けて、領地に關する爭を裁判させ、武者所を置いて武士を監督せしめられた。同時に護良親王を征夷大將軍に任じ、地方の國司を再興して、北畠顯家を陸奥守とし、皇子義良親王を奉じ奥羽に赴かしめ、足利直義を相模守に任じ、皇子成良親王を奉じて關東を治めしめ給ふた。然るに公卿と武士との間に兎角意見の一致を缺き、新政の實行は進まず、久しく武家政治に馴れて大義名分に暗き者は、新政を喜ばずして、却つて武家政治を慕ふに至つた。

足利尊氏　此時に當り、足利尊氏はその身源氏より出て、東國

に勢力あるを幸ひ、武家政治再興の野心を抱き、建武の政治に不平ある武士を巧みに手なづけ、威望高き護良親王と新田義貞とを除いて、その大望を遂げんと企てた。たまたま建武二年、北條高時の子時行が、信濃に兵を起して鎌倉を攻むるや、相模守であつた尊氏の弟足利直義は、これを防ぐこと能はず、幽閉中護良親王を弑し奉つて西走した。こゝにおいて尊氏は勅命を待たず、東下して時行を破り、新田義貞を除くことを名として兵を集めたが、新政に不平なる武士は響の聲に應ずる如く東下した。朝廷では、義貞に詔してこれを討たしめられたが、義貞は箱根、竹の下の戰に利を失ひ、尊氏は勢ひに乘じてその後を追ひ、京都に攻め上つたけれど、陸奥の北畠顯家が上京し來り、義貞・正成・長年と力をあはせてこれを破つたから、尊氏は身を以て九州さして落ちのびた。

○鎌倉宮　鎌倉にある官幣中社で護良親王を祀る。

○菊池神社　熊本縣菊池郡隈府にある別格官幣社で菊池武時を祀る。

正成の討死　尊氏の九州に走るや、菊池武敏は孤軍義旗をかゝげて、これと筑前の多々良濱に戰つたが、不幸にも利を失ひ勢ひを挽回した尊氏は大兵を集めて瀘陸相ならび東上した。こゝにおいて朝廷では新田義貞・楠木正成等をして、これを兵庫に防がしめることゝなつた。このとき正成は決死の覺悟を固め、攝津の櫻井驛において、その子正行に忠孝の道を諭し、進んで湊川に奮戰し、「七度人間に生れて朝敵を滅ぼさん」と念じながら、忠烈悲壯なる戰死を遂げた。かくて尊氏は京都に入り、天皇はこれを避けて比叡山に行幸あらせられたが、間もなく長年等も戰死し、中興の大業が空しく壞滅に歸してしまつた。

湊川神社

○湊川神社　神戸市にある別格官幣社で楠木正成を祀る。

○櫻井驛址　大阪府三島郡島本村にあり、楠公父子訣別の跡である。

○名和神社　鳥取縣西伯郡御來屋にあり名和長年を祀る別格官幣社である。

第五節　吉野朝廷

南北兩朝　尊氏の入京するや、光明院を立てゝ天皇と稱し奉り、欺いて後醍醐天皇に奏し、神器を光明院に傳へ給ふやう請ひ奉つたから、延元元年天皇は神器を奉じて私かに吉野に行幸せられ、行宮を定めて政を執り給ふことゝなつた。かくて天下に二君を戴く姿となり、吉野の朝廷を南朝と稱し奉り、足利氏の奉ずる京都方を北朝と稱した。これより宮方と稱する勤王軍と、尊氏に味方する武家方とが相對し天下の形勢は自から二分して互に相爭ひ、戰亂は五十七年の久しきに及んだ。

○新田塚　新田義貞戰死のところで、福井縣吉田郡西藤島村にある。

勤王軍不振　これより先新田義貞は勅命を拜し、皇太子恒良親王を奉じて越前の金ヶ崎城に入り、一時勢を振つたが、やがて斯波高經等の賊軍に攻められて城は陷り、親王は捕へられて後害せられ給ひ、義貞も亦藤島に戰死した。陸奥の北畠顯家もまた、義良親王を奉じて西上し、京都の回復に努めたが和泉の石津に戰死した。かゝる間に後醍醐天皇は御病にかゝり、遂に吉野の行宮で崩御あらせられた。

新田塚

○塔尾御陵　奈良縣吉野にあり後醍醐天皇を葬り奉る所である。

楠正行の戰死　後醍醐天皇につぎ、南朝にては皇太子義良親王が御立ちになつて、後村上天皇と申し奉つた。このときに當り、楠木正行は、一族を率ゐて行宮をまもり、菊池武光は、征西將軍懐良親王を奉じ、北畠親房もまたさきに東國の經營に力をつくし、陣中に神皇正統記を著はして、我國體を明かにしたが、後ち吉野に還り、天皇を輔け奉り、正行と力を合せて京都の回復を圖つた。かくて官

軍の勢は再び振つたが、正平三年高師直等が大軍を率ゐて南下したから、楠木正行はこれと河内の四條畷に戰つて戰死し、次いで吉野も侵されたから、天皇は賀名生に御遷りになつた。一方九州では、菊池武光が懐良親王を奉じ、少貳・大友等の軍を大保原に破つたが、その後再び振はず、かゝる間に吉野朝の石北畠親房は薨じ、官軍の勢ひは殆ど地を拂ふに至つた。

加名生行宮址

○四條畷神社　大阪府北河内郡四條畷村にあり、楠木正行を祀る別格官幣社である。

○賀名生行宮址　奈良縣吉野郡賀名生村にある。

南北合一　後村上天皇の次に、長慶天皇・後龜山天皇が御立ちになつたが、その間に京都では尊氏は病死し、子義詮を經て孫義滿に至り、元中九年後龜山天皇に奏して、京都還幸を請ひ奉つた。天皇は久しきにわたる天下の戰亂を治め、萬民の苦みを除かんとの思召により、義滿の請ひを許して京都に還幸あり、皇位を後小松天皇に讓り、神器を御傳へ遊ばされたので、こゝに南北兩朝の合一が成立された。

第六節　室町時代

室町幕府の制度　尊氏は恣に征夷大將軍と稱し、幕府を京都に開いて武家政治を再興したが、後龜山天皇御還幸の後、義滿は征夷大將軍として、室町の幕府において政治を行ひ、山名氏清等の豪族を抑へ、足利幕府の基を定めた。即ち將軍を輔佐する管領は、足利氏の一族なる斯波・細川・畠山の三氏より任じて三管領と稱し、その下に政所・侍所・問注所を置き、中にも侍所の權は最も重く、その長官たる所司を赤松・山名・京極・一色の四氏より補して、これを四職と稱した。地方には、鎌倉に關東管領を、奥羽と九州とには各探題を置いたが、諸國には舊の如く守護・地頭があつてこれを支配し、その權は年と共に加はつて、支配地の領主の如き有樣となつた。

足利義滿　義滿は將軍職をその子義持に讓り、次で太政大臣に任ぜられたが、大小の政務は依然として自から決した。然かも勢ひに任せて驕奢に耽り、相國寺を建て、金閣を營み、朝臣を見ること宛ら家人の如く、大義名分を紊ることも少くなかつた。殊に財用の不足を來すや、明と交通を開いて貿易の利を收め、明主から「日本國王」の尊號をうけ、これに對して臣禮を執り、また從來朝廷を稱し奉る公方なる尊稱を、將軍自身に用ひるなど、僭越極まる行ひが次第に募つた。

金閣寺

○金閣　京都市にあり義滿の別莊であるが、その死後鹿苑寺となり、三層の金閣のみが今に殘つてゐる。

永享の亂　もと足利氏は、朝廷に叛いて權力を握り、諸將に多くの領地を與へて手なづけたから、將士は恩に馴れ功に誇り漸く幕府の命を輕んずるに至つた。殊に關東管領家は、次第に威望を加へて、遂に自から將軍たらんと企て、先きに管領足利滿兼は、兵をあげて義滿を討たんとしたが、滿兼の子持氏の如きは、僧職をやめて將軍職をついだ義教と合はず、その命に叛いて事毎に幕府に反抗した。**執事上杉憲實**は、屢々これを諫めたが、持氏は聞かず、却つて憲實を殺さんと計つたから、義教は勅をうけて持氏を滅ぼした。時に後花園天皇の永享十一年であつたから、これを永享の亂といひ、關東の固めが先づ崩れ、天下動亂の源がこの間に起つた。

嘉吉の亂　かくて義教は、更に權臣を壓へて幕威を確立せんと計つたから、赤松滿祐は自から安んぜず、遂に義教を弑し、兵をあげて山名持豐等に討ち滅ぼされた。これが嘉吉の亂で幕府の實力は漸く衰へはじめた。

第七節　足利氏の外交と室町の文化

明との交渉　元寇の後、元との國交は暫く絶えたが、足利尊氏に至つて、僧疎石（夢窓國師）の言を用ひ、後醍醐天皇の御追福のため、京都に天龍寺、諸國に安國寺を營み、貿易船を

元に遣はして、その利益を收め天龍寺建立の費用に充てたので、この貿易船を天龍寺船と稱した。其後元が滅び明が起るや、足利義滿はこれと貿易して財用の不足を補ひ、外交上の失態をも惹起した。その子の義持に至つて一時明との交通を絶つたが、將軍義教に至つてまたその國交を復し、義政は自から臣と稱して、明より錢を求めるやうな不面目を敢てした。當時幕府の使者は、明より送られた勘合符を攜へたが、後には諸侯、社寺、富商なども、幕府よりこれを貰ひうけ、明と交通する者が多く現はれた。かくて明との交通の結果として學術の發達、美術工藝の進歩など、文化の發達に資するところが少くなかつたのである。

○天龍寺　僧疎石の開いたもので京都市嵯峨にあり、同寺に疎石の畫像をも藏してゐる。

倭寇　當時我國民の海外發展の意氣は盛んにして、吉野朝以後國内の亂に乘じ、相率ゐて元及び高麗に渡り、若し通商を妨げられる場合は、實力に訴へて沿海地方を荒し、後には彼の國の亂民もこれに加はつて、その害が著しくなつた。そのため、支那人は彼等の乘船を八幡船と呼び、その沿岸に出沒することを倭寇と稱して大に恐れた。元が滅び明の起るに及び、書を我征西府に送り、八幡船を禁絶せんことを求めたが更にその効がなかつたから、後には利を以て將軍足利義滿を手なづけ、辛うじてこれを制することが出來たのである。將軍義輝の頃明軍に破られてより、倭寇の勢ひは衰へたが、我國民の海外に渡るものは却つて多く、遠く南方諸國にも移住するに至つた。

○倭寇船　旗艦と攻擊艦と斥候船の三種があつた。

朝鮮半島との交通　高麗は、早くから元に屬したが、元の日本遠征に加はつてからは財政が亂れ、加ふるに倭寇の侵入を受けて、國力は次第に衰へた。これに乘じて後龜山天皇の御代李成桂は高麗を滅ぼして王となり、國號を朝鮮といひ、京城に都をさだめた。次いで我國にも使を送つて交りを結んだが稱光天皇の應永二十六年、倭寇の根據を覆滅せんとして、急に大軍を送り對馬を攻めた。時に鎮西探題澁川義俊等はこれと戰つて敗走せしめたので、その後の朝鮮は專ら和親を旨とし、我國は對馬の宗氏をして、日鮮交通の局に當らしめることゝなつた。

○烽火臺　朝鮮京畿道水原にあり、烽火によつて首都京城に警報を傳へたものである。

紅毛人の來航　此頃歐洲大陸においては、通商・航海の業が大いに進み、殊に西班牙・葡萄牙の二國が最も發達してゐたが後奈良天皇の天文十二年、葡萄牙の商船が、大隅の種子島に來り鐵砲を傳へ、島主種子島時堯の手によつてこれが四方に傳はり、後ち大砲も輸入せられて、我國の戰術、築城の上に著しい貢献を與へた。次いで西班牙人もまた來航し、天文十八年にはその宣教師サヴィエルが來航して、鹿兒島・平戸博多・山口・京都・大分などに基督教を弘めたが、我國ではこれを切支丹宗、天主教などゝ稱し、江戸時代の初期にかけて、歸信するものが次第に多くなつた。當時南蠻人と稱したのは、是等の外國人の總稱である。

美術工藝　室町時代は戰亂打ちつゞき、兎角世の中が亂れ勝ちであつたが、足利氏は尊氏から義教まで、代々佛教に歸依し或は文藝を好んだ關係上、美術工藝は衰へなかつた。特に義政は多藝にして奢侈を好み、將軍職をその子義尚に譲つて以來は世の大亂をも顧みず、東山に別莊を構へ、茶室や銀閣などを營み、風流の遊びに耽つたので、美術工藝は著しく發達した。世に東山時代と稱せられるのはこの時代である。特に明との交通が行はれるやうになつてからは、繪畫に清淡な支那畫風が取り入れられ、將軍義政の頃、明から歸つて妙技を揮つた僧雪舟の如きはこれを代表したが、その畫風と、土佐光信により中興せられた土佐派の大和繪とを調和して、狩野元信は狩野派を開いた。また茶の流行と共に、陶磁器、漆器の製法も進歩し、山田祥瑞は明の製法を傳へて唐津燒を創め、其他においても陶器は各地に製出せられた。漆器では蒔繪の術が進歩して、明にまさるものを作り出した。この外後藤祐乘は、刀劍裝具の彫刻に巧妙を極め、後世金工の祖と稱せられるに至つた。

宗教と學藝　禪宗は前代の後を承け、室町時代にも武士に喜ばれ、尊氏は天龍寺、義滿は相國寺を營み、支那の風にならつて、京都・鎌倉の禪寺には、五山の制が定められた。五山の僧徒は、支那に往來して、海外の事情に通じ、また學藝に長ずるものが多かつたから、政治、外交の顧問として幕府に重く用ひられた。文藝方面では義堂・絶海など、その作品は支那人を驚かすに至り、後世五山文學と稱せられたが、遂に僧侶が教育にも携はつて寺子屋の名を起した。然かし一般に武士、平民の好みが著しくなり、民間には眞覺七世の孫兼壽（蓮如）により一向宗が弘められ、法華宗も廣く行はれた。

和歌には太田道灌の如き名人も現はれたが、それよりも連歌の流行が盛んで、宗祇の如きはその達人であつた。義滿以後能樂・狂言・幸若舞などが盛んに行はれ、これに伴づて謡曲舞の詞などが新しく作られた。公卿出身の學者としては、一條兼良が名高く、上杉憲實は武士の出身にして、關東文運の興隆に力をつくした。

室町時代の武人生活　室内に疊を敷き、善美な調度を整へ食膳には珍味を盛り、主客共に立烏帽子に素襖をつけ、垂髪の侍女が酌をするといふ有樣であつた。

風俗　當時の風俗は一般に奢侈を極め、遊藝が盛んに行はれたが、禪宗の感化をうけ、淡泊にして上品な風が喜ばれた。家屋には玄關、床間を設け、疊を敷きつめ襖、障子を立て、或は趣ある庭園、茶室などを設けることが流行し、次第に現今の住宅建築に近づいて來た。衣服は素襖、袴から次第に短くなつた。また茶湯、香合、生花などの遊藝が行はれ、今日の禮式、作法もこの當時に定まつたものが多いのである。

第八節　室町幕府の末路

足利義政　足利義政は、年十五で將軍職を繼いだから、畠山持國・細川勝元・山名持豐等の權臣は、將軍の幼冲に乘じて互に勢ひを振ひ、權威は次第に衰退を來した。殊に義政は、成長の後も柔弱にして奢りに耽り、飢饉や惡疫の流行になやむ國民の困苦をも顧みず頻りに重稅を賦課し、或は貸借をすべて無效ならしめるため、德政と稱する暴令を屢々出した。後花園天皇は御製の詩を賜り、暗に義政を諭し給ふたが、更らにその効がなかつた。

應仁の亂　義政には後を繼ぐべき子がなかつたので、弟義視を養子と定め、細川勝元をその後見とした。然るに後に至り實子義尙が生るゝや、義政の妻富子は、これを山名持豐に託して、世嗣たらしめんと計つた。當時管領家の畠山・斯波兩家にもまた、家督の爭ひがあり、各々勝元・持豐に款を通じて味方に引き入れ、諸將もこれに分屬したから、天下の勢ひが自から二分した。かくて後土御門天皇の應仁元年、勝元の兵十六萬、持豐の兵十一萬は、京都の東西に陣戰を開き、兩軍戰ふこと六年に及び、其間持豐・勝元相ついで病死し、義政も將軍職を子義尙に讓つた。然かも職はなほも續いたが、餘勢は何時しか地方にも擴がつたので、諸將はその領國を保つ必要を感じ、文明九年に至り皆兵を收めて歸國した。

これが應仁の亂である。

地方の形勢　應仁の亂は、社會の面目を一變せしめた。即ち前後十一年間兵亂の巷となつた京都は、榎ね兵火にかゝつて、飯尾彥六が「なれ知るや都は野べの夕雲雀あがるを見てもおつる涙は」と歌つた如く一面の燒野となり、朝廷は衰へ、公卿、町人は地方に下り、幕府の威信は全く地を拂つた。これに反して地方諸侯の權勢が重くなり、堺・兵庫・大津・小田原・山口・博多などの都市が次第に榮えて、地方分權の勢が著しくなつた。

第九節　群雄割據

戰國の世　應仁の亂を契機として、足利幕府の權は全く地に落ち、義尙・義稙・義澄・義晴・義輝・義榮などの將軍が、相ついで立つたが時既におそく、山城一國を統御することすら困難となり、天下の實權は管領家の細川氏、細川氏の家臣三好氏、三好氏の家臣松永氏といふ順序に、次第に下にうつり、所謂下剋上の風をなし、諸侯はその領國に割據して、兵を練り勢ひを張り、戰爭攻伐を事とし、兵亂の相つぐこと百餘年に及んだ。世に戰國時代といはれるのはこの當時のことである。

皇室の御式微　此時に當つて朝廷では後土御門・後柏原・後奈良・正親町の四天皇が相ついで御立ちになつたが、幕府には皇室の御費用を奉る資力なく、その上御料地は荒くれ武士に掠められて、畏くも日常の供御にすら事缺かせられ、皇居は荒れたるまゝ繕ふことなく、各種の御儀式も廢れ、即位大葬の御大禮さへ大御心に任せられなかつた。

歴代天皇の御仁愛　かゝる際にも御歴代の天皇は、專ら萬民をあはれませ給ふた。即ち御土御門天皇は、應仁の亂中屢々世の安穩を社寺に祈らせられ、後奈良天皇は、御窮乏の最も甚しい御中に、飢饉や惡病に惱む國民の苦痛を除かんと、御親から經文を寫して、災を祓はんことを御祈りになつた。されば斯かる世にも、諸侯の中には心を皇室に寄せ奉るものが現はれ、後柏原天皇は三條西實隆等の盡力により、後奈良天皇及び正親町天皇は、それ〴〵大内義隆・毛利元就の獻金によつて、御即位の大禮を擧げさせ給ふた。君民一體の國體の美風は、かゝる時によく發揮せられ、天壤と窮まりなき皇基は、聊かの動きもなく、織田信長の入京を待つて、尊皇の實は大いに揚げられたのである。

北條早雲　曩に關東管領の滅亡するや、その一族は下總の古河と、伊豆の堀越とに分れて、互に公方と稱し、上杉氏もまた山内・扇谷の兩家に分れて相爭ふことゝなつた。此間に乘じて、小身から身を起した北條早雲は伊豆を略し、相模を取つて小田原城に據つた。子の氏綱、孫の氏康等もまた武略に長じ、よく遺業をついだので、間もなく關東の大部を併せたのみでなく、民政に留意して產業を興し、小田原は當時東國第一の賑盛な都市となつた。

○春日城址　新潟縣中頸城郡春日村にあり、上杉氏代々の居城の跡である。

謙信と信玄　時に北條氏に逐はれた上杉憲政は、越後の舊臣長尾輝虎に賴つて、關東管領職を上杉氏に讓つた。然るに甲斐には武田晴信あり、信濃に攻め入つて、上杉氏と衝突するに至り、川中島の戰となつた。この戰では當時天下の名將と稱せられた兩雄が、知謀を傾けて戰つたが、遂に勝敗決せず、互に軍を收め、其後輝虎は北國を從へて西上せんと企て、晴信もまた東海道筋を上京せんとしたが、共に病死して望を果さなかつた。輝虎は後の謙信、晴信は信玄である。

○武田信玄の墓　山梨縣東山梨郡松里村にある。

桶狹間の戰　當時駿河には今川義元あり、豫て上京の志を抱いてゐたが、永祿三年、大軍を進めて尾張に入り、桶狹間附近に陣を取つた。時に尾張の織田信長は、斯波氏の家臣から起つて勢ひを得、義元の不意を討つてこれを殺し、俄に勇名を轟かし、これに反し今川氏は次第に衰じに傾いた。

中國の形勢　中國地方では、山名氏に代つて、出雲に尼子氏が起り、屢々周防の大内氏と戰つた。これより先大内氏は領地廣く、且つ明・朝鮮と通商して利を占めてゐたから、その城下山口は一時頗る繁昌してゐた。然るに義隆に至り、富强にまかせて文事に耽り武備を怠り、遂に家臣陶晴賢のために弑せられた。間もなく安藝の毛利元就は、弘治元年義兵を擧げて、晴賢を嚴島に攻め殺し、大内氏の舊領を併せ、次いで尼子氏をも攻めてこれを降した。

○月山城址　島根縣廣瀨町にあり、尼子氏の居城であつたが、後ち毛利氏のため攻略された城址である。

四國・西國の形勢　四國では、管領家の細川氏が衰へ、土佐から起つた長曾我部元親が、殆んど四國の大部分を從へた。九州では肥前に龍造寺氏が興り、豐後の大友氏、薩摩の島津氏なども、附近の地を併せて各勢力を張つた。

第十節　織田・豐臣二氏

信長の上落　英雄が四方に起り、互に攻略を事とするや、正親町天皇は、信長の武略を賴母しく思召し、永祿十年勅使を下して、御料地回復の大命を降し給ふた。信長は大いに感激し蒲々上京の準備中、たまゝ前將軍義輝の弟義昭が賴つて來たから、翌十一年これを奉じて上京し、さきに幕政を亂した三好・松永の徒を逐ひ、御所を修理し、御料を献じ、京都を復舊し、やがて義昭は將軍に任ぜられた。

近畿平定　京都を定めた信長は、近畿の平定に力をつくし、元龜元年德川家康の援を得て、近江の淺井長政、越前の朝倉義景の聯合軍を姉川に破り、次いでこれに味方した比叡山の僧兵を攻めて、寺堂を燒きはらつた。ときに將軍義昭は、信長の威望を嫉み、これを除かんと謀り、却つて天正元年信長のために逐はれ、尊氏が恣に幕府を開いてから、十五代二百三十餘年で足利氏は滅び、信長がこれに代つて、天下に號令することゝなつた。かくて信長は壯大な居城を近江の安土に築き、天正四年こゝに移つた。この間を安土時代と稱するのである。

○安土城址　滋賀縣安土町にあり、城址の二の丸には織田信長の廟がある。

武田氏滅ぶ　甲斐の武田信玄は西上の志を抱き、元龜三年大兵を率ゐて遠江に入り、德川家康を三方ヶ原に破り、進んで三河に入つたが、間もなく病死した。その子勝賴は、父の志業をついで三河に出兵し、織田・德川の聯合軍と長篠に戰つたが大敗した。これに乘じて天正十年信長は、家康と共に甲斐に攻め入り、つひに武田氏を滅ぼした。これと前後して越後の上杉謙信も西上を企てたが、準備中に病死し、養子景勝がその後をつぐに及び、進取の氣勢を失つた。

信長の中國經略　時に中國の毛利輝元は、遙かに上杉・武田二氏と結び、或ひは足利義昭を保護し、信長に對して一敵國の觀を呈したから、信長は部將羽柴秀吉に命じてこれを討たしめた。秀吉は進んで備中の高松城を圍んで水攻めにしたが、やがて毛利氏の大軍が來り援けたので、急を信長に告げ援を求めた。こゝにおいて信長は、自ら秀吉を救はんため、兵を率ゐて入京し、本能寺に陣したところ、先發の部將明智光秀が、急に叛旗を飜し、信長を本能寺に圍んで弑した。時に天正十年である。

○高松城址　岡山市の西方約十二キロの田園の中にある平城である。水攻めにすれば全部水浸りとなる地形となつてゐる。現に當時の守將清水宗治の紀念碑が建てられてある。

山崎の戰　秀吉は尾張の農家に生まれ、信長に仕へてその才能を認められ、次第に重く取立てられた。たま〳〵中國進擊中、高松の陣中において、本能寺の變を聞くや、急に毛利氏と和して軍をかへし、織田氏の宿將のなすなき間に、山崎の一戰で明智光秀を打滅ぼし、主君の弔合戰をした。

賤ヶ嶽の戰　かくて秀吉の威名が俄かに揚るや、柴田勝家はこれを嫉んで除かんと謀つたから、秀吉は近江の賤ヶ嶽に勝家の軍を破り、跡を追ふて越前に入り、遂に勝家を攻め滅した。これより天下秀吉に抗するものなく、信長の遺業は、自から秀吉の手に歸した。こゝにおいて秀吉は、宏大な大阪城を築き、伏見・堺の商人を移して今の大阪市の基を立て、天下統一の業を進めた。時に德川家康は、信長の恩義を思ひ、その諸子の不遇に同情して、織田信雄をたすけ小牧山に據り秀吉の軍と對陣したが、秀吉はこれと戰ふことの不利をさとり、家康と和睦して引揚げた。

○小田原城　神奈川縣小田原町にあり、今は公園となつてゐる。また町の西南には小田原陣のとき、秀吉が本陣を布いた石垣山がある。

秀吉の勤王　秀吉は、天正十三年從一位關白となり、次いで太政大臣に任ぜられ、豐臣の姓を賜はつた。皇恩の厚きに感泣した秀吉は、京都に聚樂第をつくり、天正十六年後陽成天皇の行幸を仰ぎ、御料地を献じ、諸大名をして、皇室を尊び關白の命に服すべきことを誓はしめた。次いで皇居を造營し奉り、皇大神宮を修め、久しく廢れた遷宮の式を復するなど、秀吉の尊王によつて、皇室の尊嚴は漸く恢復せられるに至つた。

聚樂第　聚樂第は城と宮殿とを兼ねた大建築物であつたが今はその一部が西本願寺に殘つてゐる。

秀吉の集權政治　秀吉は從來の諸侯を各地に封じたが、能くこれを統一して集權政治を行つた。卽ち中央に五大老を置いて大事を議せしめ、五奉行を置いて民政を司らしめた。また大判、小判を鑄造して貨幣制度を統一し、全國の土地を調べて、田制や稅制の基礎を確立するなど、從來地方により區々であつた諸制度が漸く統一せられるに至つた。

○本能寺　京都市にあり、今の建物は後世の建築である。

○大阪城　大阪市にあり、現在のものは其一小部分である。

天下統一　其後秀吉は、長曾我部元親を降して四國を定め、上杉景勝を從へて北國を服した。當時九州には、島津義久が勢ひを振ひ、殆ど九州全土を併呑せんとしたから、秀吉は九州に下つてこれを降し、更に天正十八年、大軍を關東に進め、小田原城を攻圍すること百餘日にして北條氏を滅ぼして、その地を收めて、これを德川家康に與へ、江戸をその居城たらしめた。これより先小田原陣のとき伊達政宗以下、奥羽の諸將も來り屬したから、應仁以來百餘年の戰亂も全く收まり、全國平定の業が漸く完成した。

大阪城

第十一節　安土・桃山時代の外交と文化

信長と宗教　信長は延暦寺を燒き、一向一揆を討つて佛教を抑へたが、基督教を保護して京都・安土に教會堂を建て宣教師の布教を許した。さればイスパニヤ・葡萄牙の宣教師は相ついで渡來し、その教は九州・中國をはじめとして、近畿・東北地方にまでも弘まつた。殊に九州は最も盛んで、豐後の大友氏・肥前の大村氏・有馬氏などは、遠く羅馬法王に使者を遣した。是れ我國人の歐洲に渡航した初めである、

○安土の學林　この學林はローマ法皇グレゴリー十三世の寄附によつて安土に建てた基督教の學校で、當時既に音樂も教へてゐたのである。

基督教の影響　基督教の弘まるに伴ひ、西洋の學藝なども傳來し、また外國語も多く用ひられたが、今日の國語にまで訛り傳へられてゐるものが少くない。然かし是等のものゝ中には我國風に反するものあり、また布教を目して、領土侵略の手段なりとする說も行はれたから、秀吉は斷然基督教の布教を禁止した。然かし貿易は努めてこれを奬勵し、葡萄牙の印度

總督と好を通じ、イスパニヤ、比律賓太守や、臺灣などにも使を送つて、入貢を促したから、この刺戟を受けて長崎・堺・京都などの商人は、秀吉の免許を得て、遠く是等の地方に渡り貿易の利を收めた。

朝鮮征伐　秀吉は、明との修交を企て、朝鮮をして兩國の間に交渉せしめんと謀つたが、朝鮮は誠意ある態度を示さなかつたから、武力膺懲を加へる必要を感じ、文祿元年、本營を肥前の名護屋に進め、加藤淸正・小西行長を先鋒とし、大軍を進めて朝鮮を討つた。時に朝鮮は政治が亂れて國勢も衰へてゐたから忽ちにして敗れ、國王は遠く義州に遁れた。また明の援軍も、小早川隆景・立花宗茂等と戰ひ、碧蹄館に大敗した。こゝにおいて沈惟敬なるものをして、我を欺いて和を結ばしめたが、忽ちその不信を暴露し、慶長元年再征の令が下つた。かくて翌年我大軍は再び渡鮮したが、深く內地に攻め入らず、加藤淸正・淺野幸長は、蔚山に籠城して大敵を破り、島津義弘も泗川において大勝を得た。然るに慶長三年、秀吉が病んで伏見に薨じたので、遺命によつて出征の將士を引き上げることゝなり、折角の雄圖も空しく挫折した。かくの如く秀吉の征韓は、その目的を達するに至らなかつたとはいへ、國民進取の氣象を勵ましたのみならず、出征の諸將中には、製陶・織物などの技術家を連れ歸り、各地に工藝の發達を見るに至つた。活字印刷の術も、この役を機として我國に傳はつたものである。尙ほ朝鮮は其後因作相つゞいて、國力回復の暇はなかつた。

○名護屋城址　佐賀縣東松浦郡にあり、海に臨み今は石垣などを存するのみであるが遠く壹岐對馬をも望見する。

○碧蹄館　朝鮮の首都京城府外にある。

○蔚山城址　加藤淸正等の籠城で名高い蔚山城址は今の慶尙南道にある。

桃山の文華　秀吉は晩年に築いた伏見城を、後世桃山城と呼んだので、秀吉の時代を桃山時代と稱するに至つたが、此時は久しく打ちつゞいた戰亂が治まり、美術、工藝が頗る發達した時代であつた。卽ち繪畫には、狩野永德・山樂などが出て健筆をふるひ、聚樂第・桃山城などの建築、彫刻等も著しい特色を現はし、何れも雄大にして花々しく、着想は新奇で男性的な元氣に滿ち、遺憾なくこの時代の精神を反映してゐる。また茶湯が盛んに流行して千利休の如き名人が出で、高臺寺蒔繪の如き、精巧な漆器も製作せられた。高倉天皇　八二　後鳥羽天皇　八三　土御門天皇　八四　順德天皇　八五　仲恭天皇　八六　後堀河天皇　八七　四條天皇　八八　後嵯峨天皇　八九　後深草天皇（持明院統）　九〇　後龜山天皇（大覺寺統）　九一　後伏見天皇　九二　後宇多天皇　九三　後伏見天皇　九四　後二條天皇　九五　花園天皇　九六　後醍醐天皇　（一）宗尊親王　（二）惟康親王　（三）久明親王　九七　後村上天皇　九八　長慶天皇　九九　後龜山天皇　一〇〇　後小松天皇　一〇一　稱光天皇　一〇二　後花園天皇　一〇三　後土御門天皇　一〇四　後柏原天皇　一〇五　後奈良天皇　一〇六　正親町天皇　一〇七　誠仁親王　一〇八　後陽成天皇　（1）量仁親王（光明院）　（2）興仁王（崇光院）　（3）彌仁王（後光嚴院）　（4）緒仁王（後圓融院）　（5）貞成親王　尊良親王　護良親王　興良親王　宗良親王　恒良親王　成良親王　懷良親王

他一般產業も次第に發達したが、殊に金山、銀山などの開發は、西洋風の影響をうけた結果である。

諸家系圖

一　新田・足利兩氏

源義家―義國―
- 新田義重……朝氏―
  - 義貞―
    - 義興
    - 義宗
    - 義鑑
  - 脇屋義助―義治
- 足利義康……貞氏―
  - 尊氏―義詮
    - 義滿
    - 義持―義量
    - 義教―
      - 義勝
      - 義政
  - 直義
  - 基氏

二　足利氏

（將軍家）尊氏―義詮―義滿―
- 義持―義量
- 義教―
  - 義勝
  - 義政

（關東管領）
- 基氏―氏滿―滿兼―持氏

三　織田氏

信長―
- 信忠―秀信（三法師丸）
- 信雄
- 信孝

四　德川氏

源義家―義國―新田義重―義季…松平廣忠―德川家康―
- 結城秀康
- 秀忠―家光―家綱
- 義直（尾張）―
  - 和子（東福門院）
  - 保科正之
  - 綱重―家宣―家繼
  - 綱吉
- 頼宣（紀伊）
- 頼房（水戸）―光圀…齊昭―慶喜（一橋家）

- 光貞―吉宗（八）―
  - 家重（九）―家治（一〇）
    - 重好（清水家）
  - 宗武（田安家）―松平定信
  - 宗尹（一橋家）―治濟―家齊（一二）
- 家慶（一二）―家定（一三）
- 齊順（紀伊家）―家茂（一四）

第四章　近　世

第一節　江戸幕府

關ヶ原の役　豐臣秀吉が薨じて後ち嗣子秀頼はなほ幼少であつたから、德川家康は遺命により、伏見城にゐて政をとり、前田利家は、大阪城に秀頼を補佐した。家康は三河の出身で、新田氏の後と稱せられ、廣大なる關東を領して、實力、名望ともに高く、利家の歿後は殆んど天下の實權を握るに至つた。

これを見て秀吉の信任をうけた石田三成は、上杉景勝・毛利輝元等の同志と謀り、家康を除かんとして、慶長五年關ヶ原の戰が起つた。この役に全國の諸大名は、大抵東西の兩軍に分屬したから、豐臣・德川の興敗を決する天下分目の戰ひとなつたが、結局東軍が大勝して、家康が天下の實權を握ることゝなつた。

大阪冬・夏の陣　關ヶ原の役後秀頼は大阪を居城とし、攝津・河内・和泉の三國を領する一大名となつたが、豐臣氏の舊臣にして、心を秀頼に寄せる者もあり、資力もまた豐かであつたから、家康は内心これを恐れ、豐臣氏を激せしめて、慶長十九年大阪冬の陣を起し、更に翌元和元年夏の陣を起して、遂に豐臣氏を滅亡せしめた。

○關ヶ原首塚　岐阜縣關ヶ原にあり、關ヶ原役當時の東西將士の首級を埋めた塚である。

江戸の開府　これより先慶長八年、家康は征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開き、在職二年餘で、職を子秀忠に讓つて駿府に退き、大御所としてなほ大事を決してゐた。秀忠はよく父の業を守り、次の將軍家光も英明果斷にして、祖父家

康を深く尊信し、その墓を下野の日光山に移して、壮麗な東照宮を營み、よく諸侯を威服し、幕府の基礎をしてますゝ固むるに至つた。

○江戸城　太田道灌が築いたもので、天守を中央にして周圍に諸侯の邸宅あり、天守のある本丸は將軍の居城、西の丸は將軍世子の居城である。

江戸幕府の組織　江戸の幕府には重職として、大老・老中・若年寄の三役あり、大老は大事を總裁するが、必ずしも常置の職ではなく、老中が主として政務を掌り、若年寄がこれを助けた。その下に社寺奉行・勘定奉行・町奉行の所謂三奉行などあり、諸國の社寺の政務、幕府の財政、江戸の市政を分け掌つた。また京都には所司代、大阪・駿府には城代を置き要地を幕府直接の支配となし、地方の大部分は諸大名の領地として領内の自治を許し、所謂封建制度を行づたのである。

諸侯に對する政策　諸大名は、尾張・紀伊・水戸の御三家を始め、德川氏の一族である親藩、井伊氏・本多氏等の如く三河以來德川氏の舊臣たる譜代、家康と共に秀吉に仕へた前田・伊達・島津・毛利諸氏の如き外樣の三種に分たれたが、その配置は周到な注意の下に行はれ、外樣大名は領土は廣大であるが、江戸に遠い地方を治め、且つ幕府の重職に就くことは出來なかつた。その上武家諸法度を制定し、諸大名の築城、婚姻などに制限を加へ、江戸の邸宅に妻子を留め置き、參覲交代の制を立てゝ隔年に江戸に詰めしめ、嚴にこれを勵行したから、封建の制をとりながら、中央集權の實を擧げることが出來た。

第二節　德川氏の外交

朝鮮との交通　文祿・慶長の役後は朝鮮との國交は絶えたのであつたが、家康は對馬の宗氏を介してこれと交渉して國交を復し、朝鮮は新將軍の職につく毎に、慶賀使を來朝せしめること、なつた。其後今の滿洲に清起り、朝鮮をも攻めたとき、朝鮮は我國の援助を受けて、これに對抗せんと企てたこともあつた。

然るに我國では朝鮮の慶賀使を待遇すること厚きに過ぎたので、六代將軍家宣のとき、新井白石の建議によつてこれを改め、將軍家齊以後には、事實上幕府には直接の關接なく、單に對馬の宗家と朝鮮との、單獨交通の如き觀を呈するに至つた。

支那との交通　明と我國との國交は回復しなかつたが、其後明は清のために攻められ、後西院天皇の御代に至つて滅亡した。されば朱舜水・隱元など、明の遺臣にして我國に來り投ずるもの多く、學藝・佛教などに新味を齎したが、清の商人は從前の如く引續き長崎に來航して、生絲、絹織物、陶磁器などを輸入した。

蘭人の來航　當時和蘭も盛んに東洋貿易を營んだが、慶長五年その商船が豐後に來着するや、家康は蘭人ヤン・ヨーステン、英人ウィリアム・アダムス（三浦按針）等の乘組員を江戸に召致して、外交上の顧問とした。かくて慶長十四年以來、和蘭は我國との通商を許され、次いで英人も來航し、平戸において貿易したが、間もなく英人は退去し、獨り蘭人のみが引續き來航した。

山田長政　當時我國民の間に、大いに海外發展の氣運が興り、薩摩の島津家久は琉球を服したが、これと前後して、商人では長崎の末次氏、大阪の末吉氏、京都の角倉氏などを始め、西國の諸大名や社寺なども、幕府から通商許可の朱印狀を受け、御朱印船と稱する貿易船を遠く澳門・安南・暹羅・ジャヴァ・呂宋等に遣はして通商し、日本町と稱する居留地を設けられた所もあつた。これがため外國において、その威を輝かすものさへ現はれた。元和の頃駿河の山田長政が暹羅に渡り、その國難を鎭めて功を立て、寛永の初め、長崎の濱田彌兵衛が、臺灣にゐた和蘭人の專横を懲らし、仙臺の伊達政宗が支倉常長をして、遠く大平・大西兩洋を横ぎり、羅馬に使せしめたのも此頃のことである。

○日本町　今の佛領印度にあつた、軒を並べた日本人の家屋町では、着港した日本船を小船が曳いて入港するのが例となつてゐた。また國王に對しては、邦人が進物を獻じたのである。

外教の禁　家康は秀吉の方針を繼いで、天主教を禁じたが、一方に海外との通商を盛んにしたから、外人の往復も繁く、充分にその目的を達し得なかつた。然るに家光に至り、貿易の利を失ふとも禁教の實をあげんと、明正天皇の寛永十年頃より次第にこれが取締を嚴にし、宗門改を行づて、基督の像を踏ませなどしてその信者を嚴刑に處した。

島原の亂　さればその最も盛んに行はれた島原半島・天草諸島などの信者は、幕府の壓迫を憤り、遂に島原半島の原城によつて、幕府に叛した。これを島原の亂といひ　幕府は老中松平信綱を遣して溯やくこれを平定したが、この後は邦人の海

外渡航を禁じ、天主教に關係なき和蘭人にのみ、長崎の出島に留つて貿易することを許した。かくて鎖國を斷行して、天主教の根絶につとめたが、後ち將軍家宣のとき、新井白石の建言により、長崎における和蘭・清兩國との年々の貿易高を制限し、金銀の海外に流出することを防ぐと共に、鎖國は祖法として、この後長く幕府の對外方針となつた。その結果として國權の確立、思想の統一などには成功したが、國民の進取的意氣を挫き、自から世界の大勢から孤立して、文明の進歩に置き去られる姿となつた。

○原城址　長崎縣南高來郡にある。

○長崎の出島　ヒルトの日本史にも記されて居り、前方の狹い水道が港口となつて居た。

第三節　江戸時代の文化

民衆的文化の特色　江戸時代は、天下が太平で前に元祿時代、後に文化・文政時代の文化を招來した。この中元祿時代は、尚ほ文化の中心が、京都・大阪にあつたが、文化・文政時代には、それが江戸に移つた。この時代を通じて、社會全般の上からいへば、武士が重きをなしたが、產業、交通などは町人を中心として發達し、一般に民力を進め、參覲交代などの制度と相まつて、各地のあらゆる人々が、文化の惠みに浴し、所謂民衆的文化を發達せしめた。

德川氏と佛敎　德川氏は佛敎を保護し、治敎をたすけしむる方針を執つたが、尚ほ法度を定めて、諸大寺をも嚴に幕府の支配下に置き、島原の亂後は、佛敎の力により天主敎を禁絶せんとしたから、佛敎が國敎のやうになつた。然かし明から隱元が渡來して、禪宗の一派たる黃檗宗を傳へた以外には、別に新宗派を立つることもなく、佛敎は昔日の活氣を失ひ、人々を敎化する力を滅殺した。

○萬福寺　京都府宇治にあり、大雄寶殿や山門などは明風の建物である。

學問の復興　家康は學問を好み、學校を建て、古書を集めて保存、出版をはかり、また藤原惺窩及びその門人林羅山などを重用して學問を奬勵した。時に京都の朝廷には、後陽成天皇がおはし、活字を以つて有用の書を印刷せしめ給ふたから、戰國時代以來廢れてゐた學問、敎育が、漸く興隆の氣運に向つた。將軍家光の頃、近江に近江聖人と稱せられる中江藤樹が出て、社會を敎化し、その門人に熊澤蕃山が現はれた。

同じ頃、京都に山崎闇齋・木下順庵が出たが、闇齋は尊皇思想の發達に寄與するところ多く、順庵の門人には新井白石・室鳩巢・貝原益軒などの碩儒が出た。將軍綱吉も學を好み、江戸の湯島に聖堂を起し、羅山の孫林信篤を大學頭に任じ、これを管理して學生の敎授に當らしめた。後の昌平坂學問所がそれである。その後京都の伊藤仁齋、江戸の荻生徂徠などは、何れも學才のすぐれた門人多く、東西名を均しくした。然るに是等の學者の中には、異說を立てゝ互に相爭ふ者もあつたので、將軍家齊のとき松平定信の議により、朱子學を正學として異學の禁を令し、柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里など所謂寛政の三博士を敎官として、昌平坂學問所の根本方針を確立した。

國文學　元祿の頃僧契沖が、古語を研究して國學を興し、同じ頃北村季吟は、歌文に長じて幕府に用ひられ、この外小說には井原西鶴、戲曲には近松門左衞門、俳諧には松尾芭蕉などが出るに及び、平民文學が大いに發達した。文化・文政の頃には、小說が盛んに行はれ、瀧澤馬琴・山東京傳・十返舍一九などは最も著はれたが、江戸特有の輕妙な滑稽趣味も加つて、太田南畝（蜀山人）の狂歌など特に世に持てはやされたのである。

美術工藝　この時代はまた美術工藝も大いに發達し、特に繪畫は最も進歩の顯著なるものであつた。狩野派には狩野守信（探幽）が出で、海內一と稱せられ、土佐派には土佐光起が出て中興し、平民の趣味に適する浮世繪は、岩佐又兵衞に始まつて、菱川師信・喜多川歌麿・葛飾北齋・安藤廣重などが現はれ、盛んに當時の風俗を寫し、また本阿彌光悅に起り、尾形光琳が大成せしめた彩色華やかな畫風は、蒔繪に用ひられるやうになつた。其他圓山應擧・谷文晁なども、各一派を開いたが、池野大雅・與謝蕪村などは支那風な文人畫を起し、司馬江漢は西洋畫を傳へた。陶磁器、漆器、染織などの進歩も見るべきものがあつた。

實學及び洋畫　江戸時代の一大特色として、實用を主とする學問の興つたことは、特に注目に値する。即ち元祿の頃、淺川春海は天文・曆學に通じ、關孝和は數學を起し、宮崎安貞は農學、稻生若水は本草學を以つてをの〳〵著はれた。將軍吉宗は大いに實學をすゝめたが、寶政の頃伊能忠敬は、全國各地を測量して、精密な實測地圖を作り、佐藤信淵の農業、經濟の二科學、二宮尊德の報德の敎など、西洋學術の傳來と相

まつて、大いに利用厚生の道を開いた。西洋の學術は、鎖國政策に禍されて、一時その傳來を妨げられたが、かゝる間にあつて新井白石は、自から西洋人に就いて聞き得た所を書き綴つて、西洋紀聞などを著し、ついで將軍吉宗は、基督教に關係のない書籍の輸入を許し、青木昆陽をして、和蘭語を學ばしめたから、こゝに蘭學が始めて開けた。昆陽の門人に前野良澤・杉田玄白が出で、苦心して解體新書を譯し、次いで大槻玄澤は、和蘭語の文法書を著はすなど、この頃から蘭學の研究が大いに進んだ。かくて醫學、理科などの學問も輸入せられ、或は砲術、兵學を修めて、國防、用兵を研究するなど、世界の大勢も次第に明かになつて來た。

産業と交通　江戸幕府は産業の開發につとめ、水利を開き地味を調べて、穀類・甘藷・甘蔗・棉の栽培を奬勵し、また各藩も初め相對立して、自給自足の方針をとり、且つ備荒儲蓄の制を立てるなど、大いに産業の發達を促した。交通も參覲交代などのため能く整ひ、東海道を始め、江戸から全國各地に到る主要道路を開き、京都・大阪・江戸間を飛脚が往來して通信の便もあり、河川・海上などの水運も次第に發達した。されば大名の城下町や港市は次第に榮え、江戸・大阪は國内商業の二大中心となり、從つて町人階級の金力が、社會上重きをなすに至つた。

○飛脚　急報を送達する人夫のことで宿繼飛脚、急用のために早打飛脚、馬に乘つて行く三度飛脚等の種別があつた。

第四節　江戸幕府の失政

元祿時代　德川氏は初め武斷主義を執つて、その政治も引きしめてゐたが、五代綱吉の頃から、文治主義に轉じ、やうやく失政をも現はすやうになつた。綱吉は尊皇の志あつく、且つ學問教化を盛んにして、治績の大いに見るべきものがあつたが、晩年に及んで政治に倦み、これを柳澤吉保に委ね、自身は佛教を信じて大寺院を起し、古今の惡法と稱せられる生類憐の令を下し、殊に法を立てゝ犬を愛護するなど、その弊が漸く表面化して來た。當時は久しく太平打ち續き、上下安逸に流れ奢侈を事として衣服なども次第に華美を競ひ、能樂・淨瑠璃・猿舞伎などの遊藝が盛んに行はれ、武家の氣風も頽れて、所謂元祿時代の惰弱な風をあらはした。

惡貨鑄造　綱吉はかゝる時代に將軍職に就き、奢侈を事とし

したので幕府の財政に不足を來した。こゝにおいて勘定奉行荻原重秀の議を用ひ從來の貨幣を惡質に造りなほし、一時の窮乏を補つたので、物價が騰貴し、國民の生活を苦しめた。

江戸時代の貨幣

吉宗の中興　次の將軍家宣は、新井白石を重く用ひ閑院宮家を立て奉つたのを始めとして、前代の惡貨を改良して財政を整へ、外交上においても種々の改革を行ひ、努めて善政を行つた。次いで吉宗が、紀伊家から入つて、八代將軍となるや、先づ武家中心の政治に復せんと企て、自ら質素を守り、學問、武藝をすゝめ、公事方定書（御定書）をつくり、裁判、刑罰の標準を定め、室直清（鳩巣）に命じて、平易な修身書をつくらしめ、これを各地の寺子屋に配布し、江戸小石川に養成所を設けて貧民に施療し、更に大いに産業の開發に留意するなど、鋭意民福の增進を計つたから、その政治を享保の治と稱し、吉宗を幕府中興の英主と敬稱した。

田沼の失政　然かし吉宗の末年より、世態は漸く一變し、殊にその子家重・孫家治のときには、田沼意次父子が寵用されて權を專にし、勢ひに任せて賄賂を收め、私利をはかつたから、自然幕府の政治が亂れた上に、大火、地震、洪水などの天災が相ついで起り、人民を大いに苦しめた。そのため打壞しや、百姓一揆なども勃發し、世の中が何んとなく騷がしくなつた。

寛政の治　そこで十一代將軍家齊のとき、松平定信を老中に任じ、弊政改革の事に當らしめることゝなつた。定信は吉宗の享保の治にならひ、文武を勵まし、勤儉を勸め、財政を整へ産業を奬勵し、備荒儲蓄の制を定め、出獄人を保護し、風俗の矯正を圖るなど、在職僅か七年に過ぎなかつたが、治績大いに擧り、所謂寛政の治を出現せしめた。

文化・文政の世　然るに定信退職の後、家齊は政を親らすること四十餘年に及び、その身は從一位太政大臣に任ぜられたが、文化・文政の太平の弊風に醉ひ、奢侈を好み、安逸に流れたから、士風は衰へ、幕府の財政も乏しくなつた。その上

天保年間には凶作が續き、人民が頗る生活に苦しんだに拘らず幕府はこれを救ひ得なかつたゝめ、大阪の人大鹽平八郎は義憤を發し、公然幕府を責めて亂を起し、遂に敗れて自殺するなど、何んとなく不穩の空氣が全國にみなぎつた。

幕府の衰兆　次で家齊の子、家慶が將軍となるに及び、水野忠邦を老中となし、幕府の振作をはかつて所謂天保の改革を行つたが、却つて上下の不平を招き、忠邦も遂に職を退くに至つた。たま〳〵國内には尊皇論が勃興し、外には諸外國が頻りに近海に迫るなど、幕府の衰兆が漸く著しくなつた。

第五節　學問の興隆と尊皇思想

幕府の朝廷對策　江戸幕府は、皇室に對し奉つて、皇居を修理し、御料を献じ、或は御陵を修築するなど、表面崇敬の實を盡したが、政治上の權は悉くこれを幕府に保有せんとし公家諸法度を定めて、事大小となく皇室に干渉し奉つた。後水尾天皇は幕府の勸めを納れ、秀忠の女和子を中宮とし給ふたが、後幕府の專横を御憤りのあまり、中宮和子の生み奉つた皇女明正天皇に御讓位あらせられるに至つた。

後光明天皇　次帝後光明天皇は御英明にましまし、朝權回復の御志を抱かせ給ふたが果し給はず、人心もまた家康以來の武家政治に馴れて、深くこれを怪しまなかつたが、光格天皇が、閑院宮家から入つて皇統をつぎ給ひ、御父典仁親王に、太上天皇の尊號を奉らんと思召され、幕府に御諮りになつたところ、老中松平定信等は極力これを止め奉り、遂に御中止になつた。然るに當時は學問の普及に伴ひ、我國體に關する思想が、漸く明かになつて來たから、漸次幕府の處置を憤るものが現はれるやうになつた。

國史の編纂　これより先江戸時代における學問の興隆は、我國固有の國史、古典の研究を盛んならしめた。幕府においては將軍家光の頃、羅山の子林春齋に命じ、本朝通鑑を作らしめ、また水戸藩主德川光圀は、大義名分を明かにして、我國體の美を知らしめんと大日本史の編修を起した。

古典の尊重　是等の刺戟を受けて漢學者の中にも、山鹿素行は中朝事實を著はし、山崎闇齋は神道を說き、内外尊卑の別を明かにした。越えて將軍吉宗の頃には、荷田春滿は、僧契沖の風を承けて、我古語、古典に基き古代の歴史、文化を研究する國學を唱へ、賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤なども、相ついで國學の研究に沒頭し、また塙保己一は盲人ながらも、江戸に和學講談所を開いて國學を教へた。

尊皇論　かくて學問興隆の結果、我國體の尊嚴が明かにせられこゝに尊皇論が大いに起るに至つた。殊に闇齋の學說を繼いだ竹内式部は、將軍家重のとき、公卿の間に尊皇の大義を說いて罪せられ、次いで家治のとき、その同志山縣大貳も、幕府に忌まれて刑せられた。

王政復古の源　然かも尊皇論は次第に勢ひを加へ、將軍家齊のとき、高山彦九郎は皇威の衰微をなげき、諸方をめぐつて同志と交り、蒲生君平は山陵の荒廢を歎じて、山陵志を著はし、また賴山陽は二十餘年の苦心の末、明快な筆を揮つて日本外史を著はし、尊皇の意を含ませて人心を動かした。後に王政復古の大業が成つたのは、實に是等尊皇家の心血をそゝいだ努力に負ふところが少くないのである。

第六節　幕末の内憂外患

海防論の擡頭　我國が鎖國政策を執り、太平の夢を貪つてゐる間に、西洋諸國は競ふて力を東洋の經營に注いだ。この情勢を豫知して寛政の初め、林子平は海國兵談などを著はし、海防の急務を論じたが、幕府は世を騒がすものとしてこれを罰した。然るに間もなく、露西亞人が今の北海道に來航したから、幕府も初めて北邊の警備に意を用ひることゝなつた。

外國擊攘令　即ち近藤重藏・間宮林藏をして、それ〴〵北海道樺太を探檢せしめ、伊能忠敬をして精密なる實測地圖を作らしめ、俄に松前奉行を置いて北海道を治め、ついで仁孝天皇の文政八年には外國船擊攘を令した。

開國論者　かゝる時勢に際して、鎖國の不利を說き、開國の必要を主張する者も現はれた。中にも渡邊華山・高野長英などの蘭學者は、書を著はして攘夷の無謀を說き、幕府の忌避に觸れて罪せられたが、幕府自身もまた時勢の推移に鑑み、天保十三年には曩に發した文政の擊攘令をゆるめるに至つた。

○黑船　黑船とは外國船のことで、谷文晁の描いた黑船の贊の中に「此船のよるてふことを夢の間も忘れぬは世の寶なりけり」とあり松平定信が之を書いて居る。

黑船の來朝　亞米利加合衆國は、將軍家治の頃獨立したが、やがてペリーを使者とし、船艦四隻をつけて我國に遣はした。ペリーは孝明天皇の嘉永六年、相模の浦賀に來り、通商を開かんことを求め、次いで露西亞の使者プーチャチンも長崎に來た。是等の使臣に對し幕府は、何れも回答の期を延べて立

ち去らせた。

神奈川條約　然るにペリーは琉球で年を送り、翌安政元年再び神奈川に來航したから、幕府は種々交渉の結果、已むなく下田・函館の二港を開き、薪水食料を給することゝし、亞米利加合衆國との和親條約を結んだ。これが當時やかましかつた所謂神奈川條約である。

安政の假條約　神奈川條約に基き安政三年、亞米利加合衆國からは、總領事ハリスが下田に來り、次いで江戸に入つて、將軍家定に謁し、通商條約を結ばんことを求めた。老中堀田正睦は、當時海外の事情に通じてゐたから、世界の情勢に鑑みて、ハリスと通商條約を議定したが、勅許を得ることが出來なかつたから、幕府はこの難局を處理せしめるため、彦根藩主井伊直弼をあげて大老とした。直弼は早くより開國の意見を抱いてゐる上に、内外の形勢が切迫してゐたので、國家の安危を憂ひ、責を一身に引きうけ、勅許を待たずして通商條約に調印し、事後にその旨を朝廷に奏上した。これが安政の假條約で、次いで和蘭・露西亞・英利西・佛蘭西の各國に對しても、同樣の通商條約を取り極めた。

國論の不統一　これより先ペリーの來朝するや、幕府は前例を破つて、これを朝廷に奏し、一方諸大名に對して開港の可否を諮つた。ために國論が開港、攘夷の二つに分れて統一を失ひ、朝廷には攘夷の說が多く、諸藩にも水戸の德川齊昭をはじめ、攘夷國防の急務を論ずるものがあり、國事を憂ひ、囂々として幕政の得失を論ずるに至つた。

安政の大獄　こゝにおいて家茂が紀伊家から入つて將軍となるに及び、直弼は幕威を立て攘夷論を覆へさうとして、公卿、大名以下多くの志士を捕へこれを處刑した。これが世にいふ安政の大獄である。この幕府の處置に天下の人心大いに激し、遂に萬延元年直弼は水戸の浪士のため櫻田門外で殺されそれより幕威急に衰へ政治も統一を失ふに至つた。

公武の合體　こゝにおいて老中安藤信正は、公武の親和を圖り朝廷の御威光をかり奉り、幕府の立て直しを試みんとして、將軍家茂のために、孝明天皇の皇妹和宮親子内親王の御降嫁を仰いだが、却つて尊皇論者の怒りを招いた。かくて天下頓に尊皇攘夷論者や浮浪の徒が京都に集り、國内の形勢が激化した。このときに際して薩摩の島津久光は、兵を率ゐて入京し、公武合體の實をあげんと、勅使大原重德を奉じて江戸に下り、幕政改革の事に盡力した結果、將軍家茂は勅旨を奉じて、諸藩の改革を行つた。殊に新たに京都守護職を置き、會津藩主松平容保をしてこれに任じ、京都の治安は維持されたが、幕府衰亡の大勢は、最早如何ともすることが出來なかつたのである。

第七節　王政復古

攘夷の決行　島津久光が江戸から歸るや、京都では攘夷論者が勢力を得て朝議を動かし、遂に三條實美を勅使として東下せしめ、攘夷の決行を命ぜられることゝなつた。こゝにおいて幕府は勅を奉じ、諸藩に布告して、文久三年五月十日を攘夷の期と定めたから、期日に至り攘夷論の急先鋒たる長州藩は衆に先んじ、下關海峽を通過する外國船を砲擊した。これより攘夷論の氣勢大いにあがり、攘夷親征の議さへ起つたが、京都守護職松平容保は深くこれを憂ひ、尊融法親王によつて親征を中止し給ふべきことを奏するや、朝議俄かに一變し、長州藩は宮門守衛の任を解かれ、三條實美等は、參内を止められて長州に奔つた。

長州征伐　然るに長州藩の福原越後等は、兵を率ゐて入京し、朝廷に訴ふるところありと稱し、會津・薩摩・桑名の兵と蛤御門の邊に戰ひ、直ちに擊退せられたが、幕府は長州藩の罪を責め、元治元年諸藩に令し、長州征伐の兵を發した。たまたま英・佛・米・蘭等四國の艦隊が、彙の砲擊の罪を問はんとして下關海峽に來攻したので、長州藩は海陸に敵を受ける窮地に陷り、先づ外國艦隊と和し、ついで幕府に罪を謝して、事は收まつた。然るに長州藩士高杉晉作等は、間もなく藩論を覆へして兵をあげたから、慶應元年幕府は再び長州藩を征したが、士氣甚だ振はずその上將軍家茂は大阪城内において病死し、次いで孝明天皇が崩御あらせられ、明治天皇が皇位に位き給ふに及び、勅して征長の兵をやめしめ給ふた。

蛤御門

大政奉還　幕府においては家茂の後を受け、德川慶喜が征夷大

將軍となつたが、長州征伐のために無力を暴露し、國政統一の權を失つたから、薩摩藩も討幕に傾き、西郷隆盛・大久保利通等の藩士は、岩倉具視・三條實美等を通じて、長州藩の木戸孝允と結び、薩長聯合して幕府を倒さんとはかつた。

然るに土佐の前藩主山内豐信は深く國事を憂ひ、公武合體の實現に努力したが、その不可能なるを知るや、藩士後藤象二郎等を遣はし、將軍慶喜に大政の奉還を勸めた。當時慶喜もまた既に時勢を察し、平和に事を解決せんと心を碎く折りであつたから、大英斷を以つて大政奉還を請ひ、慶應三年勅許を得た。こゝにおいて江戸幕府は滅び、世は王朝の昔に復して、再び朝廷の御親政を仰ぐことゝなつた。江戸幕府は家康が將軍に拜せられてから、十五代、二百六十五年で倒れたのである。

鳥羽・伏見の戰　王政復古と共に朝廷では、岩倉具視等が薩摩藩と共に專ら事に當り、兵力をもつて德川氏を抑へ、改新の功を收めんとした。慶喜は大阪城にあつてこの報を聞き、大いに憤つて、討薩の表をさゝげ、明治元年兵を發して入京せんとしたが、薩・長兩藩の兵のために、鳥羽・伏見に破られ、海路江戸に逃げ歸つた。

官軍の東征　こゝにおいて朝廷は有栖川宮熾仁親王を征東大總督となし、諸藩の兵を發して、江戸を攻擊せしめられた。慶喜は深く恭順の意を表はし、幕臣勝安芳等をして和を議せしめ、次いで水戸に退き、江戸城をはじめ軍艦兵器共にこれを朝廷に捧げ、家齊の曾孫家達をしてその後をつぎ、僅かに德川氏の社稷を保つて駿河に封ぜられた。

西郷南洲

勝海舟

戊辰の役　然るに幕臣の中には、慶喜の恭順を喜ばぬ者あり、到る處に兵をあげて官軍に抗した。卽ち彰義隊は上野公園に據り、大鳥圭介は宇都宮に兵を集め、會津藩主松平容保は奥羽・越後の諸藩と同盟して若松城に據り、榎本武揚は軍艦數隻を率ゐ、江戸を脫出してこれに應じた。官軍は諸道より進んで、次第に是等を平定し、明治二年函館の五稜廓を攻め、大鳥圭介・榎本武揚を降すに及び、海内はこゝに全く平定した。明治戊辰の役とは、是等の戰ひを總稱したものである。

皇室御系圖（五）

- 後陽成天皇（一〇八）
  - 後水尾天皇
    - 一〇九 明正天皇（女帝）
    - 一一〇 後光明天皇
    - 一一一 後西天皇
    - 一一二 靈元天皇
      - 一一三 東山天皇
        - 一一四 中御門天皇
          - 一一五 櫻町天皇
            - 一一六 桃園天皇
            - 一一七 後櫻町天皇（女帝）
            - 一一八 後桃園天皇
        - （閑院宮）直仁親王
          - 典仁親王
            - 一一九 光格天皇
              - 一二〇 仁孝天皇
                - 一二一 孝明天皇

○若松城址　福島縣若松市にあり、戊辰の役白虎隊で有名な所である。

○五稜廓址　函館市郊外にある。

第五章　現　代

第一節　明治維新

天皇親政　德川慶喜の大政を奉還するや、慶應三年朝廷は王政復古の大號令を發し、攝政、關白、征夷大將軍など、舊來の官職を廢し、新たに總裁、議定、參與の三職を置き、有栖川宮熾仁親王を總裁とし、親王並びに諸臣中より議定、參與を任じ、天皇が萬機を總べられ、大小の政令は悉く朝廷から出ることゝなつた。

五箇條の御誓文　次いで翌慶應四年（明治元年）三月、明治天皇は紫宸殿に御臨御相成り、天神地祇を祀り給ひ、五箇條の御誓文を述させられて、新政の大方針を御示しになつた。

一　廣く會議を興し、萬機公論に決すへし。
一　上下心を一にして、盛に經綸を行ふへし。
一　官武一途庶民に至る迄、各々其志を遂け、人心をし

て倦まさらしめんことを要す。

一　舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

一　知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

次いで大寶令に基いて官制を定め、中央政府に神祇、太政の二官及び民部・大藏・兵部・刑部・宮内・外務の六省などを置かれた。

東京奠都　かくて明治天皇は、この年即位の大禮を擧げさせられ年號を明治と改め、一世一元の制を定め、十月始めて東京に行幸あらせられた。次いで間もなく京都に還幸あらせられ、藤原美子を立てゝ皇后と定め、翌二年賢所を奉じて先づ伊勢神宮に御親拜あらせられ、再び東京に行幸あらせられて、こゝを永く帝都の地と奠め給ふのである。

第二節　明治・大正時代の内政

版籍奉還　王政復古と共に幕府直屬の領地は朝廷に返つたが、各藩の領地は從來のまゝであつたから、全國統一の政治を行ふことは出來なかつた。參與木戸孝允は深くこれを憂ひ、諸藩主をしてその領地及び人民を、朝廷に奉還せしむべきことを建議した。然るに明治二年薩・長・土・肥の四藩主は、名を連ねて先づこれを奏請し、次で諸藩もそれに倣つたから朝廷においてこれを許し、舊藩主を知藩事として舊領地を治めしめられた。明治四年に至つて、更に廢藩置縣の改革あり、新たに地方官を任じて、縣治に當らしめたから、こゝに封建の制全く亡んで、集權統一の實あがり、維新の大事業も漸くその緒につくに至つたのである。

制度の改善　かくて士農工商の階級を廢して四民を平等にし、人材登用の途を開き、明治五年學制を定めて國民教育の制を立て、曆法を改めて太陽曆を用ふることゝし、翌年は徴兵令を布いて、國民皆兵の制を定めたのである。其他郵便、電信を設け、鐵道を通じ、通信、交通の發達をはかるなど、大いに内治の機構を整へた。

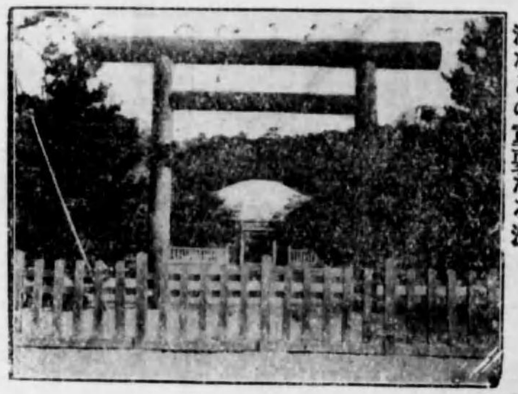
西南の役　然るに明治維新後は政治上、社會上の改革が急激であつたゝめ、國民中には、政府と意見を異にし、中には新政に不平を抱く者もあつて、地方の動亂が絶えなかつた。即ち明治七年には前參議江藤新平が、佐賀に亂を起し、同九年には熊本及び萩にも亂が起つたが、間もなく平げられた。次で明治十年鹿兒島に於ける不平の徒は、西郷隆盛を頂いて兵を擧げ、進んで熊本城を圍んだ。こゝにおいて朝廷では熾仁親王を征討總督とし、交戰八箇月にして漸く平定した。これを西南の役といひ、これより中央政府の威權は確立し、國力もいよ〳〵進展の機運に向つたのである。

○熊本城　加藤清正の築いたもので熊本市にあり、西南の役に兵火にかゝる。

熊本城

立憲政治　これより先土佐の板垣退助等は民選議院設立の議を上つたが、朝廷では明治八年元老院及び大審院を設け、地方長官會議を開き、次いで十二年には府縣會が開設せられ、民間の政治思想が次第に進歩した。

憲法發布　此時參議伊藤博文は、大命をうけて帝國憲法の起草に當り、明治十八年先づ内閣制度が定められ、同二十二年に至り、國民の歡呼裡に帝國憲法の發布となり、翌年には帝國議會が初めて東京に召集せられた。かくて我國の立憲政體は確立し、其後帝國議會の協賛によつて君民相和し、民法・刑法などの重要なる法律も制定せられ、名實ともに法治國として教育、産業、軍備などの各方面にわたり面目を一新するに至つた。



桃山御陵

伊藤博文

明治天皇　かくて國運は大いに進んだが、明治四十五年七月明治天皇には圖らずも御病にかゝらせ給ひ國民擧つて御平癒を

乃木希典

にこれを伏見桃山の御陵に納め奉つたが、このとき陸軍大將乃木希典夫妻は、御跡を慕ひまつゝて壯烈な殉死を遂げた。

大正天皇　明治天皇に次いで、大正天皇が即位せられたが、間もなく歐洲を中心として、未曾有の世界的大戰亂が起つた。我國はこの間に處し、獨力を以て東洋の平和を保ち、商工業の發達を圖つたのみでなく、遂に同盟國たる英吉利などを助けて參戰し、よく最後の勝利を收めることが出來た。

乃木神社

祈り奉つた甲斐なく、遂に寶算六十一歳にして崩御あらせられた。國民は偉大なる御功業と御盛德とを仰ぎまつりつゝ、深き悲しみの中に

關東地方大震災　その結果名實ともに世界的強國として、列國の間に重きをなすに至り、大正十二年關東地方に大震災が起つて、東京・横濱を中心とし、莫大なる損害を受けたにも拘らず、國民は大正天皇の、國民精神作興の大御心に添ひ奉らんと、敢然として復興に努力し、世界驚異のうちに、この大業を成就せしめた。

國民參政權の擴張　かく國運の興隆に伴ひ、内治、外交の規模は頗る複雜となり、國民の忠誠な協翼に賴るべきものが一層多くなつて來た。然かも教育、文化の進歩と共に、國民の知德を向上せしめたから、大正十二年には、陪審法が公布せられ、裁判の上に新紀元を作り、更に十四年には、普通選擧制を布き、昭和三年の衆議院議員總選擧よりこれを實行した。これは要するに君意、民心相一致して、盛んに經綸を行はせ給ふ大御心に外ならないのである。

第三節　明治・大正時代の外交

外國との和親　明治政府は、開國和親を以て外交の大方針と定め、明治三年公使を諸外國に派遣し、翌年更に岩倉具視を全權大使、木戸孝允・大久保利通等を副使として、歐米諸國を視察せしめ、兼ねて諸外國と和親を重ねた。また明治四年には清國と修好條約を結び、七年には、我漂流民を殺害した臺灣の蕃民を征し、八年は露西亞と交渉して、從來境界の不確明であつた樺太と千島とを交換するなど、一意東洋の平和と國力の增進とをはかつた。

朝鮮との修好　明治維新以後政府は、特に朝鮮に使を遣はし、舊交を修めんとしたが、朝鮮は却つて屢々無禮を働いたから明治六年には國内に征韓論が起り、西鄕隆盛・板垣退助・江藤新平等は、その議の容れられなかつたため職を辭した。

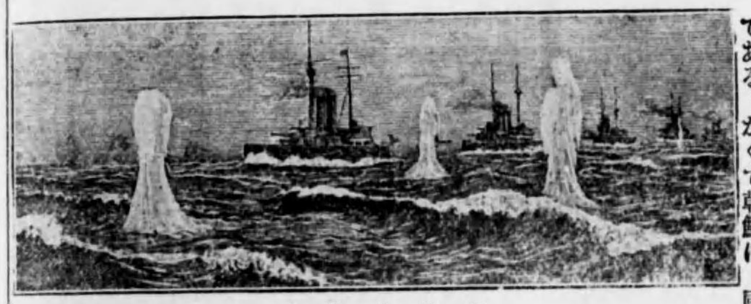
天津條約　明治九年に至つて朝鮮との間に、漸く修好條約が成立し、我國は努めて親睦の實を擧げんとしたが、朝鮮は動もすれば事大的精神に流れ、清國と結んで我を排斥し、清國もまた朝鮮を屬國の如く取扱ひ、その内政にも干渉してゐたのである。こゝにおいて明治十八年、我國は清國との間に天津條約を結び、兩國は朝鮮の獨立を認め、將來これに出兵の必要ある場合は、互に通知して善處することを約した。

日清戰役　然るに明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起るや、當時我國が、政府と帝國議會と衝突しつゝある機會に乘じ、清國は天津條約を無視して、大兵を朝鮮に出し、協力して朝鮮の内政改善を助けんとする我國の議を斥け、却つて我國を威壓し、朝鮮を屬國たらしめんと圖つた。こゝにおいて兩國の和親は破れ、明治天皇は、大本營を廣島に進めて親ら軍を統べさせ給ひ、我軍は海陸共に奮戰して清國に大勝を博した。

大本營址

下關條約　かくて清國との間に下關條約を結び、臺灣・澎湖島・遼島半島を割き、償金二億兩を出し、朝鮮の獨立を認めしめたが、間もなく露西亞は、滿洲に南下せんとして、遼東半島の領有を窺ひ、獨逸佛蘭西の二國と協同してこれが還附をすゝめて來たので、我

國は東洋平和のため、已むなく遼東半島を清國に還附したのである。かくて朝鮮は、國號を韓と改め、獨立國の體面を保ち、我國は多年の宿望であつた條約改正に成功し、江戸幕府によつて結ばれた我國に不利な舊條約も改められ、東洋の一強國として、列國と對等の地位に立つことゝなつた。



日本大海戰

○廣島大本營跡　廣島城内にあり、第五師團司令部の建物をそのまゝ流用されたものである。

北清事變　清國の我國に敗るゝや、歐米諸國は、甚しくこれを壓迫し、多くの利權を獲得したので、明治三十三年、北支那地方に、外國人排斥を目的とする大動亂が起つた。これを北清事變と稱し、列國聯合軍の手に平定せられたが、かねて南下の野心を抱く露西亞はこれを機會に、多年の宿望たる滿洲占領の歩を進めた。我國は東洋の平和を確保すべく、明治三十五年日英同盟を結び、越えて三十七年に至り、我國の誠意をこめた交渉を無視して、韓國をも侵さんとした露西亞に對し開戰を布告したのである。

日露戰役　東郷平八郎の率ゐる聯合艦隊は、先づ旅順の敵艦隊を亡ぼし、更に日本海において、遙かに波羅的海より廻航し來つたその太平洋艦隊を撃滅した。一方大山巌の指揮する陸軍も、到る處に勝利を得、難攻不落と稱せられた旅順の要塞をも陥れ、奉天に決戰して敵軍を四散せしめた。

ポーツマス條約　かくて戰局の大勢定まるに及び、米國大統領ルーズヴェルトの勧めにより、我國は小村壽太郎等を遣はし露西亞のウイッテ等とポーツマスに會商せしめた結果、露西亞は樺太の南半を割き、その經營にかゝる南滿洲鐵道及び旅順・大連一帶の租借權を我に讓り、韓國における我優越權を認めて局を收めた。かくて我國の實力は、世界列强の認むる所となり、日英同盟は更に攻守同盟に擴張せられ、次で露西亞・佛蘭西も我國と協約を結び、東洋平和のため、深く

我國に賴る所あることを示したのである。

韓國併合　韓國は日露戰役後、我國と約して保護國となり、内政、外交とも、我指導を受くるに至つたが、多年の積弊は容易に改まらず、動もすれば東洋禍亂の源となる處れがあつた。こゝにおいて明治四十三年、兩國相互の幸福を進め、東洋永遠の平和を確保するため、韓國を我國に合併し、朝鮮と改稱して總督府を置き、これを統治することゝなつた。

小村壽太郎

世界大戰　大正三年、歐洲大陸に大戰が起り、獨逸・墺太利などの同盟國と、英吉利・佛蘭西・露西亞などの聯合國とが、相對立して前後五年の長きにわたる戰爭が行はれた。開戰の初め獨逸は、東洋において支那の膠州灣を根據地とし、東亞の平和を危くしたから、我國は日英同盟の誼を重んじ、起つてこれを攻略し、進んで南洋群島を占領して、太平洋上から獨逸の艦隊を逐ひ拂つた。次いで露西亞に革命が起り、西比利亞を通じて戰禍が東洋に及び來るや、列國と共同して西比利亞に出兵し、策謀の源を塞いで最後の勝利に導いた。

ヴェルサイユ條約　かくて西園寺公望等を全權委員として、各國の全權委員と共に佛蘭西のヴェルサイユに會合した結果、大正八年獨逸との間に講和條約が成立し、我國は膠州灣及び山東省における獨逸の利權を讓り受け、赤道以北にある南洋群島の委任統治權を獲得した。

國際聯盟　かくて國際間の平和を進めるため、國際聯盟の成立を見るや、我國もこれに加盟し、その常任理事國として、世界の平和を脅威する國際間の重大問題を解決し、人類の福利增進に努力することゝなつた。

西園寺公望

第四節　明治・大正時代の文化

外來文化の影響　維新以來我國は、歐米先進國の文化をとり入

れて、國家、社會の改新を圖つた結果、上下を通じて外國尊崇の傾向を生じ、動もすれば、內外本末の別を誤るものさへ現はれた。これを見て國粹保存の說も大いに起り、明治二十三年には、教育に關する勅語を賜はり、更に大正十二年には國民精神作興に關する詔書を下賜せられ、國民に中正の正道を御示しになつた。

政黨の發達　この時代を通じて、政治上においては中央集權の實が殆ど完成し、總ての組織は漸次國家の權力を中心として統一せらるゝに至つた。然かし立憲政治の實施に伴ひ、國民の協翼によつて政治が行はれたから、民意を反映する政黨が發達した。殊に大正時代には、藩閥打破の輿論が擡頭し、大正七年には原敬が、大命を受けて政友會を基礎とする純然たる政黨內閣を組織して以來、政治界に政黨が重きをなすに至つた。

原敬

教育の發達　教育は主として歐米諸國に範を採り、初め外國人教師を雇入れ、洋書を譯して教科書に用ひ、普通教育、專門教育の各方面に亘つて、多くの官公立學校が開設せられた。

福澤諭吉

かくて諸般の學術が大いに研究せられたが、特に自然科學に於ては、世界的研究も發表せらるゝに至つた。然るに一方には、國風に基く獨創的研究が少いため、この方面を開拓する必要が叫ばれるやうになつた。民間における私立學校、研究所なども漸く多く、中でも福澤諭吉の創めた慶應義塾、大隈重信の立てた早稻田大學などは、共に多くの人材を世に出したのである。

大隈重信

文藝の進步　教育、學術の發達につれ文學、美術なども著しく進步した。

明治時代から坪內逍遙・森鷗外などによつて、外國文學の紹介が盛んに行はれ、その結果として夫等の思想、內容が我文學に影響した。小說は寫實風になり、殊に自然主義が取入れられた。この外新體詩が現はれ和歌、俳句なども復興した。尾崎紅葉・正岡子規・夏目漱石などは、名高い文學者である。美術も初め西洋風を尊び、黑田淸輝等の手によつて洋畫が發達したが、國風保存の論と共に、岡倉覺三等が出でゝ日本畫の復興をはかり、西洋の畫風をも取り入れて、新味を出すに至つたのである。

坪內逍遙

經濟界の緊張　經濟界では產業の發達、交通の進步など、實に目覺しいものがあつた。殊に明治三十年は貨幣法を改定して金貨本位制を採用し、同三十九年には主なる鐵道を國有とし四十四年には關稅法を改めて國定稅率とし、產業界に對しては各種の補助金を與へて、保護助長に努めた。かくて商工業の基礎が、次第に確立しつゝあるときに當り、世界大戰が起つて我國は物資、製品の供給國たる地位に立つたので、急に世界の一大商工國たる地位を占めるに至つた。

第五節　昭和の情勢

今上天皇　大正十五年先帝が崩御あらせらるゝや、今上天皇が皇位につき給ひ、昭和と改元せられた。今上天皇が皇太子で在した大正十年、國初以來の御盛事である御外遊を決行し給ひ、英吉利・佛蘭西・伊太利・白耳義・和蘭などの諸國を御訪問遊ばされ、到る所で熱誠な歡迎を受けさせられた。御歸朝の後大命を拜して、攝政の重任に就き給ひ、英明の御天資に加ふるに、廣き御見聞と、豐かなる御經驗とを積ませられたが、今や萬世一系の帝位を踐ませられ、日夜政務に御勵み遊ばされるのは、萬民の誠に恐懼感激に堪へないところである。

ワシントン會議　かくて我國は、世界の大國としてその一擧一動は、國際間に大なる影響を與へることになつたから、努めて世界列國と協力し、終始一貫國際平和の增進をはかつた。即ちさきに大正十年亞米利加合衆國の首唱により、華盛頓會議を開き、主として海軍々備の制限及び、太平洋に關する諸

問題を議するや、我國もこれに參加して海軍の主力艦を制限し日英同盟を廢止して英・佛・米と共に四國條約を結び、太平洋上における相互の領土を尊重することを約し、別に支那に對しては九ヶ國條約を結んで、その領土の保全を約した。

不戰條約　次いで昭和三年には、一切の國際紛爭解決を、戰爭に訴へないことを約する不戰條約に加盟し、同五年には、倫敦海軍々縮會議に參加して、補助艦の制限を約するなど、世界平和增進のために誠意をつくした。

滿洲事變　然るに國際間には、我國の平和交讓の精神を誤解するものを生じ、殊に中華民國は、無暴な排日運動を續け、遂には武力を以て、滿洲における我國の利權を奪還せんと企てるに至つた。こゝにおいて我國は、奮然自衞の處置をとつたが、これに端を發して滿洲事變の勃發となり、やがてまた滿洲國の獨立となつた。

上海事件　これより先き昭和六年夏以來の排日、排日貨の形勢と、それによつて激化された日支感情の對立は、滿洲事變の進行に伴ひ、兩國間の敵愾心を高めつゝあつたが、七年一月十八日日本人僧侶等が、租界外を通行中暴行を加へられ、死者を出すの事件が發生して、俄に危機が促進せられた。こゝにおいて我上海總領事は上海市長に對して、排日團體解散などの數ヶ條の要求を提出した。支那側はこれを受諾したが、他方において上海の物情不穩なるため、二十八日上海工部局は戒嚴令を布くに至つた。工部局との打合せにより、日本の警備區域に當てられた地域に、我陸戰隊が出動するや、支那便衣隊は、上海吳淞鐵道附近において、手榴彈を以て我軍を襲擊し、同時に支那正規兵も我軍に砲火を浴びせた。こゝに上海事件の勃發を見るに至り、我國も居留民保護の目的を以て出兵し、忽ち上海の治安を恢復した。

聯盟脫退　由來滿洲は列國勢力の競爭場の觀あり、動ともすれば政治上、經濟上の衝突を醸す恐れがあつたから、一旦その獨立を見るや、我國は極力これを援けて、東洋平和の確立を期するに拘らず、列國は國際聯盟を通じてこれに反對し我國策の根本を否定せんとしたから、昭和八年已むなく我國は國際聯盟を脫退し、獨自の立場より滿洲を保護し、毅然として正義の道を踏み、大義を世界に布くことになつた。

無條約時代　華盛頓條約は締結以來既に十三年を經過し艦船・兵器・航空機の發達並に國際情勢の變化などにより、時勢に適しないものとなつたから、日本政府は昭和九年十二月二十九日齋藤駐米大使を通じ、米國政府に對して、該條約の廢棄を通告した。これより先き我國は、華府條約によるなど差比率主義による制限にては、今後我國防の安全を期することは出來ないから、軍縮豫備交渉において、公正妥當なる新協約の成立を圖らんとしたが、關係國は我主張を容れなかつたから、遂に單獨にて華府條約を廢棄することになり、所謂無條約時代を現出するに至つたのである。

二・二六事件　昭和十一年二月二十六日午前五時頃、一部青年將校は折から降り積む雪を踏みしだいて突然蹶起し、首相官邸、內大臣私邸、陸軍教育總監私邸、湯河原伊藤屋旅館、侍從長官邸、大藏大臣私邸及び東京朝日新聞社等を襲擊して齋藤內大臣、渡邊教育總監、高橋大藏大臣を卽死せしめ、鈴木侍從長に重傷を負はしめた。是等將校の蹶起した目的は內外重大危急の時局下に於て元老、重臣、官僚、財閥、政黨等は國體を破壞する元兇であるから、これを芟除して大義を正し國體を保護開顯せんとするにあり、この事件の突發により內閣は宮中に閣議を開いた結果、岡田內閣は總辭職し後繼として廣田內閣が組織された。一方叛亂部隊に對しては直ちに在京部隊をして非常警備の任に當らしめ、次で帝都に戒嚴令を布いてこれが鎭撫に當つた結果、二十九日午後に至り悉くの歸順と見て、流血の慘なくし全く鎭定した。

日獨防協共定　昭和十一年十一月二十五日、伯林ウィルヘルム街獨逸代表リッベントロップ大使の事務所に於て、リ大使と我が代表武者小路大使との間に、日獨防共協定の調印が行はれ直ちに發表された。この協定は日英同盟廢棄以來、歐洲列强との間に締結した最初の政治協定で、我國に取つては劃期的な事件であつた。

日伊親善協定　昭和十一年十二月二日帝國政府は「今般帝國政府はエチオピヤ公使館を閉鎖し、アディス・アベバに領事館を開設するの用意ある旨を伊太利政府に通告した。尙伊太利政府はエチオピヤに於ける通商其他に關する帝國政府の利益を尊重し、右に對し特に好意的考慮を加へることになつた」旨を發表したが、間もなく伊太利は獨逸を通じて防共協定に加盟し、こゝにコミンテルン排擊を目的とする羅馬・伯林・東京樞軸の成立を見るに至つた。

蘆溝橋事件　昭和十二年七月七日、蘆溝橋北方龍王廟附近において、夜間演習中の我豐臺部隊に對し、突如支那の二十九軍騎兵部隊より數十發の射擊を加へた。この不法射擊に對し

て我軍は一もこれに應戰することなく、事を和平のうちに解決し、以て災害を良民に及ぼさざらんとして、兵力を集結のまゝ天明を待ち、交渉を開始せんとしたが、支那側の不法射撃は尙ほ止まないので、遂にこれに應戰するの已むなきに至つた。然かし我軍は直ちに現地に調停委員を派遣し、事變の擴大防止に努めたが、支那側は城門を固く閉ざし、蘆溝橋入城を阻止して、また〳〵不法射撃を集中した。

この事件は忽ちにして、支那全面の抗日態勢に進展し、我國の堅持する現地解決事件不擴大の方針を覆し、和平解決の望み絶えて、遂に支那事變にまで發展して行つた。

支那事變　かくて七月十一日我政府は北支派兵の事を一決し、十五日內地より一部兵力を派遣すべき旨の陸軍省發表となり帝國海軍も亦時局の重大性に鑑み、優秀なる海軍力を以て黃海及び支那海を制壓し、一部を以て北支方面の陸軍に協力して活動を開始した。その間二十五日の郎坊事件、二十七日廣安門事件等が頻發したから、我軍は斷乎として獨自の行動を起し、二十八日北京方面の敵を掃蕩して以來、陸に海に空に勇猛果敢なる攻擊を加へ、十二月十三日には遂に敵の首都南京を陷落し、蔣政權をして一地方軍閥に追込めるに至つたが其の翌日、將來全支那を統一する唯一の中央政府として中華民國臨時政府が北京に誕生し、越えて昭和十三年三月二十八日、南京に於て亦中華民國維新政府の成立を見た。

爰に於て臨時政府は、國に二つの中央政府を有すべからずとの見地より、維新政府當局と折衝した結果、將來この二つの新政府は聯合すべきことを豫約したのであつたが、この豫約は昭和十三年九月二十二日廣東及び武漢三鎭の陷落前、北京中海の勤政殿に於て行はれた中華民國政府聯合委員會の成立典禮によつて實現し、臨時政府側は王克敏を主席委員に擧げいよ〳〵蔣政權致落後の支那全土を統治することになつた。

張鼓峰事件　昭和十三年七月六日、滿ッ國境の圖們江下流ハーサン湖の西方にして、滿洲國の領內に屬する張鼓峰に、突如としてッ聯騎兵三名が現はれ、附近を偵察したことに端を發し、日本軍の漢口攻落を前にして張鼓峰事件なるものが勃發した。

元來滿ッ兩國の國境は蜿蜒千五百里にわたり、その國境線も頗る不明瞭なるため、滿洲國獨立以來昭和十三年六月末までに五百七十五件に上る多數の國境事件を捲き起し、その中解決されたものは僅かに六件に過ぎない有樣であるが、是等の國境紛爭に於て最も重大なものは、昭和十二年六月の乾岔子島事件であつた。

乾岔子は滿洲國に屬し、黑龍江中に多數點在する河中島の一つで不明瞭なる河川國境線によつてッ聯領の諸島嶼と接續してゐるが、ッ聯は日滿ッ關係の緊張につれて、是等の島に對するトーチカ裝備、飛行場の建設、その他の軍事施設を施して爆彈地帶と化するに至つた。

爾來屬々この方面に於てッ聯兵の不法越境が行はれたので、滿ッ兩國間に紛爭の絶間がなかつたが、果してッ聯は乾岔子島に軍隊を送つてこれを占領し、軍事施設を行ふに至つたので、日滿側も已むを得ず兵力を以てこれを撃退し、ッ聯の艦艇を撃沈した。

たま〳〵日本は、ッ聯を後援とする民國軍閥と交戰中でありこの乾岔子島の一撃は如何なる結果を生ずるかを危ぶまれたが、幸ひにも外交々渉によつて事件の落着を見るに至つた。

その後日支事變の進捗に伴ひ、蔣政權の次第に奥地に追込められつゝあるに際し、これを支援するッ聯極東軍の行動は注視されつゝあつたが、果然張鼓峰に於て日ッ兩軍の衝突を見るに至り、兩軍の間に約五千の死傷者を出した。

ッ聯が皇軍の漢口攻略を眼前に控へて、何が故に張鼓峰占領事件を敢て起したかについては、その理由は判然としてゐない。巷間に傳へられるものとしては、一、日支事變に紛れて火事泥的に越境した。二、スターリン政權が血の肅淸工作を續けてゐるに拘らず、現政權反對の勢力は屏息しないのみか一層反撥力を强化して來るのに業を煮し、國民の注意を外部に向けて國內政情の一時的安定を圖らんとした。三、日本の漢口攻略を牽制する對支援助、四、スターリンが日支事變のため日本が國力を消耗したと見て立ち上つた等の理由が數へられたが素より祕密國ッ聯のことであるから其の眞相は不明である

然し事件その物に對しては、我が外務當局は最初より國境事件の一と見て、不擴大外交的解決を望んでゐたが、その交渉は容易に纏らず、現地に於ける交戰は益々白熱化し、浦鹽には燈火管制が行はれ、東京に於ても亦或る事情のため燈火管制があり、事態は如何に成り行くか世界注視の的となるに至つた。

然るに八月十日に至り、ッ聯は突如として我國の申出に從ひ停戰に贊成した結果、八月十二日我が長大佐とッ聯のシュテ

ルン大將との間に現地停戰協定が成立し、現在の戰線のまゝ兩軍とも軍事行動を中止することゝなり、國境の制定については別にその委員會が設けられることゝなつた。

第六章　國史重要事項一覽表

第一節　我國政治上の三大變化

一大化の新政　紀元千三百六年第三十六代孝德天皇の時、皇太子中大兄皇子は天皇を輔佐し奉つて大いに政治を改め、從來勢力あるものが多くの土地を私有し、恣まゝに人民を使つた惡習を止め、是等の土地人民をすべて朝廷に收めさせられたのである。

二武家政治　紀元千八百五十二年（後鳥羽天皇の建久三年）源頼朝は征夷大將軍に任ぜられて天下の政治を執るに至つた。之より武家政治は凡そ七百年間もつゞき、朝廷の御威光が大に衰へるに至つた。

三明治維新　紀元二千五百二十七年、卽ち第百二十二代明治天皇の聖應三年、政權が武家に移つてから凡そ七百年を經て、德川第十五代將軍慶喜に至り大政を奉還し奉つたので天皇親政の古に復した。

第二節　重要帝都表

代數	天皇	所在地
第一代	神武天皇	大和國橿原
第十六代	仁德天皇	攝津國難波
第三十八代	天智天皇	近江國志賀
第四十三代	元明天皇	大和國奈良
第五十代	桓武天皇	山城國京都
第九十六代	後醍醐天皇	大和國吉野（行宮）
第百二十二代	明治天皇	武藏國東京

第三節　武家政治

氏名	場所	始祖	代數
源氏	鎌倉	源頼朝	三代
北條氏	鎌倉	北條時政	十六代
足利氏	室町	足利尊氏	十五代
織田氏	安土	織田信長	一代
豐臣氏	桃山	豐臣秀吉	二代
德川氏	江戸	德川家康	十五代

第四節　幕府

幕府名	始祖	代數	年數
鎌倉幕府	源頼朝		一四〇餘年

室町幕府　足利尊氏　十五代　一八〇餘年
江戸幕府　徳川家康　十五代　二六五年

第五節　我國の外國への出兵

仲哀天皇の朝　神功皇后新羅を伐ち給ふ。
齊明天皇の朝　新羅は唐の助をかりて百濟を亡さんとしたので、百濟は救ひを我國に請うた。そこで皇太子中大兄皇子は天皇を奉じて九州に至つたが、やがて天皇は行宮に於て崩御あらせられた。
天智天皇の朝　兵を出して百濟を救ふ。
後宇多天皇の朝　元軍來り侵す（文永・弘安の役）。
後陽成天皇の朝　豐臣秀吉、文祿元年と慶長元年との二回朝鮮に出兵す。
明治天皇の朝　日清戰爭（明治二十七八年）。
同　北清事變（明治三十三年）。
同　日露戰爭（明治三十七八年）。
大正天皇の朝　日獨戰爭（大正三年）。
今上天皇の朝　滿洲事變（昭和六年）。
同　上海事變（昭和七年）。
今上天皇の朝　支那事變（昭和十二年）

第六節　明治維新前に渡來せる歐米人

一後奈良天皇の御代　葡萄牙人初めて我が國に來り、ついで西班牙・和蘭・英吉利等の人々も來り通商を開き、且つキリスト教を傳へた。
二寛政四年　露西亞の使節根室に來り初めて通商を請ふ（松平定信の頃）。然るに幕府がこれを許さなかつたゝめ、樺太・千島に寇し、ついで英船も來て長崎を騷がした。
三嘉永六年　亞米利加合衆國の使節ペルリは、軍艦四隻を率ゐて相模の浦賀に來り通商を請ひ、翌安政元年再び來て和親條約を結んだ。
四ハリス　續いて亞米利加合衆國の總領事ハリスは下田に來りて通商を請ひ、通商條約を定めた。更に蘭・露・英・佛の四國とも同じく通商條約を結んだ。

第七節　主なる對外條約

一和親條約　嘉永六年（紀元二千五百十三年）我が國とアメリカ合衆國。
二通商條約（安政の假條約）　安政五年（紀元二千五百七十八年）我が國と米・蘭・露・英・佛の各國との間（明治二十二年以後改正條約實施）。
三天津條約　明治十八年、我が國と支那。
四下關條約　明治二十八年（紀元二千五百五十四年）我が國と支那。
五ポーツマス條約　明治三十八年（紀元二千五百六十五年）我が國と露西亞。
六平和條約　大正七年（紀元二千五百七十八年）世界大戰關係國（國際聯盟成る）。
七華盛頓條約　大正十年（紀元二千五百八十一年）日・米・英・佛・伊の五國。
八倫敦海軍條約　昭和五年（紀元二千五百九十年）我が國と英國及び米國。
九日獨防共條約　昭和十一年（紀元二千五百九十六年）我國と獨逸。
一〇日伊親善協定　昭和十二年（紀元二千五百九十七年）我國と伊太利。

第八節　我國と大陸との交通

第十五代應神天皇の御代　百濟から王仁・阿直岐などの學者來りて學問を傳へ、且つ機織・鍛冶等の職人も渡來したゝめ、我が國は益々開けた。
推古天皇の御代　聖德太子は支那に對等の國書を送つて留學生をも遣はし、其後引つゞいて兩國の往來があつたゝめ、學問などは朝鮮を經ずして直ちに支那から傳はつた。
欽明天皇の御代　佛教が初めて百濟から傳はつた。
桓武天皇の御代　僧最澄・空海が唐に渡つて佛教を學び、天台・眞言の二宗を傳へた。
後小松天皇の御代　足利義滿は奢のために財政に窮し、貿易の利を得んとして、明に使を遣はして交通を開いた。明主は義滿を指して日本國王といひ、義滿自らもまた日本國王と稱して書を送つた。

第九節　國史上に見えた戰役

○印は勝者

戰名	年代	主將	主將
天慶の亂	一六〇〇 天慶四年	○平貞盛	平將門
同	一七二二 享保五年	○源經基	藤原純友
前九年の役	一七四七 寛永元年	○源頼義	安部貞任
後三年の役		○源義家	清原武衡

保元の亂	一八一六 保元元年	○後白河天皇 清盛・義朝	崇德・上皇 頼長・爲義
平治の亂	一八一九 平治元年	○平清盛 ○平重盛	源義朝 藤原信頼
石橋山の戰	一八四〇 治承四年	○大庭景親	源頼朝
倶利加羅谷の戰	一八四二 寿永二年	○源義仲	平維盛
宇治川の戰	一八四四 天暦元年	○源義經	源義仲
一ノ谷の戰	一八四四 元暦元年	○源義經	平宗盛
屋島の戰	一八四五 文治元年	○源義經	平宗盛
壇の浦の戰	同	○源義經	平宗盛
承久の亂	一八八一 承久三年	○北條泰時	後鳥羽上皇
湊川の戰	一九九六 延元元年	○足利尊氏	楠木正成
阿倍野の戰	一九九八 延元三年	○足利尊氏	北畠顯家
藤島の戰	同	○足利尊氏	新田義貞
瓜生野の戰	二〇〇七 正平三年	○楠木正行	細川顯氏
四條畷の戰	二〇〇八 正平四年	○高師直	楠木正行
筑後川の戰	二〇一九 正平十四年	○菊地武光	少貳頼尚
永享の戰	二〇九八 永享十年	○足利義教	足利持氏
嘉吉の亂	二一〇一 嘉吉元年	○山名持豊	赤松滿祐
應仁の亂	二一二七―二一三七 應仁元年―文明九年		細川勝元
河越の戰	二二〇六 天文十五年	○北條氏康	上杉憲政
嚴島の戰	二二一五 弘治元年	○毛利元就	陶晴賢
桶狹間の戰	二二二〇 永禄三年	○織田信長	今川義元
川中島の戰	二二二一 永禄四年	上杉謙信	武田信玄
三方原の戰	二二三二 元亀三年	○武田信玄	德川家康
長篠の戰	二二三五 天正三年	○織田信長 ○德川家康	武田勝頼
本能寺の變	二二四二 天正十年	○明智光秀	織田信長
山崎の戰	同	○羽柴秀吉	明智光秀
賤嶽の戰	二二四三 天正十一年	○羽柴秀吉	柴田勝家
小牧山の陣	二二四四 天正十二年	羽柴秀吉	德川家康
小田原の陣	二二五〇 天正十八年	○德川家康	北條氏直
長久手の役	二二四四 天正十二年	○豐臣秀吉	石田三成
大阪冬の陣	二二六〇 慶長五年	○德川家康	豐臣秀頼
大阪夏の陣	二二六四 慶長十九年	德川家康	豐臣秀頼
關ヶ原の戰	二二七五 元和元年	○德川家康	豐臣秀頼
島原の亂	二二九七 寛永十四年	○松平信綱	キリスト教徒
蛤御門の變	二五二四 元治元年	○薩摩會津	長門藩士
長州征伐	二五二四 元治元年	幕府軍	長州藩
長州再征	二五二六 慶應元年	幕府軍	長州藩

伏見・鳥羽の戰	二五二八 明治元年	○薩長二藩兵	幕府軍
上野の戰	同	○官軍	幕府(彰義隊)
會津戰爭	同	○官軍	幕府(松平容保)
函館の戰	同	○官軍	幕府(榎本武揚)
西南の役	二五三七 明治十年	○官軍	西郷隆盛

第十節　對外戰役

文永の役	一九三四 文永十一年	○北條時宗	元軍
弘安の役	一九四一 弘安四年	○北條時宗	元軍
文祿の役	二二五二 文祿元年	○豐臣秀吉	朝鮮
慶長の役	二二五七 慶長二年	○豐臣秀吉	朝鮮
日清戰役	二五五四、五 明治二十七八年	○我軍	清國
北清事變	二五六〇 明治三十二年	○聯合軍	清國
日露戰役	二五六四、五 明治三十七八年	○我軍	露國
日獨戰役	二五七四 大正三年	○我軍	獨逸
滿洲事變	二五九〇 昭和六年	○我軍	支那
上海事變	二五九二 昭和七年	○我軍	支那
支那事變	二五九七 昭和十二年	○我軍	支那

第十一節　著名なる官、國幣社

社名	祭神	所在地
皇大神宮	天照大神	三重縣宇治山田市
豐受大神宮	豐受大神	同
出雲大社	大國主命	島根縣大社町(官幣大社)
熱田神宮	草薙の劍	名古屋市熱田町(同)
香取神宮	經津主命	千葉縣香取町(同)
鹿島神宮	建御雷命	茨城縣鹿島町(同)
櫃原神宮	神武天皇	奈良縣白櫃村(同)
宇佐八幡宮	應神天皇・外二柱	大分縣宇佐町(同)
賀茂神社	玉依姫命・外一柱	京都府下鴨村(同)
石清水八幡宮	應神天皇・外二柱	京都府八幡町(同)
平安神宮	桓武天皇	京都上京區岡崎町(同)
臺灣神社	北白川宮能久親王	臺灣、臺北市郊外(同)
明治神宮	明治天皇・昭憲皇太后	東京市代々木(同)
鎌倉宮	護良親王	神奈川縣鎌倉町(同)
金崎宮	恒良親王・尊良親王	福井縣敦賀市(同)
八代宮	懷良親王	熊本縣八代町(同)

鶴岡八幡宮　應神天皇外二柱　神奈川縣鎌倉町（中社）

第十二節　著名なる別格官幣社

神社	祭神	所在地
談山神社	藤原鎌足	奈良縣多武峯村
護王神社	和氣清麻呂 和氣廣虫	京都市上京區
北野神社	菅原道眞	京都市上京區
太宰府神社	菅原道眞	福岡縣太宰府町
唐澤山神社	藤原秀郷	栃木縣田沼町
小御門神社	藤原師賢	千葉縣小御門村
湊川神社	楠木正成	神戸市多聞通
名和神社	名和長年	鳥取縣名和村
阿部野神社	北畠親房 同顯家	大阪市住吉區
靈山神社	北畠親房・同顯家 北畠顯信・同守親	福島縣靈山村
北畠神社	北畠顯能	三重縣多氣村
藤島神社	新田義貞	福井市岩堀町
結城神社	結城宗廣	津市大字藤方
四條畷神社	楠木正行	大阪府甲可村
菊池神社	菊池氏一族	熊本縣隈府町
上杉神社	上杉謙信	米澤市南堀端町
豐榮神社	毛利元就	山口市上宇野令
建勳神社	織田信長	京都市上京區
豐國神社	豐臣秀吉	京都市東山
尾山神社	前田利家	金澤市西町
東照宮	德川光圀 德川齊昭 德川家康	栃木縣日光 靜岡縣久能山
常磐神社	同	水戸市字常磐
梨木神社	三條實萬 同實美	京都市上京區
照國神社	島津齊彬	鹿兒島市山下町
野田神社	毛利敬親	山口市上宇野令
靖國神社	維新前後國難に殉せる軍人志士	東京市九段坂上

第十三節　著名なる佛寺

寺名	所在地	建立者	備考
四天王寺	大阪市	聖德太子	現時の建物は後世の建立
法隆寺	大和國	聖德太子	現存本邦最古の寺
興福寺	奈良公園	藤原鎌足	藤原氏の氏寺
國分寺 諸國		聖武天皇	
東大寺	奈良公園	聖武天皇	大佛殿
延暦寺	近江比叡山	僧最澄（傳教大師）	天台宗の本山
金剛峯寺	紀州高野山	僧空海（弘法大師）	眞言宗の本山
法成寺	京都	藤原道長	早く亡びて今傳はらない
平等院	山城國宇治	藤原賴通	鳳凰堂は現存する
中尊寺	陸中國平泉	藤原清衡	光堂と經堂とのみ存する
建長寺	鎌倉山之内	北條時賴	鎌倉五山の第一
圓覺寺	同	北條時宗	鎌倉五山の第二
天龍寺	京都下嵯峨	足利尊氏	京都五山の第一
相國寺	京都上京區	足利義滿	京都五山の第二
金閣寺	山城國衣笠	足利義滿	鹿苑寺と稱する
銀閣寺	京都東山	足利義政	慈照寺と稱する
方廣寺	同	豐臣秀吉	鐘銘事件で有名
東本願寺	京都下京區	教如上人	眞宗大谷派の本山
西本願寺	同	顯如上人	眞宗本願寺派の本山
萬福寺	山城國宇治	僧 隱元	黃檗宗の本山
寛永寺	東京市上野	僧 天海	德川將軍家の菩提所

【京都五山】　京都に在る禪宗の五大寺。天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺。

【鎌倉五山】　相模國鎌倉に在る禪宗の五大寺。建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺。

第十四節　國史上著名な書籍

古事記　太安麻呂著。本邦最初の歴史。天地の開け始から推古天皇迄、編年體に述べてある。

風土記　本邦最古の地誌。今僅に五ヶ國を存するのみ。

日本書紀　舍人親王、太安麻呂著。神代から持統天皇に至る間の漢文編年體の國史。

萬葉集　撰者不詳。本邦最初の歌集で漢字の音訓を借りて書いてある。

土佐日記　紀貫之著。最も古い假名の日記で、著者が土佐から京に歸るときの舟日記。

古今集　紀貫之其他撰。本邦最初の勅撰和歌集。

源氏物語　紫式部著。中古宮中の公卿及び官女の生活を描いた小説。

枕の草紙　清少納言著。本邦最古の假名文の隨筆。

平家物語　著者不詳。假名交り文で平家の繁榮から沒落までを記したもの。

源平盛衰記　著者不詳。源平二氏の盛衰を記した假名交り文。

新古今集　藤原定家其他撰。鎌倉時代の勅撰和歌集。

神皇正統記　北畠親房著。皇統の由來を述べて大義名分を明かにしたもの。

太平記　小島法師著。足利時代の軍記物語。

大日本史　德川光圀著。神武天皇から後小松天皇迄の漢文の國史で尊王論の起因となつた。

中朝事實　山鹿素行著。我が上代の歴史により我が國體の尊嚴と忠孝の大道を說いたもの。

古事記傳　本居宣長著。古事記の註釋書で、我が國註譯書中最上のもの。

山陵志　蒲生君平著。漢文で歴代の御陵を考證記述してある。

群書類從　塙保己一著。我が國に於ける最大の叢書。

日本外史　頼山陽著。漢文の國史で源平二氏から德川氏に至る武家の興亡を記してある。

日本政記　頼山陽著。神武天皇から後陽成天皇迄の史實と論斷とを漢文で記したもの。

海國兵談　林子平著。我が國の邊防を論じた兵書。

夢物語　高野長英著。攘夷の不可を述べた假設の物語。

解體新書　前野良澤、杉田玄白著。人體の解剖書で鎖國以後洋書飜譯の最初のもの。

蘭學階梯　大槻磐水著。オランダ語の綴方や發音を示したもの。

第七章　歴史對照年表

（外國重要事項の欄で數字は支那の開國紀元年數を示し、括弧内は西暦紀元を示す。前とあるは西暦紀元前の意味である。例へば我が綏靖天皇の朝に於て、支那は周代に當り、その紀元九十八年に釋迦が印度に生れたが、この年は西暦紀元前五百六十三年の類である。）

御代	重要事項	支那	外國重要事項
1 神武（元―七六）	元・橿原宮に御即位 ■ 皇祖を鳥見に祀る		
2 綏靖（七六―一二）		周	
3 安寧（一二―一五〇）			九八（前五六三）頃 釋迦生る 一一〇（前五五一）孔子生る
4 懿德（一五〇―一八四）			
5 孝昭（一八四―二六八）			一六九（前四四九）ペルシヤ戰役始まる 二一七（前四四四）ペリクレスアテネの執政となる 二五八（前四〇三）支那の戰國時代始まる 三三五（前三二六）アレクサンドル大王即位
6 孝安（二六八―三七〇）			
7 孝靈（三七〇―四四六）			
8 孝元（四四六―五〇二）			
9 開化（五〇二―五六三）			
10 崇神（五六三―六三一）	五六九 鏡劍を笠縫邑に還さる 五七三 四道將軍の派遣 五七五 初めて人民に租稅を課す 六〇四 新羅建國 六二四 高句麗建國		

御代	重要事項	支那	外國重要事項
7 孝靈（三七〇―四四六）		周	三八九（前二七二）ローマのイタリヤ統一 四〇五（前二五六）周亡ぶ
8 孝元（四四六―五〇二）		秦	四四〇（前二二一）秦の支那統一 四五九（前二〇二）漢の高祖即位 四六〇（前二〇一）カルタゴ滅亡
9 開化（五〇二―五六三）		前漢	五五三（前一〇八）漢の武帝朝鮮を服し四郡を置く
10 崇神（五六三―六三一）			六一七（前四四）ケーザル死す

11 垂仁（六三一—七三〇）	六二八	任那初めて入貢す	新	六五七（前四）キリスト生る	
	六四三	百濟建國			
	六五六	皇大神宮を伊勢に遷さる			
	六五九	殉死を禁ず			
12 景行（七三〇—七九〇）	七四二	熊襲親征	後漢	六八五（二五）後漢の光武帝即位	
	七五五	武内宿禰東北視察			
	七五七	日本武尊の熊襲征伐			
	七七〇	日本武尊の蝦夷征伐			
	七七三	日本武尊薨去			
	七八三	天皇東國巡幸			
13 成務（七九〇—八五〇）	七九三	武内宿禰始めて大臣となる			
	七九五	國縣邑里の制を整へる			
14 仲哀（八五一—八六〇）	八五三	熊襲親征			
	八六〇	神功皇后の新羅御征伐			
15 應神（八六〇—九七〇）	八六〇	神功皇后攝政の始め	三國	七二七（六七）佛教支那に入る	
	九四三	百濟縫衣を貢す○弓月君歸化す	西晉		
	九四五	王仁來朝し論語千字文を獻ず			
	九四九	阿知使主等來朝歸化す			
	九六六	阿知使主等を吳に遣はす		八二六（一六六）大秦國の使節支那に來る	
				八八〇（三三〇）後漢亡ぶ	
				九四〇（二八〇）西晉の支那統一	
				九七三（三二三）樂浪帶方二郡亡ぶ	
16 仁德（九七〇—一〇五九）	九七三	難波（大阪）に都したまふ	東	九七六（三一六）西晉亡ぶ	
	九七六	諸國に三年の租稅を免じたまふ	晉	一〇五一（三七五）ゲルマニヤ民族移動	
	一〇五一	高麗廣開土王（好太王）即位		一〇四四（三八四）佛教百濟に入る	
				一〇五五（三九五）ローマの分裂	
17 履中（一〇五九—一〇六五）					
18 反正（一〇六五—一〇七一）					
19 允恭（一〇七一—一一一三）	一〇七五	姓氏の混亂を正す	南北朝	一〇八〇（四二〇）東晉亡ぶ	
20 安康（一一一三—一一一六）					
21 雄略（一一一六—一一三九）	一一三三	吉備田狹任那に據り叛す			
	一一三〇	機織の工女吳より來る			
	一一三八	伊勢外宮の起り			
22 清寧（一一三九—一一四四）				一一三六（四七六）西ローマ帝國亡ぶ	

23 顯宗（一一四四—一一四七）	一一七二	大伴金村の失政	南北朝		
24 仁賢（一一四七—一一五八）	一一七四	新羅法興王即位			
	一一八二	司馬達等來る			
	一一八七	筑紫國造磐井叛す			
25 武烈（一一五八—一一六六）					
26 繼體（一一六六—一一九一）					
27 安閑（一一九一—一一九五）					
28 宣化（一一九五—一一九九）					
29 欽明（一一九九—一二三一）	一二一二	新羅眞興王即位			
	一二一三	百濟佛像經論を獻ず			
	一二一四	百濟曆醫易等の博士を貢す			
	一二三二	任那の日本府亡ぶ			
30 敏達（一二三一—一二四五）	一二三七	百濟造佛寺等の工人を貢す		一二三一（五七一）マホメット生る	
31 用明（一二四五—一二四七）	一二四七	物部守屋亡ぶ			
32 崇峻（一二四七—一二五二）					
33 推古（一二五二—一三八八）	一二五三	聖德太子攝政となる○四天王寺を建つ			
	一二六三	冠位十二階を定む			
	一二六四	憲法十七條を定む			
	一二六七	小野妹子を隋に遣はさる○法隆寺を建つ			
	一二六八	隋使來る○留學生派遣			
	一二八二	聖德太子薨ず			
			南北朝	一二四九（五八九）隋の支那統一	
34 舒明（一二八八—一三〇一）	一二九〇	初めて使を唐に遣はす	隋		
	一二九二	唐使來る○留學生僧旻等これに隨つて歸る			
	一三〇〇	留學生高向玄理等歸る			
35 皇極（一三〇一—一三〇五）	一三〇三	蘇我入鹿山背大兄王を害す	唐	一二七八（六一八）隋亡び唐起る	
	一三〇五	蘇我蝦夷及び入鹿誅に伏す		一二八六（六二六）唐の太宗即位	
36 孝德（一三〇五—一三一四）	一三〇五	年號の始。改新の大業始まる			
	一三〇六	改新の大事を宣したまふ			
	一三〇九	八省百官を置く		一三〇四（六四六）唐の太宗高句麗を親征す	

37 齊明（一三一—一三三）	一三一四	新羅の武烈王卽位	
	一三一八	阿倍比羅夫蝦夷及び肅慎を伐つ	
	一三二〇	新羅王百濟を攻めてその王を降す	
	一三二一	新羅征討のため九州行幸○新羅の文武王卽位	
38 天智（一三二二—一三四一）	一三二二	近江令制定	
	一三二三	唐新羅、百濟を滅ぼす	
	一三二七	都を近江に還す	
	一三二八	唐、高句麗を滅ぼす	
	一三二九	藤原鎌足薨ず	
	一三三〇	庚午年籍を作る	
	一三三一	大友皇子始めて太政大臣となる	
39 弘文（一三四一—一三四二）			
40 天武（一三四三—一三四六）	一三四五	始めて占星台を起す	
	一三四五	八色の姓を定む	
41 持統（一三四六—一三五六）			
42 文武（一三五七—一三六七）	一三六一	大寶律令成る	一三五〇（六九〇）則天武后卽位し國を周といふ
43 元明（一三六七—一三七五）	一三六八	和銅開珍を鑄る	
	一三七〇	奈良奠都	
	一三七二	太安麻呂古事記を上る	
	一三七三	諸國に風土記を上らしむ	
44 元正（一三七五—一三八四）	一三七六	吉備眞備・阿倍仲麿等唐に留學す	
	一三七八	藤原不比等に命じて大寶律令を修正せしむ	
	一三八〇	日本書紀成る	
45 聖武（一三八四—一四〇九）	一三八七	渤海初めて入貢す	
	一三八九	藤原光明子を立てゝ皇后となしたまふ	
	一三九〇	施藥院悲田院を置く	
	一四〇一	國分寺を諸國に建てしむ	
	一四〇七	東大寺の大佛を鑄る	
46 孝謙（一四〇九—一四一八）			
47 淳仁（一四一八—一四二四）			
48 稱德（一四二四—一四三〇）	一四三五	僧道鏡を太政大臣禪師となす	
	一四二九	和氣清麻呂宇佐八幡の神敎を奏しついで大隅	

唐

一三七三（七一三）唐の玄宗の卽位○渤海建國

一三八六（七二六）東ローマ皇帝偶像禁止を令す

一四一五（七五五）唐の安祿山の反起る

49 光仁（一四三〇—一四三一）	一四三〇	道鏡を下野に貶し清麻呂及び廣嶋を召還す	
50 桓武（一四三一—一四六六）	一四三八	僧最澄比叡山に延曆寺を創む	
	一四五四	平安奠都	
	一四六一	田村麻呂蝦夷を平ぐ	
	一四六四	最澄空海入唐す	
	一四六五	最澄歸朝して天台宗を傳ふ	
51 平城（一四六六—一四六九）	一四六六	空海歸朝して眞言宗を傳ふ	
52 嵯峨（一四六九—一四八三）	一四七〇	藏人所を置く	
	一四七四	新撰姓氏錄を上る	
	一四七六	空海高野山に金剛峯寺を創む	
53 淳和（一四八三—一四九三）	一四八一	藤原冬嗣勸學院を建つ	
54 仁明（一四九三—一五一〇）			
55 文德（一五一〇—一五一八）	一五一七	藤原良房太政大臣となる	
56 清和（一五一八—一五三六）	一五一八	藤原良房攝政となる	
57 陽成（一五三六—一五四四）			
58 光孝（一五四四—一五四七）			
59 宇多（一五四七—一五五七）	一五四七	藤原基經關白の詔を受く	
	一五四九	高望王平姓を賜はる	
	一五五四	遣唐使の派遣をやめたまふ	
60 醍醐（一五五七—一五九〇）	一五五九	藤原時平を左大臣、菅原道眞を右大臣としたまふ	
	一五六一	菅原道眞貶せらる	
	一五六三	道眞薨ず	
	一五六五	古今和歌集成る	
	一五七八	王建高麗國を建つ	
61 朱雀（一五九〇—一六〇六）	一五九五	新羅亡ぶ	
	一五九六	高麗の朝鮮半島統一	
	一六〇〇	平將門誅に伏す	
	一六〇一	藤原純友誅に伏す	
62 村上（一六〇六—一六二七）	一六二一	經基王源姓を賜はる	

唐

一五三二（八六二）ルーリツクロシヤの基を開く

一五六七（九〇七）唐亡ぶ

一五七六（九一六）契丹（遼）の建國

一五八（九二六）渤海亡ぶ

一六二〇（九六〇）宋興る

五代

63 冷泉（一六二七—一六二九）				
64 圓融（一六二九—一六四四）				
65 花山（一六四四—一六四六）				
66 一條（一六四六—一六七一）	一六五三	菅原道眞に正一位太政大臣を贈らる		
	一六六〇	藤原道長の女彰子を中宮となしたまふ		
67 三條（一六七一—一六七六）				
68 後一條（一六七六—一六九六）	一六七六	藤原道長の攝政		
	一六七九	刀伊入寇す		
	一六八二	法成寺成る		
	一六八七	藤原道長薨ず		
	一六八八	平忠常叛す		
69 後朱雀（一六九六—一七〇五）	一六九九	初めて延曆寺の僧兵强訴		
70 後冷泉（一七〇五—一七二八）	一七一三	鳳凰堂成る		
	一七二二	前九年の役終る		
	北		宋	
71 後三條（一七二八—一七三二）	一七二九	新置の莊園をやめたまふ		一六三三（九六二）神聖ローマ帝國興る
72 白河（一七三二—一七四六）				
73 堀河（一七四六—一七六七）	一七四八	白河上皇の院政始まる		
	一七四七	後三年の役終る		
74 鳥羽（一七六七—一七八三）				一六五四（九九四）遼・高麗を降す
75 崇德（一七八三—一八〇一）	一七八四	平泉の金色堂成る		
76 近衞（一八〇一—一八一五）				
77 後白河（一八一五—一八一八）	一八一六	保元の亂		
78 二條（一八一八—一八二五）	一八一九	平治の亂		
79 六條（一八二五—一八二八）	一八二七	平清盛太政大臣となる		
80 高倉（一八二八—一八四〇）	一八三二	平清盛の女德子入内す		
	一八三三	平清盛の兵庫築港		
	北	宋	南	宋
				一七二九（一〇六九）宋の王安石の新法發せらる
				一七五六（一〇九六）十字軍始まる
				一七五八（一一一五）女（眞）金の建國
				一七八五（一一三五）遼金に滅ぼさる
				一七八七（一一三七）宋南渡

	一八三五	僧源空淨土宗を開く		
	一八三七	藤原成親等の陰謀		
	一八三九	平重盛薨ず		
81 安德（一八四〇—一八四五）	一八四〇	源頼政兵を擧ぐ○源頼朝・義仲起る○富士川の陣○頼朝侍所を鎌倉に置く		
	一八四一	平清盛薨ず		
	一八四三	平氏西奔○義仲入京		
	一八四四	義仲敗死○一ノ谷の戰○頼朝公文所・問注所を鎌倉に設く		
	一八四五	屋島の戰○壇ノ浦の戰		
82 後鳥羽（一八四五—一八五八）	一八四五	頼朝守護地頭を置くことを許さる		
	一八四九	頼朝の奥州征伐		
	一八五一	榮西宋より歸朝し臨濟宗を傳ふ		
	一八五二	頼朝征夷大將軍に任ぜらる		
	一八五三	絶頼殺さる		
83 土御門（一八五八—一八七〇）	一八五九	將軍頼朝薨ず		
	一八六二	頼家將軍となる		
	一八六三	北條時政執權となる○將軍頼家廢せられ、實朝將軍となる		
	一八六四	頼家害せらる		
		宋	南	宋
				一八六六（一二〇六）テムヂン大汗の位につく（蒙古）
				一八七五（一二五）大憲章發布
				一八七七（一二九）インギス汗の西征
84 順德（一八七〇—一八八一）	一八七九	將軍實朝弑せらる○藤原頼經鎌倉に下る		
85 仲恭（一八八一—一八八二）	一八八一	承久の亂○六波羅探題を置く		
86 後堀河（一八八二—一八九二）	一八八四	北條泰時執權となる○親鸞眞宗を開く		
	一八八六	頼經將軍となる		
	一八八七	道元宋より歸朝し曹洞宗を傳ふ		
	一八九二	貞永式目を定む		
87 四條（一八九二—一九〇二）				
88 後嵯峨（一九〇二—一九〇六）	一九〇四	將軍頼經廢せられ、頼嗣將軍となる		
89 後深草（一九〇六—一九一九）	一九〇六	北條時頼執權となる		
	一九一二	將軍頼嗣廢せられ、宗尊親王將軍となる		
	一九一三	日蓮日蓮宗を開く		
	一九二六	將軍宗尊親王廢せられ惟康親王將軍となる		
90 龜山（一九一九—一九三四）	一九二八	蒙古の國書幕府に達す○北條時宗執權となる		
				一八九四（一二三四）金亡ぶ
				一八九七（一二三七）バッの西征
				一八九八（一二三八）高麗、蒙古に降る
				一九一四（一二五四）フラグ西征
				一九二〇（一二六〇）クビライ即位
				一九二五（一二六五）イ

91 後宇多（一九三四—一九四七）	一九三一	蒙古國號を元と定む	
	一九三四	元軍來寇す（文永の役）	
	一九四一	元軍大擧して再び來寇（弘安の役）	
92 伏見（一九四七—一九五八）	一九四九	將軍惟康親王廢せられ久明親王將軍となる	南宋
93 後伏見（一九五八—一九六一）			
94 後二條（一九六一—一九六八）	一九六八	將軍久明親王廢せられ守邦親王將軍となる	
95 花園（一九六八—一九七八）	一九七六	北條顯時金澤文庫を建つ	
96 後醍醐（一九七八—一九九九）	一九八四	日野資朝・同俊基捕へらる	元
	一九九一	笠置潛幸○楠木正成義兵を起す	
	一九九二	隱岐還幸	
	一九九三	六波羅及び鎌倉陷落○北條氏亡ぶ○天皇還幸	
	一九九四	建武中興	
	一九九五	北條時行の亂○護良親王弑せらる○足利尊氏反す	
			一九六二（一三〇二）フランスの三部會始まる
			ギリス國會制度起る
			一九三五（一二七五）マルコポーロ元に來る
			一九三九（一二七九）南宋亡ぶ
97 後村上（一九九九—二〇二八）	一九九六	多々良濱の戰○湊川の戰○正成戰死○尊氏光明院を擁立す○天皇吉野還幸	
	一九九七	金ケ崎城の陷落	
	一九九八	北畠顯家・新田義貞戰死○尊氏擅に幕府を開く	
	二〇〇一	尊氏初めて天龍寺船を送る	元
	二〇〇八	四條畷の戰○正行戰死○天皇賀名生還幸	
	二〇一三	官軍京都を復す○足利義詮京都を奪はる	
	二〇一四	北畠親房薨ず	
	二〇一八	尊氏歿し義詮家をつぐ	
	二〇二七	義詮歿し義滿家をつぐ	
98 長慶（二〇二八—二〇四三）			
99 後龜山（二〇四三—二〇五一）	二〇五一	義滿山名氏清を滅す	明
	二〇五一	後龜山天皇神器を後小松天皇に傳へ給ふ○李成桂の朝鮮建國	
100 後小松（二〇五四—二〇七二）	二〇五四	征夷大將軍足利義滿職を辭し子義持つぐ	
	二〇九七	義滿金閣を建つ	
			二〇二八（一三六八）元滅び明起る

	二〇五九	應永の亂○義滿大內義弘を滅す	
101 稱光（二〇七二—二〇八八）	二〇六一	義滿好を明に通ず	
	二〇六八	義滿薨ず	
	二〇七九	義持明と交を絶つ	
	二〇八三	義持退隱し子、義量將軍となる	
	二〇八五	義量卒す	
	二〇八八	義持薨ず	
102 後花園（二〇八八—二一二四）	二〇八九	義持の弟義敎將軍となる	
	二〇九二	義敎明と通交を復す	
	二〇九八	永享の亂起る（翌年足利持氏自殺）	
	二一〇〇	結城合戰　春王・安王の亂起る	
	二一〇一	嘉吉の亂　赤松滿祐義敎を害す	
	二一〇二	義敎の子義勝將軍となる	
	二一〇三	義勝卒し弟義政家督をつぐ○宗氏朝鮮と通商條約を結ぶ	
	二一〇九	足利成氏關東管領となる○義政將軍となる	
	二一一五	義政成氏を討たしむ成氏古河に走る	
			明
			二〇六二（一四七二）明の成祖永樂帝卽位
103 後土御門（二一二四—二一六〇）	二一一七	太田道灌江戶城を築く○足利政知堀越に來る	
	二一二七	應仁の亂起る○雪舟明に渡る	
	二一三三	山名宗全・細川勝元卒す○義政退隱し、子義尙將軍となる	
	二一三七	應仁の亂終る	
	二一四三	銀閣成る○義政之に移る	
	二一四九	義尙薨ず	
	二一五〇	義政薨ず○義視の子義稙將軍となる	
	二一五一	伊勢長氏伊豆を略す	
	二一五三	義稙出奔○翌年政知の子義澄將軍となる	
	二一五五	長氏小田原を取る	
104 後柏原（二一六〇—二一八六）	二一六八	義澄近江に奔る○義稙入京	
	二一八一	義稙復京都を出奔す○天皇卽位の禮を行ふ（踐祚後二十二年）○義澄の子義晴將軍となる	
105 後奈良（二一八六—二二一七）	二一九六	天皇卽位の禮を行はせ給ふ（踐祚後十年）	
	二二〇三	葡萄牙人種子島に漂着し鐵砲を傳ふ	
			明
			二二九八（一四九八）イスパニヤ王國成る
			二二四〇（一四八〇）ロシヤのイワン大公獨立す
			二二五二（一四九二）コロンブス亞米利加を發見す
			二二五八（一四九八）ガマ印度航路を開く
			二二七〇（一五一〇）ポルトガル人ゴアを占領す
			二二七七（一五一七）ルーテルの宗教改革意見公表
			二二七九（一五一九）マジエラン世界周航發程
			二二八六（一五二六）ムガール帝國建國

二三〇六	義晴退隱、子義輝將軍となる		
二三〇九	宣教師フランシスサビエル鹿兒島に來る		
二三一一	大内義隆其臣陶晴賢に害せらる		
二三一五	川中島の戰（以後屢々交戰あり）○嚴島の戰		
二三一九	南蠻寺創立		
二三二〇	桶狹間の戰		
二三二五	松永久秀將軍義輝を害す		
二三二八	義輝の從弟義榮將軍となる（ついで阿波に奔り卒す）○信長義昭を奉じて入京す		
二三三〇	信長皇居を修理す○姉川の戰		
二三三一	三方原の戰		
二三三二	義昭逐はれて足利將軍家亡ぶ○武田信玄死す		
二三三五	長篠の戰		
二三三六	信長安土城に移る		
二三三七	秀吉中國征伐		
二三三八	上杉謙信卒す		
二四二	武田氏亡ぶ○本能寺の變○山崎の戰○大友・有馬・大村の三氏使者を羅馬に遣す		
		明	
		二三〇〇（一五四〇）耶蘇會成立	
		二三一七（一五五七）ポルトガル人澳門をとる	
		二三一八（一五五八）イギリスのエリザベス女王即位	
		二三二五（一五六五）イスパニヤ人フイリツピン諸島を占領す	
		二三二九（一五七九）英人初めてインドに達す	
		二三四一（一五八一）オランダ獨立	
106 正親町（二三一七—二三四六）			
二三二九	南蠻寺創立		
二三三〇	桶狹間の戰		
二三三五	松永久秀將軍義輝を害す		
二三三八	義輝の從弟義榮將軍となる（ついで阿波に奔り卒す）○信長義昭を奉じて入京す		
二三三〇	信長皇居を修理す○姉川の戰		
二三三一	三方原の戰		
二三三二	義昭逐はれて足利將軍家亡ぶ○武田信玄死す		
二三三五	長篠の戰		
二三三六	信長安土城に移る		
二三三七	秀吉中國征伐		
二三三八	上杉謙信卒す		
二四二	武田氏亡ぶ○本能寺の變○山崎の戰○大友・有馬・大村の三氏使者を羅馬に遣す		
		明	
		二三〇〇（一五四〇）耶蘇會成立	
		二三一七（一五五七）ポルトガル人澳門をとる	
		二三一八（一五五八）イギリスのエリザベス女王即位	
		二三二五（一五六五）イスパニヤ人フイリツピン諸島を占領す	
		二三二九（一五七九）英人初めてインドに達す	
		二三四一（一五八一）オランダ獨立	
107 後陽成（二三四六—二三七一）			
二三四七	秀吉九州を平ぐ○秀吉聚樂第に移る○禁教令○使を朝鮮に送る		
二三四八	聚樂第行幸		
二三四九	再び使者を朝鮮に送る		
二三五〇	秀吉小田原城を拔く○家康江戸城に入る		
二三五二	文祿の役始まる○イスパニヤのルソン太守に書を送る		
二三五三	小西行長明人沈惟敬と和を議す		
二三五四	秀吉伏見城を築く		
二三五六	秀吉明使を大阪城に引見す		
二三五七	慶長の役始まる		
二三五八	秀吉薨去		
二三六〇	關ヶ原の戰○アダムス等江戸に入る		
二三六三	家康征夷大將軍に任ぜらる		
		明	
		二三四八（一五八八）イスパニヤの無敵艦隊敗北	
		二三六〇（一六〇〇）イギリスの東印度會社創立	

二三六五	家康退隱秀忠將軍となる○朝鮮との修交成る		
二三六九	幕府和蘭人の通商を許す○島津家久琉球を服す		
二三七〇	田中勝助等ノヴイスパンに行く		
二三七三	幕府英人の通商を許す○伊達政宗使を羅馬に遣す		
二三七四	大阪冬の陣		
二三七五	大阪夏の陣○豐臣氏滅亡○諸法度の頒布		
二三七六	家康薨ず		
二三八〇	秀忠の女和子入内○政宗の使歸朝		
二三八三	秀忠退隱し、家光將軍となる		
二三九〇	禁書の令を發す		
二三九五	參觀交代の制定まる		
二三九六	海外渡航の禁		
二三九七	島原の亂		
二三九八	切支丹宗の禁を嚴にす		
二三九九	和蘭の外西洋諸國との貿易を禁ず		
二三〇一	オランダ人を長崎の出島に移す		
		二三六二（一六〇二）オランダの東印度會社創立	
		二三七三（一六一三）ロシヤのロマノフ朝始まる	
		二三七六（一六一六）メルハチ滿洲で帝位につく	
		二三七九（一六一九）オランダ人バタヴイヤに據る	
		二三八四（一六二四）オランダ人臺灣を占領す	
		二三九六（一六三六）滿洲の太宗國を清と號す	
		二三九七（一六三七）朝鮮清に降る	
108 後水尾（二三七一—二三八九）			
二三七三	幕府英人の通商を許す○伊達政宗使を羅馬に遣す		
二三七四	大阪冬の陣		
二三七五	大阪夏の陣○豐臣氏滅亡○諸法度の頒布		
二三七六	家康薨ず		
二三八〇	秀忠の女和子入内○政宗の使歸朝		
二三八三	秀忠退隱し、家光將軍となる		
二三九〇	禁書の令を發す		
二三九五	參觀交代の制定まる		
二三九六	海外渡航の禁		
二三九七	島原の亂		
二三九八	切支丹宗の禁を嚴にす		
二三九九	和蘭の外西洋諸國との貿易を禁ず		
二三〇一	オランダ人を長崎の出島に移す		
		明	
		二三六二（一六〇二）オランダの東印度會社創立	
		二三七三（一六一三）ロシヤのロマノフ朝始まる	
		二三七六（一六一六）メルハチ滿洲で帝位につく	
		二三七九（一六一九）オランダ人バタヴイヤに據る	
		二三八四（一六二四）オランダ人臺灣を占領す	
		二三九六（一六三六）滿洲の太宗國を清と號す	
		二三九七（一六三七）朝鮮清に降る	
109 明正（二三八九—二三〇三）			
二三九〇	禁書の令を發す		
二三九五	參觀交代の制定まる		
二三九六	海外渡航の禁		
二三九七	島原の亂		
二三九八	切支丹宗の禁を嚴にす		
二三九九	和蘭の外西洋諸國との貿易を禁ず		
二三〇一	オランダ人を長崎の出島に移す		
		明	
		二三六二（一六〇二）オランダの東印度會社創立	
		二三七三（一六一三）ロシヤのロマノフ朝始まる	
		二三七六（一六一六）メルハチ滿洲で帝位につく	
		二三七九（一六一九）オランダ人バタヴイヤに據る	
		二三八四（一六二四）オランダ人臺灣を占領す	
		二三九六（一六三六）滿洲の太宗國を清と號す	
		二三九七（一六三七）朝鮮清に降る	
110 後光明（二三〇四—二三一四）			
二三一一	家光薨去、家綱將軍となる○由井正雪の亂		
二三一七	江戸大火○德川光圀大日本史編纂の業を起す		
二三二四	狩野探幽歿す		
二三二〇	家綱薨去、綱吉將軍となる		
二三二七	生類憐みの令を發す		
二三二四	綱吉聖堂を湯島に興す		
二三五〇	光圀湊川に楠公の碑を立つ		
二三五二	光圀薨ず		
二三五五	貨幣改鑄		
二三六〇	光圀薨ず		
二三六二	赤穗義士の復讐		
二三六九	綱吉薨去、家宣將軍となる		
二三七〇	金銀貨の改鑄○閑院宮家を立つ		
二三七一	朝鮮使節の待遇を改む		
二三七二	家宣薨去		
二三七三	金貨の改鑄○家繼將軍となる		
二三七五	長崎貿易の制を定む		
二三七六	家繼薨去、吉宗將軍となる		
		明	
		二三九八（一六三八）ロシヤ人太平洋岸に達す	
		二三一九（一六五九）清の支那統一	
		二三二二（一六六一）鄭成功臺灣に據る	
		二三四二（一六八二）ロシヤのペートル大帝即位	
		二三四九（一六八九）清露間のネルチンクス條約成立	
		二三六七（一七〇七）大ブリテン王國成立○ロシヤのカムチヤツカ占領	
111 後西（二三一四—二三二三）			
二三一七	江戸大火○德川光圀大日本史編纂の業を起す		
二三二四	狩野探幽歿す		
二三二〇	家綱薨去、綱吉將軍となる		
二三二七	生類憐みの令を發す		
二三二四	綱吉聖堂を湯島に興す		
二三五〇	光圀湊川に楠公の碑を立つ		
二三五二	光圀薨ず		
二三五五	貨幣改鑄		
二三六〇	光圀薨ず		
二三六二	赤穗義士の復讐		
二三六九	綱吉薨去、家宣將軍となる		
二三七〇	金銀貨の改鑄○閑院宮家を立つ		
二三七一	朝鮮使節の待遇を改む		
二三七二	家宣薨去		
二三七三	金貨の改鑄○家繼將軍となる		
二三七五	長崎貿易の制を定む		
二三七六	家繼薨去、吉宗將軍となる		
		明	
		二三九八（一六三八）ロシヤ人太平洋岸に達す	
		二三一九（一六五九）清の支那統一	
		二三二二（一六六一）鄭成功臺灣に據る	
		二三四二（一六八二）ロシヤのペートル大帝即位	
		二三四九（一六八九）清露間のネルチンクス條約成立	
		二三六七（一七〇七）大ブリテン王國成立○ロシヤのカムチヤツカ占領	
112 靈元（二三二三—二三四七）			
二三二四	狩野探幽歿す		
二三二〇	家綱薨去、綱吉將軍となる		
二三二七	生類憐みの令を發す		
二三二四	綱吉聖堂を湯島に興す		
二三五〇	光圀湊川に楠公の碑を立つ		
二三五二	光圀薨ず		
二三五五	貨幣改鑄		
二三六〇	光圀薨ず		
二三六二	赤穗義士の復讐		
二三六九	綱吉薨去、家宣將軍となる		
二三七〇	金銀貨の改鑄○閑院宮家を立つ		
二三七一	朝鮮使節の待遇を改む		
二三七二	家宣薨去		
二三七三	金貨の改鑄○家繼將軍となる		
二三七五	長崎貿易の制を定む		
二三七六	家繼薨去、吉宗將軍となる		
		明	
		二三九八（一六三八）ロシヤ人太平洋岸に達す	
		二三一九（一六五九）清の支那統一	
		二三二二（一六六一）鄭成功臺灣に據る	
		二三四二（一六八二）ロシヤのペートル大帝即位	
		二三四九（一六八九）清露間のネルチンクス條約成立	
		二三六七（一七〇七）大ブリテン王國成立○ロシヤのカムチヤツカ占領	
113 東山（二三四七—二三六九）			
二三五〇	綱吉聖堂を湯島に興す		
二三五二	光圀湊川に楠公の碑を立つ		
二三五五	貨幣改鑄		
二三六〇	光圀薨ず		
二三六二	赤穗義士の復讐		
二三六九	綱吉薨去、家宣將軍となる		
二三七〇	金銀貨の改鑄○閑院宮家を立つ		
二三七一	朝鮮使節の待遇を改む		
二三七二	家宣薨去		
二三七三	金貨の改鑄○家繼將軍となる		
二三七五	長崎貿易の制を定む		
二三七六	家繼薨去、吉宗將軍となる		
		明	
		二三九八（一六三八）ロシヤ人太平洋岸に達す	
		二三一九（一六五九）清の支那統一	
		二三二二（一六六一）鄭成功臺灣に據る	
		二三四二（一六八二）ロシヤのペートル大帝即位	
		二三四九（一六八九）清露間のネルチンクス條約成立	
		二三六七（一七〇七）大ブリテン王國成立○ロシヤのカムチヤツカ占領	
114 中御門（二三六九—二三九五）			
二三七〇	金銀貨の改鑄○閑院宮家を立つ		
二三七一	朝鮮使節の待遇を改む		
二三七二	家宣薨去		
二三七三	金貨の改鑄○家繼將軍となる		
二三七五	長崎貿易の制を定む		
二三七六	家繼薨去、吉宗將軍となる		
		明	
		二三九八（一六三八）ロシヤ人太平洋岸に達す	
		二三一九（一六五九）清の支那統一	
		二三二二（一六六一）鄭成功臺灣に據る	
		二三四二（一六八二）ロシヤのペートル大帝即位	
		二三四九（一六八九）清露間のネルチンクス條約成立	
		二三六七（一七〇七）大ブリテン王國成立○ロシヤのカムチヤツカ占領	

	二三八〇	禁書の令を弛む	
	二三八二	養生所を設けて貧者に施療せしむ	
	二三八三	足高の制を定む	
	二三九〇	田安家起る	
115 櫻町 (二三九五—二四〇四)	二四〇〇	一橋家起る	
	二四〇五	吉宗退隱、家重將軍となる	
116 桃園 (二四〇七—二四二二)	二四一九	竹内式部追放○清水家起る	
	二四二〇	家重退隱、家治將軍となる	
117 後櫻町 (二四二二—二四三〇)	二四二七	山縣大貳・藤井右門等罪せらる	
118 後桃園 (二四三〇—二四三九)	二四三三	田沼意次老中となる	
119 光格 (二四三九—二四七七)	二四三三	諸國饑饉	
	二四三六	家治薨去	
	二四三七	家齊將軍となる○松平定信老中となる	
	二四三八	京都大火皇居炎上	
	二四三〇	定信聖堂を巡視す○異學の禁	
	二四五二	林子平罪せらる○露艦根室に來る	
		清	
		二四一七(一七五七)プラッシーの戰	
		二四三五(一七七五)米國獨立戰爭始まる	
		二四三七(一七八七)米國憲法制定	
		二四四九(一七八九)フランス大革命始まる	
120 仁孝 (二四四七—二五〇六)	二四五三	林子平歿す○高山彦九郎自盡○定信江戸近海を巡視す	
	二四五八	近藤重藏木標を擇捉島に建つ	
	二四六〇	伊能忠敬蝦夷地の測量	
	二四六一	本居宣長歿す	
	二四六四	ロシヤのレザノフ來る	
	二四六七	露人蝦夷に寇す	
	二四六八	間宮林藏樺太に到る○英船長崎を騷がす	
	二四八五	外國船擊攘令を下す	
	二四九四	水野忠邦老中となる○大鹽平八郎の亂	
	二四九七	家齊退隱、家慶將軍となる	
	二四九九	渡邊華山、高野長英罪せらる	
	二五〇一	天保の改革始まる	
	二五〇二	外國船擊攘令を弛む	
	二五〇四	オランダ國王幕府に開國をすゝむ	
	二五〇五	忠邦職を罷めらる	
	二五一三	米使ペリー渡來○定齊薨去○ロシヤ使プーチヤチン來る	
	二五一四	米・英・露・蘭と和親條約を結ぶ○家定將軍となる	
		清	
		二四六四(一八〇四)ナポレオン一世卽位	
		二四七五(一八一五)ソーテルローの戰○ウイーン會議	
		二四九七(一八三七)イギリスのヴイクトリヤ女王卽位	
		二五〇二(一八四二)阿片戰爭終る	
		二五一四(一八五四)クリミヤ戰役始まる	

	二五一六	米使ハリス下田に來る	
	二五一八	老中堀田正睦上京○井伊直弼大老となる○米蘭・露・英・佛との條約に調印す○家定薨去家茂將軍となる	
	二五一九	橋本左内・吉田寅次郎等罪せらる	
	二五二〇	櫻田門外の變	
	二五二一	和宮御降嫁	
	二五二二	坂下門外の變○島津久光、毛利元德入京○勅使大原重德東下○生麥の變○幕制の改革	
	二五二三	家茂入京○下關の外國船砲擊○薩藩英艦と戰ふ○七廷臣の長門下向	
	二五二四	蛤御門の變○長州征伐○佛・米・蘭・英四國の聯合艦隊下關を砲擊す	
	二五二五	長州再征○假條約勅許	
	二五二六	家茂薨去慶喜將軍となる	
		清	
		二五一七(一八五七)英佛聯各軍の支那侵入○ムガール帝國亡ぶ	
		二五一八(一八五八)露清間の愛琿條約成立	
		二五二〇(一八六〇)英佛聯合軍北京攻略	
		二五二一(一八六一)イタリヤ王國成る○米國南北戰爭始まる	
122 明治 (二五二六—二五七二)	二五二七	慶喜大政を奉還す○王政復古の令	
	二五二八	鳥羽・伏見の戰○天皇五箇條の御誓文を宣し給ふ○戊辰の役	
	二五二九	函館戰爭（維新の戰亂終結す）○東京奠都○版籍奉還	
	二五三一	廢藩置縣○岩倉大使一行歐米視察	
	二五三三	太陽曆實施○岩倉大使一行歸朝○征韓論の議破る○徵兵令實施	
	二五三四	佐賀の亂○臺灣征伐	
	二五三五	江華島事件○千島・樺太の交換	
	二五三六	熊本の亂○秋月の亂	
	二五三七	西南の役	
	二五三九	府縣會開かる	
	二五四一	明治二十三年國會開設の詔下る	
	二五四二	朝鮮京城の變	
	二五四四	朝鮮京城の變	
	二五四五	京城條約○天津條約○內閣官制の制定	
	二五四九	帝國憲法の發布	
	二五五〇	國會開設○敎育勅語下る	
	二五五四	朝鮮東學黨の亂○清國と戰端を開く	
	二五五五	清國との講和條約（下ノ關條約）成る	
	二五五七	朝鮮國號を韓と改む	
	二五六〇	北清事變	
		清	
		二五三〇(一八七〇)普佛戰役	
		二五三七(一八七七)英國王印度皇帝兼攝	
		二五三八(一八七八)ベルリン會議	
		二五四三(一八九三)三國同盟成立	
		二五四四(一八八四)清佛戰爭	
		二五五一(一八九一)露佛同盟成る○シベリヤ鐵道起工	
		二五五八(一八九八)米西戰爭○米國のハワイ併合	
		二五二九(一八六九)スエズ運河開通	

123 大正（二五七二―二五八六）	二五六二	日英同盟成る	
	二五六四	露國と戰端を開く	
	二五六五	露國との講和條約（ポーツマス條約）成る○韓國に統監府を置く○日英攻守同盟成る	
	二五六七	日佛・日露新協約成る	清
	二五七〇	韓國併合	
	二五七一	日英同盟條約改訂	
	二五七二	明治天皇崩御	
	二五七四	昭憲皇太后崩御○對獨宣戰の布告○青島陥落	中
	二五七五	卽位の禮を擧げ給ふ○日支交渉行はる	
	二五七八	シベリヤに出兵す	
	二五七九	獨逸との講和條約成る	
	二五八〇	尼港事件起る	華
	二五八一	皇太子裕仁親王の外遊○皇太子攝政に就任○ワシントン會議	
	二五八三	關東地方大震災	民
	二五八五	ソヴイエト聯邦との修好成る○普通選擧法制定	
	二五八六	大正天皇崩御	國

124 今上（二五八六―現在）	二五八六	御踐祚	
	二五八七	ジュネーヴに軍縮會議開かる	
	二五八八	不戰條約成立	
	二五九〇	ロンドンに軍縮會議開かる	
	二五九一	滿洲事變起る	
	二五九二	上海事變起る	
	二五九三	國際聯盟脫退	
	二五九五	華府條約廢棄	
	二五九六	二・二六事件勃發す	
	二五九六	日獨防共協定成立	
	二五九七	日支事變起る	
	二五九七	日獨防共協定に伊太利加盟す	
	二五九八	我軍支那の首都南京を陥落	

清	二五五九（一八九九）北清事變起る		
	二五六二（一九〇二）南阿戰爭終る		
	二五六四（一九〇四）英佛協商成る		
中	二五七二（一九一二）バルカン戰爭始まる○伊土戰爭○清の滅亡		
	二五七四（一九一四）世界大戰始まる○パナマ運河開通		
華	二五七七（一九一七）ロシヤの革命		
	二五七八（一九一八）獨墺の革命		
民	二五七九（一九一九）ヴエルサイユ講和條約成立		
	二五八〇（一九二〇）國際聯盟成立		
國	二五八八（一九二八）支那の國民軍北伐完成		
	二五九二（一九三二）滿洲國獨立		
	二五九三（一九三四）內蒙自治委員會成立す		
	二五九五（一九三五）冀東冀察二政權成立す		
	二五九六（一九三六）西安事件起る		
	二五九七（一九三七）ソ支不可侵條約成る		
	二五九八（一九三八）國民政府漢口及び重慶に遷る		

第廿二編　東洋史知識

第一章　上古

節一節　支那の上代

漢民族　支那は世界最古の文明國であるが、この文化を開拓したものは漢民族である。然し漢民族は支那土着の民ではなく、今から約五千年以前に西北地方から、今の黃河の流域地方に移住し來り、南方の土民苗族を征服同化して、この地方に數多の部落を作り、農牧を營み、交易の道を開いた。これら漢民族の部落には、必ず酋長があつて政治的支配權を握つたが、部落酋長中の勢力人望とも最も優れた者が、推されて全民族を統一した。

漢民族の發展　黃河の沿岸にあつた民族は、自らを中華と稱し四方の者を野蠻視して東夷・北狄・西戎・南蠻といつたが、この夷・狄・戎・蠻を外にしては支那人は無いのだから、今日の漢民族なるものは、要するに往古の夷・狄・戎・蠻に外ならないのである。彼等は次第に四方の蠻族を同化または征服し、南は揚子江に至る地方にまで、その領域を擴大した。

三皇・五帝　當時全民族を統一したものは三皇・五帝である。三皇とは燧人氏、伏羲氏、神農氏のことで、燧人氏は火食を發明して、食物の調理法を敎へ、伏羲氏は初めて八卦を畫し

また人民に漁業と牧畜のことを敎へた。神農氏は初めて農具を作り、農耕、商業の法及び醫藥のことを敎へた。五帝とは黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜の五帝である。然し是等三皇

五帝の時代は、支那の神話時代に屬してゐて、實在の人ではないのである。

大帝國の建設　五帝の初めである黃帝は、武略に長じ、次第に諸蠻を征服して全民族の諸部落を統一し、舟車を造つて商業交通に資し、文字をつくり、曆法を定め、文化の發展に貢獻したから、後世支那帝國建設の祖として崇拜された。

堯舜の世　黃帝より顓頊・帝嚳を經て堯・舜の時代を迎へるに及び、共に名君にして大いに治蹟を擧げ、後世「唐虞の世」と稱せられる程の時代を現出せしめた。以上が支那の神話時代である。

夏の世　禹が黃河の洪水を修めるや帝舜は禹に位を讓つた。禹は都を安邑に奠め、初めて國號を立て丶夏と稱し、全國を九州に分つて道路を開き、河水を通じ、勤儉を旨とし、民力を休養するなどの仁政を布いたから、諸侯、人民はその德を慕ひ、子の啓を推して天子とした。これが支那における王位世襲の初めである。

夏の滅亡　かくて夏には啓の子孫が代々君臨したが、桀王に至つて政を紊し、人望を失づたから、商の湯王のために滅ぼされ、十七代四百四十年にして夏は滅亡した。

湯王の建國　湯王はもと夏の諸侯の一であつたが、桀王が人心を失ふに乘じ、賢相伊尹の勸めに從つて夏を滅ぼし、自ら王位に卽いて革命を開いた。かくて亳に都を奠め、國を商と號したが、中頃盤康といふ名君現はれ、都を殷に遷したから、爾後國號を殷と稱することになつた。

殷の滅亡　その後紂王に至つて租稅を重くし、賢臣箕子等の諫を用ひず、遂に周の武王のために滅ぼされた。西曆紀元前一千百二十年頃で、湯王が夏に代つてから三十代、六百四十餘年にして殷は滅んだのである。

○禹王陵　浙江省の會稽山にある。

第二節　周の世

周公の盛世　周の武王は、殷を滅して今の西安に都し、一族功臣を諸侯に封じて、各地を治めしめた。當時武王の弟周公は、幼主成王を助けて、文物制度を整へ、今の洛陽に東都を營んで建國の基を固くしたのである。そのため武王と康王との二時代は、周の極盛時代を出現したが、それより約三百餘年後の平王のときに至り、夷狄のため西安を追はれて東都に移つた。これが周の東遷で、それより周の國力は次第に衰へるに至つた。

周の制度　周の諸王は、都に近い地方を直屬の地として王畿と稱し、諸侯を公・侯・伯・子・男の五爵に分ち、その四周に領地を與へて封建制度を立て、中央政府には天・地・春・夏・秋・冬の六官を置いて政務を司らしめた。また學校は夏・殷以來既に設けられてゐたが、周に至つて大學・小學などを設け、小學では日用の小事を敎へ、大學に入つて禮・樂・射・御・書・數の六藝を授け、修身と治國の道を敎へて人材の養成に努めた。其他土地制度、徵兵制度などをも定めこれより人文大いに開け、支那文化の基礎が確立したのである。

春秋の世　周の東遷から、約三百年間を春秋時代といつて、漢民族は次第に增加し、地域も擴大するに從つて蠻・夷・戎・狄の異民族と相接するに至つたが、その間周の王室は衰へて威令は行はれなかつた。こゝにおいて强大な諸侯は、尊王攘夷に名を藉り、表面周王を戴いて小諸侯の長となり、天下に號令するに至つた。

霸者　これらの諸侯を霸者と稱し、北方の齊・晉と南方の楚・吳・越などが、互に相爭ふたから、黃河流域に發達した文化が、次第に南方にも傳はつた。

戰國の世　春秋より凡そ二百年間を戰國時代といつて、周は僅かに洛陽附近の地を支配して勢ひ振はず、諸侯は悉く自から王と稱して、富國强兵を競ひ、全國を擧げて戰爭攻伐が相つゞいた。

合從・連衡　中にも西方の秦は、勢最も强く、東方の諸國を征服せんとしたから、蘇秦なる者が、合從の策を立て、是等諸國の同盟をつくつて秦に當つた。これに對し秦は張儀をし

て、連衡の計を行はしめたから、同盟諸國互ひに相疑ひて團結力衰へ、遂に秦と和するに至つた。この後東方諸國は、策士の言に惑はされて方針一定せず、秦はこれに乘じて、頻りに諸國を併合しやがて天下を統一するに至つた。

箕子陵

古朝鮮　朝鮮半島は我國と支那との間に位し、古來兩國の影響をうけて發達した。これより先殷の亡ぶや、その王族の箕子が朝鮮に入つて、今の平壤に都し、次第に諸部落を統一して、半島の北部から南滿洲一帶の地方を支配するに至つた。古朝鮮と稱するのが即ちこれである。

燕の衞滿　其後春秋・戰國の世に至り、漢族のうち難を避けて朝鮮に來る者が多くなつたが、箕氏の勢力の衰へたのに乘じて、燕の衞滿なる者が箕氏を逐ひ、皇紀四百六十七年平壤に都して朝鮮王となつた。かくて半島の北部は、漢族によつて開かれたが、今の漢江より南部には、尙ほ多くの小國が分立して、我國と交通してゐた。

○箕子陵　平壤北方の高地、乙密臺の附近にある。

第三節　儒教と諸子百家

學術の發達　周は學校を設けて、教育を奬勵し、春秋・戰國の世に至つて、諸國が競ふて、人材を用ひたから、才藝ある者は、立身成功の道が開かれた。殊に世の亂れと共に、言論が自由になつた結果、學ある者の中には治國救民の方法につき說を立てるもの多く、ために學者や論客が輩出した。これは我戰國時代と大いに異なるところで、中にも學德共に高く後世まで深い感化を及ぼしたのは孔子であつた。

孔子　孔子は名を丘、字を仲尼といひ、春秋時代の末に魯の昌平鄉に生れた。初め魯侯に仕へて政治を行つたが、自己の持說が用ひられなかつたので、職を辭し諸國を遊說した。然も到る處志を得なかつたから、晚年子弟の教育と著書とに全力を注ぎ易・書・詩・春秋・禮記などの所謂五經を著

した。

五經・論語　また論語は孔子の遺教をあつめた書である。孔子の門に學ぶ者は、その數三千人と傳へられ、その趣味廣く、意志も強く、道のためには身命をも惜まなかつた點で釋迦・キリスト・マホメットなどと並べて、世界的聖人に數へられてゐるのである。

孔子

○孔子の廟　山東省の阜曲にあり、廟中の孔子像は唐の吳道書の筆と傳へられてゐる。

儒　孔子の教を儒教または儒學ともいひ、その說く所は家族相親しむ孝悌を根本とし、これを廣めて、人々は仁・以て互に和し、身を修め、國家の平和をもたらすべしと言ふにあり、その目的とするところは君臣の名分を正し、亂れた世を治めて、周の盛時に返さうとするものであつた。其後戰國の頃、孟子・荀子などが出で、儒教は更に發展した。

孟子と荀子　孟子は性善說を唱道し、仁義を重んじ、覇道をしりぞけ、荀子はこれに反して性惡說を唱へ、禮の必要を力說した。孟子と孔子は、その學德の上において孔孟と並稱せられ、儒教も一に孔孟の教へといひ、久しく支那における政教の基となつた。かく儒教の發達に伴ひ、孔子をまつる聖廟が各地に建てられ、その祭も行はれることゝなつたがその數は遠く朝鮮半島を經て、我國にまで傳へられた。

聖廟

諸子百家　戰國時代には、儒教に反對した學說も少くなかつた。中でも楚の老子は、儒教が束縛に傾くのに反對して、すべて仁義をしりぞけ、自然に一任せば天下は自から治まるべしと說き、これを

莊子が祖述したのである。

老莊の學　道學または老莊の學といふのがこの一派で、後世の道教は、この派の說に附會して起つたものである。以上の外に、墨子は博愛說を唱へ、楊子は自愛說を立て、孫子・吳子は兵法を講じ、韓非子・商鞅等は法治主義を說くなど、諸學派が一時に並び起つた。是等を總稱して諸子百家と言ひ、後世支那に行はれた各種思想の根源として發展したのである。

第二章　中　古

第一節　秦の統一

始皇帝の內治　周を滅した秦は國富み兵强く、始皇帝に至つて天下を統一したが、始皇帝は戰國時代の弊に鑑み、封建制度を廢して郡縣の制を布き、中央政府に丞相・太尉・御史大夫などの官を置いて、集權政治を行つた。また天子の尊嚴を示すために皇帝と號し、その命令を詔、印を璽といひ、大いに宮殿を營み、屢々國內を巡遊して民間の兵器を收め、富者を國都に移して戰亂の源を塞ぎ、文字・度量衡等の制を一定して、法治の步を進めたが、その法治主義は、やゝもすれば極端に流れたから、人民は却つて新政を厭ひ、學者もまた古制を賞するなど、始皇帝の改革に對して世論が頗るやかましくなつた。

焚書・坑儒　こゝにおいて帝は、丞相李斯の言により、醫藥・農業などに關するもの以外は、民間の一切の古書を燒きすて次いで書生四百餘人を坑に埋めて殺し、異論を壓迫して統一の實を擧げんと計つたのである。

萬里長城

萬里長城　これより先春秋・戰國の世以來漢族は次第に發展して、附近の異民族と接觸するに至つたが、內部の不統一に乘じて、屢々異民族の侵入を受けることゝなつた。殊に今の蒙古地方に住する匈奴は、その勢ひが强大であつたから、北方の諸國は、北境に城を築き辛うじて防いだ。秦の始皇帝に至り、蒙恬なる者をして匈奴を擊退せしめ、北邊の要城を修築して、萬里の長城となし、その侵入を防ぐ一方、今の安南地方をも從へ、漢族をしてこの方面に移住せしめた。そのため漢族は、黃河流域より南支那方面にまで擴がり、秦の威名は遠近に轟いた。後ち秦が滅ぶに至り、その遺民にして我國に歸化した者が少くなかつたが、現今諸外國の間に用ひられてゐる支那なる國名は秦の名から轉じたチナに基くものと言はれてゐる。

○萬里の長城　今の長城は秦代のものではなく、漢以後に次第に築造されたものである。八達嶺は北京の北方にあり蒙古に對する要地である。

項羽

項羽と劉邦　始皇帝は、統一の事業半ばにして歿し、二世皇帝が其後をついだが、彼は愚昧にして宦官趙高等が暴政を行ひ、人心を失つたから、その機に乘じて亡國の遺臣が、兵を四方に擧げた。中にも江東より起つた項羽と、沛より起つた劉邦とは、最も有力であつたが、先づ劉邦は、國都西安に迫つて秦王を降し、三世十五年にして秦を亡ぼした。

第二節　前漢と後漢

漢の高祖　秦が滅ぶや、項羽は劉邦の功を嫉み、これを擊たんとしたが、鴻門に會して許された。然るに項羽は阿房宮を燒き、子嬰を殺し、諸將を天下に分封したから、劉邦は、秦の法を改めて民心を收める一方、蕭何・張良・韓信の三傑を用ひ、好機を狙つて項羽を烏江に倒し、帝位につき、長安に都して國號を漢と稱した。これが漢の高祖である。

高祖

郡縣・封建併用　高祖は一平民から身を起して皇帝となり、藩屏と賴むものがなかつたから、自ら王室の基を固くせんとして周・秦の制度を併用し、天子の領地は郡縣の制を採り、一

族功臣は、これを遠地に封じて封建を行つた。然かもその子の文帝・孫景共によく遺業を守り、殊に景帝は諸王の亂を平げて、その領地をも直接に治め、諸王の國政を執ることを許さなかつたから、天下は穩かに、この頃より財政もやうやく豐かになつた。

武帝の偉業　景帝の子武帝は、英明の資を以て、漢の盛時に位につき內政、外交ともに大いに擧つた。彼は卽位の翌年、始めて建元といふ年號を立て、儒教を以て國民の思想を統一する目的で大學を興し五經博士を置いて子弟を教育したから、儒教が支那の國教のやうになつた。當時北方の匈奴は再び勢ひを盛り返し、屢々漢を侵した。そこで武帝は、探險家の張騫を西域に遣し、大月氏と結び、所謂夷を以て夷を制せんと謀ると共に、大軍を送つて匈奴を遠く北方に退け、今の內蒙古を略取した。其他皇紀五百五十三年衞氏を征して朝鮮を服し、更に今の安南地方をも平定した。かくて漢の勢力は東は朝鮮より、西は天山の南に及び、北は內蒙古より、南は安南にまで達し漢土・漢族の名は何時しか、支那全部の國土・人民を代表する名となつた。然かも張騫の遺使によつて、西域諸國との交通が開けた結果、葡萄・胡麻・胡瓜・孔雀などの、西方の物產や文化が陸續と支那に傳はり、同時に支那の絹布も西方に輸出されることゝなつた。

武帝

漢の中絕　武帝の後は宣帝が中興の英主と稱せられたが、其後國勢は次第に衰へ、成帝のときには外戚の王氏一族が專橫を極めるに至つた。王氏の族の王莽は、巧みに人心を收め、遂に平帝を弑して、漢室を奪ひ、自ら帝位について國を新と號した。然るに假は從らに古代の制度に復舊せんとして、頻りに法令を改廢し、人民に重稅を賦課したので、間もなく四方に亂が起り、且つ外敵の侵入を受けるに至つた。

後漢の興起　此時に當り、漢の王族にして、景帝の遠裔に當る劉秀も兵を起し、王莽の軍を昆陽に破り、ついで長安に入つて王莽を殺し、帝位に卽いて都を洛陽に定め、中絕した漢を再興した。これが後漢の光武帝である。光武帝は意を內治に用ひ、學問を奬勵して士風の養成に力をつくし、努めて兵戰を避けて民力の休養をはかつたが、子の明帝・孫章帝と共によくその遺業を守り、後漢の極盛時代を現はした。

後漢と匈奴　後漢に至つて匈奴は南北二部に分れ、南匈奴は早く後漢に屈服したが、北匈奴はなほ西域に威を振つた。明帝は智勇兼備な班超を遣はし、西域諸國の經略に當らしめ、これを討つて今の裏海附近に追ひ、漸く西域諸國を服從せしめることを得た。

大秦國との交通　當時歐洲の羅馬帝國は、西部亞細亞地方を領有し、漢と對立する世界の二大先進國となつてゐた。漢はこれを大秦國と稱し、西域諸國を從へるに及んで班超は、使者を大秦國に送り、陸上から交通を開かんと試みて果さなかつたが、桓帝のとき大秦の使者が、海路より今の東京に來てから、兩國の間に交通が開け、支那の絹布は羅馬人の間に頗る珍重されることになつた。

第三節　朝鮮半島の變遷

漢の朝鮮征服　前漢の頃朝鮮の衞氏は、驕慢にして動もすれば前漢に敵意を示したから、武帝は楊僕等を將として海陸の兵を派し、衞氏を滅して朝鮮を服しこれに郡縣政治を施した。然るに當時半島は、部落割據の狀態で、漢の服したものは漢江以北の地であつたから、漢の政令は普ねく全半島に行きわたらなかつたが、漢族の移住するものはこれより次第に多く支那の文化が盛んに半島に傳はつた。

三韓と三國　當時半島の南部には、馬韓・辰韓・弁韓の三韓が分立し、日本人及び支那人の移住する者も少くなかつた。從つて漢の勢力が半島に及ぶに至つて、三韓から今の平壤に通ずる者も現はれたが、是等は殆どその郡縣政治の範圍外であつた。やがて漢の勢力が衰へるに至り、北方に高句麗が起り南方の三韓も亡んで、その跡に新羅・百濟などが起り、次第に附近を併せて、三國の分立を見るに至つた。

任那日本府　當時半島の南部に任那といふ小國があつたが、新羅の壓迫に苦しみ我國に援を求めた。こゝにおいて垂仁天皇は任那を保護して日本府の基を開き給ひ、次いで神功皇后の新羅御親征が行はれた。かゝる關係によつて、我國と支那との交通も開けたが、支那は我國を呼んで倭と稱し、我國人の中には、後漢の光武帝から、王印を授けられたものさへあつたの

漢倭奴國王印

である。

○漢委奴國王印　福岡縣博多灣の志賀島から發掘されたもので方二・四ミリ位ある。この附近の土豪にして、漢の倭奴國王の使用した印である。

第四節　漢代の文化

訓詁の學風　前漢の武帝が儒教を奬勵した結果として、學者・文人が相ついで現はれた。儒教においては、主として古書の文義・字句のみを解する訓詁の學風が盛んに行はれ、次第に道德の實行から遠ざかるに至り、前漢の董仲舒・後漢の馬融・鄭玄などは共に名高い儒者で、殊に鄭玄は、支那第一の訓詁學者と仰がれた。

修史　また前漢の司馬遷は史記を著して、支那の上古から武帝に至るまでの歷史を述べ、後漢の班固は漢書を作つて、前漢の歷史を明かにした。この二書は後世修史の模範とされるやうになつた。

漢字の發達　文字は黃帝の時代に發明せられたが、時代の經過と共にその形は變化して簡明となり、字體も統一せられた。最も古いものを古文といふが、周以後は略して篆書・隸書となり、漢代には更に略して楷書・行書・草書の三體となつた。文字を記すには漆を以て竹片・木の札・布などに書き、韋を以て編み、卷いて書物とした。今も書物を數へるのに卷・編などといふのは、これがためである。然るに秦代に入つて初めて筆がつくられ、後世は蔡倫なるものが製紙の法を發明し書物の體裁も自ら變化した。

漢字の發達

道教　漢の初期には儒教よりも道家の說が歡迎されたが、後漢に至つて佛教が輸入せられると共にその刺戟によつて道教が興つた。道教は支那古來の民間の信仰に老莊の說を加味し、主として幸福にして長生せんとするもので、張道陵といふ者によつて開かれ祈禱・療病などの事を行ひ、次第に民間に廣まつた。

漢の文化と我國　漢代には銅鏡・織物・漆器などの製作の技が進み、今の平壤附近の樂浪などを初めとし、朝鮮半島にも傳はつた。其後我國の勢力が朝鮮半島に及ぶに至り、是等の學問技藝は我國にも傳はり、應神天皇の御代に來朝して、論語千字文を獻じた百濟の王仁の如きは漢の高祖の子孫である。其後易博士・五經博士なども矢張り朝鮮から來朝し、機織・裁縫工などの渡來と共に、文物工藝の發達に貢獻するところが少くなかつた。

樂浪の工藝

樂浪　漢の武帝は古朝鮮を征し四郡を置いたが、中にも樂浪郡はわが仁德帝の御代に至るまで約四百二十年間支那の勢力範圍として殘つた。

第五節　印度佛教の傳播

古代印度　印度は支那と共に、東洋文明の發源地で、今より約四千年前アーリヤ種族の一派が、中央亞細亞から南下して印度に入り、土人を征服して印度北半部を占めたときに發端してゐる。アーリヤ種族の社會は僧族、王族、平民などの階級制度が嚴重で、特に神人の間に立つ僧族が重んぜられたから制度、文物をその手に占め、バラモン教を本として他の階級を壓迫し、次第に專横に傾いた。このときに當つて宗教を革新し、救世濟民を目的として起つたのが釋迦であつた。

釋迦　釋迦は中印度カピラ王國の世子で我紀元前天皇の御代に生れた王族であるが、長ずるに及んで深く人生、社會問題に思をひそめ、遂に出家修業して佛教を開き、一生を捧げてこれが布教に從事した。釋迦の教義はバラモン教に反對し、一切人類の平等を唱へ、この世における人間の苦痛は、悉く私利に基くのであるから、何人も私欲を斷ち、慈悲の心を以て正しい道を行へば佛となり、極樂の安心境に達し得べしといふのにあつた。僧族の專横に反感を抱く人々は、隨喜してその信者となり、印度以外の國々にも弘まつて、大なる感化を及ぼした。

佛教の興起　釋迦の歿後二百餘年を經て、中印度のマガダ國にアショカ王が出て佛教を弘めたが、其後約三百年にして大月氏國にカニシカ王が現はれ、佛教を信じて保護・布教に力をつくした。大月氏國は、インダス河上流のガンダーラ地方に

位した關係上、希臘の影響を受けて、佛教美術の花を開き、東はバルマより西はシリヤに及び、南はセイロン島から北は中央亞細亞に至るまで弘通せられ、やがて支那にも傳はることゝなつた。

釋迦降靈圖　西印度ボンペイ附近の石窟寺の洞内の壁畫のことである。釋迦がまだ悟を開かず菩提樹下で修業してゐるとき魔王がその一族を率ゐ來り、これを惑亂せんとするのを、能く降伏したさまを示したものとして有名である。

佛教の東漸　當時、漢族の勢力は、西域地方にも及び、佛教の隆盛の影響を受けることゝなつたが、後漢の明帝は、特に蔡愔を大月氏國に遣してこれを求めた、かくて蔡愔が中印度の僧侶を伴ひ佛像・經文をもたらして歸國するや、明帝は洛陽に白馬寺を建立してこれを布教せしめ、外國僧侶の支那に來り譯經・布教をなすもの多きを加へると共に、次第に弘通されるに至つた。

第六節　三國、兩晉、南北朝

三國鼎立の卷　後漢の天子は和帝以後多くは幼弱で、外戚・宦官が政を專らにし、群雄が四方に據つて亂を起すに至つたが、中にも曹操・孫權・劉備の三人が最も有名であつた。初め曹操は後漢の天子をいたゞいて、北支那を平定したが、孫權・劉備等は、揚子江流域を保ち、やがて同盟して曹操の軍を赤壁に破つた。間もなく曹操の子曹丕は、後漢を滅して帝位につき、洛陽に都し國號を魏と稱した。この間前漢・後漢を合せて凡そ四百年を經過した。

諸葛孔明

諸葛孔明　ついで劉備が帝となり、成都に都するや、國を蜀と改め、諸葛孔明・關羽等の賢臣名將を用ひて漢の回復を計り、孫權もまた今の南京に都して國を吳と稱し、こゝに三國分立して、互に攻爭をつゞけることゝなつた。

西晉の統一　其後、魏は次第に勢力を得て蜀を滅したが、魏の權臣司馬氏が主家を倒し、吳をも併呑して天下を統一した。これが西晉である。

○**蜀の城門**　今の四川省成都の城門で、成都には諸葛孔明を

まつる丞相祠堂がある。

五胡・十六國　西晉は國勢振はずして、國内の統一を缺いだが、其間に匈奴・羯・鮮卑・氐・羌などの異民族が侵入して、黄河の流域を占領し、約百三十年間に十六國が興亡を重ねた。世にいふ五胡・十六國はこれである。

南北朝　そのため西晉は滅び、その王族は江南に逃れて、今の南京に都し、東晉と稱したが、これもまた間もなく宋に滅された。その後凡そ百五十年間、支那は南北の二大勢力に分れて、絶えず爭亂を繰返すに至つたのである。

南北朝の文化　これより先南朝の宋・齊・梁・陳等は、吳及び東晉と合せて六朝と稱し、江南の文化は進んで文學、藝術などが發達した。特に文學は詩文の流行を來し東晉の末には陶淵明の如き詩人も現はれた。また一般に老莊の學が行はれて文學などの上に影響を與へた。佛教もまた頗る盛んにして、東晉の法顯は印度に留學し、梁の武帝はこれを篤く信奉して寺院を建て、また印度より達磨が入國して禪宗を傳へた。北朝においても後魏の孝文帝は、漢族の文物を慕ひ、言語、風俗に至るまで、漢化主義をとつたから、佛教は後魏にも盛んに行はれ、印度にならつて石窟寺を開き、佛教美術の隆盛を來した。南北朝時代は分裂爭亂の時代であつたに拘らず、佛教の隆盛を極め、次第に東方諸國にまで傳播された。

佛教東傳　この間に朝鮮半島の高句麗は、我仁德天皇の頃より好太王・長壽王などの英主が相次いで平壤に都し、屢々百濟を侵したが、其後新羅にも英主眞興王が出て任那を攻め、日本府を滅したから、半島における勢力關係が著しく變化した。かゝる間に佛教は、北朝を通じて高句麗・新羅に入りまた東晉より百濟にも傳はつた。百濟が更にこれを我國に傳へた。欽明天皇の頃はその國運漸く傾き、我國の後援を得て、これを回復せんとするときであつた。かく佛教が東漸するに從ひ、佛教藝術は著しく發達し、新羅の都慶州附近及び、我法隆寺などには、多くの優れた遺物を傳へることになつた。

○**好太王碑**　高句麗十九代の英主好太王の功績を記した碑で今の滿洲の輯安縣にある。

○**佛國寺**　新羅の都で慶州附近にあり、新羅法興王が創立し、更に我孝謙天皇の御代に景德王が再建したものである

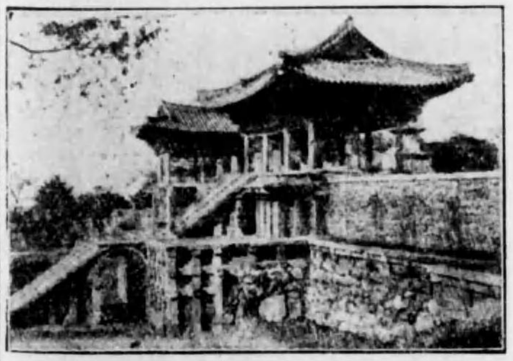
第七節　隋の興亡

好太王碑

文帝の統一　北朝諸國は風俗は粗野であつたが、その武強の精神を以て、文弱に流れ易い南朝を壓した。かくて久しく支那に止まる間に、次第に漢族の風に感化せられ、遂に楊堅は北方の勢力を基礎として南北を統一し、長安に都を奠めて隋の文帝と稱した。

煬帝の經略　文帝は内治に心を用ひ、中央集權の實をあげ、久しきに亙る爭亂を治めて民力を休養し、諸制度を整のへた。また次の煬帝は漢の武帝にならひ、外國經略に志して、先づ北方の突厥を服し、次いで今の安南・臺灣を從へ、西域諸國の人々を招き通商を行つた。然かるに彼は豪奢を好み、遊幸に便せんため、各地に離宮を營み、運河を開鑿して南北を通じ、北邊の長城を修理するなど頻りに人民を使驅したから、遂に天下の怨みを受けることゝなつた。殊に高句麗を討たんとして失敗に終るや、國内の動亂を起して臣下のために弑せられた。我聖德太子が小野妹子を遣し、支那と國交を開かれたのは、この煬帝のときであつた。

貞觀の治　隋の末山西省太原の守將李淵は、その子世民とゝもに兵を起し、進んで長安を陷れて帝位についた。即ち唐の高祖である。高祖はやがて群雄を平定して天下を統一し、間もなく子の世民に位を讓つた。世民は後の太宗で明英の資をもつて能く文武の名臣を用ひ、天下稍かにして國威を擧げ、世にいふ貞觀の治を現出した。太宗の子高宗の代にも、前代の名臣なほ存してこれを助け、太宗の遺業を完成した。されば兩帝の治世約六十年間は、



佛國寺

太宗

唐の極盛時代にして、内には文化の花が開き、外は異民族を服して、漢族空前の大發展を來し、當時の世界における一先進國となつたのである。

則天武后　高宗は多病のため皇后武氏に政治を行はせてゐたが高宗の死後、武氏自から帝位に登り、則天武后と稱し、國號を周と改めた。武后は權略もすぐれ、よく人材を用ひて、國威を維持したが、間もなく唐室に復することゝなつた。

第八節　唐の興亡

唐の外國經略　唐は太宗と高宗の時代に國威大いに振ひ、對外經略の歩も頻りに進んだ。これより先アルタイ山附近に突厥が起つて、今の蒙古・新疆・中央亞細亞地方を支配し、唐にも屢々入寇したから、高宗はこれを滅して、その領地を併せたが、更に今の西藏・青海を服し、滿洲・樺太までも威を及ぼした。當時朝鮮半島では尙ほ高句麗が勢力を有し、百濟と同盟して、新羅に對抗した。

唐の半島統治　この間唐は朝鮮半島にも手をのばし、新羅を援けて百濟を亡ぼし、半島より日本の勢力を驅逐し、次いで内亂に乘じて高句麗を滅し、平壤に安東都護府を置き、半島を統治するに至つた。間もなく新羅は唐にそむき、一時大同江以南の地を領したが、後唐と和してその文化を輸入したから國都慶州を中心として學問、佛教、藝術などが頗る發達した。

○大唐平百濟國碑塔　唐の高宗の時百濟を滅した記念として其都であつた今の忠淸南道扶餘に建てた石塔である。

唐の對外交通　かく唐の國力發展するに從ひ、諸外國との交通も盛んに行はれた即ち西藏を服するや、これを通じて印度との交通を開

太唐平百濟國碑塔

き、太宗は使節を送つたが、當時印度では佛教藝術などの榮えたグプタ朝に次ぎ、ウヂャーナ國が起つて、文藝、佛教を興起せしめたシラヂチャ王の治世に當つたから、この印度文化の影響を受けて、南北朝以來次第に發達した支那の佛教文化は、唐代に至つて極盛の時代を現出した。

大食國　また太宗の頃は、イスラム教の教祖マホメットが、亞剌比亞半島を統一して、サラセン國を建て、次いで波斯を滅したから、唐と境を接することゝなり、高宗の時代から直接唐との交通が開かれた。唐ではこれを大食國といひ、後には主として海路から、廣州・泉州・杭州などに來つて香料・象牙・犀角などを齎らし、支那の絹・陶器・茶などゝ交換した。かく東西交通の結果、支那の養蠶・製紙の方法が西方に傳はると共に、西方諸國の各種の宗教が唐に傳來したが、航海の發達するに從ひ、唐の船舶は南海に出沒してその沿岸を浸した。

開元の治　高宗の孫玄宗が位につくや、その初め大いに政治を整へ、賢臣を用ひたから、國は益々富み兵は強く、文物も進歩して世に開元の治と稱せられた。然るに晩年に及んで彼は政に倦み、楊貴妃を寵して遊樂に耽り、國民もまた安逸を事として醉生夢死し、異民族を節度使とし、邊境の防備をこれに一任して顧みない有樣となつた。

安祿山の亂　異民族出身の節度使にして玄宗の寵をうけた安祿山は、この唐朝の廢頽せるに乘じて兵をあげ洛陽・長安を陷れて自から皇帝と稱したから、玄宗は難を避けて蜀に亡命した。これが所謂安祿山の亂で、國内は前後九年にわたつて兵亂の巷となり、大食其他の異民族の援によつて、漸く平定することを得た。

唐の滅亡　この亂後も唐は尙ほ約百五十年も續いたが、國勢は次第に衰へて回復の機を得ず、宦官の專横から政治・財政共に紊れ、加ふるに武人の横暴、異民族の侵入等相ついだから民心は次第に唐朝を離れて、遂に動亂が起り、賊將朱全忠のために滅された。

朱全忠　かくて全忠は自から帝位につき今の開封に都して國號を梁と稱した。唐は國を保つこと凡そ二百九十年にして、その間サラセン、東羅馬等と共に、世界の文明國として重要な位置を占め、その國號は支那の別名として用ひられる程、漢族の大發展を來した時代であつた。

第九節　唐代の文化

文化の發達　南北朝以來、江の南北に發達して來た文化は隋朝を經て唐に至り統一せられた。從つて唐代は、漢族の勢力が最高潮に達した時代で、印度其他の西域諸國の風をも取入れ能くこれを調和し、當時世界第一の先進國となつたゞけに、東洋史上でも最も重要な時期であり、この時代に興つた唐の文物制度は、東方諸國へも傳つてこれが模範となつたのである。

唐朝の官制　先づ中央政府には、三省・六部を設けた。三省とは中書・門下・尙書で、詔勅の發布及び實行を司り、尙書省はその中心となつて最も權力重く、吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の六部がこれに屬して實務に當つた。長官は主として王族を以て任じたが、後に同平章事の官が起るに至つて、宰相の實權を握つた。地方はこれを十道に分ち、更に道を州に、州を縣に分つてそれ〴〵長官を置いてこれを治めしめた。

田制と稅制　人民の貧富の差を少くし、土地の利用を盛んにするため、全國の土地を國有とし、人民には均しく口分田を給し租・庸・調の三種の稅を納めしめこれを均田法と稱した。然かし貴族や富者は、莊田と稱する私有地を持ち、富者は次第にこれを併せたから、安祿山の亂後は是等の制も紊れた。こゝにおいて德宗のとき、資產の多少に應じ、夏と秋の二期に賦課する兩稅法に改めた。

兵制　唐の初は徵兵の制を行ひ、天下の要地に折衝府を置いて地方を鎭め、交代に都に上つて衞士となりこれが守護に當つたが、これも間もなく名目のみで實なく、玄宗以後は募兵制となつた。そのため兵農は分離して地方の兵は　恰かも節度使の私兵の姿となつた。

學制　國都の大學を初めとして、學校の設備は整ひ、儒學・文學などを敎へたが、その敎育は、官吏養成を主眼とし、卒業者を試驗の上官吏に任用した。

刑法　刑罰は、罪の輕重に應じて、笞・杖・徒・流・死の五刑を課し、特に道義と一致せしめるため、孝道を重んじ、君父に對する罪を重くした。

文藝　六朝の文學は、美しい對句を並べ、形式を飾ることを主としたが、唐に至り、帝王は文學を愛好し、詩文が空前の發達を見せた。殊に玄宗のときには李白・杜甫の二大詩人が出

て、唐朝文藝の最盛期を現はし、其後白居易も現はれ、また文章家としては、韓愈・柳宗元の二人が最も名高く、古文を唱へて長く後世に範を垂れた。儒教は複ね訓詁の風を繼ぎ、太宗は學者孔穎達に命じ、五經正義を作らしめ、學說を一定して官吏登用の試驗に用ひたので、研究は殆どその範圍に限られ、學習者はその暗誦に努めるのみで、儒學の眞精神は等閑に附せられた。こゝにおいて韓愈は道、佛兩教を排し儒教を興さうとしたが、文藝の隆盛に壓せられてに振はなかつた。またこの頃の書物は寫本で卷物となつて居たが、唐末に至つて印刷の法が起り、册子體となつて學問・文藝の普及を大いに助けた。

佛教　宗教は唐代に入つて隆盛を極めた。殊に佛教は南北朝の後をうけて、太宗のときには玄奘、高宗のときには義淨等が前後して印度に赴き、多くの經論をもたらし、その教を弘めた。かくて、佛教にも種々の宗派が生じ、多くの名僧も現はれたが、佛教の興隆は印度の佛教藝術を取り入れて、美術工藝を發達せしめる一方、文學にも影響を與へ、殊にその思想は儒教に感化を及ぼして、宋學の發達を見るに至つた。

道教　唐の王室が老子を祖先と稱し、その教を國の正教として保護した結果、頗る盛んになつたが、概して佛教には及ばなかつた。

○韓愈の廟　廣東省潮州府にあり、憲宗のとき韓愈が一年ばかり居つた所である。

○玄妙觀　江蘇省蘇州府にある道教の大寺で、今の建物は西晉に成り清朝に重修したものである。

諸種の西教　この外西域から新たに傳來した諸宗教も行はれた高祖のときには波斯のゾロアスタ教が傳へられて、祆教と稱せられ、太宗のときには、基督教の一派である景教が傳來して、大秦寺の建築となつた。また大食人の來航する諸港や、西北の邊境には、イスラム教が行はれ、唐ではこれを回々教と稱した。

美術工藝　佛教の興隆と共に、印度・ガンダーラの樣式が陸續と輸入せられ、その影響を受けて美術工藝は精妙の極に達した。洛陽附近の龍門の如きは、實に佛教藝術の最高潮を示す遺跡である。繪畫においても、吳道玄は佛畫を以て著はれ、寫生風な山水畫も新しく起り、李思訓は、強い線を用ひる北宗畫を創め、王維は水墨の畫風を起して、南宗畫の祖と仰がれた。書道も漸く盛んとなり、晉の王羲之の風を承けて眞顏

卿・張旭などの名手が輩出した。

我國に及ぼした唐文化の影響　我國は舒明天皇の御代から、遣唐使及び留學生を派遣して、唐の文化を輸入したから、奈良時代から平安時代の初期にかけて、制度、學藝、宗教、美術などは等しく唐風の影響をうけた。即ち平城・平安兩京の規模が唐都洛陽・長安の市制に範を取つたのを初めとして、律令制度も多く唐制を模し、我國情に適應せしめることを圖つた。奈良時代より漢文學の流行を見たのも、また唐風の影響によるもので、正史や詩集は勅命により撰修せられたが、貞觀政要・群書治要などの書は、政教の要道を明かにするものとして、御歷代の天皇も深く尊重し給ふた。中にも白居易の詩文は廣く愛好せられ、國文學にも感化を與へる一方、阿部仲麻呂・吉備眞備等は留學生として唐に文名を謳はれた。佛教においても、奈良の都に發達した各宗はいふまでもなく最澄・空海によつて傳へられた天台・眞言の二宗も、唐から傳つたものである。從つて造寺・造佛の事より、社會事業に至るまで唐風を模すること多く、花の如き奈良朝の藝術も、要するに唐より移植されたものが多かつたのである。さればこの頃、朝廷や社寺で行はれる種々の舞樂をはじめ、服裝、化粧法、年中行事など、各方面にわたり、唐から傳はつて今日に至り今尙ほ存するものが少くないのである。

○舞樂　萬歲樂と太平樂で、一は文樂、二は武樂として多く賀儀に行はれた。

第三章　近　古

第一節　北宋と南宋

宋の統一　唐の滅後五十餘年間、支那は統一を失つて今の開封を中心に、王朝が五度も代つたが、後ち趙匡胤が現はれてこれを統一し開封において帝位についた。これが宋の太祖である。太祖は軍人出身であるが、宰相趙普の計を用ひて文治政策を行ひ、當時尙ほ邊境の異民族の勢力が强かつたにも拘らず、武人を抑へ文官をして地方を治めしめ、同時に學問を奬勵した。

宋と遼　これより先唐の玄宗の頃、滿洲に渤海國が興つたが、其後、遼河上流の契丹族が勢力を占め、前記開封を中心に五代交立の頃、自立して遼と號し、滿洲及び內蒙古を領し、勢ひに乘じて支那を侵すに至つた。この當時宋では、太祖に次

太祖

いで、弟太宗が位についたが、統一の勢ひに乘じ遼を討つて、却つて大敗し、次の眞宗もまた遼の南侵を防ぎ得ず、澶州に敗れて銀・絹などの歳貢を贈ることを約した。かくて宋は文弱の弊漸く現はれ、絶えず外國から輕侮されることゝなつた。

王安石　宋の仁宗は、民を愛し賢者を用ひて仁政を行ひ、宋代第一の名君と稱せられたが、外政は前代同樣振はなかつた。神宗が卽位するに及び、當時經世家として有名な王安石を宰相に擧げ、富國强兵の策を立てゝ制度の改革を行はしめた。王安石は、富國策としては靑苗・均輸・市易・募役の諸策、强兵策としては保甲・保馬などの新法を實行したが、元來政府の財政を豐かにするのが目的であつたから、國民は必らずしもこれを歡ばなかつた上に、司馬光等の舊制度を歡ぶ人々が强くこれに反對した。かゝる間に神宗は、功を急ぎ外征の軍を起して失敗し、朝臣もまた新・舊の二派に分れて政權を爭つたから國力がます〳〵衰へた。殊に徽宗に至つて奢侈を好み藝術の上には力をつくしたけれど、國內の政治は次第に紊れてしまつた。

金と宋　滿洲においては、遼が次第に衰へて來たのに乘じ、女眞族の長完顏阿骨打は、その軍を破つて自立し、今の哈爾賓附近に都して金と稱した。このとき宋は金と結び、宿敵遼を挾擊せんと謀つたが、宋の軍勢振はず、金獨り善く戰つて遼を滅したから、やがてその金が南侵し來り、こゝに宋と金の對立となつた。

宋の南遷　金は欽宗のとき大擧南下して、宋の國都開封を陷れ徽宗・欽宗以下を捕虜として歸つた。これが靖康の變である。宋では高宗が卽位したが、金を恐れて江を越え今の杭州に都を遷した。これより後の宋を南宋といひ、その後金は都を今の北京にうつして、北支那を支配することゝなつた。

王安石

蒙古族の興起　この間に南宋の國論は二つに分れ、岳飛・韓世忠などは主戰論をとなへて、北伐の功を樹てたが、高宗は柔弱にして平和を好み、宰相秦檜の說を容れて强硬論者の岳飛を殺し、淮水・秦嶺以北の地を割いて歳貢を贈ることを約し、金に臣禮をとるに至つた。其後の宋と金は或は和し、或は戰ひ、干戈を收めるひまがなかつたから、兩國とも大に國勢衰へ、この間に蒙古族が漠北から起つて遂に二國を併呑することゝなつた。

宋の宗教と文學　佛教は宋に入つて漸く不振となつたが、禪宗のみは獨り盛んに行はれた。從つて學問・藝術の上にも禪風が深い影響を及ぼし、殊に儒學は、訓詁の風を捨てゝ、理論的研究を旨とするもの多く、周敦頤・程顥・程頤等を經て、南宋の朱熹により、この傾向は大成せられた。宋學、道學、性理學または朱子學といふのがこれであるが、儒學の正統として最も感化を及ぼし、その尊王斥覇の歷史と思想は、我國にも輸入せられて尊皇の士氣を振作したのである。詩文は唐に亞ぐ盛況を示し、また文章家として歐陽修・蘇東坡などが現はれ、修史もまた行はれて、司馬光の資治通鑑の如きが世に出るに至つた。

宋の藝術　禪宗の風は、藝術に淸淡の趣をあらはした。先繪畫では馬遠・夏珪などの名手が出でゝ、墨繪の山水畫を大成し、やがて奢侈の風が盛んになると共に、華麗なる花鳥畫も進步した。佛畫では李龍眠が有名であつたが、すべて尹等の畫風は禪宗・花道・陶器製造の法などゝ共に我國にも傳へられ、鎌倉時代より東山時代にわたつて廣く行はれた。活版印刷術は宋に起り、後世宋版として知られる各種の出版が相ついで出たが、やがて朝鮮半島や我國にも傳はり、五山版の如き印行を見るに至つた。

第二節　元の興亡

太祖の經略　蒙古族は初め外蒙古のオノン、ケルレン兩河の地方に遊牧して遼及び金の支配を受けてゐたが、南宋の孝宗のとき鐵木眞がその部長となるに及び、次第に勢力を加へ、內外蒙古を從へてその君主となり、成吉思汗と號した。これが蒙古の太祖である。成吉思汗はその後四方を經略し、まづ金を攻めて都を陷れたから、金は難を避けて開封に遷り、黃河以北の地がほゞ蒙古の手に歸した。次いで今の新疆地方を復し、更に大軍を率ゐて中央亞細亞より印度の北境を略し、別

軍はまた波斯よりコウカサス山脈を越え、ロシヤ諸侯の軍をカルカ河に破つて歸り再び南方の金を討伐せんとする中病死した。彼は逆境に成長したが、兵を用ひること鬼神の如く一生の間に世界に比類なき大征服者となつたのみでなく、これを統御する政治にも巧みであつた。

成吉思汗

太宗オゴタイ　太祖に次いでその子オゴタイが推されて帝位につき、太宗と稱した。當時金の勢ひは漸く衰へたので、太宋は南宋と同盟してこれを滅し、カラコルムに宮城を營みて國都とした。

拔都と欽察汗國　かくて甥の拔都に大軍を與へて歐洲に侵入せしめ、到る處に敵を破つて諸國民の心膽を奪つた。たまたま太宗の死を聞き拔都は東に歸つたが、やがてヴォルガ河畔のサライに欽察汗國を建て、ロシヤを支配することとなつた。

クラグとイル汗國　その後憲宗が立つに及んで弟クラグをして西部亞細亞を征服せしめたが、クラグは波斯より進んで大食の都バグダードを陷れ、シリヤ、アラビヤ等をも服してマラガに都を奠めイル汗國を建設した。

高麗と蒙古　朝鮮半島の新羅はさきに唐末に至つて國勢衰へ、五代の頃は王建なるものが今の開城に據つて高麗を建て、新羅を滅して半島を統治した。これが高麗の太祖である。かくて高麗は南方の宋に好を通じ、北方の遼・金にも朝貢したが、蒙古が起るに及んで太宗のとき征服せられた。然かし蒙古の蠻風を服ひて心服せず、叛服定めなき有樣であつた。

○滿月臺　朝鮮開城にある高麗王宮の跡で、今は僅に礎石のみを存して居る。

世祖忽必烈　憲宗は弟忽必烈をして南方を經略せしめ、自からも出でゝこれを援助したが、やがて陣中で歿して後は忽必烈が帝位に上り、世祖と稱した。世祖は成吉思汗につぐ英主で、都を今の北京に遷し、國號を元と稱して盛んに四方を經略した。當時南宋は甚しく衰へ、杭州の都も攻め落されたので、文天祥・張世傑などが勤王の軍を起して、その回復につとめたけれどその甲斐なく、厓山の戰に敗れて遂に宋は滅亡した。

南宋の滅亡　これより後の支那は、世祖の手によつて統一せられ、その勢力はさらに今の印度支那半島にも及びジャヴア、スマトラなどの南海諸國も朝貢することゝなつた。高麗は太宗のとき以來蒙古に好を通じたが、その態度頗る曖昧にして、叛服常なき有樣であつたから、世祖はこれと婚を結んで保護國となし、次いでこれを介し我國との交渉を開くに至つた。

世祖忽必烈

元と日本　その結果文永・弘安の再度の役を起し、兵力を以て我を屈從せしめんとしたが、却つて我擧國一致の奮戰によつて擊滅せられ、その志を果し得なかつたのみならず逆に、我邊民が元の沿海を荒したので、支那では我國を倭寇と稱して大いに脅威を受けるに至つた。

元の政治　元は塞外の異民族から起つて支那全土を支配するに至つたが、世祖は種族の如何を問はず廣く人材を登用し、殊に漢族を治めるためには、儒教を奬めて文治を主とした。然るに一般蒙古族は征服者としての專横を振ひ、漢族を迫することが酷薄であつたから、その巧みな政治も、漢族を心服せしめるに至らなかつた。それにも拘らず、元の勢力は、世祖のときその極盛に達し、亞細亞の大部と歐羅巴の一部とを領し、世界空前の最大版圖をなした。

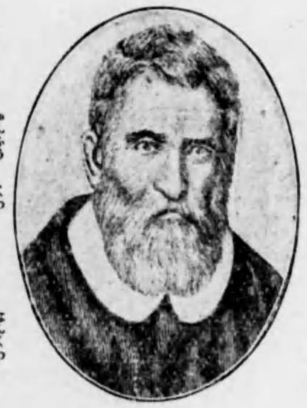
元の領土　爾來元の皇帝は支那・蒙古・滿洲・高麗・チベットなどを支配し、太祖以來一族諸王を封じた四大藩國は、皇帝に屬して各自その領地を治めた。是等の領内には多數の異民族が住んでゐたが、元はよくこれを統べ、分立割據の風が破られた結果として東西の交通は便利となり、西域諸國の人々にして學問、宗教、藝術など、その長ずる所により元に來り仕へる者も少くなかつた。

東國の黃金島　中にも我國を東方の黃金島として歐洲人に紹介した伊太利人マルコ・ポーロは最も有名であつた。またこの頃磁針・火藥及び印刷術なども元より西方に傳へられ、歐洲における地理學や、航海事業などの發達を促進し、世界文化の發展に多大の貢獻をなしたのである。

○居庸關　北京の北方南口附近にあり、蒙古の出入口で世祖の築造に係り、壁には精巧な佛像や、ラマをたゝへる文

が刻んである。

元の滅亡　然かも世祖の死後は元にまた英主なく、權臣が專横を極めるに至つて國運は傾き、天子の廢立は權臣によつて屢屢行はれ、政令も大いに亂れた。加ふるに代々の天子が、チベットに發達したラマ教を信奉した結果、ラマ僧の專横を招いて國費の濫費甚だしく、また多年戰役をつゞけた結果として、財政の困憊を來たし、これを救はんとして濫りに紙幣を發行し、國民の生活を苦しめたが、年と共に固有の氣象を失ひ、いつしか漢風に化せられて軟化するに至つた。この機に乘じて久しく壓迫せられてゐた漢族が四方に亂を起し、順帝のとき遂に都をすてゝ蒙古を去るに至つた。



ローポ・コルマ

第三節　明の興亡

明の太祖　元朝末期の亂に當り一貧民から身を起した朱元璋が南支那を平定して今の南京に據り、王位に即いて國號を明と號した。これが太祖洪武帝であるが、明代から一世一元の制を執つたから、年號を以て帝王の名を呼ぶ風が起つた。太祖は漢族復興主義を唱へてよく民心を收め、天下を統一して要地に諸子を封ずると共に、多くの功臣を殺して一家子孫の安全を圖つた。

成祖の內治　太祖についで孫の惠帝が立つや、諸王の領地を削つてその勢力を抑へんとしたから、叔父の燕王は先づ兵をあげて南京を陷れ惠帝を逐つて自ら帝位に上つた。これが成祖永樂である。成祖は帝位に上るや都を今の北京に遷し官制を改め學問を奬勵し、萬里の長城を修築し、兵制を整へるなど大いに內治に努めると共に更に對外經略の歩を進めた。

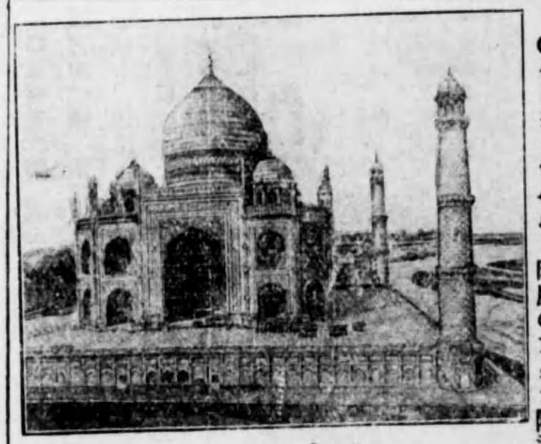
成祖の對外經略　先づ親征して蒙古を服し、次で惠帝が海外に亡命したとの風說が傳へられるや、宦官鄭和をして南海諸國を巡航せしめ、遠く阿弗利加の東海岸地方にまでも派したから、南海諸國との通商も盛んになつた。かくて成祖から仁宗を經て宣宗宣德帝に至るまで、三十餘年の間、國內はよく治まつて明の隆盛時代を現はした。

帖木兒大帝　これより先元の衰亡と共にその四大藩國も振はなくなつたが、察合臺汗國に帖木兒大王が起るに及んで局面が一變した。帖木兒は蒙古族の出身で、察合臺汗國の宰相の家に生れたが、蒙古民族の大帝國を建設せんと主家の衰亂に乘じ自立して、わが長慶天皇の御代サマルカンドに都し、イル汗國及びキプチャック汗國を併せ、印度を攻め、土耳古を伐ち、亞細亞の西半を平定したが、廣く人材を用ひて內治を整へ、イスラム教を採用し、教育を奬め、產業を興し、交通を開くなど治績の頗る見るべきものがあつた。かくて成祖永樂帝のとき、元室の仇を報ひ、且つ東亞細亞をも從へんとし、大軍を率ゐて征明の途に上つたが、途中で病死したゝめ雄圖は挫折し、間もなくその國土も分裂した。

明の太祖

アクバル大帝　帖木兒大王の死後凡そ百年を經て、その五世の孫バベルは中央亞細亞から印度に攻め入り、デリーに都してムガール帝國の基を開いた。これより先印度では佛教が既に衰へ、ヒンヅー教、イムラス教などが行はれ、その間爭鬪が絶えなかつた。バベルの孫アクバル大帝は、よくこの兩教徒を調和せしめ、學問を興し、善政を行ひ、大いに民望を得た。そのため帝の治世から凡そ百五十年間は、ムガール帝國の威令が殆んど全印度に及び、學問・藝術なども頗る發達したものである。

○タージ・マハル　印度のアグラ附近にあるがアクバル大帝の孫シャージヤハン帝及び其皇后の陵である。白大理石に瑪瑙、珊瑚などを欽入し世界有數の美しい建物である。



タージ・マハル

高麗の衰亡　朝鮮半島では高麗は歷代奢侈を事とし、貴

族が權力を恣にし、且つ甚しく佛教を尊信した結果僧侶も專横に流れ、政治は紊れ、國力は次第に衰へた。殊に元の世祖以後は、內政、外交共に殆んど元の命をうけ、元寇に參加してからは一層衰亡を來し、加ふるに倭寇の防禦に惱み、內外大に多事となつた。このときに當り李成桂は、倭寇を擊退して人望を收め、遂に高麗に代つて王位につき、皇紀二千五十二年國號を朝鮮と稱した。これが朝鮮の太祖で、高麗は凡そ五百年にして全く亡んだ。かくて太祖は都を漢陽(今の京城)に奠め、壯大な宮殿を營み、制度を整へて學問を興し、使を遣して明と好を修め、その封冊を受けて事大の禮をつくした。

京城南大門

○京城南大門　李氏の都城の威容を示す城門として名高い。

蒙古の北侵　明は英宗の頃から、宦官が權を專らにして政治を紊し、加ふるに外には北虜・南倭に惱まされて國勢は次第に傾くに至つた。卽ち再び勢を復した蒙古族は、頻りに明の北邊を侵したので、英宗これを親征したけれど土木に敗れ、時には國都北京を掠められたこともあつた。

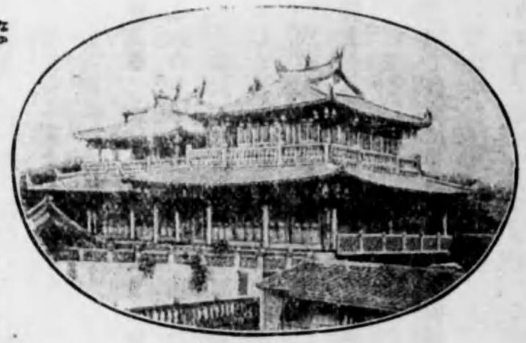
倭寇　一方倭寇は惠帝のとき足利義滿を懷柔して禁絕せしめんと企てたが、其後連年明の東南海岸に出沒して掠奪を行つた。然かも世宗嘉靖帝の時代になると、明の邊民が倭寇を裝ひて自國の海岸を荒しまはる有樣となつたから、帝は戚繼光等を遣はして、これを福建に擊破し、漸く倭寇の氣勢を殺ぐことを得た。

秀吉の征韓　倭寇の害は事を好む邊民の行動であつたが、一面には明が通商を制限し、我商人に對して壓迫を加へたから生じたものであつた。豐臣秀吉が海內を統一するに及び、かゝる制限を取除かんとし種々交渉したが、明は我要求に應じなかつた。その結果として文祿・慶長の役を惹起すに至つた。このとき明の神宗萬曆帝は、大兵を出して朝鮮を援けたが、精銳なる我軍のために大敗し、そのため多大な軍費をつひやして財政が困難となり、課稅を重くしたので、民心は漸く明室を離れ、これがためその衰亡を早めることゝなつた。

第四節　歐羅巴人の東航

印度航路發見　元代は、東西の交通が發達した結果として、歐洲人は珍らしい東洋の事情を聞知し、是等の諸國との交通を希望するに至つた。然るに元の領土分裂と共に交通も漸く衰へたが、加ふるに土耳古人が勃興して西亞細亞の地を占めてその通路を塞いだから、別に安全な航路の必要が起つた。それで明の中頃より西歐洲の諸國は、冒險的な航海、植民の業を競ひ、新航路を開いて東洋に達せんと試みた。中にもポルトガル人ヴアスコ・ダ・ガマは、皇紀二千百五十八年阿弗利加を迂回して印度に達したので、これ以來西洋人にして東洋に來航する者が漸く多くなつた。

西力の東漸　其後ポルトガル人は、印度のゴアを占領して根據地となし、更に南支那海に出て澳門を占領し、支那及び我國と通商を行ひ、佛朗機砲と稱する火器を明に傳へた。またイスパニヤ人は東方より比律賓群島を占領し、マニラを根據地として東洋貿易に從事し、次いで和蘭人は、ジャヴアのバタヴィヤを根據地とし、皇紀二千二百八十四年更に進んで臺灣島を占領して、我國及び明と通商を行ひ、ポルトガルやイスパニヤとの競爭に勝つて、久しく東洋貿易の利益を獨占することゝなつた。



赤嵌樓

○赤嵌樓　臺灣臺南市にあり、もと和蘭人のプロヴイデンチヤ城で、その政廳の跡である。

天主敎の傳來　基督敎は、唐代及び元代には早くも支那に傳へられたが、其後西洋人の東漸するにつれてその一派ジエスイットの宣敎師が盛んに東洋布敎を試みるに至つた。中にもフランシス・ザビエルは印度を經て我國に渡來し、次いでマテオ・リッチは支那に來り、明の神宗の許可を受けて今の北京に敎會堂を建て盛んに布敎した。明人はこれを天主

教と呼び、この教に歸する者が少くなかつた。

西洋學術の輸入　其後も相ついで支那に渡來した宣教師は努めて支那風に化し、漢語・漢文に習熟して天文・曆法・算數・地理・測量・砲術などの學術、技藝に通じてゐたから、或者は明の朝廷に仕へ、或者は書を著はすなど、西洋の學術を明に輸入することに全力をつくしたのである。

第五節　元明兩代の文化

兩代の特色　元は蒙古地方から起り、特有の文化が發達してゐなかつたから政治の上からは漢族を支配したが、文化の上では逆に漢族に化せられた。從つて支那統一後は、學問・藝術なども多く漢族の風を用ひ、尙ほ廣く一般屬領はもとより遠く西洋文化の輸入にも努めた。明は元の勢力を驅逐して、漢族復興主義を唱へたが、多くは形式に流れ柔弱に陷り、清新な趣に乏しかつた。

朱子學　元の儒學は概して振はなかつたが、明代には成祖のとき、朱子の學說によつて、四書大全・五經大全などの書を作り、官吏登用試驗は總てこれに據ることゝなつたから、朱子學が一般に行はれたが、新らしい研究は見ることは出來なかつたのである。

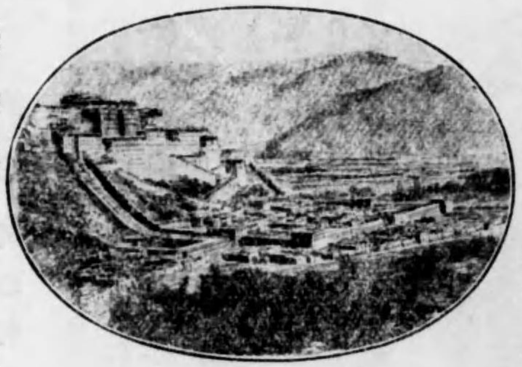
陽明學　明の中頃に至つて王陽明が現はれ、朱子學が兎角理に走り、實行の伴はないことを排して知行合一の說を唱へ、人格修養に重きを置いて陽明學を開いたが、此後朱子學と相對して世に行はれ、深く人心に感化を與へた。

俗文學　元代には詩文よりも戲曲・小說などの俗文學が流行し殊に演劇の體制は略ぼ整ふた。戲曲は所謂元曲として名高く西廂記・水滸傳・三國志演義などは、この種俗文學の名作として知られてゐる。明代に入つてこの傾向はます〳〵發展し西遊記の如き奇書も現はれた。

詩文　詩文も明代に至つて復興されたが、これは古人の詞句を取つて、唐以前の風に復せんとする古文辭の派であつた。從つて多くは、單に古人を模倣するに止まり、獨創の精神は乏しかつた。

ラマ教　支那の佛教は元代に衰へたが、これに代つてラマ教が盛んになつた。ラマ教はもと西藏に行はれた佛教の一派で、主として祈禱、修法などを行つたが、世祖クビライが西藏の僧パスパを信任し、帝師としてから歷代厚くこの教を信奉した。從つてラマ僧もこれに馴れ、西藏の政權と教權とを握り

次第に專横に流れるに至つた。こゝにおいて、明の初期ツォンカパはその改革を行ひ、從來ラマ僧の蓄用した紅衣・紅帽を廢し、これに代り黃衣、黃帽を用ひしめ黃衣派と稱した。それより黃衣派が漸く勢ひを得たが、ツォン・カパの高弟はダライラマと稱し、自ら西藏の法王となり、ラサに居て政教を統べ、爾來ラマ教は塞外に廣く行はれることになつた。



ダライラマ殿堂

○ダライラマの殿堂　西藏のラサにある大ラマ寺で王宮を兼ねた建物である。

美術工藝　元代には美術は一般に盛んでなかつたが、趙子昂は書畫ともによくして宋風を傳へた。また元の末には、黃公望・倪瓚などの名手が現はれ、淡白にして調子の高い水墨の南宗畫風を大成した。明代は奢侈の風が流行したゝめ美術工藝も大いに發達し、初期には北宗畫が榮えて戴進が出たが、後ち南宗畫が榮えて沈周・文徵明・董其昌などの名手があらはれた。中でも文徵明と董其昌は、また能書家として知られた。この外、明の宣宗の宣德時代を中心に陶磁器・銅器などを製出する諸種の工藝も發達した。

我國との關係　我國と元との間には元寇や倭寇等の事故があつたに拘らず、絕えず民間の交通が行はれた。即ち元末に足利尊氏が、天龍寺船を遣して元と通商を行つたのを初めとしてその後室町幕府も明との國交を修め、この頃より元・明の文化が殊に盛んに我國にも傳へられた。文藝方面では朱子學や陽明學は江戸時代に入つて大いに榮え、殊に朱子學は江戸幕府の正學として採用せられた。また陽明學派にも中江藤樹・熊澤蕃山などの名儒を出した。別に荻生徂徠は、古文辭の學風を儒學に應用して一派を開き、瀧澤馬琴の作品もまた、少からず支那小說の影響をうけた。江戸時代に黃檗宗の僧侶や商人などを通じて傳へられた明代の書畫は、唐樣書風または文人畫などゝ稱し、畫家や文人間に大いに歡迎せられたものである。

第四章　近　世

第一節　清の興亡

滿洲族の勃興　金の滅亡後、滿洲族は久しく衰へ、元・明兩朝の支配下に置かれたが、明末に至つて今の興京にヌルハチが起り、附近の部族を從へ、皇紀二千二百七十六年自立して王位に卽いた。これが清の太祖である。こゝにおいて明は朝鮮と結び、大兵を發して挾擊し、太祖は進んで今の奉天に都を遷した。

○清太祖の陵　奉天の北郊にあり北陵とも稱する。

明の滅亡　太祖の子太宗の世に至り、更に內蒙古を併せ、朝鮮を征してこれを降し屬國とした。ときに明は內政紊れ不穩の兆が現はれた上に、清の南侵に遇つたから、吳三桂をしてこれを

清太祖

太宗の陵

千三百四年明は滅んだ。このとき吳三桂は清に降り、その援を得て李自成を討つたので、清の世祖はこれを好機として都を今の北京に遷した。明の諸王は尙ほ江南に據り、王室の回復をはかつたけれど、世祖は悉くこれを平定して、支那全土を統一するに至つた。

明の遺臣と我國　滿洲の異民族から出た清は、支那を統一して辮髮の令を下し、漢族に對しても滿洲人の風俗を强ひたから山海關に防がしむるなど、漸く內外多事となつた。

李自成の亂　たまゝ李自成が陝西に亂を起して明に叛くや、流賊が各地より呼應し、忽ち勢ひを得て國都に亂入した。明軍はこれを防ぎ得ずして、毅宗は自殺し、建國以來二百七十六年にして、皇紀二千三百四年明は滅んだ。

明人は、夷狄の風に從ふのを不面目として、陰に陽に清に反抗した。中にも鄭成功は明の遺臣の家に生れ、我國人を母とするだけに、特に反清の心强く、福建を經て臺灣に渡り、明室回復のために力を盡したが遂にその志を果さなかつた。當時明の遺臣は我江戶幕府や西國の諸大名に援を求め、明室を回復せんと企てる者は少くなかつたが、何れもその實現を見るに至らず、隱元や朱舜水のやうな氣節高き人々は多く明の覇絆を逃れて我國に歸化した。

康熙帝

清の四邊經略　世祖についで聖祖が位につくや、當時雲南に封ぜられてゐた明將吳三桂は、興明討虜を唱へ同志と共に兵を擧げたが、聖祖のために討伐された。かくて聖祖はまた外蒙古・西藏を從へ、臺灣の鄭氏をも服したが、その孫高宗は更らに今の新疆地方を併せ、シヤム・バルマ・安南をも朝貢國とした。そのため清の領土は、漢・唐二代にも勝つて漢・滿洲・蒙古・西藏、土耳古の五大民族を含むに至つたが、領土の擴大と共に漸く尊大の風を生じ、外國を輕んずることゝなつた。然かし聖祖は、文武の才を兼ね學德共に高く、公明の政治を行つたから是等の民族をよく威服せしめた。

康熙乾隆時代　聖祖から高宗に至る間は、清の國威が外部に擴がつたのみでなく制度は整備し、政治はよく行はれ、學藝も發達し、國運の隆興、文化の進步共に最も隆盛な時代を現はし、所謂康熙・乾隆時代と稱せられた。

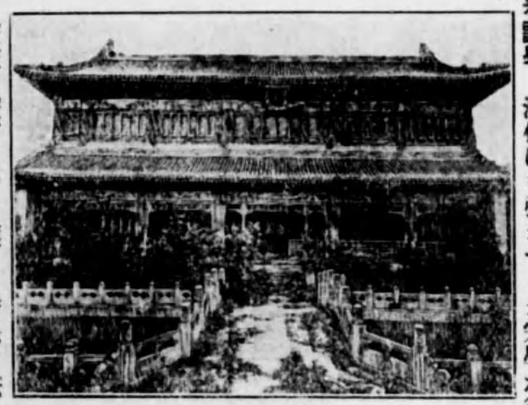
中央政府　清の中央政府は、初め明制により內閣をして諸政を統べしめ、その下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部を置いて政務を分掌せしめた。然かるに邊境經略の必要から高宗以後は別に軍機處を設け、軍機處大臣をして重要な政務に掌らしめたので、內閣の實權が次第にこれに移つた。

地方制　地方は支那本部を十八省、滿洲を三省に分ち、新疆省と共に總督、巡撫などを派駐し、中央政府の命により省內の軍政、民政を掌らしめた。また蒙古・西藏などは藩部として各その自治に任せ、中央政府の理藩院がこれを統督し、官吏は滿人・漢人を併用して、漢人の不平を少からしめた。

兵制　軍隊は天子直屬の八旗と、支那本部の常備軍なる綠旗と

に分れた。八旗はもと滿洲人を以て組織せられ、代々家職として相傳へたが、別に漢人・蒙古人から成る八旗をも編制し綠旗は一般漢人から募集した。

考證學　清代にも引きつゞき宋學が行はれたが、學者は動もすれば空理に走り、事實を閑却する風があつたから、清初に顧炎武が出て確實なる證據をあげ、まことの事實を考究する考證學を開いた。この後經書・歷史・地理文字などの各方面にわたつて考證の學風が行はれ、錢大昕・段玉裁など多くの學者が輩出した。



文淵太閣

圖書編修　聖祖及び高宗は、共に學問を好んでこれを奬勵し、且知名の學者を集めて四庫全書の如き勅撰の大著を編修せしめた。また我國に廣く行はれた康熙字典もこの頃編纂されたものである。

○文淵閣　四庫全書を納むるもので、北京の舊紫禁城内にある。

文藝　文藝も康熙・乾隆時代に最高潮に達したが、主として明代の風を承け、殊に小說・戲曲などは俗情に投ずることを主としたから、却つて氣品をおとした。繪畫は清代に花鳥畫を完成せしめ、惲壽平はその名手として知られた。また王鞏は南宗畫に長じ、畫聖と稱せられた。一方歐洲人の渡來と共に洋畫も輸入せられ、寫照派と稱する一派が起り、伊太利人朗世寧の如きは、康熙帝の頃その道の達人と稱せられた。

洋學の發達　明末より支那内地に活動した耶蘇教宣教師は、清朝にも仕へて布教に從事すると共に、天文・數學・測量等の技術を傳へ、曆法の改正・地理書の飜譯・地圖・天文觀測機械の製作などを試み、支那における洋學の發達に力をつくした中にもアダム・シャール、フェルビーストなどが名高く、是等の人々の手に改造せられた觀象臺は今も北京に遺つて居る。

基督教の禁令　然るに其後渡來した宣教師は、支那の風習を無視し、孔子を始め各自の祖先を祭ることを迷信として排斥したから、世宗のとき基督教の布教を禁止するに至つた。

清初と我國の文化　寶永の鎖國以後も、我國は清の商船に對し長崎に來港して貿易を營むことを許したから、是等の船舶を通じて清の文化が輸入せられた。中でも考證學の如きは我國の儒學や、史學に少からざる影響を與へ、書籍も多く輸入せられ、鎖國時代の人々に重要な世界的知識を與へた。南宗畫や花鳥畫の畫風も相次いで傳へられたが、後にはその影響をうけて發達した日本畫が、却つて支那畫を凌ぐ勢を示した。

○觀象臺　北京にある。元代の創立で晉代に修築し觀象臺修築の功勞者フェルビーストの像を彫す。

第二節　西洋諸國の東方經略

西力東漸の變遷　明の中頃に端を發した西洋諸國の東洋經營は其後益々盛んとなつて各國とも商權をひろめ、植民地を得んとする傾向が顯著となつた。中でも葡萄牙・イスパニヤは漸く老境に入り、これに代つて英吉利・露西亞・佛蘭西などが到る處に活動を始めたが、このときに當つて東洋諸國は、多くは國勢振はず、兎角不利な地位に立つことが多かつた。

英佛と印度　皇紀二千二百六十年英吉利人は、東印度會社を立てゝ東洋貿易に從事したが、支那や日本は、商權擴張の機をとらへることは出來なかつた。こゝにおいてムガール帝國の衰亡を機とし、マドラス・ボンベイ・カルカッタなどに據つて、專ら印度の侵略に從事することゝなつた。當時佛蘭西人もまた東印度會社を起し、ポンヂシエリーを根據地として印度の經略を企てたから、英佛の間に抗爭が起り、遂に桃園天皇の頃、クライブの率ゐる英吉利軍は、プラッシーにおいて佛蘭西人と印度土人の聯合軍を破り、遂に印度の實權を握るに至つた。

印度帝國　かくて皇紀二千五百十七年ムガール帝國を滅し東印度會社の權を政府に收め、我明治九年以後印度を帝國として英吉利王がその皇帝を兼ねることになつたが、次いでバルマを併せ、ベルチスタン及びマライ半島の諸小國をも保護國とした。

阿片戰爭　英吉利人の印度經營が進むに從つて、その手により印度產の阿片が、支那に向け盛んに輸出せられることゝなつた。清廷では、阿片吸飲の弊害を認めて、度々これが禁令を發したがその効はなかつた。こゝにおいて宣宗は、林則徐を

廣東に遣はし嚴にこれを取締らせた。然るに林則徐は急激なる手段に訴へ、廣東在留の英商から阿片を沒收して燒きすて且英吉利人の貿易を禁止した。

南京條約　こゝにおいてか英吉利は、貿易保護を名のもとに清國に對して戰を開き、艦隊を以て廣東などの諸港を封鎖し上海から南京に迫らんとしたから清國は遂に屈して香港を割讓し、償金を出し、廣東・厦門・福州・寧波・上海の諸港を開くことを約して局を收めた。これが所謂南京條約である。

長髮賊の亂　阿片戰爭は眠れる獅子として威信のあつた清國の實力が、案外微弱な事實を暴露したので、洪秀全は兵を廣西にあげ、進んで南京に據り、國を太平天國と號して、江南一帶を收めた。これは支那より滿洲人を斥け、漢族を興さんとしたものであつたから、清の風俗に反抗して剃頭辮髮をしなかつた。そのため長髮賊と稱した。然かも清の官兵はこれを平定し得なかつたから、曾國藩・李鴻章などの漢人が、義勇兵を募つてこれを討ち、後ち英人ゴルドンなども新式の軍隊を組織して官軍を援けた結果、南京は陷り、洪秀全は自殺した。この大亂は前後凡そ十五年に亘つたが、亂半ばに文宗は歿し、穆宗が僅か七歳にして帝位につき、生母西太后が攝政となつたが、これより清朝の勢力は漸く衰運に向つた。

英佛聯合軍の上陸　曩に英・清兩國の間に南京條約が結ばれたのであるが、兩者の間には感情の衝突が絶えなかつた。その當時廣東に國法を犯して外國船に逃れ、官の捕縛を免れるものが多かつたので、清の官吏は碇泊中の英船アロー號に臨檢して罪人を捕へ英人をして大いに怒らしめた。その當時たまたま佛蘭西宣教師も、廣西省において清人のために殺された。こゝに於て英佛二國は聯合艦隊を出動せしめて廣東を陷れ、更に北上して天津に迫つた。清は長髮賊の內亂に苦しみ一時外患を避けんとして、我安政五年天津條約を結んだのであるが、素よりこれを實行する心がなかつたから、英佛聯合軍は再擧して國都に迫り、圓明園の離宮を燒き拂つてその威を示した。

北京條約　こゝにおいて、清は北京條約を結んで九龍半島を英國に割讓し、英佛二國公使の國都に駐在することを許し、兩國に償金を拂ひ、漢口・牛莊等の港を新たに開き、基督教の內地布教を許すことを約して和を復した。この後清は總理各國事務衙門なる役所を設け、從來理藩院において取扱つた外交のことを掌らしめることになつた。

○總理各國事務衙門　衙門とは役所のことで、わが外務省に相當する。

米清通商條約　當時亞米利加合衆國は大西洋・印度洋を經て、清國と交通を開いたが、太平洋沿岸地方の開發が進むに從ひ東洋に來航した。かくて我天保十三年清國と通商條約を結んだが、その貿易が次第に發展して來たので、往來の途次我國に寄港するを便とし、嘉永六年ペリーをして江戸幕府に開國を求めしめた。次いでハリスの來朝するや、たまたま英佛聯合軍の支那侵入事件が起り、その餘威を以て我國にも來り迫らんとする風說が傳はつたので、これを材料として江戸幕府を動かし、遂に我國と安政の假條約を結ぶに至つた。

露西亞の東方經略　露西亞は拔都の西征以來、久しくキプチャック汗國の支配下にあつたが、莫斯科大公イヴアン三世に至り、これを滅して獨立した。其後凡そ百年を經て、南露西亞のコサック部族の長エルマクは、部下を率ゐて東方の西比利亞を侵略し、爾來次第に進出して、遂には黑龍江流域にまで達し、太宗の末頃から、これが經略に着手し、清との間に衝突を生することゝなつた。

ネルチンスク條約　然かも當時清は南方平定に忙しく、その侵入を顧みるひまがなかつたが、聖祖に至り國內統一の餘勢を以て露西亞との交涉を行ひ、使臣をしてネルチンスクにペートル大帝の使節と會見せしめ、スタノボイ山脈を兩國の境界とすることを約し、露西亞人を北滿洲から驅逐した。これをネルチンスク條約といつて露西亞の東侵は一頓挫を來した。

キヤクタ條約　其後露西亞は世宗のとき、清とキヤクタ條約を結んで通商を約し、一時清の勢ひを避けてカムチャツカ半島アラスカなどを經略したが、其後清に長髮賊の內亂が起るやこれに乘じて東西比利亞總督ムラヴィヨフは黑龍江流域地方を占領し、やがて安政五年清國に迫つて愛琿條約を結び、黑龍江以北の地を露西亞に割讓し、ウスリー江東の地方を兩國の共同管理と定めることを協定した。

ウラヂホストツク港　かくて尙ほも乘ずべき機會を狙ふうち、英佛二國の聯合軍が侵入して清が外患になやむやうになつたから、露西亞は巧みにその間に仲裁し、これが報酬として北京條約を結びウスリー江東の地を併せてウラヂホストツク港を建設し東方經營の根據地とした。かくて我國と交涉して明治八年千島と樺太とを交換し、更に西比利亞鐵道の敷設に着手し、滿洲南下の地歩を固めたのである。

伊犂事件　東方經略の歩を進めた露西亞は今の中央亞細亞をも侵略し、更に東部の伊犂においては清の領土に侵入して伊犂事件を惹起し、償金を取つて占領地を清に返還した。また南部はボカラ、キヴアなどを併せ、進んでアフガニスタン、パミール方面をも窺ふに至つたので、遂に印度の領有を確保せんとする英吉利の勢力と衝突したが、結局英吉利に制せられて印度洋進出を斷念し、專ら太平洋方面に力を用ひることになつた。

佛蘭西の安南攻略　明末より多數の宣教師を送り、安南地方に基督教を弘めた佛蘭西は、印度において英吉利に敗れてから後は、專ら印度支那の經營に力を注いだ。即ち自國の宣教師が危害を蒙つたことを口實として先づ安南を攻め、交趾支那を奪ひ、翌年カンボヂヤを保護國とし、更に居留民保護を名として東京地方に駐兵せしめた。

清佛戰爭　こゝにおいて安南は佛蘭西と戰つたが利なく、國都順化を陷れられて東京地方を割讓し、明治十六年遂にその保護國となつた。然かるに清國は安南を自國の外藩と稱して異議を唱へ、佛蘭西に向つて開戰したが勝敗定まらず、遂に和して安南を佛蘭西の手に委ねた。それ以來佛蘭西は、是等の地方を佛領印度支那と稱して統一し、總督を置いて治めしめることになつた。

第五章　現　代

第一節　日清の關係

朝鮮の內訌　西洋諸國の亞細亞經略に刺戟された我國は早く國を開いてその文物、制度を輸入し、明治維新の大業を進めたが、清國は當初の强大を恃み自負、自尊の念强く、我國と事を構へて衝突するに至つた。これより先朝鮮は江戸時代の初から我國と交通し、清に對してもまた事大の禮をとつて臣事してゐた。明治維新後我政府は、朝鮮に開國、通商をすゝめたが、國王李熙の父にして攝政たる大院君は固く鎖國主義をとり、我國に對しても屢々無禮な振舞に出た。其後明治九年に至り我國は、朝鮮の獨立を認め通商條約を結んだが、その頃より朝鮮には清國に賴つて國家を維持せんとする事大黨と我國の援兵を受けて制度、文物の改新をはかり、獨立の實を擧げんとする獨立黨とが對立し、屢々國內に兵亂を起した。

天津條約　支那と我國との國交は、室町時代の末頃から絶えてゐたが、明治四年兩國の間に通商條約が成立して再び好を通ずることゝなつた。然るに清國は朝鮮を屬領視してその內政に干涉し、政治の改新をも妨げたから、明治十八年我國は伊藤博文をして、李鴻章と天津に會見せしめ、清國をして朝鮮の獨立を認め、爾後協同して朝鮮に關する事を處理すべき旨を約し東洋の禍亂を未然に防がんとする天津條約を結んだ。

大院君

東學黨の亂　其後、明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起るや、清國は天津條約を無視して朝鮮に干涉し、我國から提出した兩國協同して、朝鮮の內政を改善せんとする議を斥け、俄に大兵を發して我を威壓せんとした。

日清交戰　こゝにおいて兩國の國交は破れ、我國は上下一致して清國を相手に奮戰した結果、海陸ともに大勝を博したので清國は驚き恐れて李鴻章を遣はし我に和を求めて朝鮮の獨立を認め償金二億兩を出し、臺灣及び遼東半島を割讓することを約した。これが下關條約である。

三國干涉　時に極東經略に全力を注ぎ、滿洲に南下せんとする野心を抱いてゐた露西亞は獨逸、佛蘭西と聯合して、我國の遼東半島領有に異議を唱へ、その還附を勸めたから、我國は東洋平和のため、深く時局の大勢を察し、隱忍してこれを清國に還すことになつた。

○景福宮　景福宮は今の京城にある。朝鮮太祖の造營にかゝるものであるが、後ち燒けて廢絶したのを大院君が復興したのである。

清國に伸びる列國の魔手　日清戰役によつて清國の脆弱無力が暴露するや、列國はこれを壓迫して、自國の勢力範圍を定めんと佛蘭西は先づ佛領印度支那に近い廣東・廣西・雲南三省の鑛山採掘權を得、次いで廣州灣を租借した。獨逸は宣教師の殺されたのを口實として、膠州灣を租借し、山東地方に鐵道・鑛山などの利權を獲得した。露西亞は無凍港にも、三國干涉して我國より還附せしめた遼東半島の旅順・大連を租借し、滿洲鐵道の敷設權を得た。これを見て露西亞に對し、勢力均衡を念とする英吉利が威海衞を租借したので、一時は支那分割の說さへ行はれた。當時亞米利加合衆國は西班牙と開

戰し、比律賓群島を攻略した關係上、支那との關係は一層密接となつたに拘らず、その利權競爭に參加することが出來なかつたから、支那の門戸開放と、商業經濟上の機會均等主義を唱へ、我國も戰後日淺く、未だ獨力を以てこの急迫した時局を解決する實力がなかつたから、自衞上支那をして福建省の不割讓を約せしめ、東洋平和の維持と、支那の保全とに力を盡すところがあつた。

萬壽山離宮

○萬壽山離宮　清の齋宗と西太后が造營したもので、佛光閣を中心に、その山腹から昆明湖畔にわたり、多くの建物が配置されてゐる。

清國の改革運動　かゝる險惡な形勢は清國の上下をして、國政改革の氣運を生ぜしめた。當時康有爲は變法自强の說を唱へ我明治維新にならひ、制度を改め國力を强くせんと屢々上書したので、光緒帝はその說を用ひ改革を斷行せんとしたが、西太后を中心とする守舊派のために妨げられたのみならず、西太后は光緒帝を幽して自ら政を聽き、康有爲などを國外に亡命せしめ、排外守舊の方針を固執した。

義和團　明治三十二年義和團と稱する排外主義の暴徒が、山東省に蜂起したが、官兵もこれに加はつたのみならず、端郡王等の王族大官が暗に教唆したゝめ、次第にその勢ひを加へ翌年今の北京に進入して列國公使館を攻圍した。こゝにおいて列國は聯合軍を組織して大沽を陷れ、天津より北京に入つたので、光緒帝、西太后等は西南にのがれ、慶親王などをして列國と和を講ぜしめ、償金を出し謝罪使を送ることを約して時局を結び、列國は北京に兵を駐め、公使館を保護することゝなつた。

日英同盟　朝鮮は、さきに下關條約によつて獨立を全うし、明治三十年國號を韓と改めた。然るに義和團の亂が起るや、露西亞は滿洲鐵道の保護を名として滿洲の要地を占領し、更に韓國の北境をも脅かすに至つた。こゝにおいて我國は、東洋平和の維持と、清・韓兩國の領土保全とを期するため、明治三十三年英吉利と同盟を結んで屢々露西亞に忠告したが、露西亞はこれに耳を傾けずして、却つて益々滿洲の軍備を增大し、我を屈從せしめんと謀つた。

日露交戰　こゝにおいて我國は、自衞の必要上、明治三十七年やむを得ず開戰を宣して露西亞を擊ち破り、ポーツマス條約を結んで韓國における我優越權を認めしめ、且旅順・大連一帶の租借權及び樺太の南半を讓らしめた。この戰役は啻に露西亞をして滿洲侵略の野心を挫折せしめたのみならず、世界の形勢及び東洋人の精神に大なる影響を與へ、これより我國は東洋の盟主として、治安維持の鍵を握ることになつた。

西太后

日韓併合　即ち滿洲を世界の市場として門戸開放の實をあげ、韓國を保護國とし、次いで兩國永遠の福利のため明治四十三年これを併合し、半島の蒼生をも大日本帝國の臣民として、文明の惠澤に浴せしむることゝなつた。

第二節　中華民國

清廷の革新　當時清國は、我國の急激なる發展に鑑み、その原因を立憲政治の結果なりとし、憲法を發布して國會を開き、國政を革新して國力を養ひ、外國に奪はれた利權を回收せんとするに至つた。即ち我國に倣ひ、諸般の制度を改革すると共に、多くの留學生を諸國に派遣し、張之洞を擧げて憲政の準備に當らしめた。然るに間もなく光緒帝・西太后とも相次いで死し、宣統帝が僅か三歲にして帝位につくや、父醇親王が攝政となつて國事に當り、改新の實を擧げんとしたが、張之洞も間もなく死し、最早漢人の心をつなぐこと能はずして遂に革命を見るに至つた。

孫逸仙　清は滿洲から起つて支那全土を支配したに拘らず、比較的に漢族をよく遇したが、漢族は異民族たる滿洲人の支配を受けるのを喜ばず、倒滿復明の思想は絕えず上下に流れてゐた。光緒帝の代に至つて廣東の孫逸仙は、遂に同志を集めて興中會を組織し、我國及び歐米を漫遊して支那留學生間に革命思想を鼓吹し、且支那內部の革命黨とも氣脈を通じて機の熟するのを待つた。たまゝ宣統帝が幼少にして位に即

き、國勢の日に非なるに乘じて事を起さんとしたが、その當時政府が鐵道國有計畫を立てるや、地方の人民はこれに反對して、物情騷然となつた。

革命の勃發　こゝにおいて革命黨は、兵を武昌に擧げ、明治四十四年黎元洪を首領に戴くや、國を擧げてこれに應じたから清廷は狼狽の餘り漢人袁世凱を起用して討伐に當らしめた。かゝる間に革命軍は、南京を略し、各地方の代表者を集めて假共和政府を樹立し、孫文を迎へて假大總統とした。

○武昌の蛇山　革命軍が烽火を擧げたところで、山中に八賣寺といふ有名な寺院がある。

中華民國成立　この情勢を見て醇親王は、騷亂の責を負ひ攝政の位を退き、國政を袁世凱に委ねたから、袁世凱は、孫文と交渉して時局を收拾し、同時に清帝は民意に從ひ、明治四十五年退位することゝなつた。かくて清は、支那に君臨すること約二百七十年にして滅び、翌年今日の北京に於て新共和國の國會が開かれ、袁世凱が正式大總統となつて、こゝに中華民國が成立したのである。

袁世凱の帝制運動　袁世凱が大總統となるや、孫文等の舊革命黨員を壓迫し、權勢の擴張を圖つて先づ國會を停止し、次いで共和制を廢し、大正四年自から帝位に卽くべきことを宣言した。これを見て共和擁護を名とし、討袁軍を起すものが各所に起つたから、流石の袁世凱も大勢に抗し難く、目的を果さずして幾くもなく病死した。其後北京においては、黎元洪・馮國璋・徐世昌・曹銀等が相次いで大總統となつたが安徽派の段祺瑞・直隸派の吳佩孚・奉天派の張作霖などの軍閥の勢力を制する能はず、結局昭和二年張作霖が北京に軍政府を立て、大元帥として北支那を支配した。かゝる間に南方では廣東に軍政府を起して、孫文を大元帥に推したが、大正十年これを正式政府と稱し、孫文を大總統としたから、南北分立の姿を示しながら幾變轉を重ねた。

袁世凱

民國と我國　日露戰役以後我國は佛蘭西、露西亞、北亞米利加合衆國などゝ約し、東洋平和の維持に努める一方、日英同盟を改訂して專ら國策の實行をはかつた。然るに中華民國の成立するや、列國はこれに資金を貸附けて各種の利權を得んと企て、支那は再び分割の危機に直面した。

世界大戰の勃發　我國は極力この形勢の緩和を圖り、大正三年世界大戰の勃發するや、日英同盟の誼により、起つて東洋の戰雲を一掃し、獨逸の根據地膠州灣を略し、日支條約を結んで形勢の變化に備へ、更に民國に勸めて聯合國に味方し大戰に參加せしめ、戰後有利な國際的地歩を占めしめんとした。然るに民國の政情は兎角安定を缺き、內政外交に關する問題を擧げて政爭の具に供したゝめに、我國策の眞意も往々誤解せられ、昔ながらの以夷以制の策を弄し、太平洋方面に密接な關係ある國々を誘つて、我國に當らしめんとする氣勢を示した。

華盛頓會議と民國　それにも拘らず我國は、東洋全局の大勢を察し、大正十年亞米利加合衆國の主唱で華盛頓會議が開かるゝや、喜んでこれに參加し英・米・佛の三國と共同して、太平洋方面の平和確保の協約を結び、支那に關しては、その國權を尊重し、國力の伸張を援助するため各種の決議をなし、日我國に占有中であつた膠州灣を無償にて民國に還附し、山東地方は、再び支那の治下に歸することゝなつた。

國民政府の統一　これより先孫文が廣東に據るや、その率ゐる國民黨の結束を固め、鋭意革命の實を擧げんとしたが、大正十四年孫文は志を果さずして歿した。然かしその主唱による三民主義は、次第に民衆の共鳴を得て、國民黨は廣東に國民政府を樹立し、蔣介石の統率のもとに、國民革命軍を編制し、北方軍閥の討伐を決行するに至つた。かくて次第に北方を壓し、昭和三年南京に統一政府を立てたから、當時北京にあつて北支那を支配してゐた張作霖は、その地位に不安を感じ奉天に退去するの途中不慮の死を遂げ、國民革命軍の北伐はこゝに完成した。かくて支那はほゞ國民政府の手によつて統一せられたが、國內の不安は尙ほ一掃されるに至らず、從つて政府の基礎も安定しなかつた。

張作霖

外蒙古の獨立　外蒙古庫倫のラマ教酋長活佛は、曩に帝政露西亞の援助の下に獨立を宣言し、露西亞の保護國となる密約

を結んだので、支那はこれに對して抗議したが何の反響もなかつた。其後勞農露國の成立以來も外蒙の實權は依然その手に歸し、遂に活佛の獨立宣言を見るに至つたが、千九百二十四年の露支條約は露國をして蒙古における支那の主權を認容せしめた。

西藏の獨立　民國元年西藏の政治、宗教上の首長達賴喇嘛は英國の後援によつて獨立を宣言した。國民政府は民國二年以來、支・英・藏間に會議を開いたが、歐洲大戰のため交渉は頓挫し、かくて西藏は未解決のまゝ獨立の姿を持續してゐる。

露支紛爭　勞農露國は支那の赤化を企てたから、南京國民政府は、ハルビンの露國領事館及び、東支鐵道の回收とを行はしめた。そのため露支兩國間の平和は亂されたから、千九百三十年六月、兩國はモスコーに會議を開き、折衝を重ねることになつたが、豫備的交渉のみで頓挫した。

日支通商條約の改訂　昭和三年南京國民政府は、關稅條約の改正に着手し、日支兩國の間に交渉が續けられた。このとき米國が南京政府を承認したのを機會として、我國もまた同政府を承認し、先づ南京濟南事件を解決して後、日支通商條約を改訂した。

印度の國民運動　印度は曩に三ヶ條の公約を得て、英國の統治を受けることゝなつたが、英國はその公約を履行しなかつた。そのため印度人は自治權獲得の暴動を起すに至つたが、この反英運動に統制と秩序とを與へた者は聖雄ガンヂーであつた。

一九一〇年の末英國は印度統治法を布告して、印度人の參政權を認めた。然るにこの新法も、完全な自治を印度に許さなかつたから、ガンヂーはその主宰する全印度の國民會議をして、スワラジ運動を起さしめるに至つた。かくて印度人は對英非軍事運動を起し、受動的反抗を行づたので、英國の印度總督はガンヂーを逮捕した。かくて我昭和五年末、倫敦において圓卓會議を開き、次で總督とガンヂーとの會見が行はれた結果、兩者の間に英印平和協定が成立し、印度自治の機運はいよ〳〵熟し、千九百三十七年印度憲法が制定された。

滿洲事變　滿洲の地位は我國の產業・國防上重要な關係にあるから、我國は日露戰役後多額の投資を行ひ、滿洲の開發に努めた。然かも滿洲における我國の特殊權益は、條約と歷史とがこれを證してゐるに拘らず、支那は滿洲を以て完全なる領土と看做し、日本の特殊權益を、以て領土主權の侵略なりと主張し、條約を守らざるのみか却つてこれを蹂躙した。これに對して我國は、支那に對して嚴重に抗議したが、たま〳〵昭和六年九月十八日、張學良麾下の一部隊は、奉天郊外の南滿鐵道を爆破し、我鐵道守備隊に向つて發砲したから我滿洲軍は猛然として立ち、我軍事行動の正當なることを中外に聲明して兵匪の討伐に當り、滿洲の法安維持に努めた。

滿洲國皇帝

然るに國際聯盟は支那の宣傳を過信し米國を誘つて抗議したから、我國は再び聲明を發して、滿洲に對し領土的野心のなきことを明かにした。次で聯盟の調査員派遣の件を提議し、かくてリットン調査團が組織された。

同調査團は昭和七年十月調査報告書を國際聯盟に齎らしたがその內容は支那の材料を偏重し、我國を不利に陷れしむるものであつたから、我國は認識不足の聯盟より脫退し、獨自の見解より東洋の平和を維持することゝなつた。

滿洲帝國の出現　滿洲事變の結果によつて、舊軍閥の誅求から免れた滿蒙三千萬の民衆は、王道樂土の建設を計り門戶開放機會均等の主義の下に獨立政府を樹立し、昭和七年三月一日國號を滿洲國と定め、年號を立てゝ大同と稱し、國都を新京に定めて、建國式を擧げ、清朝最後の皇帝たる溥儀氏を迎へて執政に擁立した。滿洲國は初め五省を以て組織されたが、我國は列國の意向に關せず、昭和七年九月十五日、日滿議定書を締結し、卒先して滿洲國の承認を正式に行づた。其後の滿洲國は平和的施設を進めると共に、憲法制度の完成に向つて努力し、我昭和九年三月一日執政溥儀氏は、民望の請ひを容れて皇帝の位に卽かれた。

上海事件　支那人の排日抗日運動は、滿洲事變以後益々甚しくなり、在留邦人の憤慨はその極に達した。殊に民國日報社の不敬記事と、我日蓮宗僧侶殺害事件に關聯する、我海軍の侮辱記事とは、我官民を激昂せしめたが、たま〳〵支那兵が我陸戰隊に砲擊を加へたので、遂に日支兩軍は衝突するに至つた。こゝに於て我國は、出兵の正當なることを列國に聲明して上海に出兵し、忽ち上海の治安を恢復したが、やがて列國が居中調停を試みたから、日支間に停戰協定を成立して局

を結ぶに至つた。

滿洲國治外法權撤廢　我國は曩に滿洲國承認と共に治外法權の撤廢をも決意し、昭和八年三月現地關係者間にその準備委員會を組織せしめて以來着々その工作を進めつゝあつたが、昭和九年八月九日、我が閣議において治外法權撤廢に關する大綱方針を決定して中外に聲明し、昭和十一年七月一日よりこれを實施した。

乾岔子島事件　滿洲國建國以來昭和十一年末に至るまで、滿露蒙國境紛爭事件は三百件以上に達し、國境線上暗雲低迷の狀態が續いたが、昭和十二年六月十九日未明北支國境黑龍江上流の乾岔子島西北に在る滿洲國航路標識一八六號附近において、露國兵が越境上陸し、右標識附近點火夫宿舍の看板を强奪の上、點火夫に退去を强要し、更らにその下流の採金滿人を追放してノウォペトロフスキーに引揚げる等の不法行爲をしたので滿洲國軍及び同國警察官は乾岔子島に至り、露國兵の越境上陸について調査を開始した。然るに砲艇及び警備艇に搭乘する露國兵三十名は同島に上陸し、重機關銃掩護の下に攻擊を開始し、續いて陣地を構築し、對岸にも越境して滿人を拉致する等の行動に出たから、關東軍はこれを擊退して、乾岔子島附近が滿洲國領地であることの證據を公表した。

西安事變　昭和十一年十二月十八日蔣介石は中央要人を同伴して西安に赴き張學良、楊虎城等と連日軍事會議開催中、十二日西安郊外臨潼に駐屯の張學良麾下と、西安城内駐屯の楊虎城麾下の兵が呼應して兵變を起し、蔣介石を捕へて西安城内に監禁し、中央政府に向つて國民政府を改組し各黨派を包容すべきこと外八十條の要求を提起した。國民政府は狼狽して對策を協議する一方、顧問英人ドナルドを西安に特派して眞相を調査せしめ、且つ何應欽を學良討伐軍總司令に任じ交渉の結果、翌月二十六日蔣介石は監禁を解かれて南京に歸還した。かくて事變の全責任を負ひて蔣介石は正式に行政院長及び軍事委員長を辭任した。然るに中央常務會の慰留によつて辭意を飜し、學良に對しては有期徒刑十年、五年間公權剝奪の判決を下したが、蔣介石の請願によつて學良は特赦され一時中外を震駭せしめた事變も、支那一流の龍頭蛇尾にして局を結んだ。

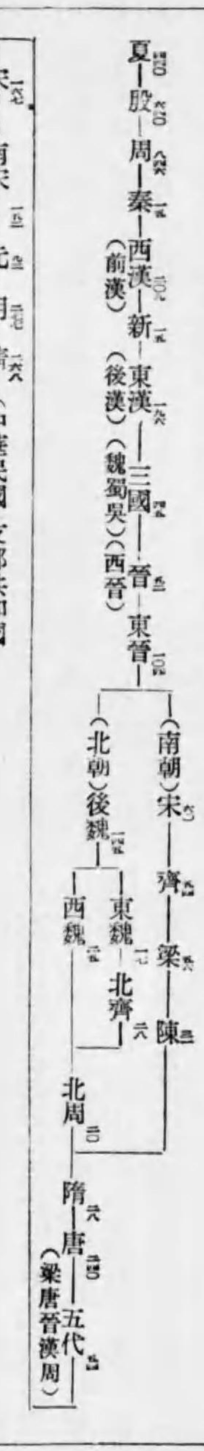
綏蒙戰爭　昭和十一年初旬より、内蒙の蒙政會委員長德王が、日滿兩國に接近しつゝあることを知つた支那國民政府は、綏遠省政府傅作義に命じて德王に壓迫を加へ、蒙政會に解消を迫つたので德王側は憤慨し、十一月十五日綏遠軍討伐の宣言を爲し軍事行爲を起すに至つた。支那側は蒙軍の猛烈なる進擊に狼狽し、内蒙軍蹶起の背後に日滿軍在りと邪推し、大々的に日本の非を鳴らして民衆の抗日熱を煽り、傅作義に對してあらゆる援助を與へた。これに對し滿洲國政府は内蒙軍の蹶起は當然で多大の同情を有する旨を聲明し精神的援助を與へたが、日本側は支那の宣傳を事實無根と反駁し、その間内蒙軍は、百靈廟の奪回を策しつゝあるうち西安事變の突發を見たので、德王は監禁された蔣介石に同情して軍事行動を中止し、一時内外の注目を惹いた綏蒙戰爭も勝敗未解決のまゝ幕となつた。

蘆溝橋事件　昭和十二年七月七日、蘆溝橋北方龍王廟附近において、夜間演習中の我豐臺部隊に對し、突如支那の二十九軍騎兵部隊より數十發の射擊を加へた。この不法射擊に對して我軍は一もこれに應戰することなく、事を和平のうちに解決し、以て災害を良民に及ぼさゞらんとして、兵力を集結のまゝ天明を待ち、交渉を開始せんとしたが、支那側の不法射擊は尚ほ止まないので、遂にこれに應戰するの已むなきに至つた。然かし我軍は直ちに現地に調停委員を派遣し、事變の擴大防止に努めたが、支那側は城門を固く閉ざし、蘆溝橋入城を阻止して、また〳〵不法射擊を集中した。

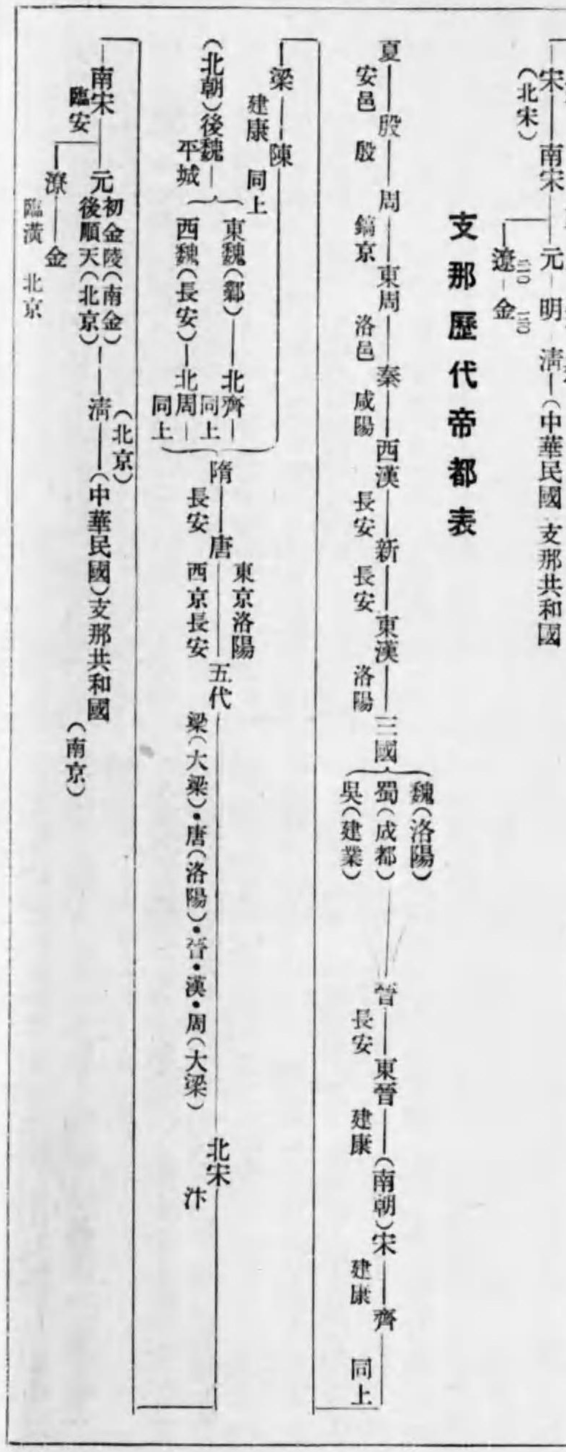
この事件は忽ちにして、支那全面の抗日態勢に進展し、我國の堅持する現地解決事件不擴大の方針を覆へし、和平解決の望み絶えて、遂に支那事變にまで發展して行つた。

支那事變　かくて七月十一日我政府は北支派兵の事を一決し、十五日内地より一部兵力を派遣すべき旨の陸軍省發表となり帝國海軍も亦時局の重大性に鑑み、優秀なる海軍力を以て黃海及び支那海を制壓し、一部を以て北支方面の陸軍に協力して活動を開始した。その間二十五日の郎坊事件、二十七日廣安門事件等が頻發したから、我軍は斷乎として獨自の行動を起し、二十八日北京方面の敵を掃蕩して以來、陸に海に空に勇猛果敢なる攻擊を加へ、十二月十三日には遂に敵の首都南京を陷落し、蔣政權をして一地方軍閥に追込める一方、北支には既に國民政府より離れて自治政府の樹立を見るなど、交戰半歲にして從來の國民政府は事實上その存在を失ふことになつた。

支那歷代興亡表（數字は續いた年數）



支那歷代帝都表



第廿三編　西洋歷史知識

第一章　上古

第一節　古代東方諸國の興亡

最古の文明　西洋ではナイル河畔の埃及と、チグリス・エウフラテス兩河間のバビロニヤとに、最古の文明が發生した。其後へブライ・フエニキヤ・アッシリヤ・ペルシヤなどの諸國が興り互に往來してゐた間に特殊な文明が生れ、それが歐羅巴の各地に擴がつて、遂に現代文明の基礎となつた。

埃及の建國　埃及は氣候が熱く、ナイル河畔の土地が豐沃なため、早くより農業が發達し、住民の生活が豐かであつたから今から約五千年前には、既に統一した一王國をなして文明の域に達し、社會には僧侶、武士、平民の三階級があり、專制獨裁の國王によつて統治されてゐた。

埃及文明　宗教は多神教で、太陽其他の天體、禽獸などを崇拜し、また靈魂の不滅を信じ、貴人の屍體をミイラとして保存する風があつた。またピラミット・スフインクス・オベリスクなどの雄大なものを造り、太陽曆、象形文字などを發明したのみでなく、パピルス紙をも製造し、測量學、數學、天文學などにも秀でてゐた。

ナイル河とピラミツト

○ピラミツト　ピラミットは古代國王の墳墓で、カイロの西ギゼー村にあるクフ王の造つたものゝ如きは高さ一三七米餘、底邊の長さ二三〇米餘に達してゐる。

バビロニヤ　バビロニヤ王國は埃及と同じ頃に興りバビロンに都したが、チグリス・エウフラテス兩河の下流地方も、また氣候が暖かで土地が肥えてゐたから、バビロニヤ王國は早くより文化が進んだ。埃及と同じ此頃處に興り、バビロンに都したが、後ち兩河の上流地

方にアッシリヤ王國が興起した。

アッシリヤ　アッシリヤはバビロンより少しく後れて、チグリス・エウフラテス兩河の上流北方に興つた王國である。然るにアッシリヤ人は勇猛にして、武藝に長じ、後ちバビロニヤ王國を滅して獨立し、ニネヴェに都した。其後も四方を征して西洋史上最初の統一帝國を創めたが間もなく内亂が起り、これに乘じて北方の蠻族が侵入したので、國勢は次第に衰へ紀元前六百六年新バビロニヤ其他二國に分裂した。

兩國とも宗教は埃及と同じく多神教で、楔形文字を用ひ、また天文數學に秀で、建築、彫刻なども巧みであつた。

ヘブライ　ヘブライ人は牧畜を業とし水草を逐つて移住し、一時は埃及で天幕生活を營んでゐたが、其後パレスチナ地方に住した。この民族は當時多神教徒の間にあつて、獨りエホヴアなる一神のみを信じ、國王を擁立してより國運は隆盛を極めたが、ソロモン王の歿後内亂が起り、イスラエルと猶太の二王國に分立し、間もなく前後して共に滅亡した。

この民族は一神教にして偶像の崇拜を禁じてゐたから、彫刻繪畫などの美術は發達しなかつた。

フェニキヤ　フェニキヤはシリヤの沿岸地方に興り、早くから埃及と交通し、地中海の島嶼や沿岸にも植民したのみでなく遠く大西洋より北海を經てバルト海にまで航し、陸路隊商となつて、西方亞細亞や黑海の諸地方にも交通したゝめ、一時國運は甚だ隆盛を極めた。

音標文字　商業上の必要から簡單な音標文字を發明して、これを希臘に傳へたが、やがてこれが今日の西洋文字の基となつた。

波斯　波斯は酋長キルスのとき、メジヤを滅して獨立し、次いで新バビロニヤ・埃及などを征服した。かくてダリウス一世は西方印度を征し、更に歐羅巴に入つて、マケドニヤの地方をも征服し、一大帝國を建設した。

ダリウス王　王は内治に厲み制度を整へ、產業を興したから、領内はよく治つた。宗教は固有のゾロアストル教であるが、廣大な領内の宗教を統一することは不可能であつたから、一神教や多神教も行はれてゐた。

第二節　希臘

希臘の環境　希臘はバルカン半島の南端を占め、海岸線に富んだ國であるから、その住民は早くから航海や商業に長じ、地中海や黑海の沿岸・諸島にも植民した。内地は多くの山脈のため小區域に分たれ、人民もまた自由を愛してゐたから、各地方の都市は獨立して各小國家を作つた。然かし國人は民族宗教、言語を同じうしてゐたから、常に同一國民であるの觀念を失はず、その上オリンピヤに祀つてあるゼウス神のため四年毎に國民祭を行つて大競技會を催すなど、國民に協同一致の觀念を養成せしむるの効果があつた。

スパルタとアテネ　希臘民族中のドリヤ族はスパルタ市を、イオニヤ族はアテネ市を創めて、各々特殊な發展を遂げた。

スパルタ教育　スパルタは貴族政治を行ひ、自衞のため七歳以上の男子に尙武的教育を施し、强健な兵士を作つた。また婦人も身體を鍛へ、婦德を磨いたから、國運は次第に强盛となり、一時はペロポンネス半島の大部を征服するに至つた。

ソロンの改革　アテネは初めは王政であつたが、後には少數の貴族が政權を恣にし、平民との紛爭が絶えなかつた。やがてソロンやクリステネスなどが現はれ、平民にも政權を分つことになつたから、多年の紛爭は止み、民主政治の基礎が確立するに至つたのである。

波斯戰爭　さきに波斯に征服された、小亞細亞沿岸の希臘植民地が、アテネの後援を得て叛いたので、波斯王ダリウス一世はこれを鎭定し、更に希臘に遠征軍を出發せしめたが、この遠征は失敗に終つた。次王クセルクセスは父の遺志を繼ぎ、自から大軍を率ゐて希臘に迫つた。スパルタ王レオニダスは之をテルモピレーの嶮に邀へて勇戰し、壯烈な戰死を遂げた。勝ちに乘じた波斯の大軍は、アテネに侵入し、火を放つて掠奪を恣にした。

アテネのアクロポリス

アテネの勇將テミストクレスは、老幼男女をサラミス島に避難せしめ、自ら大軍を率ゐて波斯の艦隊をサラミス灣内に全敗せしめ、陸軍もまたプラテーエーの野で大勝したので、紀元前四百四十九年波斯は遂に屈して和を請ふに至つた。

アテネの隆盛　戰後アテネの勢力は忽ち他の諸國を凌ぐやうに

なり、その上大政治家ペリクレスが現はれ、善良なる民主政治を行ひ、土木を起して市街を修め、海軍を盛んにし、努めて築港、防備に意を用ひ、且つ學藝を奬めたから、國運は次第に隆昌に向ひ、アテネの極盛時代を釀成したのである。

ペロポンネスス戰役　スパルタはこのアテネの隆盛に反感を抱き、遂に黨與を集めて宣戰した。これがペロポンネスス戰役で、前後二十七年間續いたが、最後においてスパルタは漸くアテネを降し、希臘の全權を握つた。然るにやがて中部希臘のテーベ市にエパミノンダス・ペロピダスなどの名將が出で、スパルタ軍を破つて一時その權力を奪ふに至つたが、兩將とも間もなく戰歿したので、テーベは俄かに衰へた。

フイリップ　この頃希臘の北方マケドニヤ國に、フイリップといふ偉人が現はれ、次第に希臘の都市を從へて、終に全土を征服したが、紀元前三百三十六年不幸にもその臣下のために弑せられ、多年の宿望たりし東方遠征も挫折した。

アレクサンドル大王　フイリップの子アレクサンドル大王はよく内亂を鎭め、小亞細亞を經て埃及を略し、ナイル河口の要地にアレクサンドリヤ市を建てたが、更に鋒を轉じて波斯に迫り、首府スサを陷れて全土を征服し、次いで印度の西北部を略してスサに凱旋した。かくて大王はその攻略した諸地方を統一し、東西兩洋に跨る大帝國を建設せんとしたが、病を得てバビロンに歿し、その雄圖は水泡に歸した。

然かし大王によつて輸入された諸方の文明はその征服した領土内において、各地の文化と融合し、こゝに所謂ヘレニズム文化の大成をなすに至つた。

然るに大王の歿後、希臘には英主がなかつたから、部下の諸將が勢力を爭ひ、各地に據つてマケドニヤ・シリヤ・埃及などの獨立國を作つたが、是等もやがて羅馬に併合された。

希臘の文化　優美にして想像力に富む希臘人は、快活な自然の感化を受けたのと、早くより東方の文物を學んだ結果として、より獨得な新文明を作り、歐羅巴文明の源泉をなすことになつた。

先づ文學においては、希臘人は古代の諸國民中、最も文學思想の發達した國民であつたから、韻文が先づ榮え、散文がこれに次いで興つた。即ちホーマーは敍事詩の大家として知られ、降つてペリクレス時代にはエスキルス・ソフオクレス・エウリピデスの三大悲劇作家と、喜劇作家アリストフアネスとが現はれ、戲曲界に一新時期を劃した。史學では、ヘロドツス・ツキヂデス・クセノフオン等が出て、流麗な筆を振ひ共に後世史家の模範となつた。

三大哲學者　哲學では始祖ターレスを始め、主として自然界の現象を說明することに努めてゐたが、前五世紀の頃ソクラテス現はれるに至り、彼等の所說を排斥して專ら倫理道德の研究に從事し人生の要務を主張した。この學說は高弟プラトンに傳へられたが、プラトンは高尙な觀念論を唱へて、後世の理想哲學の端緒を開き、更にその高弟アリストテレスは論證法に長じ、ターレス以來の諸學問を綜合して、論理、物理、政治及び美術などに對し、卓絕した意見を發表した。

ソクラテス

希臘美術　希臘人は古代諸民族中最も美術的素質の圓滿に發達した國民であるが、その美術は埃及の如く、徒に宏大單調なるものでなく、極めて雅致に富み、複雜な趣向の中に調和の美を備へたのを特色とした。先づ建築の樣式に三種の別があり、ドリヤ式は最も古く莊重を旨とし、イオニヤ式はこれに次いで起り、優美で裝飾が稍や精巧である。最後に發達したコリント式は頗る優美華麗を極めた。而して彫刻もまた建築と相前後して發達した。

第三節　羅馬

羅馬の建國　巴爾幹半島の南端に希臘が興り、次第に東方に發展してゐる間に、伊太利半島の中部に羅馬が勃興し、その勢力を西方に伸張した。かくて前七百五十三年頃伊太利民族はチベル河畔に羅馬市を創設したが、それより附近の諸部落を征服して、次第に强大となり、その先住者を貴族と稱し、新附の歸化人を平民と名づけた。

共和時代の職制　建國以來政體は選擧王政であつたが、その後共和政體となり、貴族の中から二人の統領を選任して大政を執行せしめ、元老院・貴族會及び兵員會などがこれを輔佐した。

然るに平民は參政權を與へられない上に、貴族の壓迫を受けたので不平を抱き、遂に結束して貴族と爭つた。その結果紀元前四世紀の末には、リキニウス法令が發布され、平民の權利は伸長して兩者の權力は殆んど同等となり、こゝに多年の軋轢は跡を絕つことになつた。爾來貴族と平民とは協力し

て他の民族に當り、先づ中部伊太利を從へ、次いで南伊太利にある希臘植民市をも陷れ、伊太利半島の大部を征服した。

ポエニ戰役　當時阿弗利加の北岸に、カルタゴと稱するフェニキヤの植民地があつた。彼等は早くより貿易植民に努めた結果國は富み、特に海軍に長じて、西部地中海の海上權を獨占したから、新興羅馬との間に、ポエニ戰役が開かれるに至つた。第一役においては羅馬が勝ち、カルタゴからシシリー島を奪つたが、第二役にはカルタゴの勇將ハンニバルが現はれ伊太利に侵入して羅馬を苦しめた。この時羅馬の勇將スキピオは、阿弗利加に上陸してカルタゴに迫つたので、ハンニバルは軍を返してこれに當つたが、ザマに敗戰したので、カルタゴは再び重い條件で羅馬と和を結んだ。其後羅馬はカルタゴが徐々にその勢力を回復するのを見て、三たび軍を起し、スキピオの力によつて終にカルタゴを滅した。

これより先、羅馬は紀元前百九十年既にシリヤを破り、さらにマケドニヤを征し、次で希臘を滅してその地を併せたから、地中海沿岸の諸國は概ねその領土となつた。

ケーザルの治績　羅馬は海外の領土から無限の富を得たが、これがため國民は次第に奢侈、遊惰に流れ、多數の農民は奴隷に壓迫されてその業を失つた。富者はこの間に政權を私し、次第に土地を併せたから、國家の中堅である中產階級が次第に衰へ、貧富の兩階級が對立することゝなつた。このときグラックス兄弟はこれを憂慮し、熱心に救濟に努めたが、元老院や一部市民の反對を受けて失敗した。かくて貧民黨のマリウスと、富豪黨のスラとが衝突して、內訌時代を現出することになつた。

三頭政治　マリウスとスラとの歿後は、貧民黨からケーザルが現はれ、富豪黨のポンペイウス、グラックスと共に三頭政治を組織し、羅馬の政權を握つたが、やがてケーザルはガリヤ地方と、ブリタニヤの南半とを征服し、羅馬の文化をこの地方に移し、威名は日と共に盛んになつた。然かるにポンペイウスはこれを嫉み、竊かに元老院と結んで彼を除かんとしたから、ケーザルは俄に羅馬に歸つてポンペイウスを殺し、その殘黨を仆して文武の大權を一身に集めた。かくて積弊を除き、國政の改革を行ひ、其他產業の保護、植民の奬勵、曆法の改正など、大いに治績を擧げたが、間もなく彼の威名、榮達を嫉む輩が、共和主義を理想とする人々と氣脈を通じ、紀元前四十四年遂にケーザルを元老院の議場において殺害した。

た。

第四節　羅馬帝政と文化

羅馬の帝政　其後ケーザルの養嗣子オクタヴイヤヌスは、アントニウスとクレオパトラとの軍を破つて羅馬に凱旋し、遂に天下を統一して紀元前二十七年、元老院からアウグスツスの尊號を受け、專制政治を斷行し、努めて內政を整へ、國防を嚴にし、土木を起し、且つ文藝を奬めて羅馬文化の隆盛時代を作つた。

コンスタンチヌス大帝　アウグスツスの歿後約二百年の間は、帝國の政治は尙ほよく行はれ、マウリタニヤ、猶太、トラキヤの南半、ドナウ河北のダキヤなどを攻略して、帝國の版圖を大いに擴張した。然るにマルクス・アウレリウス帝の歿後から、漸く政治が亂れて、屢々蠻族の侵寇を受け、その上近衞兵が皇帝の廢立を行づて橫暴を極めたから、國運は次第に衰へるに至つた。

其後コンスタンチヌス大帝が、內亂を鎭めて全國を統一し都を今のコンスタンチノープルに遷してより、中興の政が一時成就したが、帝の歿後は內憂外患交々起り、國威は次第に衰へて、三百九十五年以後帝國は東西に分裂してしまつて永久に合一することが出來なかつた。

○マルクス・アウレリウス　マルクス・アウレリウスは紀元百六十六年使節を東漢の桓帝に送つて交通貿易を約した。

羅馬と基督教　羅馬の宗教は多神教であつたが、地方では種々な宗教が行はれた。然かし是等の宗教は何れも國家的または地方的なもので、世界的なものは一つもなかつたが、アウグスツス帝の治世にイエス・キリストが、イエルサレム附近の地に生れて猶太教の教義を改善し、自から救世主と稱して、博愛仁慈を旨とする世界的の一神教を創め、熱心に各地に布教した。神教の猶太人はこれを不快とし、イエルサレムに滯在する羅馬の官吏に訴へ、西曆三十一年キリストを十字架上に殺した。爾來代々の皇帝は基督教を邪教として斥けたが、キリストの弟子等は少しもその信仰を飜さず、殉教的な精神をもつて布教に努めた結果、信徒の數が日に增加した。殊にコンスタンチヌス帝は自からその信者となつて布教を公認し、テオドシ

キリスト

ウス帝もまた基督教を羅馬の國教としてより、その布教は四方に弘まつて、後には歐羅巴の社會上にも政治上にも重大な關係をもつことになつた。

羅馬の文化　羅馬人の實用を尚ぶ國民性は、よく政治を發達せしめ、その法律は後世の模範と仰がれたが、文學、哲學、美術などは創造力に乏しく、概ね希臘の模倣であつた。然かし建築だけは雄大と堅牢とをその一大特色とし、アウグスツス帝の建築したパンテオン殿堂、チツス帝の圓形劇技場と凱旋門、トラヤヌス帝の記念圓柱、カラタラ帝の大浴場などは、何れもこれを代表し、公會堂・市場・劇場・水道・橋梁などの遺跡にして、今尚ほ往時の盛觀を回想させるものが少くない。

要するに羅馬人の世界文明に寄與した最も偉大な功績は、希臘の文明を取り入れて羅馬化し、これをその廣大な領土内に撒布したことであつた。

第二章　中　古

第一節　ゲルマニヤ民族

ゲルマニヤ民族の移動　ゲルマニヤ民族は、もとスカンヂナヴイヤ半島の蠻民で、戰鬪を好み、遊牧を業としてゐたが、次第に南下して北獨逸の平原に移つてからは、數十の部落に分れた。その中の東西兩ゴートは、共に黑海の北岸に轉住したが、たま〳〵中央亞細亞から他の蠻族に壓せられて、黑海方面に侵入したフン族が、東ゴートの大部を征し、更に西ゴートに迫つた。このとき西ゴートは羅馬帝の許しを得て、三百七十五年ドナウ河の南に移り、ゲルマニヤ民族移動の發端をつくつた。

諸王國の創立　ゲルマニヤの諸民族は四方に移動し、先づ西ゴートは一旦羅馬に侵入した後、イスパニヤに入つて西ゴート王國を建設した。次いでヴアンダール族はイスパニヤの故地を離れ、阿弗利加の北岸にヴアンダール王國を建て、フランク族はガリヤの北部にフランク王國を創めた。獨逸の北部海岸地方にゐたユート、アングル、サクスの諸族は、今の英吉利に渡つて、スコットやピクトなどの蠻民を北方に驅逐して、こゝにアングロ・サクソン王國を建設した。

西羅馬帝國の滅亡　分裂後の西羅馬帝國は内憂外患のため國勢が衰へたので、之に乘じゲルマニヤ傭兵の長オドアーサーは遂に西羅馬帝國を滅して自から伊太利の主となつた。然かしやがて彼も東ゴートのために仆され、その地に東ゴート王國が創められた。

ユスチニヤヌス帝　西羅馬帝國が亡んだ頃、東羅馬帝國もまた衰へてゐたが、ユスチニヤヌス帝が即位してから形勢が一變した。帝は内政を整へて、宗教の爭を鎭め、羅馬法典を編纂し、養蠶の法を支那から傳へ、ビザンチン式に基いてセント・ソフイヤ以下多數の寺院を建て、國境の防備をも嚴重にした。また西羅馬の舊領を回復せんとして、五百三十三年ヴアンダール王國を滅し、更に伊太利を併せ、イスパニヤの東南部をも征服したが、帝の歿後は國運が再び衰亡に傾いた。

第二節　アラビヤ民族

マホメツト　アラビヤ民族はサラセンとも稱し、アラビヤ半島に住んで牧畜や隊商を營み、その各部落は割據してゐたが、マホメットが出るに及び、新宗教を以てこれを統一してより國運は俄に振ふことになつた。

マホメットはメッカ市に生れ、初め商業を營んでゐたが、後ち猶太と基督の兩教を參酌してマホメット教を創め、自から神の使と稱し熱心に布教した。然かし當時はメッカの市人は多神教を信じてゐたから、その迫害に堪へず、六百二十二年竊かに逃れてメヂナに赴いた。これをヘジラと稱して、マホメット教の紀元元年である。

アラビヤ半島の征服　其後マホメットは再びメッカに歸り、武力を以てこれを陷れ、更にアラビヤ半島の大部分を征服し其後コーランを大成して、イスラム教の聖典とした。

○コーラン　マホメットは無學で筆錄の法を辨へなかつたから、自から說法したことや神託を受けたことなどを、弟子に命じて筆記させた。是等の斷片的な訓話や、神話を集めたものがマホメット教の聖典コーランである。

サラセンの版圖擴大　マホメットの歿後、その繼承者をカリフと稱した。カリフは政治、宗教、軍事上の大權を握り、教祖の意志を繼いで征伐と布教とに力を盡したから、次第にその版圖を擴張して、先づペルシヤを滅し、東羅馬を征し、更に阿弗利加の北岸を略してイスパニヤに入り、一旦フランク國内を侵したが、宮宰チヤールス・マルテルの率ゐる封建武士に破られてイスパニヤに退却した。

東西兩カリフの對立　其後サラセン帝國は東西に二分し、東は

チグリス河畔のバグダードに、西はイスパニヤのコルドヴアに都を奠めた。

爾來兩カリフ朝は、競つて各種の學問、殖産、工藝を奬勵し、通商、貿易を盛んにしたから、八世紀の後半より九世紀にわたつて、國勢は大いに發展し、その文化は遙かに西歐羅巴の諸國を凌ぎ、中でも東カリフ、ハルン・アル・ラシッドの時代は、サラセン文化の黄金時代を現出した。

サラセンの文化　中古の暗黑時代において、歐羅巴に文藝、學術の研究が殆ど跡を斷つた時、アラビヤ民族が特にこの方面の研鑽に努力し、その命脈を維持したことは特筆すべきである。またマホメット教が廣く西方亞細亞から阿弗利加の内地及び、イスパニヤの大半にまで弘布され、是等の住民に秩序と安心とを與へたことや、東西の交通往來を發達せしめたことなど、共にアラビヤ民族の世界の文化に貢献した著しいものであつた。

○サラセンの美術　イスラム教は偶像を禁じたから、人物や動物などの繪畫、彫刻は發達しなかつたが、幾何學的の圖案で一種の花卉模樣を案出し、これを寺院建築の裝飾に採用し、且つ濃厚な色彩を用ひたから、人目を眩惑するものがあつた。

第三節　基督教會

希臘正教と羅馬正教　基督教會では、信仰や布教の方便として聖像を用ひたが、後には聖像そのものを、神として崇拜する風を生じ、マホメット教徒から嘲笑されるに至つた。こゝにおいて東羅馬皇帝レオ三世は、七百二十六年勅を發して、偶像を破壞せしめた。然るに羅馬法王はこの禁令に從はず、數十年に亘つて相爭つた結果、東西兩教會は分離し、一を希臘正教、他を羅馬正教と稱するやうになつた。

○法皇　羅馬本山の大僧正には、歴代傑出した人物が多く民衆の尊敬を受けたが、グレゴリー一世は特に學德高く人民に慰安を與へ、且つゲルマニヤ民族の教化に努めたから、羅馬の父の意味から轉じ、地上における基督の代表者の意で、これを法皇と稱するに至つた。

カロルス朝の創立　フランク王國には世々、クロヴイスの子孫が君臨したが、宮宰チャールス・マルテルの子ピピンは、七百五十一年これを廢して自立し、カロルス朝を創立した。此時羅馬法王はピピンの力により、羅馬に侵入せんとするロンバルド族を擊退せしめるためその即位を認めた。ピピンはこれを德として、ロンバルヂヤの一部を攻略し、ラヴェンナを法王に寄進した。これが法王領の最初である。

西羅馬帝國の再興　ピピンの子チャールス大帝が即位するに及び、先づロンバルヂヤ王國を滅して伊太利王位を兼ね、次いでアラビヤ民族を擊つてイスパニヤの一部を併せ、更にサクス、スラヴ族などを破つて領地を擴げ、東はドナウ・エルベ兩河から、西は大西洋に達する廣大な版圖を統一した。こゝにおいて法王レオ三世は、帝冠をチャールス王に授けたので西羅馬帝國はこゝに再興し、同時に法王加冠の新例が開かれたのである。

チャールス大帝　帝は都をアーヘンに奠めて意を内政に留め、全國を郡・縣と寺領とに分け、侯伯僧侶等を封じ、地方官の非違を檢するため、巡察使を各地に遣はして、農工商の業を保護し、軍制を整へ、教育を奬勵し、且つ文藝を盛んにするなど、治績大いに擧り、ゲルマニヤ民族に蹂躙された文明は再びその光輝を放つことになつた。

然るに帝の歿後その子孫は、帝の遺領を爭つて紛擾を起したが、ヴエルダン及びメルセンの兩條約によつて、これを東フランク、西フランク、伊太利に三分し、後ちの獨逸、佛蘭西、伊太利三國の基を作つた。

オツト大帝　後の獨逸である東フランク王國では、チャールス大帝の血統が絶えて後は、全國の諸侯が王を選擧する制となつたが、其後オツト一世の王位に登るや、諸侯の叛亂を平げノルマン、マジヤールなどの侵寇を防ぎ、また伊太利の内亂を鎮定し、九百六十二年羅馬法王から帝冠を受けて、神聖羅馬皇帝と稱した。爾來獨逸の國王は代々この稱號を用ひ、法王の選擧や僧官の任免にも干渉すると同時に、基督教の保護にも努力するやうになつた。

グレゴリー七世　然るに十一世紀の後半羅馬法王となつたグレゴリー七世は、教權の絶對獨立を唱へ、教會の積弊を改め、大いに僧官任免の權を皇帝の手から奪はうとした。こゝにおいて獨逸國王ヘンリ四世は大いに憤つて反抗したから、法王は國王を破門し、その臣民は向後國王に對し、忠誠を致す義務なしと宣言した。加ふるに不平を懷いてゐた諸侯等が、竊かに廢立を企てたから、王は窮して罪を法王に謝し、纔かに破門を免れることが出來たが、これより以後法王の權力は益々強化されるに至つた。

然かし其後といへども、皇帝と法王との爭ひは容易に解けず、獨逸や伊太利の諸侯も、皇帝黨と法王黨とに分れて互に軋轢したが、結局皇帝の權力は益々衰へるに反し、法權は愈々優勢となつて、法王インノセント三世の時代にはその絶頂に達した。

第四節　封建制度

法皇權の隆盛　ゲルマニヤ民族の移動以來、西歐羅巴には戰爭が絶えず、社會の秩序は亂れ、政府の威嚴は地に墜ち、地方の豪族は漸く土地、人民を私有するに至つた。こゝにおいて不平と失望とに惱まされた一般民衆は、未來の信仰によつて慰藉を求めんとし、基督教に歸依したから、基督教の感化は上下各方面に普及し、從つて法王や僧侶などの威力は大にしては諸國の內政や社會事業に干與し、學問、教育の事を殆ど獨占し、小にしては個人の私事にも容喙するやうになつた。

この外修道僧の諸團體が山中に修道院を開き、祈禱、研學の餘暇を利用して農工業を勵み、實業の模範を示して社會救濟事業にも努力し、これがため世道人心に裨益する所が少くなかつた。

封建制度　當時西歐羅巴の諸國は、サラセン、スラヴ、マジヤール、ノルマンなどの諸蠻族の侵寇を受け、不安混沌の狀態に陷つたので、これを整頓してその秩序を回復するため、地方分權主義の封建制度が採用されるに至つた。その起源は、フランク王の宮宰チヤールス・マルテルが、アラビヤ民族の侵寇に備へ、王領の一部を割いて封土となし、これを部下に與へて君臣の關係を結び、部下はその報酬として平素武を練り、有事の日には國王に從ひ、軍役に服せしめたのに基くものである。其後封土が世襲となるや、これを有するものは更にその一部を己の部下に與へて君臣の關係を作つた。諸侯、教會、都市等もまたこれに倣つて、多數の家來を養成し、自衛の計を立てたので、十世紀に入つてその組織は完備し、爾後約五百年の間、英吉利、佛蘭西、獨逸などの西歐羅巴諸國における重要な政治組織となつた。

騎士　封建制度の發達するに伴ひ、武士と僧侶とは社會の上層に位置して、商工業者や農民と自から區別されるに至つた。かくて武士の中から騎士と稱する一階級を生じたが、騎士はその幼時より主君に仕へて禮節を習ひ、武藝を練り、屢々競技會に臨んで武技を闘はせ、嚴肅な儀式を擧げて武士道を守ることを誓つた。されば彼等は飽くまで名譽を重んじ、神を崇び、弱者を助け、婦人を敬ひ、且武勇にして剛勢に屈しなかつたから、封建制度の華と謳つて、社會一般から尊敬されたが、十字軍以後に至り世態が變遷するに從ひ、次第に墮落するやうになつた。

農民　古代は勞働を賤み、これを奴隷に一任して顧みなかつたが、中世紀に入つてより基督教の感化により、勞働を人生の訓練と考へるやうになつてから次第に尊重されるに至つた。然かし農民は、封建時代においては武士の壓制を受け、社會の下層に苦しまねばならなかつた。

商人　中古の經濟生活は、自給自足の方針によつて、極めて小規模なものであつた。殊に組合制度が實現されて、自由競爭は未だ行はれず、交通も不便で商業の發達を妨げてゐた。然るに十字軍以後は、地中海の貿易が、俄かに活氣を呈し、ヴエニス、ジエノア、ミラン、フロレンスなど伊太利の諸市が先づ隆興して、東方の貿易を獨占するに至つた。

次いでライン、ドナウ、ローヌなどの諸大河沿岸の要所にも多數の都市が勃興し、各商業または製造の中心となつて發展した。

自由都市　是等の都市の中には金力を以て、支配を受けてゐる諸侯より自治權を買收し、純然たる自由都市を作つたものもあり、また王侯の壓制を防ぎ、商業の發達を圖らんため、都市間の同盟を約するものも現はれた。十二世紀に出來たミラン市を中心とするロンバルチヤ同盟、十三世紀に出來たライン都市同盟及びハンザ同盟などはその代表的なものである。殊にハンザ同盟ではリユベック、ハンブルグ、ブレーメン等が活動し、一時は八十五以上の都市を包容して、その富强は王侯を凌ぐものがあつた。

第五節　十字軍

十字軍の起因　西歐羅巴における多數の基督教徒が、イエルサレムのキリストの墳墓に參詣したとき、土耳古人セルジユック族のため多大な迫害を受けたので、この地を基督教徒の手に回復することを熱望した。たまたま東羅馬皇帝も土耳古人の壓迫を受けて援助を求めて來たので、法王ウルバン二世は千九十五年、諸國の貴族、僧侶及び平民をクレルモンに召集して、聖地回復の急務なることを說明した。その熱誠に感激した民衆は、封建武士の尙武的敵愾心の發動と相俟つて、出

征を誓ひ、赤十字の布片を從軍の章とし、明年を期して出征することを約した。

十字軍の經過　第一回十字軍は、主として佛蘭西の武士によつて計畫され、千九十六年コンスタンチノープルを經て小亞細亞に入り、千九十九年にはイエルサレムを陷れ、こゝにイエルサレム王國を建てたが、幾程もなく、勢力を回復して土耳古人が王國に侵入したので、千百四十七年更に第二回十字軍を起した。然るにこれまた失敗に終つて、空しく軍をかへした。

其後土耳古の皇帝サラヂンは、イエルサレム王國を滅したから、獨逸皇帝フレデリック一世は、英吉利、佛蘭西兩國王と共に、千百八十八年第三回十字軍を起したが、これまた不成功に終つた。十字軍は其後も數回の活動を見たが、從軍者の殉教的精神の冷却したことゝ、戰爭の目的が必らずしも聖地の回復に局限されなかつたことなどが原因となつて士氣振はず、終に豫期の目的を達することは出來なかつた。

十字軍の終結　かくて十字軍は法王の主唱により、莫大な軍費と多數の生命とを犧牲にしたに拘らず失敗したので、宗教熱は急に降下して法權の失墜を促進し、出征した貴族や武士の多數を失つて、封建制度そのものも大いに衰へ、中央集權の風を助長した。これに反して、東西の交通は頻繁となり、航海、貿易の事業が發展して、都市の勃興を促した。それのみならずサラセンの發達した學藝を西歐羅巴に輸入し、歐羅巴人の西方亞細亞に關する地理的知識をも豐富ならしめ、學界に貢獻する所は頗る多かつた。

法權の衰退　十字軍が失敗に終つたから、法王に對する民衆敬慕の念は著しく衰へたが、十四世紀の初には、法王廳は一時羅馬よりアヴィニョンに移され、佛蘭西出身の僧正が法王に擁立された。これに對して反對派の法王が新たに羅馬に選出されたので教會は分裂し、法權は益々衰へるに至つた。たまゝ千四百十四年コンスタンスの宗教會議の決議により、法王廳を羅馬に復歸し、教會を統一することになつたが、教會內部の積弊は、依然として少しも刷新されなかつた。プラーグ大學の教授にして、教會刷新說に贊成したフスが、異端者として焚刑に處せられたのはこの時である。

第六節　十字軍後の歐洲諸國

イングランド王國　五世紀の中頃、アングロ・サクソン族が、今の英吉利に渡つて七王國を作つたが、九世紀に入つてエグバート王はこれを統一して、イングランド王國を建設した。

その頃北方のノルマン族は、頻りに西歐羅巴の諸國を侵し十一世紀の初めその一派のデーン人は、一時イングランドを併合したが、間もなく擊退された。

ヘンリ二世　其後千六十六年になつて、ノルマンヂー公ウイリヤムが大擧して侵入し、アングロ・サクソン族を破つて、イングランドの王位に登つた。然しノルマン王統は、僅かに四代にして絕え、其後は佛蘭西よりウイリヤムの外曾孫アンジュー伯が來つて後嗣となり、ヘンリ二世と稱した。かくて王はイングランドの外、佛蘭西のノルマンヂー、アンジュー、アクイタニヤなどの地を領し、その勢力は遙かに佛蘭西王を凌いだ。

ジョン王　然るにジョン王は暴戾にして失政多く、外に佛蘭西王と爭つてノルマンヂー以下の地を失ひ、內には重稅を課して民衆の不平を招いた。のみならずカンタベリー大僧正の選擧に關し、法王インノセント三世と衝突し、破門されるやうなこともあつたので、千二百十五年貴族、僧侶などは、倫敦市民と共にジョン王の失政を責め、王に迫つて彼等の起草した大憲章に署名させた。

大憲章　この大憲章により、其後は人民の身體と財產との安全は共に保證され、無法な誅求を免れることが出來たが、これこそ實に英吉利憲法の基礎を確立したものである。然るにその子ヘンリ三世は大憲章を遵奉しなかつたから、シモン・ド・モンフォールなどは千二百六十三年國王に迫り、貴族、僧侶の外に市府及び地方の代表者をも召集し、國事を審議せしめた。これが英吉利下院の起源である。

佛蘭西　佛蘭西ではフイリップ二世が、カペー朝を創めてから王權は振はなかつたが、十二世紀の後半以後英邁な君主が相次ぎ、內は諸侯の權力を抑へ、外は法王を威壓して、王權は漸く伸張するやうになつた。其後フイリップ六世が立つに及び、イングランド王エドワード三世は、自から王位相續の權利ありと稱し、千三百三十九年佛蘭西に侵入して戰を開いた。これが百年戰役である。

百年戰爭　この戰役に佛蘭西軍は、敗北を重ねた結果オルレアン城を圍まれ、それがため國運が頗る危くなつた。此時、ジヤンヌ・ダルクといふ一少女が現れ、國難を救ふべき神託を受けたりと稱し、で、自から陣頭に立つて將士を勵ましたの

士氣は忽ち振ひ、オルレアンの重圍を解いて敵軍を國外に驅逐し、カレー以外の全土を回復して、再び國威を發揚することになつた。

王權擴張時代　百年戰役後佛蘭西は、疲弊した諸侯を抑へて王權の擴張に努めたから、國王は十五世紀の末に至つて全國を統一することが出來た。一方イングランドでは、百年戰爭についで、薔薇戰役といふ內亂が三十年間も續き、諸侯の家は多く斷絶したが、これに反して王權は伸張した。

イベリヤ半島ではイスパニヤが、コルドヴアのカリフ王が亡んで後ち、多數の基督教國が再興し、やがてアラゴンとカスチラとの兩王國は合してイスパニヤ王國を建て、諸侯の權力を抑へ、アラビヤ民族を國外に放逐し、漸く國土を統一することが出來た。またポルトガルはカスチラの屬邦であつたが、十一世紀末に至つて獨立し、十三世紀にはその全土を支配するやうになつた。

獨逸の國情　獨逸は選擧王國であつたから、國王は大小の諸侯に妨げられ、神聖羅馬皇帝としての抱負を實現することが出來なかつた。諸侯の中でもマインツ、トリエル、ケルンの三大僧正及びボヘミヤ王、サクソニヤ公、ファルツ伯、ブランデンブルグ邊境伯の四大公伯等は、何れもその權力を逞しうし、皇帝選擧の常置委員となつたが、チャールス四世に至つて千三百五十六年黃金文書を發布し、前記三大僧正と四大公伯とを七選擧侯とし、その權利を認めたので、諸侯の權力はこゝに固定し、帝權はいよ〳〵衰へるに至つた。

スウイス　スウイスは獨逸のハプスブルグ家の私領であつたが國人は自由を尙び壓制政治を厭ひ、千二百九十一年、ウリ、シユウイツ、ウンテルワルデンの三州が同盟して叛旗を飜へし、屢々墺太利軍を破つた。爾來同盟の範圍は次第に擴張され、遂に十三州の聯邦を組織して獨立共和國を作つた。

オスマントルコ　西歐羅巴諸國に國家主義が盛んに行はれたとき、東歐羅巴地方ではこれと全く趣を異にした。即ち歷代の東羅馬皇帝が多く暗愚または橫暴であつたから、內亂を鎭める威望もなく、外寇を掃ふ兵力をも備へてゐなかつた。かゝる時代にオスマントルコは、蒙古族の壓迫を避けつゝアルメニヤに移住したが、千二百九十九年その始祖オスマンは、この地方に自立して小王國を建て、次いでその子ウルカンは小亞細亞を攻め、且つ精鋭な新軍隊を編成した。更にその子ムラッド一世はこの新兵力を用ひて巴爾幹半島を取り、千三百六十五年帝都をアドリヤノープルに奠め、バヂヤシッド一世に至つてブルガリヤ、マケドニヤ、希臘などを征服し、進んでコンスタンチノープルを圍んだ。

アンゴラノ戰　此時西方亞細亞に威を振つてゐたチムールは、東羅馬皇帝の請ひにより、バヂヤシッドとアンゴラに戰つてこれを破つた。然かしチムールはその後間もなく病歿したから、その帝國は忽ち瓦解し、土耳古が勢を回復してマホメット二世のとき、遂にコンスタンチノープルを陷れて東羅馬帝國を滅し、こゝに都を遷して大帝國を作つたのである。

第七節　文藝復興時代

文藝復興の原因　中古の前半期歐羅巴においては、各國とも混亂を極めたから、文藝の如きは殆んど顧みられなかつた。然るに十一世紀以來大學が創設せられてサラセン文化を輸入し、また東羅馬帝國の滅亡後東方の學者にして、伊太利に來るものが多かつたことなどが原因となつて、文藝復興の曙光が伊太利の地に發現した。かくて十三世紀頃より人文學者が輩出し、宗門や教會の束縛を離れて、自由に希臘や羅甸の古典の研究に着手した。プロレンスの人ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオは特に有名で頻りに人間の本性を發揮することを叫んだが、彼等の學說はその後、次第に獨逸、佛蘭西、イングランド諸國にも傳つた。

美術の復興　中古の前半期の美術は、教會の束縛を受けてゐたが、後半期にはその束縛より脫し、古來襲用した美術の技巧上に、寫實の新分子を加へて、人生の眞と美とを表すことに努めるやうになつた。即ち建築は從來のローマネスク式、ゴシック式の外に、新たに復興式を出し、彫刻は古代希臘の壘を摩した。繪畫においては最も著しい發達を遂げ、ラフアエルの如き大家を出した。

ダンテ

磁針及び火藥の應用　文藝の復興と前後して、諸種の發明ありその應用も頗る盛んになつた。中にも磁針盤は十三世紀の末に發明され、これによつて遠洋航海の發達を促し、新大陸や新航路の發見となつた。十四世紀には火藥が發明されたが、その發達に從ひ戰術の革新を促し、大に封建制度の崩壞を助けたのである。

活版術　活版術は十五世紀の中頃、獨逸のマインツの人グーテンベルヒが、木製活字を發明したのに起源し、後ち多くの改良を加へ、金屬の活字を作るに及んで、多數の印刷本を低廉な費用で供給する途が開かれ、學問の普及、文化の發展に多大の貢献を與へた。

新航路發見の希望　中古の後半期には土耳古が興つて、東西交通の要路を占め、東洋の貨物に重税を課した結果市價が暴騰し、東洋貿易は一頓挫を來した。こゝにおいて歐羅巴人は、東洋の貨物を直接原産地から輸入せんと企て、遂に地中海以外の海洋の航行を思ひ立つに至つた。かくてポルトガル人は王室の特別な奬勵により、十五世紀以來熱心に阿弗利加の西端に向つて探檢的航海を試みたが、終に千四百九十八年に至り、ヴアスコ・ダ・ガマは阿弗利加の南端なる喜望峰を迂廻して、印度の西岸に達する航路を發見した。

新大陸の發見　これより先、伊太利のコロンブスは、地球は球形であるから、西航すれば印度に到ることが出來ると唱へ、イスパニヤの女王イサベラの援助を得て、千四百九十二年大西洋を西航したが、偶然西印度諸島中の一島に着いた。其後も彼は尚ほ三回の航海を試みてキューバ、ハイチ、オリノコ河口、ホンヂユラス灣内などを探檢したが、この大陸を亞米利加と稱したのは、彼と同時代に南亞米利加の東岸を探檢した伊太利人アメリゴ・ヴエスプッチの名に基いたのである。

世界周航の壯擧　かくて新陸地や新航路の發見されてからは、遠洋航海を企てるものが頗る多くなり、ポルトガル人マジエランは、イスパニヤ王の命を奉じて千五百十九年大西洋を航し、南亞米利加最南の海峽を通過し、太平洋に出て千五百二十一年比律賓諸島を發見したが、不幸にもこの島で歿した。部下は更にその航海を續けて喜望峰を迂廻し、千五百二十二年本國に歸着することが出來たのであるが、實にこれが世界周航の最始である。

南歐人の植民　これより先、ポルトガルはカブラルによつて千五百年偶然南亞米利加のブラジルを發見したが、イスパニヤもまたコルテスによつて千五百八十九年墨西哥を、ピザロによつてペルーを各々攻略し、次いでアルマグロは千五百三十八年チリを征して植民地とした。

比律賓諸島征服　ガマによつて印度に達する新航路が發見されてから、東洋に航行するポルトガル人は次第に增加し、先づセイロン島やマラッカを取り、更に東に南支那海に出で澳門の永代租借權を獲得し、支那との通商を營むことになつた。次いで肥前の平戸に來つて我國とも貿易を開き、一時東洋の商利を獨占するに至つた。一方イスパニヤ人もまた東洋貿易に志し、フイリッピン諸島を征服してマニラを根據地と定め、その拓殖に從事したが、後ち我國にも渡來して、平戸において通商を行つた。

第三章　近　古

第一節　宗教改革

教會の腐敗　中古の末には基督教會の風紀が紊れたから、これが改革を唱へるものが屢々現はれたが、何れも目的を達することが出來なかつた。其後文藝が復興すると共に、教會革新の氣運は熟したに拘らず、法王は毫も反省せず、却つて羅馬のセント・ピーター寺院建立の資金を得るため、罪障消滅符を賣出した。

ルーテルの改革說　此時獨逸の僧マルチン・ルーテルは、大いにその非を鳴らして、教會改革の必要を唱へ、斷然法王に反對した。實に千五百十七年のことで、こゝにおいて宗教改革の端は發せられたのである。

チャールス五世　其後イスパニヤ王チャールス一世が、獨逸皇帝となつてチャールス五世と稱した。然るに帝は北伊太利の地において、多年佛蘭西王と爭つた關係上、羅馬法王の要求を容れて、特にルーテルをウオルムスの國會に招き、その說を取消さしめんとしたが、ルーテルは頑としてこれに從はなかつたので、邪教徒として國法の保護を停止され、暫くワルトブルグ城内に隱棲して、聖書の飜譯に從事することゝなつた。然るに間もなく、スパイエルの宗教會議は、一時ルーテル派の布教を認められたから、ルーテルはこの機會を利用して熱心に布教し、千五百二十六年自から率先して結婚し、僧尼等をしてその例に倣はしめた。かくて信徒の數は日に增加し、北獨逸一帶に弘まつたので、羅馬教會から分離して新に獨逸國民の教會を確立した。

シマルカルデン同盟　其後チャールス五世は、ルーテル派の新教說を排斥したから、その派の諸侯は自衛のためシマルカルデン同盟を組織した。このとき佛蘭西王もまた、皇帝の勢力を嫉んでトルコと結び、新教派を援け皇帝に反抗したので、皇帝は千五百五十五年アウグスブルグに宗教和議を結び、獨

逸の王侯及び都市に信仰の自由を許した。これからルーテルの新教派は、十六世紀の末には北獨逸を中心にデンマルク、瑞典、諾威、諸國にも蔓延するに至つた。

カルヴインの新説　これより先、スウイス人ウルリヒ・ツウイングリも、罪障消滅祠販賣の非を鳴らし、經典の唯一證典たることを説いて、新教の別派を組織したが、國内の舊教徒と衝突して戰歿し、遂にその派は振はなかつた。其後佛蘭西にジョン・カルヴインが現れてまた新説を唱へたが、間もなく國外に放逐された。然かしスウイスはジュネーヴに到つて布教し、こゝで意外にも成功し、その説がやがて佛蘭西、ネーデルランド、獨逸の西南部及びスコットランドなどに傳播したのである。

ヤソ會　當時舊教派は新教の勢力の偉大なるに驚いて覺醒し、トリエントに宗教會議を開いて教會の弊を除き、羅馬法王は自から清淨な生活を營んで範を垂れ、更に千五百四十二年宗教裁判所を設けて、異教徒に嚴罰を加へるなど、舊教の勢力挽回に努めた。殊にイスパニヤ人イグナチウス・ロヨラが、友人フランシス・ザヴイエル等と、耶蘇會を組織し、學校を設けて人材を養ひ、且つ宣教師を諸方に派遣し、獻身的に布教させたことは、舊教挽回の上に著しい效果を與へた。千五百四十九年に我國に天主教の傳來したのは、この派の宣傳に基いたものであつた。

○耶蘇會　ヤソ會は少年子弟の教育と舊教の改善と、蠻民の改宗を目的として成立したジエスイット教團であつて、初めロヨラがその會長に選ばれて全會員を指揮した。彼は世界に二つの軍隊があつて相鬪ひつゝあり、一は神の軍、他はサタンの軍である、そして新教徒はサタンの側にあり、耶蘇會は「神の最大の榮光のために」神の軍にあつて相戰ふものであると唱へた。

第二節　宗教改革と歐洲の形勢

和蘭の獨立　イスパニヤ王チャールス一世の後嗣であるフイリップ二世は、本國の外に、ネーデルランド、兩シシリー、ミラノ及び亞米利加の新植民地などを領し、ポルトガル王をも兼ねて、一時その國運は隆昌を極めた。王はこの勢力を利用して舊教の普及を企て、先づ領國ネーデルランドに舊教を強ひ、またその特權を奪つて專制政治を行つたから、新教に歸依してゐた北部七州は、大いに怒つて獨立を宣言し、オレンチ公ウイリヤムを推して統領とし、數回交戰の後、千五百八十一年和蘭共和國を作つた。爾來國運は次第に發展し、千六百二年には東印度會社を創立し、次いでジャヴア島のバタヴイヤ市に東洋經營の根據地を置き、臺灣を占領して我國及び支那と貿易し、一時東洋貿易の全權を握つた。

イングランド教會　イングランドでは國王ヘンリ八世は、熱心な舊教信者であつたが、皇后の離婚問題に關し羅馬法王と不和となり、遂に法王との關係を絶ち、議會の協賛を經て自からイングランド教會の首長となつた。次王エドワード六世は新教を贊して僧侶の妻帶を許し、教義上よりまた法王と分離したが、姉メリーが相續してからまた舊教に復した。異母妹エリザベスがその後を承けるに及び、前代の方針を變じて新教に基く祈禱書を作り、首長令を復して統一令を發布し、國人をしてこれを遵奉せしめたから、イングランド教會はこゝに確立し、これを遵奉しない者は、多くは和蘭または亞米利加大陸に移住した。

ユグノー戰役　千五百六十二年佛蘭西ではユグノーと稱するカルヴイン主義の新教派が新たに成立したので、在來の舊教派との間に爭ひが起り、イングランド、獨逸の二國はユグノー派を援け、法王とイスパニヤとは舊教派に黨し、爾後十數年に亘つて戰亂が續いた。この間にセント・バーソロミュー祭日に虐殺が行はれ、多數の新教徒は殺害された。

ナント勅令　然るにヘンリ四世は千五百九十八年ナント勅令を發し、信教の自由と、新舊兩派の同權を認めたから、多年の紛爭もこゝにおいて漸く一掃された。

三十年戰役の勃發　獨逸では、アウグスブルグの宗教講和以來も、兩教徒の軋轢は絶えなかつたが、ボヘミヤの新教徒が、その王フェルヂナンド二世の壓制に反抗し、遂に兵を擧げたので三十年戰役が勃發した。

このときフェルヂナンド二世は、獨逸皇帝となつて大いに新教徒の軍を破り、次いで北方から侵入したデンマルク王クリスチヤン四世の軍をも擊退したが、間もなく瑞典王グスタフ・アドルフが佛蘭西と結んで侵入したので、帝は勇將ワレンスタインをしてこれに當らしめ、兩雄は千六百三十二年、リユッツエンで戰つた結果、グスタフ・アドルフは大勝したが不幸にして陣歿した。

ウエストフアリヤの講和　其後戰爭は尙ほ繼續し、その間にワレンスタインは殺され、イスパニヤは本國の内亂によつて、

その派遣軍も引揚げたから、皇帝の軍は俄かに振はなくなつた。その上國内の諸侯も多年の戰ひに疲れ、平和を切望するやうになつたから、次帝フェルヂナンド三世は、佛蘭西の宰相マザレンの説を容れて千六百六十一年、ウエストファリヤ條約を結び講和した。

帝權の衰微　この條約によつて瑞典は、ポメラニヤの地を得て獨逸の國會に參加することを許され、佛蘭西はメッツ、ツール、ヴェルダンの三寺領とエルザスの大部とを受領し、スウイスと和蘭との二國は共にその獨立を認められ、信教の自由と新教、ルーテル、カルヴイン三派の同權とが共に承認された。かくて關係諸國の宗教上の爭ひは全く終息を告げたが獨逸國内の諸侯が愈々割據獨立した結果、帝權はます〳〵衰へ、人口も著しく減じて、都市と農村とは共に疲弊し、文化は廢れ、愛國の精神もまた跡を絶つやうになつた。

第三節　諸國家の興隆

ルイ十四世　ヘンリ四世の歿後ルイ十三世と十四世とが相次いで君臨した。ルイ十四世はマザレンを擧げて善政を施し、勵精よく治を圖つたが、マザレンの歿後、萬機を親裁し、コルベールなどの能吏を用ひて財政を整へ、産業を勵まし、植民や貿易の事業を興し、文學、藝術をも奬めたから、國力は充實し、王權はいよ〳〵確固となつた。かくてヴェルサイユに宏壯な宮殿を造り、嚴肅なる儀式を定めて君主の尊嚴を示し榮華を極めたので、佛蘭西の言語、學藝、風俗などは歐洲各國の模範と仰がれるに至つた。

○ヴェルサイユ宮殿　ヴェルサイユは巴里の西方十八粁にあり、閑雅幽邃の風致に富んだ小市である。宮殿は無慮數億の大金を使用して造營し、君主の尊嚴を十二分に發揮しやうとした。從つてその規模の宏大にして善美を盡してゐる點において、他にその比儔なく、内部の裝飾の如きも華麗を極め、光彩陸離たるものがあるが、その一面において莊嚴の趣を缺く憾はあつた。國王はときに學者、美術家を始め數多の佳人才子を集めて盛宴を張り榮華を極め、ブルボン王朝の最も華々しい時代を現出させた。

スペイン繼承戰爭　ルイ十四世はその富强を恃んで外征の師を起した。先づネーデルランドを攻め、次に隣國和蘭と戰つて共にその一部を占領し、更にフアルツを侵入してストラスブルグを略取した。其後千七百年イスパニヤ王チャールス二世が崩じ、その相續者がなかつたから、ルイ十四世は遺志に基いて己れの孫アンジュー公フイリップをフイリップ五世として、イスパニヤの王位に卽かしめた。このとき獨逸の皇帝レオポルド一世はこれを喜ばなかつたので、曾て佛蘭西の富强を嫉んでゐるイングランド、和蘭、ポルトガルなどの諸國と同盟して宣戰を布告した。

この役は前後十三年間に亘つて各所で戰ひ、佛蘭西とイスパニヤとの聯合軍は度々敗北した。然るにイングランドに政變が起り、主戰黨の内閣が倒れて、輿論が平和に傾いたのと次いで獨逸皇帝ジョセフ一世が歿したのとで局面は全く一轉し、交戰諸國は遂にユトレヒトで和を講じ、將來佛蘭西とイスパニヤとが併合しないことを條件に、改めてフイリップ五世がイスパニヤの國王となつた。

佛蘭西大革命の萌芽　ルイ十四世は豪奢な生活を營む一方、屢々外征の師を起したから、國財を蕩盡し、これを補はんとして租稅の徵收が益々苛酷となつた。その上千六百八十五年ナント勅令を廢し、舊教を勵行せんとしたので、商工業に從事する多數の新教徒は國外に逃亡し、實業界の沈衰を促すに至り、民衆の不平と相俟つて、革命の萌芽がこゝに胚胎するに至つた。

エリザベス女王　エリザベスは新教主義に基いて國教を制定したから、國内の舊教徒は激昂して女王を廢し、イスパニヤ王フイリップ二世の後援により、スコットランドの前女王メリーを迎へんとした。そこでエリザベスは先づメリーを殺し、次いでフイリップ二世の派遣した無敵艦隊を英吉利海峽に破り、他日イングランドを海軍國たらしめる基を作つた。この外北亞米利加の東岸にヴアージニヤの植民地を作り、千六百年東印度商會を設けて印度開拓の端緒を開き、學藝を奬勵したから、この方面でも、大劇詩家シエクスピヤを始め、詩人スペンサー、哲學者ベーコンなどが現はれ、英吉利文學の隆盛時代を現出した。

チャールス一世の失政　然るにエリザベスの歿後相續者がなかつたから、ジエームス一世がスコットランドから入つてイングランド王となつた。王は王權神聖論を唱へて專制政治を行ひ、屢々議會と衝突した。子のチャールス一世もまた失政多く、武力を以て議會を壓迫せんとしたから、議會もまた兵を集めて王に抗し、終に八年に亘る内亂となつた。

國王の處刑　此時議會黨の勇將オリヴアー・クロムウエルは、王軍をネースビーに破り、次いで國王を捕へたが、議會は國王の罪を裁判して死刑に處し共和政治の成立を公にした。

クロムウエルの專制　其後クロムウエルは共和政府の長官となり、内は勤王黨を除き、外は航海條例を出して和蘭の海運業を抑へ、一時國威を揚げたが、その政治は餘りに嚴酷であつたから、不平の聲は至るところに起り、クロムウエルの歿後、共和政治は忽ち亡び、前王の長子チヤールス二世が國王となつて王政復古を見た。

名譽革命　チヤールス二世とその弟ジエームス二世は、共に專制政治を行つたが、殊にジエームス二世は舊教の回復を企てたから、國民は怒つて王を廢し、その女婿にして和蘭の總督である者を迎へて王としウイリヤム三世と稱した。この政變を名譽革命と稱してゐる。かくてその翌年王は權利の宣言なるものを發布し、議會の協贊なくして王は租税を徵收しないこと、言論の自由を尊重することなどを規定し、民權を擁護すべきことを公約した。かくて英吉利憲法政治の基礎は鞏固となり、國運はます〳〵隆昌に向ふことゝなつた。

大ブリテン王國　ジエームス一世以來イングランド王は、スコットランドの王位を兼ねたが、兩國は議會を別にしてゐたから、完全な合一を見ることは出來なかつた。ウイリヤム三世の後を繼承した女王アンの時代に至り、兩王國は漸く合一して千七百七年大ブリテン王國と稱した。女王の歿後は、ジエームス一世の外曾孫ジョージ一世が、獨逸のハノーヴアー家から迎へられて、王統を繼承し、今の英吉利王室の始祖となつた。

第四節　植民地經營時代

英吉利の植民地　英吉利はエリザベス女王以來盛んに植民を行ひ、ジエームス一世の治世には、北米方面においてヴアージニヤとニューイングランドとを開拓したが、次いで和蘭と戰つてその植民地ニューネーデルランドを略取して、ニューヨークと名づけ、更に十七世紀末には、大西洋斜面に十三州の植民地を作つた。また印度地方では、モゴル帝國の衰運に乘じてその領地を蠶食して、十七世紀にはマドラス、ボンベイ、カルカツタなどを領有した。

佛蘭西の植民地　佛蘭西は十七世紀の初期、北米のアカヂヤに植民し、次第にセント・ローレンス河を溯つて、ケベック、モントリオールなどを創建したが、コルベールが植民を奬勵してから、ケープ・ブレトン島、カナダ、ルイジヤナなどの諸地方を併有し、遂に英吉利の植民地と境を接することになつた。また印度地方では千六百四年東印度會社を創立し、ルイ十四世時代には更にシヤンデルナゴル、ポンヂシエリーなどを領有するに至つた。

植民政策の衝突　英吉利と佛蘭西は、互に勢力を伸張せんとして幾度か紛爭を重ねたが、七年戰役の際は一層激化し、北米方面では千七百五十九年、英吉利はケベックの城壘を攻略した後、カナダの全領と、西印度諸島中の佛蘭西領とを奪取した。また印度方面ではチユプレックスが、佛蘭西の勢力を維持してゐたが、七年戰爭で佛蘭西が、その主力を歐羅巴に集中してゐる間に、英吉利は軍費をフレデリック大王に補給する一方、全力を植民戰に傾中して、先づ千七百五十七年英吉利人クライヴが、プラッシーの戰でベンガル領主の大軍と佛蘭西軍とを破り、ベンガルを保護國としてから佛蘭西を壓倒して、印度の主權を掌握した。

巴里條約　英吉利と佛蘭西は植民地において、前後七年に亘つて交戰した結果、英吉利の勝利となつて千七百六十二年巴里條約を結び、英吉利は佛蘭西よりケープ・ブレトン島、カナダ、ミシシッピ河以東の佛蘭西領、阿弗利加にあるセネガル河地方を獲得し、ポンヂシエリーとシヤンデルナゴルとを佛蘭西に還し、同時にイスパニヤからフロリダを割取し、その賠償としてミシシッピ河以西の佛蘭西領を、イスパニヤに與へることゝなつた。

第五節　北歐の情勢

露西亞の獨立　露西亞は八百六十二年、ノルマンの別派ルス族の酋長ルーリックによつて建てられたが、一時蒙古人に攻略され、其後の約二百年間は欽察汗國に屬してゐた。モスコー大公に至つてイワン三世は、千四百八十年この束縛を脱して獨立し、孫のイワン四世はカスピ海まで領地を擴げ、西比利亞拓殖の端緒を開いて皇帝と稱した。其後千六百十三年より帝位はロマノフ朝に移り、數代を經てペートル大帝となつた。

ペートル大帝の偉業　ペートル大帝は英邁にして大志を抱き、早くより西歐の文化を輸入して國民を啓發し、黑海と波羅的海に軍港を開き、國威を歐羅巴に輝かさんと企て、先づ土耳古からアゾフ海附近の地を奪ひ、次いで自から獨逸、和蘭、

イングランド、佛蘭西、墺太利などの諸國を巡歴して造船術を研究し、制度、文物を視察して歸國した。是等の制度、風俗などは、直ちに改良を加へられて、益々造船事業を盛んにし、新たに海軍を興し、從來の近衞兵を廢して常備軍を編成した。また學校を創立して教育の普及を企て、郵制を布き、鑛山を發掘し、商館を建設するなど、努めて民益の增進を圖つたから、この時代から露西亞の面目は一新されるに至つたのである。

北方戰役　ペートル大帝はバルチック海の沿岸地方の征服を企て、その領主スウェーデン王チャールス十二世の弱冠なのに乘じ、デンマルク、波蘭兩國と同盟して、千七百年これに宣戰した。

然るにチャールス十二世は、一擧してデンマルクの軍を破り次いでペートル大帝の軍をナルヴァに粉碎し、千七百一年には波蘭とサクソニヤに侵入するなど、ナルヴァ役後の八年間は、全く露西亞を顧みなかつた。機敏なペートル大帝はこの間に軍制を改め、兵備を嚴にし、千七百三年帝都ペテルブルグをネヴァ河口に建設し、諸般の準備を整へた。

ニスタツト條約　かゝる時において、チャールス十二世は、露西亞に侵入したから、千七百九年ポルタヴァの役で大敗し、一先づ土耳古に逃れ後ち本國に歸つたが、ノルウエーとの戰爭中に歿したから、瑞典は交戰諸國と順次和議を約し、露西亞とは千七百二十一年ニスタツト條約を結んで講和した。これによつて露西亞はインゲルマンランド、エストランド、リヴオニヤの全部及び、カレリヤの一部とを得て、瑞典に代り、北方の雄となつた。

西比利亞拓殖　千五百八十二年イワン四世が、コサック兵をして西比利亞に侵入せしめて以來、その拓殖事業は急進し、十七世紀の中頃には、オホーツク海からカムチャツカ半島に達し、一隊はバイカル湖畔に到り、イルクツクとネルチンスクとに堡壘を作り、ヤクーツクから出發した遠征隊は、また黑龍江畔に出で、千六百五十年アルバジンに寨城した。かくてペートル大帝卽位の頃は、彼等は屢々清の滿洲軍と境上の地で衝突してゐたから、大帝は千六百八十九年清の聖祖康熙帝とネルチンスク條約を結び、外興安嶺とアルグン河とを以て、兩國の境界と決定した。

波蘭　波蘭はスラヴ人の建てた王國で、一時は甚だ强盛であつたが、貴族が政權を專らにしてから國勢が衰へた。露西亞の女帝カザリン二世は、この機に乘じて普魯亞、墺太利兩國と謀り、前後三回に亘つてその地を分割したから、憂國の士コシューシコ等の再擧の効なく、全く滅亡するに至つた。

普魯亞　普魯亞は始め獨逸武士團の所領で、後ち波蘭王國に屬してゐたが、十七世紀の初めブランデンブルグ選擧侯がその地方を併せて普魯亞公と稱した。かくて選擧侯フレデリック・ウイリヤムは、波蘭王を說いて公國の獨立を認めしめたが、その子フレデリック三世は、イスパニヤ繼承戰役に際し、獨逸皇帝を援けた報酬として王號を許され、やがて卽位して普魯亞國王フレデリック一世と稱した。

フレデリツク大王　次王フレデリック・ウイリヤム一世は、勤儉尙武を奬め、軍制を改めて常備軍を增加し、行政を刷新し、教育及び實業を奬勵するなど、極力國本の培養に努めた。千七百四十年フレデリック二世(大王)がその後を繼承したが、英邁にして武略に長じ、父王の蓄積した資財と、精鋭な軍兵とを用ひて一層國運を發展せしめた。

フレデリック大王

○フレデリツク大王　フレデリック大皇は、フレデリック・ウイリヤム一世の王子で、母は英吉利のジョージ一世の女ソフイヤ・ドロデヤである。幼時から文藝、音樂を嗜んで佛文を草し、殊に哲學書を好んだから、武骨稜々たる父王とは、全然その性格を異にしてゐた。そのため家庭において父子の間に衝突があり、遂に王もその嚴酷な責罰に堪へず、竊かに王宮を脫したこともあつた。かくて最下級の文武官となり、嚴肅な訓練を經て、つぶさに辛酸をなめて漸次昇進し、二十九歲で王位を繼承した。後年萬難を排して百折撓まず、遂に能く興國の大業を達成することを得たのは、幼時における嚴格なる訓育に負ふところが多かつたのである。

墺太利繼承戰　獨逸皇帝であつたオーストリヤ公チャールス六世は、男子がなかつたので、千七百十三年女子の遺領相續を許す家憲を發布して、豫め列國の承認を得たが、皇帝の歿後長女マリヤ・テレサが、墺太利の全領土を相續するや、バヴアリヤ公チャールス・アルバートは、自からその相續權を主張してこれと爭ひ、やがてイスパニヤ、佛蘭西、サクソニヤなどの諸國がこれに關係するに至つて、所謂墺太利繼承戰役が

開かれた。

マリヤ・テレサ　フレデリック大王はこの機會に乘じ、突然兵を墺太利領に入れてシレシヤの北半を占領した。マリヤ・テレサは、婦人の身でありながら、大王と前後二回の戰爭を交へ、且つ列國の聯合軍と前後八年間に亘つて鬪つた後、千七百四十九年アーヘンで講和した。その結果マリヤ・テレサはシレシヤ以外の墺太利領を悉く相續し、普魯亞もまたシレシヤを併合した。

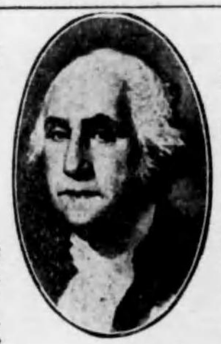
戰後の形勢　フレデリック大王は極力戰後の經營に當つて殖産興業の計を立て、特に軍備を充實して、墺太利報復の擧に備へた。マリヤ・テレサもまたシレシヤの如き肥汰の地を、大王に取られたことを憤つて行政を整へ、兵制を改め、農商業を奬勵して國本の培養に努め、特に佛蘭西、露西亞、サクソニヤ、瑞典などの諸國と同盟を結び、機を見て大王の勢力を粉碎せんと計つた。烱敏なフレデリック大王はこれを探知し、機先を制して突然サクソニヤに侵入し、千七百五十六年宣戰した。

七年戰役　フレデリック大王は、破竹の勢ひを以て各方面の敵を破つたが、中頃に至つて兵隊や軍資の缺乏を來し、非常な苦境に陷つた上に、クネルスドルフにおいて墺太利と露西亞との聯合軍に破られた。然かも大王はなほも屈せず、能くこれに堪へ、漸次形勢を有利に導いたので、露西亞と佛蘭西とは對普魯亞同盟より脱退し、墺太利を孤立させた結果、千七百六十三年フベルツスブルグ條約が結ばれて、各國の境界を舊に復し、普魯亞のシレシヤ地方を領有することを認め、同時に大王はマリヤ・テレサの王子ジョセフを皇帝に選擧すべきことを約束した。かくて普魯亞は、歐羅巴強大國の班に列するに至つた。

第六節　北米合衆國の獨立

印紙條例の發布　北亞米利加に植民された英吉利の住民は自主獨立の精神に富み、困苦を忍んで新植民地を開拓し、漸く繁榮の域に達したが、英吉利政府は七年戰役以來財政を救はんため、北米の植民地にも課稅することに決し、千七百六十五年、議會の協賛を經て印紙條例を發布した。當時植民地の人民は、本國の議會に代議士を出してゐない關係上、納稅の義務のなきことを主張し、本國政府の課稅に反對した。英吉利政府は、翌年この條約を撤回したが、更に茶、紙などに輸入稅を課したのみでなく、千七百六十八年軍隊をボストンに派して、植民地の人民を威壓し初めた。

ワシントン　この形勢を見て、植民地の人民は大いに憤慨し、ボストン港に入港した英吉利印度會社の茶船に暴行を加へたが、却つてその港口を封鎖された。これから兩者の反目は日に烈しくなり、植民地十三州の委員はフイラデルフイヤに會して、本國に陳情委員を派遣したが更らに要領を得ず、植民地十三州は遂にワシントンを總督に推薦して、千七百七十六年獨立宣言書を公にし、翌年聯邦を組織して亞米利加合衆國と稱するに至つた。



ワシントン

ヨークタウンの陷落　本國との間に戰端を開くや、初め獨立軍は利を失つたが、國外から志士、軍人の來り援けるもの多く總督ワシントンの指揮宜しきを得た上に、佛蘭西とイスパニヤの兩國が合衆國と同盟して聲援を與へたから、獨立軍の士氣頓に揚り、千七百八十一年英吉利軍をヨークタウンに降伏せしめた。かくて先に英吉利海軍の横暴を抑へ、海上貿易を保護するため、武裝中立同盟を組織した露西亞、墺太利、瑞典、丁抹などの諸國がその獨立を承認したから、英吉利は遂に屈して合衆國、佛蘭西、イスパニヤなどゝヴエルサイユに和議を結んだ。

ヴエルサイユの和議　この和議によつて亞米利加合衆國の獨立は承認されて境界を劃定したが、同時に英吉利はミシシッピ河以東の地を合衆國に讓與し、セネガルと西印度諸島中のトバゴ島とを佛蘭西に割讓し、ミノルカ島とフロリダ州とをイスパニヤに還附した。

憲法の制定　かくて合衆國の人民は其後千七百八十七年新憲法を制定した。これによつて合衆國の十三州は聯邦組織となり各州は任意の憲法を定め、各政府と議會とを設けて自治を行ひ、別に全體を統轄すべき中央政府を設けて、立法、行政、司法の三權を分掌すること、なつた。

奠都　合衆國は千七百八十九年、第一回の國會を開き、ワシントンを大統領に選擧したが、後ち二年にして國都をワシントンに奠め、こゝを中央政府の所在地と確定した。かくて建國の大業は漸く完成し、國運は日に隆盛を來し、歐洲大陸の新興强國と比肩することになつた。

第七節　近古の國家社會と其文化

國家社會　近古においては、歐羅巴の到るところに中央集權的國家を創立して、專制政治を行つたが、中にも君主自ら覺醒して、平民の境遇に改善を加へ、貴族僧侶などの特權を抑へ、産業を奬勵して國民の利福增進に努力するものもあつた。然かし社會上では依然として貴族、僧侶、平民の區別が嚴存し、貴族、僧侶は社會の上層にあり、種々な特權を有して優遇されてゐた。これに反して平民は、農民も商人も社會の下層にあり、その負擔のみ重く、何等の特權も與へられず、且つ冷遇されたから、その地位の向上と待遇の改善とを圖ることは、當時の急務であり、且つまた一般民衆の希望でもあつた。

産業　十七世紀以來は諸國に、重商主義の經濟政策が唱へられた。一國の富は商業を盛んにして、金銀即ち貨幣を蓄積することによつて得られるものであると考へるやうになつた。そのため政府は、高い關税を課して外國貨物の輸入を少くし、同時に内地の産業を保護して、海外輸出を奬勵し、金銀の貯蓄に努力した。製品もまた海外植民地の發達に伴ひ、その需要を次第に增加したから、工場的工業の發達を促進したのみでなく、十八世紀以來は蒸氣力の應用や、新機械の發明などによつて、工業界に一大革命を起したのである。

哲學と純文學　哲學の方面では英吉利のベーコンは經驗論を唱へ、一切の知識は經驗に基くものであると主張したが、佛蘭西のデカルトは、これに反して唯理論を唱へ、人の知性は一定の原理を先天的に具へるから、眞正の認識はこの原理から發生するものであると說き、近世哲學思想上の二大源流となつた。然るに十八世紀になつて、獨逸にカントが現はれ、この兩說を批判綜合して哲學の大系を立て、近世哲學の基礎を築いた。文學では各國とも宗教の束縛を脫して自由の發達を遂げ、殊に國語の基礎が次第に鞏固となるに從つて、純文學が發達し、自國の國語で社會各方面の實狀を寫すやうになつた。中でも英吉利のシェクスピヤ、獨逸のゲーテとシルレルとは世界三大文豪として知られ、此他にも英吉利のミルトン、ゴルドスミス、佛蘭西のコルネイユ、ラシイヌ、モリエール、獨逸のレッシングなどは、何れも非凡な文學者として、名什傑作を遺した。

カント

啓蒙文學　十七世紀以來科學の發達と共に、純理を以て舊來の因襲や一切の迷信を排斥し、その不合理な點を打破して、知識を要求する社會に提示し、蒙を啓かうとする思想が大いに興つた。而して佛蘭西語と佛蘭西文學とが、この運動の機關として採用された結果、啓蒙文學者なるものが、十八世紀以來佛蘭西に輩出した。モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーなどは代表的の大家であるが、モンテスキューは「萬法の精理」を著して英吉利憲法の美を稱讚し、三權分立の理想を說いて君主權の打破に努め、ヴォルテールは優麗輕妙な文章をもつて教會の腐敗、貴族、僧侶の專横を非難し、革新の氣運を盛んならしめた。ルソーに至つては極端な自由平等論者で、「社會契約論」を著して、現時の不自由、不平等な社會を根本より覆し、自由平等な舊態に服すべきを力說し、時人の耳目を聳動せしめた。其他伊太利のマキヤヴェリは「君主論」を著して外交術の端緒を開き、英吉利のアダム・スミスは「富國論」を公にして、經濟學の元祖と仰がれた。

シエクスピヤ

美術　建築・彫刻はミケランジェロの時代を以て極盛期に達したが、十七世紀より十八世紀に至る間は著しい進歩を見なかつた。繪畫はイスパニヤにヴェラスケスとムリリが現はれ、和蘭にリューベンス、ヴアン・ダイクレンブラントなどの大家が輩出して熱心に古畫を研究し、或は自然の模寫に努めたので隆盛を極めた。此外音樂には獨逸人モザルトとベートヴェンとの兩大家が出た。

科學　十四世紀から十五世紀にわたつて、波蘭人コペルニクスは地動說を唱へ、天文學の新系統を開き、ベーコンは歸納論理を明らかにして實驗哲學を鼓吹したが、爾來科學界は俄かに勃興の氣運に向ひ、伊太利のガリレオは望遠鏡を作つて天體の觀察をなし、獨逸のケプレルは天體諸星の運行に關する法則を確定し英吉利のニュートンは引力の大法則を發見し、哲人カントや天文學者ラプラスは、星雲說を以て天地の開闢を說明し、瑞

ニユートン

典のリンネは植物學に分類法を應用し、其外形の異同によつてこれを區分し、その研究を簡便にした。此他佛蘭西人デカルトは解析幾何學を、獨逸人ニュートンとライプニッツとは微分、積分を、英吉利人ネービヤーは對數表を創め、英吉利人ハーヴェーは血液循環の法を明らかにし、佛蘭西人ラヴオアジェーは近世化學の開祖と仰がれた。

科學の應用と發明　科學の發達するに從つてその應用もまた顯著となり、種々な發明が起つた。中でも瑞典人セルシウスの氣溫計、亞米利加人フランクリンの避雷針、英吉利人ワットの蒸氣機關、英吉利人アークライトの紡績機、英吉利人ジェンナーの種痘法などは顯著なるものである。

第四章　近　世

第一節　佛蘭西大革命

革命の原因　佛蘭西大革命は全歐洲の世態を一變し、その歴史上に重大な過渡時代を形成したものであるが、これが勃發は主として社會的、政治的の缺陷に基因してゐる。即ち一實力を失つてゐた貴族、僧侶などの特權階級が、實力ある中產階級を威壓してゐたゝめ、兩者の間に階級鬪爭を起すに至り、二華奢放漫な生活を營んで財政を極度に紊亂した國王が、特權階級と結んで中產階級を壓迫したから、中產階級の國王に對する反感が漸次濃厚となり、三重稅を負擔し特權階級に酷使されて、極めて悲慘な境遇に陷つてゐた職工、農民などの下層階級は、中產階級と策應してその窮狀を打開するため奮起し、四モンテスキューやルソー等が、盛んに君主の專制を非難して、人權の自由平等を唱へ、新思想を宣傳し、五亞米利加合衆國が獨立して共和政治を實現したことに刺戟され歴史や國情を顧慮せず、直ちに彼國の制度を採用しようとしたことなどが、その遠因となり、それにルイ十六世の失政が近因となつて、遂に爆發するに至つたのである。

ルイ十六世の失政　ルイ十六世は王室の豪奢や外征のため、多くの國費を要し、ために紊亂した當時の財政を整理するためチュルゴーやネッケルなどを擢用したが失敗に終り、千七百八十九年には久し振りに貴族、僧侶及び平民議員から成る三部會をヴェルサイユに召集した。然るに議論は沸騰して平民議員は、貴族や僧侶から離れて別に國民議會を起し、憲法を制定するまでは解散しないことを誓つた。其後王は貴族や僧侶の請ひを容れて武力を以て國民議會を抑壓せんとしたから、不平の暴民は遂に爆發して、バスチーユの牢獄を破りこゝに革命の烽火を擧げた。

ルイ十六世

それより暴動が各所に起つたので、貴族や僧侶は難を避けて續々國外に亡命するに至つた。

人權の宣言　其後議會は「人權の宣言」を發表し、一政治の主權は人民にあること、二すべての人民は自由同權であること、三個人の身體と財產との安全は共に保證されることなどを規定し、更に進んで政治上、司法上、宗教上に一大改革を斷行した。これにより從來の地方行政區劃を廢せられ、全國を縣、郡、鄉、市などに細分して、すべての官吏と判事とは民選となり、宗教上信仰の自由を認められ、寺院の不動產を沒收し、これを擔保に紙幣を發行して、僧侶には俸給を與へることゝなつた。かくて間もなく國外逃走を企てゝ失敗し、巴里に幽閉されてゐる國王に迫つて、千七百九十一年、さきに國民議會で制定した新憲法に批准せしめた。

王政の廢滅　國民議會を解散した後、千七百九十一年新憲法に基いて召集された立法議會は、少數の立憲王政黨と優勢な共和黨とによつて組織されたから、輿論は勢ひ王政廢滅に偏した。然るに當時普魯亞と墺太利の兩國は、自國に革命の波及することを阻止するため、協力してルイ十六世を救援せんと企てたので、議會は王に迫つて千七百九十二年墺太利に宣戰させた。こゝにおいて兩國の聯合軍は佛蘭西に侵入し、國人の國王を虐待することの不當を責めたから、國民は激昂し、國王を捕へて獄中に禁錮し、ついで聯合軍を擊退した。

爾來共和黨は益々勢ひを得て千七百九十二年立法議會を解散し、新たに自黨の議員のみで國民集會を組織し、千七百九十二年王政の廢止と共和政治の成立を宣言し、次いでルイ十六世を刑殺した。

恐怖時代　佛蘭西の革命宣言と國王の處刑は內外に激衝を與へ遂に勤王黨が內亂を起したから、英吉利の宰相ピットは、普魯亞、墺太利、和蘭、イスパニヤ諸國と對佛蘭西大同盟を作つてその國境を壓した。時に佛蘭西では過激黨が議會の全權を握り、革命裁判所と公安委員會とを設け、ダントン、ロベスピエールなどを委員に擧げ、新政府に反對の黨員を殺し初めて全國に徵兵制度を布いた。かくて徵發した壯丁の力で

騒亂を鎮め、次いで前王后マリー・アントアネット以下、多數の人々を刑殺した。この間共和曆を作つて千七百九十二年を紀元元年と定め、基督教を廢して道理崇拜の教を立てた。

ロベスピエールの暴政　ロベスピエールは其後公安委員會の牛耳を握つて暴政を行ひ、殺戮を恣にしたが、やがて國民の全體が彼に反抗し、彼とその黨與とを捕へて悉く殺戮し、公安委員會と革命裁判所とを廢するに至り、この恐嚇時代は一先づ終つた。

都督政府と外征　ロベスピエールの刑戮後、國民集會は直ちに新憲法を定めて五人の都督を選び、これに行政權を委ね、元老院と五百人會とから成る議會に立法權を與へて解散した。新政府は先づ三軍を編成し、墺太利に侵入せんとしたが、第一軍と第二軍とは失敗し、ナポレオンの率ゐた第三軍のみが北部伊太利で墺太利軍を破り、進んで國都を衝かうとしたから墺太利は遂に屈して講和した。次いで都督の命を受けたナポレオンは、英吉利の印度交通を斷つたため、埃及に渡つてその地を占領したが、その海軍はネルソン提督のため、アブキール灣において破れた。

執政政府　當時英吉利の宰相ピットは、墺太利、普魯亞、ポルトガル、土耳古などゝ第二回の對佛蘭西大同盟を作り、大擧して佛蘭西に侵入せんとしたが巴里の人心が頗る動揺した。この機運に乘じてナポレオンは、急遽埃及から歸り、武力を以て政府を倒し、新憲法を制し都督を廢して、新たに三人の執政を設け、自から第一執政となり、兵政の實權を握つた。かくて佛蘭西には共和政治の外形はまだ存したが、その實は帝政同樣となつた。

第二節　ナポレオンの帝政

アミヤン條約　ナポレオンは英吉利と墺太利が飽くまで佛蘭西の新憲法を認めないから、自から伊太利軍の總督となつて先づ墺太利軍を粉碎し、リユネヴィルで和議を約してライン左岸の地を割讓せしめ、その勢ひに乘じて英吉利を衝かんとしたが、海軍力不足のため果さなかつた。英吉利でも宰相ピットの辭職と財政の困難とにより、平和說が優勢となつたから、千八百二年兩國はアミヤンで和議を約し、歐羅巴の平和は一時克復した。

ナポレオンの即位　ナポレオンは意を內政の改善に用ひ、民選の官吏と判事とを廢し、政府よりこれを任命することゝし、財政を整理し、佛蘭西銀行を創立して金融の圓滑を圖り、羅馬舊教を再興し、新たに勳章を制定して文武官吏、學者、藝術家などの勳功の顯著なものに授與した。また教育を奬勵し土木を起して交通の便を開き、且つナポレオン法典を編成した。これより先、國民に推されて終身の統領となつてゐたが更に大多數の投票によつて、千八百四年遂に皇帝の位に卽きナポレオン一世と稱し、翌年には伊太利の王位をも兼ねた。

ナポレオン

トラフアルガルの海戰　千八百五年英吉利の宰相ピットは、露西亞、墺太利、瑞典の諸國を誘つて第三回の對佛蘭西大同盟を組織したから、ナポレオン一世は英吉利を討たんとした。然るに佛蘭西とイスパニヤの聯合艦隊が、英將ネルソンのためトラフアルガル沖で破られ、海上權が英吉利に歸したから、その計畫は失敗に終つた。

ライン同盟　そこでナポレオン一世は兵を東に進め、墺太利と露西亞との聯合軍を破つて、墺太利と講和し、次いでバヴアリヤ、ウユルテンベルヒ、バーデンなどの西南獨逸の諸州にライン同盟を作らしめ、自からその保護者となつたから皇帝フランシス二世は神聖羅馬帝國を解散し、單に墺太利皇帝フランシス一世と稱することになつた。

大陸封鎖令　これより先普魯亞は久しく中立を守つてゐたが、ナポレオンの侵略を受けたので、露西亞と同盟し、千八百六年戰ひを宣した。ナポレオン一世は長驅して伯林を占領し、大陸封鎖令を發して、歐洲大陸諸國が英吉利と通商することを禁じ、次いで東普魯亞に進んで、普魯亞と露西亞の聯合軍を破り、兩國の君主とチルジットに會して別々に和を講じた。

その後ポルトガルが、大陸封鎖令を奉じなかつたので、ナポレオン一世はこれを征服し、次いでイスパニヤの國王父子を幽閉し、その王位を自分の兄に讓らしめ、更に墺太利を伐つて皇帝の長女マリヤ・ルイザと婚して、家門の繁榮を圖つたのである。

ナポレオン一世の流配　其後露西亞が大陸封鎖令に背き、英吉利と貿易を始めたから、ナポレオン一世は大擧してその國を侵し、一旦莫斯科を占領したが、不慮の大火と糧食の缺乏とに惱まされ、全軍は空しく敗退した。普魯亞はこの敗北に乘じ、露西亞、瑞典、墺太利などと第四回對佛蘭西大同盟を

組織し、大いにナポレオン一世の軍をライプチヒに破り、千八百十四年進んで佛蘭西に攻め入つて巴里を陷れた。ナポレオン一世は力つきて帝位を辭し、エルバ島に流され、代つてルイ十六世の弟ルイ十八世が佛蘭西の王位に即いた。

ワーテルローの會戰　間もなくナポレオン一世は、竊かにエルバ島を脱出して本國に歸り、再び皇帝となつたが、やがてワーテルロールにおいて英吉利のウエリントン將軍と戰つて敗れ、終に列國會議の決議により、セント・ヘレナ島に流され佛蘭西ではルイ十八世が王位に復した。

ウイーン會議　これより先千八百十四年英吉利、露西亞、普魯亞、墺太利、佛蘭西五國は委員を出し、革命前の歴史に基いて國土の分合を行ふことを協定したが、意見は區々にして容易にまとまらなかつた。たま〳〵ナポレオン一世がエルバ島を出るや、これに刺戟されて互に讓り合ひ、漸くウイーン條約を結び、國土の分合を行ふことになつた。

第三節　佛蘭西革命の反動政治と自由運動

神聖同盟　ウイーン會議の後、露西亞皇帝アレクサンドル一世は、千八百十五年墺太利、普魯亞兩國の君主と神聖同盟を組織し、基督の主義に基いて、互ひに永久の平和維持を唱道したが、歐羅巴の諸國は概ねこれに加盟した。中でも墺太利宰相メッテルニヒは、この同盟を利用し、歐羅巴の平和の美名の下に、獨逸聯邦内を始め、イスパニヤ、伊太利、波蘭などに起つた自由主義と民族主義との運動を抑へ、各々その舊制に復せしめた。そのため是等諸國の志士は、倫敦、巴里、ジユネーヴなどの諸市に逃がれ、是等の諸市を新運動の策源地と定めて各々特殊の結社を作り、自國の革新を企てると同時に、互ひに氣脈を通じて青年歐羅巴を作つて世界的の活動を試みんと圖つた。

亞米利加諸國の獨立　十九世紀の初期において、イスパニヤは南亞米利加ではブラジル以外の全土、北亞米利加では墨西哥以南の大半を領してゐたが、その政治は本國の利益を圖るのみで、毫も植民地の經濟的發展を顧慮しなかつた。こゝに於て植民地の人民は不平を鳴らし、ナポレオン一世がイスパニヤを占領したときと相前後して獨立し、ウイーン會議以後も本國の統治を斥け、度々交戰して各々その獨立を大成した。かくてアルジエンチン、智利、コロンビヤ、墨西哥の各共和國及び亞米利加合衆國などを創建し、次いでブラジルもまた本國ポルトガルの束縛から脱れて、千八百二十二年獨立帝國を創建した。

モンロー主義　かゝる植民地の獨立につき、メッテルニヒは自由運動の一種なりと考へ、武力でこれを以て舊態に復せしめんとしたが、英吉利の外相カンニングと、合衆國の大統領モンローとがこれに反抗し、殊にモンローは教書を公にして、向後歐羅巴の諸國にして、亞米利加大陸の諸國に向ひ、若し兵力を以て干渉するものがあれば、これを以て合衆國の平和と安寧とを害するものであるから、飽くまでも反抗すべしといふ意を表明した。これが所謂モンロー主義で、さすがのメッテルニヒもそのため、その意志を驕へして諸植民地の獨立を承認した。

希臘の獨立戰　希臘人は古來自由を尚び、基督教を信じてゐたから、十六世紀の中頃土耳古に隷屬してからは、政治上にも宗教上にも壓迫を蒙つてゐた。一般の志士はこれを憤つて、千八百二十一年叛旗を驕へし、忽ちにして歐羅巴の諸國から多大の援助を得たが、埃及の太守メヘメット・アリの子、イブラヒムのために破れて失敗した。このとき露西亞皇帝ニコラス一世は、希臘を援けて土耳古の勢を挫かんと、英吉利の外相カンニングの議を容れ、神聖同盟の主義に反して土耳古皇帝をして、希臘の自治を認めしめんと試みたが用ひられなかつた。こゝにおいて三國の聯合艦隊は千八百二十七年土耳古、埃及の聯合艦隊をナヴアリノ灣内に破り、次いで露西亞の陸軍はアドリヤノープルを占領したから、遂に土耳古も屈して、和議を結び、希臘の獨立を認めることゝなつたのである。

第四節　佛蘭西の隆盛

七月革命　佛蘭西では、ルイ十八世の次に、王弟チャールス十世が即位したが、新王は自由思想を抑へて、羅馬舊教を振興した。のみならず專制政治を行ひ、議會を解散し、且つ選擧法に改正を加へると共に、言論や出版の自由をも束縛したから、巴里の市民が憤起して、千八百二十年七月王宮を圍んだ。王は難を避けて英吉利に奔り、王族ルイ・フイリップが迎へられて佛蘭西國王となつた。

二月革命　ルイ・フイリップは初めは善政を施したが、漸次ギゾーを用ひて保守政治を行ふやうになつてからは民望を失ひ

その上東方問題に干渉して坂及を援け、土耳古を抑へんとして却つて失敗を招いたから、民心は全くルイ・フイリップを離れてしまつた。こゝにおいて共和黨は社會黨などゝ巴里に暴動を起し、王政の廢滅を圖つたから、千八百四十八年二月王は狼狽して英吉利に亡命し、佛蘭西は再び共和政體となつた。

クリミヤ戰爭　二月革命後共和國政府は新憲法を定め、ナポレオン一世の甥ルイ・ナポレオンを大統領に選任した。ルイ・ナポレオンが大統領となるや、武力を以て反對黨を抑へ、やがて帝政を再興して皇帝となり、ナポレオン三世と稱した。かくて民心を收め、國威を外に輝かすため、イエルサレムにおける聖地管理權を土耳古皇帝から得た。これを以て露西亞皇帝は大いに憤り、直ちに土耳古に抗議し、且つ土耳古領内の基督教徒の保護權を要求して拒絶されるや、遂に土耳古に向つて戰ひを開いた。こゝにおいて、ナポレオン三世は英吉利と同盟して土耳古を援け、露西亞の大軍をクリミヤ半島のセバストポールに圍み、更にサルヂニヤの援助を得て、千八百五十五年これを陷れた。かくて巴里會議を開いて和議を結び、列國と共に土耳古の獨立を認め、領土の保全を尊重することを約し、同時に黑海を中立として、露西亞南進の計畫を阻止した。

ナポレオン三世の治績　ナポレオン三世は意を内治に用ひ、海外貿易を奬め、製鐵、紡績などの工業を興し、病院、孤兒院などを各地に設け、巴里市區の大改正を行ひ、各種文明の設備を施したが、次いで世界大博覽會を巴里に開いて、その繁榮を促進することに成功した。

第五節　英吉利の隆盛

産業革命　英吉利は十八世紀の後半に紡績機と蒸氣機關を發明し、家庭手工業は機械工業となり生産力が頓に激增した。然かも汽車、汽船が發明されたので、過多な製品は快速な運輸機關を以て各方面に賣捌かれ、富の回收もまた激增することになつた。そのため工場を經營する資本家と、工場に使役される勞働者とが對立することになり、階級鬪爭を惹起し、遂には社會革命をも誘起するに至つた。

憲法政治の改善　また英吉利は歐羅巴諸國中最も早く立憲政治の發達した國で、トーリー黨とウイグ黨とが對立し、下院において多數を制するものが責任内閣を組織し、憲政の運用は巧妙を極めてゐた。然かるに久しい間の因襲より、各種の弊害がその間に生じ、殊に選擧區の如きは、根本的の改正を要する有樣となつた。それは十九世紀の初期以來、植民地が擴張され、工場工業は發展し、鐵と石炭とを多量に産出する地方に、各種の大工場が創設されて、これに隣接する地方の人民を吸收し、一大都會となつたものが頗る多かつたが、從來の選擧區には少しの改正も加へなかつたから、人口が激減して零落した選擧區では、なほ舊制によつて代議士を選出するが、新興の大都市からは一名の代表者をも出すことが出來ない情勢になつてゐたからである。

グレイ　かくて選擧區の改正は焦眉の急務となつたが、貴族などは既得の權利を實業家に奪はれんことを憂ひて、これに反抗した。然るにウイリヤム四世が自由主義を唱へる一方、政界は佛蘭西七月革命の影響を受けて動搖し、また産業界はマンチエスター、リヴアープール間の鐵道の開通によつて活氣を呈したから、ウイグ黨のグレイ伯は、遂にトーリー内閣を倒してウイグ内閣を組織し、選擧法改正案を議會に提出したこの案は上院の猛烈な反對で一旦否決となつたが、翌年に至つて漸く兩院を通過し、州、郡、都市は均しく代議士によつて代表され、從來威力を逞しうしたのに反し、大地主は勢力を失ひ、商工業に從事する資本家乃至中産階級のものが、これに代つて實權を握るに至つた。

コブデン　これより先愛蘭の議會は、英吉利の議會に合併されたが、愛蘭人の大半は舊教徒で、英吉利の國教を信仰しなかつたから、國會議員や官吏になる資格を缺いてゐる。然るにウエリントン内閣のとき、オーコンネル等の盡力で、千八百二十九年に制定された舊教徒釋放法案が議會を通過したので、愛蘭の舊教徒も、また英吉利の官吏や國會議員になる資格を獲得した。

奴隷廢止　其後グレイ内閣のとき、千八百三十二年奴隷は廢止されたが、貴族や大地主の利益を擁護するため、穀價の低落を防ぐ目的で制定された穀物法だけは、なほ依然と存在して勞働者を苦しめてゐた。然るにヴイクトリヤ女王のとき、コブデンやブライトなどの努力で、その廢止案が議會を通過したから、ピール内閣は穀物法を撤廢して輸入税を全廢し、次いで貿易の自由に制限を加へる航海條例をも廢止した。かくて政府は意を憲政の運用と、殖産貿易の發展とに用ひたから、國勢は次第に進展し、その上海軍の優越、社會狀態の

改善など、見るべきものが多く、歐羅巴の諸國はその範を多く英吉利に求めるやうになつた。

第六節　伊太利王國

サルヂニヤ王　伊太利は中古以來久しく分裂してゐたから、國人は屢々統一運動を起したが、何れも失敗に終つた。サルヂニヤ王ヴイクトル・エマニユエル二世はこれを遺憾となし、賢相カヴールを用ひて、内は政治を整へ、外はクリミヤ戰役に出兵して英吉利、佛蘭西兩國の歡心を求めてこれと結び、戰後更にナポレオン三世と約束して戰備を整へ、遂に墺太利に宣戰してこれを破り、チユーリッヒ條約の結果、ロンバルヂヤを獲得した。

伊太利王國の實現　サルヂニヤ王は更にカヴールと共に、中部伊太利の諸小國を合併し、次いで法王領に入つてその大部を攻略した。かくてさきに義勇兵を率ゐ、シシリー島を征伐して北上したガリバルヂの軍と力を協せ、千八百八十二年ナポリ王國を滅し、ヴエニス及び法王領以外の伊太利の全土を統一した、が千八百六十一年ヴイクトル・エマニユエル二世は伊太利王位に即いて、千八百六十五年國都をフロレンスに遷した。

領土の統一　やがて國王は普魯亞、墺太利戰役に際し、普魯亞を援けて墺太利からヴエニスを取り、普魯亞、佛蘭西戰役には羅馬を占領して、法王領の殆んど全部を併せ、千八百七十一年都を羅馬に遷して統一の事業を大成したのである。

第七節　亞米利加合衆國の興隆

版圖の膨脹　亞米利加合衆國は、建國以來次第に發展し、やがて千八百三年に佛蘭西からルイジヤナを購入したのをはじめ千八百十九年にはイスパニヤからはフロリダを購入し、更に千八百四十五年にはテキサスの地を併せ、千八百四十八年には、土耳古と戰つてニユーメキシコと、上部カリフオルニヤとの地方を略取したから、その版圖は非常に擴大して、遂に太平洋岸にまで達した。

南北戰役　かく領土の膨脹に從ひ、工業を主とする北部と、農業を主とする南部との間に、政治上の主義や、經濟上の利害を異にするやうになつたが、更に奴隷の存廢に關して、兩者の意見が衝突した。このときたま〳〵奴隷廢止論者のリンカーンが大統領に選擧されたので、意見の對立は遂に破裂して、南北戰役となつた。

奴隷解放令　開戰の初め、南軍は頗る優勢であつたが、北軍の總督グラントの指揮が宜しきを得たのと、艦隊が南部諸州の要港を封鎖して、軍資を得る路を斷つたのと、大統領リンカーンが奴隷解放令を發布したのなどが軍を有利に導き、北軍は到る所に大勝して千八百六十五年リッチモンドの陷落の後南軍の總督リーを降し、遂に北軍の全勝を以て、戰局を結ふことを得た。

リンカーン　然かしリンカーンは不幸にも千八百六十五年暗殺されたが、その後を繼承した歴代の大統領は熱心に戰後の經營に當り、且つ奴隷を解放して自由民に編入したから、南北の合一が實現して國基はまく〳〵す鞏固となり、大陸横斷鐵道の敷設と金、銀、鐵、石炭、石油等の採掘事業の發展と共に國運は愈々興隆するに至つた。

第八節　獨逸帝國の建設

ウイリヤム一世　普魯亞國王フレデリック・ウイリヤム四世は夙くより憲法政治を實行せんとしたが、墺太利が聯邦の牛耳を握つてこれに反對したので、その志を果すことが出來なかつた。英邁なウイリヤム一世がその後を繼承するや、墺太利を聯邦外に放逐して、獨逸の統一を大成せしめんと、千八百十五年ビスマルクを宰相に、モルトケを參謀總長に起用し頻りに軍備の擴張を圖つた。たま〳〵丁抹國王が、シユレスウイヒをホルスタインから分離して、自國に併合したからウイリヤム一世はそれを責めて宣戰し、墺太利と聯合して大いに丁抹軍を破り、遂にシユレスウイヒ、ホルスタイン及びラウエンブルグの三地を得て和を講じた。

モルトケ　然るにその新領土の處分と統治に關し、普魯亞は墺太利とその意見を異にしてゐたから、先づ伊太利と同盟し、墺太利を刺戟して、千八百六十六年戰端を開かしめた。この役で普魯亞軍の向ふところ敵なく、僅かに二週間にして北獨逸の諸州を征し、次いで墺太利の主力をケーニヒグレーツで粉碎したから墺太利は降伏してプラーグで和議を結び、獨逸聯邦を脱退しシユレスウイヒとホルスタインとを普魯亞に割讓し、ヴエニスを伊太利に割くことになつた。

モルトケ

北獨逸聯邦　戰後普魯亞は北獨逸の小邦を併せ、またマイン河北の諸國を糾合して千八百六十六年、北獨逸邦を作つてその盟主となり、次いで千八百六十七年聯邦の憲法を定め、更に南獨逸の四王國とも祕密の同盟を結び、國運は隆々として盛んになつた。一方墺太利は戰後匈牙利王國の建設を許して、國號を墺太利・匈牙利と改稱し、墺太利皇帝は匈牙利王位を兼攝することゝなつた。

普佛戰役　佛蘭西は普魯亞の隆盛を見て、ビスマルクは獨逸を統一するため、必ず佛蘭西と戰爭を起すであらうと考へたから、兩國の關係が次第に切迫した。たま〳〵イスパニヤ王位繼承問題で兩國の意見に衝突を來し、これが動機となつて、千八百七十年遂に兩國は交戰することになつた。

セダンの敗戰　この役に普魯亞の大軍は、迅速にストラスブルグとメッツとを圍み、進んでナポレオン三世をセダンに破つて捕虜とした。そこで佛蘭西は王政を廢し、國防政府を建てて專ら國防に努めたが、ストラスブルグもメッツも相前後して陷落し、巴里は重圍に陷つて、終に千八百七十一年一月開城した。かくてヴェルサイユで假條約を結んで講和し、佛蘭西はエルザスとロートリンゲンを獨逸に割讓し、償金五十億フランを支辨することを約し、フランクフルトの本條約でこれを承認した。

ウイリヤム一世　この戰役中に、獨逸では統一の議が漸く熟したので、國王ウイリヤム一世は國民の希望を容れて、千八百七十一年一月大本營であつたヴェルサイユ宮殿において、獨逸帝國の再興を宣言して皇帝の位に卽き、次いで伯林に會議を開いて聯邦の憲法を制定し、普魯亞國王が獨逸皇帝の位を世襲し、立法權は聯邦議會と帝國議會とで分掌せしめることとし、統一の事業を完成した。爾來ウイリヤム一世は、宰相ビスマルクをして戰後の經營に當らしめ、內治・外交の大策を決行して帝國の基礎を鞏固にした。

第九節　露西亞帝國の發展

アレクサンドル二世　露西亞ではアレクサンドル二世の卽位以來、內政を整へ、言論の束縛を緩和し、農奴を解放し、力めて寬大な政治を行つてゐたが、波蘭の叛亂後は、從來の方針を一變して、專制政治を勵行するやうになつた。

セバストポール軍港　其後普魯亞と佛蘭西の戰爭中、千八百五十六年突然、黑海における露西亞の海軍力を制限する巴里條約の條項を廢棄する旨を宣言したが、千八百七十一年、關係の諸國は倫敦で會議を開いてこれを認めた。こゝにおいて露西亞はセバストポールに要塞を築造し、再び土耳古を威壓するやうになつた。

露土戰役　當時土耳古帝國は巴爾幹半島の大半を領し、歷代の皇帝は專制政治を行つて、マホメット教を信じ、基督教徒を冷遇して重稅を課し、驕奢を極めたから民心が離反した。かくてボスニヤとヘルツエゴヴィナの二州が先づ一揆を起したが、このときセルビヤとモンテネグロがこれを援け、次いでブルガリヤ州內にも虐殺が行はれ、國運が危殆に陷つた。これに乘じて露西亞は、英吉利、佛蘭西、墺太利などゝ協議して、土耳古の內政改革を監視せんと提議したが、これが容れられなかつたので千八百七十七年土耳古に對して宣戰した。かくて露西亞の本軍は、オスマン・パシヤの死守するプレヴナ要塞を五ケ月間包圍してこれを陷れ、長驅してアドリヤノープルを占領した。黑海の東岸を迂廻した別軍もまた土耳古軍を破つたから、土耳古皇帝は驚いて、露西亞とサン・ステフアノに假條約を結んだ。

伯林條約　然るに英吉利と墺太利の兩國は、この條約は土耳古の獨立を危くするものとして抗議を申込んだ。此時獨逸の宰相ビスマルクは相互の間に斡旋し、列國會議を伯林に開催して、サン・ステフアノ條約に修正を加へ、千八百七十八年七月伯林條約を締結した。

第十節　近世の國家とその文化

近世文明の二大特色　近世文明の二大特色は、佛蘭西革命以來歐羅巴の各方面に弘布された自由主義の發展と、物質文化の顯著な進步とか、近世文化の二大特色をなしてゐる。自由主義發展の結果、十九世紀の後半において歐羅巴の諸國は概ね憲法を制定し、國會を開催することゝなつたが、國際間の競爭が次第に激しくなつたので、君民は協同して祖國の名譽と利益とを擁護するため、個人の利益を犧牲にする傾向を生じ國家主義の發達を促した。また同一の民族や言語や習慣を有するものが團結して、鞏固な一國家を確立せんとする民族主義も、一部民衆の間に唱道されるやうになつたのである。

科學の發達　次に物質文化の進むに伴ひ科學の發達を來し、その科學が各方面に應用されるに及び產業革命を招來したが、その結果として都市、村落の面目を一新した。然るに歲月の

經過と共に、大資本を有する工業家が、次第に小資本の工場を壓倒して、生産の利益を壟斷するやうになつたから、資本家と勞働者との鬪爭が次第に激烈となり、これを解決するために社會主義が擡頭するに至つた。

社會主義　英吉利では、工場主のオーウエンが、勞働者に同情して社會主義を唱へ、佛蘭西ではフーリエーやルイ・ブランなどが當時の社會組織を非難して、彼等の理想とする新社會の建設を唱道した。其後獨逸にカール・マルクスが現はれ、英吉利や佛蘭西における理想的社會主義を實際的なものに改め、その主義を實社會に應用して社會問題を解決せんと試みるに至つた。マルクスは勞働者を解放するには、政治上では民主主義を行ひ、經濟上では共産主義を勵行する必要があると主唱したのである。そのため社會主義の主張は、現存の國家組織と相容れないところがあるに拘らず、非常な勢ひで歐羅巴の諸國を風靡し、遂に各國に社會黨が出現して、議會に活動することゝなつた。こゝに於いて各國の政府は、各種の社會政策を實施して、勞働者の境遇を改善し、國民の幸福を增進せんとするに至つた。

思想の變遷　十九世紀初期の思想界では、理智の力を重んずる理想主義と、感情を重んずるロマンチック主義とが、二大勢力をなしたが、兩者ともに現實を輕視する傾向があつたので十九世紀の中頃に至り空論を排し、實際を基礎とする現實主義が擡頭して、物質文化の進歩と相俟ち思想界を支配するやうになつた。其後十九世紀末期には再びその反動として、單に事實を探求するのみでなく、更に事實を根幹とし、原理を發見せんとする新理想主義と、新ロマンチック主義とが唱へられるやうにつた。

バイロン

文學　哲學は獨逸において最も發達した。中でもカントは近世哲學の開祖と仰がれ、其後フイヒテやヘーゲルなども現れシヨペン・ハウエル、ハルトマン及び英吉利のスペンサーなどと共に名を博した。純文學の方面では、ロマンチック派の新思想が十九世紀の前半を風靡したが、後半に至つて、自然科學の進歩に從ひ、描寫の精緻を尙ぶ自然主義がこれに代つた。そして詩人としては英吉利のウォーヅウォース、バイロン、テニツソン、獨逸のハイネなどが名を成し、評論家としては英吉利のカーライル、マコーレー、ラスキンなどが燦然たる光彩を放ち、英吉利のスコットはまた歴史小說家の祖として著はれた。この外露西亞のトルストイは小說家として、獨逸のワグネルは樂劇家として、ノールウエーのイブセンは近代劇を以て何れも盛名を博し、また佛蘭西のゾラは獨逸のズーデルマンやハウプトマンと共に、自然主義の錚々たるものであつた。次に獨逸のランケは、歴史に科學的研究法を應用して史界を一新し、トライチケ・モムゼンは、佛蘭西のギゾーや英吉利のフリーマンと前後して共に盛名を傳へた。

トルストイ

美術　美術もまた文學とほゞ同一の進歩を來し、その初期には建築、彫刻、繪畫を通じて、尙古派とロマンチック派が對立したが、中頃には自然科學の發達の影響を受けて、自然主義が新機軸を開き、更に印象派、表現派などが現はれた。

科學　十八世紀に曙光を放つた科學は、十九世紀に入つて長足の進歩を來し、佛蘭西のルヴエリエーは海王星を發見し、マイエルは精力不滅說を確立し、英吉利のファラデーは電磁氣學を創め、獨逸のリービッヒは有機化學に一新生面を開いて農藝化學の祖となり、佛蘭西のラマルクは進化論を唱へ、英吉利のダーウインはその後に出て該博な知識と、銳敏な觀察力とを以て種源論を公にし、進化の法則を明らかにしたが、更に獨逸のアインシュタインは、相對性原理を說いて學界を驚かした。

ダーウイン

最近においては獨逸のリンデ、英吉利のヂュアーは、永久瓦斯と想定されてゐた水素や酸素や空氣などを、液化し得ることを發見し、獨逸のレントゲンは、X放射線が不透明體を透過して、寫眞の種板に感ずることを實驗したが、この放射線は各種の方面に應用され、特に醫界の進歩を促すに至つた。佛蘭西のキユリー夫妻はラヂウムを發見し、その研究により從來分解出來ないものと信じられてゐた原子が、電子から成立つことを確知し、物質觀に大變動を與へた。醫學も近時非常な發達を

アインシュタイン

遂げ、パスツールは傳染病豫防接種法と、狂犬病患者治療法とを發見し、ロベルト・コッホは細菌學の研究から虎列刺病菌を發見して、その高弟北里柴三郎をしてジフテリヤ血精療法を發見せしめた。英吉利のスターはクロロフォルム痲醉外科療法を發見して、手術上に一新生面を開き、獨逸のペテン・コーフエルは健康の保持や疾病豫防の研究に從事し、室内換氣法勵行の必要を論じて衞生學上の泰斗と仰がれた。

人類學や地理學の方面にも大家が輩出したが、中でも地理的探檢熱は近時漸く旺盛を極め、獨逸のリヒトホーフエンは東洋探檢隊を率ゐて支那の地質を研究し、瑞典のスヴエン・ヘヂンは前後五回に亘つて中央亞細亞地方に大旅行を企て、ノルデンシエルドは西比利亞の北岸を迂廻して日本に來り、諾威のナンセンは北極探檢を企て、亞米利加のピーリーは遂に北極點に到達した。これより先英吉利のスコットとシヤクルトンは、相前後して南極探檢を企て、諾威のアムンゼンは千九百十一年南極點に達し、次いでスコット大佐もその翌年目的地に到達したが歸路風雪のため壯烈な最期を遂げた。

應用科學　蒸氣力と電氣力との應用は、十九世紀の文明に最も重大な影響を與へた亞米利加のフルトンは、蒸氣力を船に應用して汽船を造り、次に英吉利のスチヴンソンは蒸氣力を陸上に應用して汽車を作り、間もなくリヴアープール、マンチエスター間に鐵道が敷設されて、鐵道工事の先鞭をつけた。其後千八百八十一年電車が始めて巴里で作られ、千九百四年以後は鐵道が電化された。

亞米利加のモースは電氣力を金線に應用して電信機を作つたが、千八百五十一年には英吉利、佛蘭西間に海底電信線が沈設された。この外亞米利加のグラハム・ベルは電話機を、エヂソンは蓄音機と電燈とを、伊太利のマルコニーは無線電信を發明し、次いで無線電話もまた最近文明の利器として各地に採用されることになつた。軍備の擴張に伴つて兵器の改良進歩も著しくなり、水雷、綿火藥、速射砲、後裝連發銃なども盛んに使用されるやうになつた。此外オット・ダイムラーは、千八百九十二年ガソリンモーターを製作して、自動車の運轉を可能ならしめ、サントス・ヂュモンは千九百一年空中飛行に成功し、やがて亞米利加のライト兄弟以下の人々によつてその改良が行はれ、獨逸のツェッペリンは飛行船を作製した。

世界共通事業　交通機關の發達は、十九世紀の中頃より種々な世界共通の事業を勃興せしめた。先づ世界大博覽會が最初に倫敦に開かれてから、十數回に亘り世界各國の大都市に開催されたが、この外萬國郵便聯合、萬國電信聯合、各種學藝上の會議、萬國平和會議など相次いで開かれ、國際間の關係は年と共に親密となり、各種の事業も國際的に發達するやうになつた。中でも千八百六十四年ジュネーヴの規約に基き、戰時傷病者の救護を目的に創立された萬國赤十字社の如きは、その最も世界的なものである。

第五章　現　代

第一節　列强の世界政策

三國同盟　獨佛戰役後獨逸皇帝ウイリヤム一世は、ビスマルクの建策を用ひ、千八百七十二年墺太利皇帝フランシス・ジョセフ及び露西亞皇帝アレクサンドル二世と三帝同盟を結び、豫め佛蘭西の報復に備へた。然るに伯林會議で、ビスマルクの露西亞に對する態度が、餘りに冷淡であつたゝめ獨露の關係が大いに疎隔した。こゝにおいてビスマルクは、チユニス問題を利用して千八百八十二年伊太利を誘ひ、獨逸、墺太利、伊太利の三國間に、歐洲大陸の平和維持を目的とする三國同盟を締結した。

二國同盟　かくて佛蘭西は孤立の有樣となつたから、千八百九十一年頃露西亞と二國同盟を約して獨逸に對抗した。是等の兩同盟は何れも防禦的の性質を有するもので、其後二十餘年間存續して、能く歐羅巴列强間の勢力均衡を維持することに成功した。

萬國平和會議　英吉利は是等兩同盟と鼎立して、所謂光榮ある孤立を誇持し互に相制してゐたから、或方面に勃發せんとする騷亂は、概して平和手段によつて解決されたが、各國は萬一の事變に備へるため、軍備の擴張に努め、中でも露西亞皇帝ニコラス二世の唱へた、前後二回の萬國平和會議が、失敗に終たので益々その度を昂めるに至つた。

グラストストン

英吉利　英吉利はヴイクトリヤ女王と、エドワード七世との時代が黃金時代で、自由黨のグラットストンとローズベリー、保守黨のヂスレリーとソールスベリーなどが、交々に内閣を組織して選

擧法に改正を加へ、愛蘭問題の解決を企てるなど、熱心に政治を勵んだから、國勢は發展して版圖は五大洲に跨り、然かもその優秀な海軍は世界の海洋を壓した。

獨逸　獨逸では帝國成立後、皇帝ウイリヤム一世は、宰相ビスマルクをして專ら戰後の經營に當らしめ、農、工、商業を奬め、阿弗利加と大洋洲とに廣大な植民地を開き、大いにその國力を增進した。帝の後を承けたフレデリック三世の歿後、ウイリヤム二世が即位したが、帝はよく政治を勵み、軍備を充實し、物質文化を盛んにしたから、國運は年と共に發展し其上トルコを懷柔してバグダード鐵道の敷設に着手し、伯林と波斯灣との聯絡を企て、世界貿易の覇權を掌らんとするまでに至つた。

佛蘭西　佛蘭西は普佛戰役後、行政官チエールの努力によつて、秩序は次第に回復され、多額の償金も皆濟することが出來た。然かも千八百七十三年共和政體の成立後は、年月を經るに從つて國基は安定し、殖産興業も著しく發展して、その富力は實に驚くべきものがあつた。こゝにおいて政府は海外に植民地を開拓し、また隣國獨逸に對抗するため軍備の充實擴張を斷行した。

露西亞　露西亞ではアレクサンドル二世に次いで立つたアレクサンドル三世は、專制獨裁政治を勵行して虛無黨を抑へ、スラヴ國家主義を唱へて猶太人を虐遇し、波蘭、芬蘭の獨立運動を抑壓し、全國民を露化することに努力した。次帝ニコラス二世もまた專制獨裁政治を斷行し、露化政策の實現と異教の排斥とに努めたから、少數民族の反抗を受けることゝなつたが、帝は藏相ウイッテを信任して、極端な保護政策を行ひ、佛蘭西から借入れた資金を以て各種の産業を奬め、千八百九十九年には西比利亞鐵道を完成し、極東の經營を進めた。かくて滿洲を占領し、北韓の一部をも併呑せんとするに至つて我國と衝突したが、戰後は從來の失敗に鑑みて、獨裁政治を廢し、千九百六年立憲帝政を行ふことになつたが、政府と議會との衝突が頻出して、國運の前途に一道の暗雲がたゞよふ狀態であつた。

巴爾幹諸國　千八百六十六年の敗戰後、墺太利は匈牙利と相互條約を結び、兩國は各々特殊の内閣と上下兩院とを有すると同時に、外務、海陸軍及び大藏の政務は、兩國共通の中央政府で處理することゝなつた。然るに異民族、異教徒間の紛爭が續出したことゝ、獨立黨が匈牙利の分離獨立の運動を起

したことゝによつて國力の發展は阻害された。巴爾幹半島においては、土耳古と希臘以外にモンテネグロ、セルビヤ、ルーマニヤ、ブルガリヤの四國が獨立したが、土耳古皇帝アブヅル・アミド二世は、依然として專制政治を行ひ、基督教徒を迫害したから、常に紛擾絶えずして、國家の前途は年と共に多事となつて來た。

列强の植民政策　十九世紀の後半には、各國とも人口の激增と商工業の發展とに伴ふ生産物の過剩と、獨逸や伊太利などの民族的統一の完成により、列强は世界政策を採つて、盛んに阿弗利加や亞細亞や大洋洲諸島に植民するやうになつた。

阿弗利加の分割　もと阿弗利加は、暗黑大陸として世人から顧みられなかつたが、十九世紀の後半に至つて、英吉利人リヴイングストンやスタンリーなどのナイル河上流域探檢によりその實狀が發表されてから、列國は爭つてこれが分奪を企てアビシニヤとリベリヤとを除く廣漠たる大陸は、悉く歐羅巴列國の植民地若しくは保護領となつた。

アラビ・パシヤの奮起　英吉利はウイーン會議の決議に基いて和蘭からケープ植民地を取り、次いで埃及太守が財政困難に陷つた機會に乘じ、その所有にかゝるスエズ運河會社の株券を買收し、爾來佛蘭西と共に埃及の財政に容喙するやうになつた。志士アラビ・パシヤはこれに憤激して内亂を起したから、英吉利は單獨出兵してこれを鎭定した後、佛蘭西の勢力を抑へ、事實上埃及をその保護國とした。

トランスヴァール戰爭　爾來英吉利は埃及を根據として、その勢力を南方に進める一方、南の方ケープ植民地からは、その威力を北方に伸ばし、オレヂン自由國とトランスヴァール共和國とを併合し、以て南北を連結せんと企てた。たまたまオレンヂ國に金剛石の産地が發見され、トランスヴァールには又黃金が多量に採取されるやうになつたから、英吉利人にしてこの二國に移住するものが增加した。こゝにおいて英吉利政府は、是等の移民のために、その政府に對し參政權を要求したが拒絶されたので、千八百九十九年終に戰端を開いた。この役でトランスヴァールの大統領クリューゲルは、能く民兵を指揮して各地に轉戰したが、衆寡敵せずして終に敗れ、千九百二年プレトリヤ條約を結んで、兩國共に英吉利領と化した。英吉利政府は、是等の二國と更にナタル、ケープ植民地などの諸地方を併合し、千九百十年南阿弗利加聯邦として總督を任命し、その統治に當らしめることゝなつた。

佛蘭西の世界政策　佛蘭西は千八百三十年亞米利加の北岸アルジエリヤを先づ占領し、隣邦チュニスを保護國とし、次いでサハラ沙漠とその以南一帶の地方とを攻略し、更にマダガスカル島を占領したが、其後は佛蘭西領コンゴーから大陸の横斷を企て、マルシャン少佐の一行は一旦ナイル河上流の地ファショダを占領した。然るに英吉利の強硬な抗議によつてこれを拋棄したのみならず、この地方が英吉利の勢力範圍であることを認めた。

獨逸の植民地　獨逸はビスマルクの盡力で、阿弗利加の經營に着手し、千八百八十四年にカルメンを得たのをはじめ、トゴランド、西南阿弗利加、東阿弗利加の四植民地を得、やがて紛糾したモロッコ保護問題を、アルジェシラスの列國會議で解決されたが、間もなく同國に内亂が起るや、同國王の請ひにより出兵してこれを鎮め一部の兵を駐めて萬一に備へた。此時獨逸はこれに干渉し、佛蘭西と交渉を重ねた結果、千九百十一年モロッコ條約を結んで、佛蘭西領コンゴーの一部を獲得し、一方モロッコに對する佛蘭西の保護權を認めた。この外白耳義は千九百八年コンゴー自由國を併せ、伊太利は土耳古と交戰して、千九百十三年トリポリの全土を領することになつた。

英吉利の東洋經營　英吉利は早くよりクライヴやヘースチングスなどの努力により、印度の大半を領して東印度會社を設立し、これを統治せしめてゐたが、千八百五十七年土兵の一揆を鎮定して後は、英吉利政府によつてこれを統治した。殊にヴイクトリヤ女王は、千八百七十七年印度帝國を創立し、自ら印度女帝の位に即いて、この地方を直轄地とした。

ヴイクトリヤ女王

英吉利の南清經營　これより先英吉利は、千八百三十四年新嘉坡を購入し、マラッカを得たが、更に進んで南支那海に入り、鴉片戰役で清軍を破つて後南京條約を結び清國から香港を割取し、次いでアロー號事件により佛蘭西と協力して北京を陷れ、北京條約の結果清國から九龍を取つて南清に雄飛した。かくて英吉利は其後ベルチスタンを保護國とし、緬甸を併せ、日清戰役後は清國から威海衞を租借し、更に清末の革命により國情の紛糾せるに乗じ、その勢力を西

露西亞の中央亞細亞經營　露西亞は十九世紀の初めから、度々波斯と戰つてカスピ海西岸の地方を取り、中央亞細亞に入つて、ブカラとキヴアの兩國を保護國としたが、其後更に清國の伊犂を侵し、アフガニスタンに入つて英吉利軍と衝突し、清國とは伊犂條約を結んで、千八百七十九年アフガニスタンの境界を協定した。

露西亞の極東經營　露西亞はムラヴイヨフの努力によつて東部西比利亞の拓殖を進め、愛琿條約を結んで黑龍江以北の地を得たが、次いで露西亞の公使イグナチエフが北京條約の締結に斡旋した報酬として烏蘇里江以東の地方を取り、千八百七十二年浦鹽斯德に海軍の根據地を設けた。日清戰役後は獨逸佛蘭西兩國と共に我國を威壓し、遼東半島を還附させて自からこれを租借したが、日露戰役の失敗によつて、その租借權を我國に讓つた。たま〳〵支那の革命に際し清朝が亡び、中華民國の安定を缺いてゐるのに乗じ、千九百十二年蒙古の活佛と露蒙條約を結んで、内外蒙古に保護を加へ、また新疆方面にも勢力の扶植に努めた。

佛蘭西の印度支那經營　佛蘭西はナポレオン三世時代から印度支那の經營に當り、千八百五十九年先づ西貢を陷れ、安南王に交趾支那の地を割かせ、千八百八十四年には東蒲寨と安南を保護國とした。この佛蘭西の東京攻略は、清國の物議を釀したが、清佛戰爭の結果清國は、遂に佛蘭西の要求を承認したから、佛蘭西は支那の雲南、廣西地方にもその勢力を扶植し、千八百九十九年には更に廣州灣を租借した。

獨逸の膠州灣租借　獨逸は三國干渉以來、極東の經營に着手したが、たま〳〵宣教師が殺害されたのを口實に、武力を以て千八百九十八年膠州灣を占領して租借し、次いで青島に海軍の根據地を作り、その發達した文化を輸入して、支那の各方面に勢力を扶植せんとした。

大洋洲諸島の分割　大洋洲の諸島中に最も大きな濠太利は十九世紀の初から英吉利人が開拓し、千九百年濠太利聯邦を組織した。この外英吉利は、ニュージランドとフイージー全部及びニューギニヤ、ボルネオ兩島の一部とを領し、獨逸はカイゼル・ウイルヘルムスランドとビスマルク諸島とマーシャル群島とを領有し、次いでマリヤナ、カロリン、パラオの三群島をイスパニヤから購入し、更にサモア群島の一部を取つた。佛蘭西はニューカレドニヤの一部を有し、和蘭はニューギニヤ及びボルネオ兩島の一部を共に領有とした。

米西戰爭　千八百九十九年亞米利加合衆國は、布哇の革命に干渉してこれを併せ、更にサモア群島の一部を領有したが、やがてイスパニヤ領のキューバ島と、比律賓諸島の住民とが、本國の惡政に苦しんで、叛亂を起したのを援助し、イスパニヤと戰つてその海軍を破り、キューバ島を保護國とし、ポルトリコ島を得、比律賓諸島とグアム島とを併合したが、其後大統領ルーズヴェルトは、軍備を擴張し、千九百十四年にはパナマ運河を開鑿して太平洋上に雄飛することになつた。

第二節　世界大戰

國際關係の變調　獨逸帝國が最近非常な發展を遂げてから、三國同盟の存續は、却つて歐羅巴の均勢を破壞するやうになつた。英吉利國王エドワード七世はこれに對抗するため、光榮ある孤立の主義を棄てゝ我國と日英同盟を結ぶ一方、千九百六年佛蘭西、露西亞兩國と三國協商を約したから、三國協商の盟主である英吉利は、三國同盟の首腦たる獨逸と、北海を隔てゝ相對する姿となつた。

當時獨逸皇帝ウイリヤム二世は土耳古を懷柔し、その勢力を巴爾幹半島に扶植せんとしたから、墺太利、匈牙利國に有力な援助を與へて、露西亞に强壓を加へ、遂に千九百八年同國をして、ボスニヤとヘルツエゴヴイナとの二州を併合せしめた。

伊土戰爭　これより先伊太利は、チュニスを佛蘭西に取られてより、トリポリの經營に努めてゐたが、墺太利、匈牙利の二州併合に憤激して、土耳古に對し、トリポリの讓渡を要求した。然かるに土耳古が應じなかつたので突然宣戰し、その結果伊太利は勝利を得てローザンヌ條約を結び、土耳古からトリポリとキレナイカとを獲得した。

バルカン戰役　かくて土耳古が勢力を失ふや、ブルガリヤ、セルビヤ、希臘、モンテネグロの四國は、この機に乘じてその領土を擴張せんと、さきに暴動を起したマケドニヤとアルバニヤとを援け、千九百十二年土耳古に宣戰した。この役で四國の聯合軍は到るところに戰勝したので、土耳古は一時休戰したが、再戰後また〳〵敗れたので遂に屈し、千九百十三年倫敦條約を結んで、廣大な土地の割讓を約した。

然かるに割讓地の分割に關して、ブルガリヤの欲望が過大であつたゝめ、希臘、モンテネグロ、セルビヤの三國はこれに反對した。この情勢を見て從來中立を守つてゐたルーマニヤと、戰敗國たる土耳古とは前後してブルガリヤに宣戰した。

ブカレスト條約　ブルガリヤは四方から壓迫されて大敗し、千九百十三年遂にブカレスト條約を結んで講和した。その結果として土耳古は歐羅巴における所領の大半を失ひ、ブルガリヤ、セルビヤ、希臘の三國は、各々その一部を分取して版圖を擴張し、別にアドリヤ海岸に、永世中立國たるべきアルバニヤ國を創建した。

二大主義の對立　諸國に散在するスラヴ民族を統一し、有力な大帝國を創立しやうとする汎スラヴ主義と、各地のゲルマニヤ民族を統括しやうとする汎ゲルマニヤ主義とは、特に兩民族の雜居してゐる巴爾幹半島で屢々衝突した。中でも巴爾幹戰役によつて領土を倍加した塞耳亞は墺太利に對する積怨を散ずるため、盛に大塞耳亞主義を唱へたが、遂にボスニヤの一青年を煽動して、墺太利の皇儲フランシス・フエルヂナンド夫妻を、ボスニヤの首府で殺害せしめた。

フエルヂナンド大公

世界大戰の勃發　世界大戰は、一英吉利と獨逸兩國の利害關係の衝突と、二巴爾幹半島における汎スラヴ主義と汎ゲルマニヤ主義との衝突と、三普佛戰役以來、獨逸と佛蘭西間に醸された反目敵視の念とが三遠因となり、墺太利の皇儲夫妻が暗殺されたのが、その導火線となつたのである。

當時墺太利は、皇儲の暗殺に對して、强硬な最後通牒を送つたから、寒耳亞は露西亞と協議を遂げ讓步的な通牒を出したが、墺太利はそれを以て滿足せず、獨逸の意見を求めた後ち千九百十四年七月、斷然宣戰を布告した。

世界大戰と我國　次いで獨逸は露西亞と佛蘭西に對して宣戰したが、英吉利も獨逸が白耳義の中立を侵したことを責めて奮起した。我國は獨逸の艦隊が東亞の海上で、日英間の海上貿易を妨害するに及び、同盟の誼を重んじて宣戰し、千九百十六年には伊太利、ルーマニヤ、葡萄牙、千九百十七年には亞米利加合衆國及び南亞米利加のブラジルや支那などの諸國も相前後して聯合軍に參加し、これに反し土耳古、ブルガリヤなどは同盟側に加はり、こゝに未曾有の大戰役となつたのである。

東・西兩戰線の戰況　獨逸は西部において、佛蘭西軍を破つた

後ち、主力を東に轉じて露西亞軍を粉碎する計畫を立て、優勢な大軍を送つて白耳義の中立を破り、リエージュ以下の要塞を陷れ、長驅して佛蘭西に入り、將に巴里を占領せんとした。佛蘭西のジョッフル將軍は、諸般の準備を整へ、機を見て攻勢に轉じ、千九百十四年九月獨逸軍をマルヌ河畔に擊退した。爾後兩軍は戰線を西北方面に延長し、互に塹壕を作つて持久戰に入つた。

此時露西亞の一軍は、既に東普魯亞を侵略し、別軍は墺太利領ガリチヤに侵入したが、新たに司令官に拔擢された獨逸のヒンデンブルグ將軍は、一擧して兩方面の露西亞軍を粉碎し、次いでマッケンゼン將軍と協力し、波蘭に入つて千九百十五年八月首府ワルソーを陷れ、そのまゝ東進した。

巴爾幹の戰況　これより先土耳古が獨逸に味方して露西亞に宣戰したから、英吉利と佛蘭西の聯合艦隊は、ダーダネルス海峽から土耳古を攻擊して失敗した。こゝにおいて獨逸、墺太利の大軍は、新たに參加したブルガリヤ兵と策應して、北と東の兩方面から寒耳亞を挾擊し、千九百十五年十一月その全土を攻取した。

其後間もなく、今まで形勢を觀てゐたルーマニヤが、墺太利に向つて宣戰したので、獨逸、墺太利の大軍は、土耳古、ブルガリヤの軍と協力し、西と南とから進んで首府ブカレストを陷落し、國土の大半を占領した。そのため英吉利と佛蘭西との聯合軍はサロニキだけを守備する形になつた。

ヒンデンブルグ

獨逸海軍の窮狀　かゝる間に聯合軍側は優勢な海軍力で、獨逸の海運業に大打擊を與へ、その軍艦をも軍港内に壓迫したから、獨逸の海外植民地は孤立の姿となつた。かくて阿弗利加にあるものは主として英吉利植民地兵に、太平洋にあるものは我國及び英吉利兵のために占領され、その上我帝國は更に千九百十四年十一月膠州灣を略取し、極東における獨逸の勢力を一掃した。

ヴエルダンの攻圍戰　戰況は獨逸の豫期を裏切り、東、西、南三方面ともに持久戰に入り、殊に西部戰線の如きは、兩軍ともに塹壕を築いて、純然たる要塞戰と化し、容易に勝敗を決することが出來なくなつた。英吉利はこの期間を利用して、兵士の徵發及びその訓練、軍器、軍需品の製造などに全力を注いだので、獨逸のウイリヤム二世は前途を憂ひ、ヴエルダン要塞に强襲を加へ、戰線の一角を突破して巴里を突き、一擧に戰局の大勢を制せんと企てた。この攻擊は猛烈を極め、屍山血河の慘狀を呈したが、佛蘭西軍總司令官ジョッフル元帥の周密な措置と、要塞司令官ペタン將軍の沈勇とによつて猛烈な反擊を加へ、遂に獨逸の計畫をして挫折せしめた。

亞米利加合衆國の宣戰　獨逸は交戰二年に亘つて、なほ勝敗を決することが出來なくなると、飛行機によつて聯合側の無防禦市街に爆彈を投下すると共に、潛水艇を放つて盛んに軍艦商船を擊沈した。殊は千九百十七年二月以後は、無制限潛水艇戰を開始することを宣言し、人道を無視して海上に暴威を逞しくするに至つたから、久しく中立を守つてゐた亞米利加合衆國もその行動を悪み、正義人道のため千九百十七年四月宣戰した。次いで中部亞米利加及び、南亞米利加における諸國、支那、シャムなども相前後して獨逸に宣戰したから、こゝに戰局は一變するに至つた。

露西亞の單獨講和　農業國の露西亞は、殖産興業の發達が遲々として進んでゐなかつたから、戰爭が永續するに從ひ、武器彈藥などが次第に缺乏して來た。その上勇敢な將校の戰歿後これを補充すべき將校がなく、且つ作戰の機密が度々獨逸の軍事探偵に探知されて、失敗を重ねたことなどのため、一般に戰爭の終了を熱望する風を生じた。この機運に乘じて、多年專制政治の積弊を憤つてゐた勞働者や農民等は、軍隊と力を協せて千九百十七年三月革命を起し、ニコラス二世を廢してロマノフ朝を倒し、次いでレニン、トロツキーなどの過激共産黨派が、ソヴエート政府を建てゝ政權を握り、獨逸とブレスト・リトウスクに單獨講和を結んで、遂に聯合側から脫退した。

伊太利軍の進軍　伊太利は聯合側に參加してから、カルソ平原まで進出したが、墺太利軍の反擊を受けて、ピヤヴエ河畔に退却した。然るに露西亞の革命後墺太利軍は、西部戰場における獨逸軍の攻擊に策應して、再び攻擊を開始したから、伊太利軍は猛烈な逆擊と追擊とを加へてこれを粉碎し、遂に休

戰條約を結ばしめた。

聯合軍の總攻擊　獨逸は多年の戰爭により、兵員と物資の缺乏を來した上、士氣も甚しく沈衰したから、東方より轉送した兵力を合して西部戰場に最後の大攻擊を行ひ、巴里を陷れて一擧に勝敗を決せんとした。こゝにおいて新たに聯合軍の總司令官となつたフォッシュ元帥は、諸般の準備を整へ、全軍を統帥して奮戰したから、流石の獨逸軍も遂に潰敗し、聯合軍はこれを追擊しつゝ攻勢に轉じ、次第に被征服地を奪還した。

ウイリヤム二世

兩共和國成立　この獨逸軍の潰敗は各方面に多大の影響を與へた。ブルガリヤと土耳古とは先づ休戰を約し、塞耳亞はその國土を回復し、次いで獨逸と墺太利・匈牙利に革命が起り、千九百十八年兩國の皇帝は相次いで帝位を去り、兩國とも民主的の共和國となり、匈牙利もまた墺太利から分離して獨立した。

ヴエルサイユ條約　革命後の獨逸の新政府は、內外の形勢の危險に瀕したことを知つて、千九百十七年十一月、聯合側の提出した休戰條約を認め、こゝに四年半に亘る大戰爭も、漸く終熄した。やがて英吉利、佛蘭西、伊太利、亞米利加合衆國日本の五大國以下、大戰に關係した諸國は千九百十九年四月巴里において、獨逸に對する講和條約を協定し、同年六月ヴエルサイユにて獨逸に調印せしめた。かくて墺太利、ブルガリヤ、土耳古の三國に對する講和條約もまた相次いで調印され、茲に全く世界大戰の幕は閉ぢられたのである。

第三節　大戰後の列國

世界の改造　大戰後は、敗戰國が著しくその領土を縮小したことゝ、同一民族が結合し、獨立國家を作つたことによつて世界の情勢が非常に變化した。

先づ獨逸はアリサス、ロレーンスの二州を佛蘭西に、西普魯西以下二三の地方を波蘭に割讓し、白耳義と丁抹とにもそれ〳〵若干の土地を分與し、且つ海外にあつた領土と、租借地との全部を失つた。また陸海軍は、その兵數を大いに制限されたのみならず巨額の償金を支辨することゝなつたのである。

次に墺太利は、一小共和國となつて舊領の三分の一に縮小せられ、匈牙利は分離獨立し、其他の地方は新興の諸國に分割された。これに反して伊太利は多年宿望のトレンチノ、トリエスト以下の土地を回復したが、土耳古はコンスタンチノープル附近の一小地方と、小亞細亞半島のみを領して、他の土地を失つた。

新興の七國　この外民族自決主義に基いて、新たに波蘭、チエツコ・スロヴアキヤ、ユーゴー・スラヴイヤ、芬蘭、エストニヤ、ラドヴイヤ、リトワニヤなどの諸國が創立された。

統治委任諸地方　英吉利は埃及を保護國とする外パレスチナ、メソポタミヤ及び、阿弗利加にある獨逸領東阿弗利加の大部分、カルメン、トゴランドの一部を委任統治し、南阿弗利加聯邦は獨逸領南西阿弗利加を、墺太利聯邦は獨逸領ニューギニヤ及び、赤道以南にある太平洋上の獨逸領諸島を委任統治し、佛蘭西はシリヤ及び獨逸領カルメン、トゴランドの大部を委任統治することゝなり、我國は赤道以北の太平洋上にある獨逸領の諸島を委任統治し、且つ從來獨逸が山東半島に有した膠州灣の租借權及び鐵道、鑛山、海底電線などに關する一切の特權を獲得した。

國際聯盟　千九百二十年一月、大統領ウイルソンの主唱に基き巴里會議において國際聯盟が成立し、國際間の協力によつて戰爭を避け、世界の平和安寧を維持することゝし、英吉利、佛蘭西、伊太利、日本などを始め、五十餘ケ國がこれに加入した。

フイウメの所屬問題　講和成立後、伊太利はアドリヤ海に乘出して、フイウメを占領したから、ユーゴー・スラヴイヤはこれに反抗して紛擾を釀したが、結局兩國の協定に基き千九百二十四年伊太利がこれを併合することゝなつた。土耳古はセーヴル條約で多大の打擊を受けたから、國民黨の領袖ケマル・パシヤは千九百二十年アンゴラに據つてこの條約に大修正を加へ、且つ希臘が亞細亞土耳古に領土を擴張することに抗議して出兵し、千九百二十二年希臘軍を破つた。間もなく佛蘭西の仲裁によつて休戰し、關係諸國の間にローザンヌ條約を結んで平和を克復した。

ンソルイウ

土耳古共和政體の成立　この條約によつて土耳古は稍やその領土を擴張し、領土的にも民族的にも統一した新國家を創立

したが、其後政府は民意を容れ、帝政を廢して共和政體とし、ケマル・パシヤを大統領に推し、回教教主を廢し、政治の改善と國力の回復に努力することになつた。

獨逸の賠償問題　獨逸の賠償金は六百六十億圓餘と決定されたが、財政困難を口實として、これが支拂の猶豫を懇請した。これに對し佛蘭西と白耳義はその不誠實を責め、千九百二十三年一月獨逸工業の中心地ルール地方を軍事的に占領した。英吉利と亞米利加合衆國はこれを遺憾とし、千九百二十四年佛蘭西、伊太利、白耳義などの諸國と倫敦で、ドーズ案に基く賠償金支拂法を協定し、獨逸をしてこれを採用せしめた。そのため佛蘭西と白耳義の聯合軍はルール地方を撤退してこれを獨逸に還し、これより正確に賠償年額を拂つてゐたが、やがてヤング案が成立して、ドーズ案に改正を加へ、賠償額を輕減した。

ロカルノ會議　其後英吉利、佛蘭西、白耳義、伊太利、獨逸、波蘭などの諸國は、スウイスのロカルノで會議を開き、互ひに國境の安全を保障し、一切の紛爭を仲裁裁判に附して、平和的に解決することを約した。これによつて佛蘭西と白耳義との兩國は、獨逸よりその國境を侵略される不安を一掃し、獨逸もまた列國の承認を得て、千九百二十六年正式に國際聯盟に加入し、共に歐羅巴の復舊に努力することゝなつた。

軍備縮小會議　大戰後各國間に、國民の負擔を輕減するため、軍備縮小の輿論が漸く高まつて來た。亞米利加合衆國の大統領ハーヂングは、英吉利、佛蘭西及び我國と交渉して、軍備制限會議を華盛頓に開き、更に白耳義、和蘭、葡萄牙及び支那の四國をも加へて、太平洋及び極東問題などを協議した。その結果、英吉利、佛蘭西、伊太利、亞米利加合衆國及び我國は、向後十個年間における主力艦建造の標準比率を定めたが、補助艦と陸軍兵力との制限について、異論をはさむものがあり、協定を見るに至らなかつた。またこの會議で、英吉利、佛蘭西、亞米利加合衆國及び我國は、十年間四國協約を結び、太平洋上の平和と現狀維持とを確保し、太平洋上の島嶼である屬地及び、領地に關する各自の權利を保持することを約し、同時に日英同盟の廢棄を公にした。一方支那に對しては、前記九國の間に條約を結び、支那の主權、獨立及び領土の保全を尊重することを約したが、千九百三十四年十二月我國は、世界の情勢に鑑みて是等の協約を廢棄し、帝國獨自の立場より國防を策することになつた。

倫敦軍縮會議　其後千九百二十七年ジュネーヴの第二回の軍備縮小會議は、佛蘭西、伊太利の兩國不參加のため、英吉利、亞米利加合衆國及び我國代表者の會議となつたが、巡洋艦、驅逐艦、潛水艦などの補助艦の制限つき意見の一致を缺いて遂に決裂した。また千九百三十年には倫敦において、英吉利、佛蘭西、伊太利、亞米利加合衆國及び我國の五國間に、軍備縮小會議が開催されたが、これまた英吉利、佛蘭西、伊太利の三國間に、補助艦の保有量制限を協定することは不可能であつたので、單に英吉利、亞米利加合衆國及び我國との三國間に、實質的の協定をなしたに過ぎなかつた。その後この會議は、千九百三十五年十二月より三度び倫敦において開かれたが、參加各國は我國の主張を容れなかつたので、我國は斷然海軍々縮會議より脱退するに至つた。

第四節　列强の現勢

英吉利　エドワード七世の歿後、英吉利ではジョージ五世が即位し、國務に忠實にして、國運の隆昌發展に全力を集中されたが、次のエドワード八世は、千九百三十七年シンプソン夫人問題のため退位し、皇弟がその後を襲ひ位に即いた。英吉利に於ける實際の政治は國王でなく、下院に多數を有する政黨が內閣を組織し、人民の意志を代表して執行してゐる。大戰後、民族主義が盛んになつてから、千九百二十二年には埃及の名義上の獨立を認め、また愛蘭を一つの自由國として英吉利帝國の自治領たることをも認めた。爾後海外の領土は次第に自主的に傾き、千九百二十六年の帝國會議で、海外の自治領は本國と對等の位置を占めることに決定し、最近印度が頻りに完全な自治權を得んとして烈しい運動を始めてゐる。

マクドナルド

佛蘭西　佛蘭西では大戰によつて破壞された經濟組織を建直すことは、非常に困難なことであつたが、ドーズ案に續いてヤング案が成立してから、獨逸より多額の賠償金が流入して資金が漸く潤澤となつて來たのと、佛蘭西貨幣の價格が安定したのとで、經濟界は次第に安定し、產業もまた徐々に發展するに至つた。その上ロカルノ條約によつて國境の安全が保障されたので、國運の發達は益々顯著となつたが、國際間には伊太利との對立があり、また獨逸の軍備再興に對して不安を

生じたので、露西亞と結び、一方波蘭とも對獨逸連衡を策してゐる。

獨逸　共和政體成立後、第一回の大統領に當選したエーベルトが千九百二十五年病歿したので、大戰當時から軍神と敬仰されてゐた、ヒンデンブルグ元帥が第二回の大統領に就任しドーズ案を認めて償金の支拂を約し、やがて金準備の新貨幣の發行によつて通貨を安定し、ルール地方の占領軍も、ライン地方の駐屯軍と相前後して撤退したので、經濟界は漸く活氣を呈するやうになつた。其後ロカルノの安全保障條約が調印され、獨逸が國際聯盟に加入してから、獨逸と佛蘭西の國際關係もまた改善せられ、更にヤング案の成立によつて賠償負擔額が大いに輕減されたから獨逸の再建は確實となつた。其後ヒットラーが國權を左右するに至り、ヴェルサイユ條約改訂の必要を說き、賠償金支拂の不可能を主張し、盛んに國粹主義運動を起し、ヴェルサイユ條約に反して陸海軍の再建設を斷行し、ルール地方に陸軍を進駐せしめる一方、我國と日獨防共協定を結んで暗に露佛に備へ、千九百三十八年三月には墺太利を併合した。

伊太利　伊太利は土地が瘠沃で、多くの農産物を産出するが、鐵、石炭、石油などの缺乏と財政の困難とで、戰後の産業は遲々として發達せず、職工の同盟罷業は各所に勃發し、勞働者の思想は次第に惡化した。かゝるときファシスト黨の領袖ムッソリーニが千九百二十二年宰相となり、國王ヴィクトル・エマニュエル三世を輔佐して獨裁政治を行ひ、外交方面では千九百二十四年フイウメを併合し、千九百二十七年にはアルバニヤとアビシニヤとの兩方面にその勢力を伸張し、千九百三十六年にはエチオピヤを征服し、頻りに國運の發展を圖つたが、千九百二十九年には羅馬法王と協約を結び、法王廳を獨立國として認め、千八百七十年以來の懸案を解決した。

ムッソリーニ

勞農露西亞　勞農政府の下に全露西亞の大小諸邦を聯合して、ソヴェート社會主義共和聯邦を組織してから、秩序の回復は顯著となつた。然かし共産主義に基く施設を、各方面に勵行せんとする企てと、全世界の赤化運動は共に失敗に終つたから、政府は漸次その態度を改め、千九百二十一年には新經濟政策を實施して、或程度に土地の私有と資本主義とを認めるやうになつた。これがため共産黨の間には分裂を生じたが、農村は著しく活氣を呈し、工業界もまた復活の曙光を見ることゝなつた。

かくてその內政が次第に整頓するに從ひ、諸外國の信用も漸次增進して、獨逸、伊太利、佛蘭西及び我國なども順次その獨立を認めて國交を回復した。政府は是等の諸國から外資を輸入し、數次の五ヶ年計畫を立て、無限の富源を開拓して産業の發展を計り、兼ねて軍備の充實を企てるに至つた。

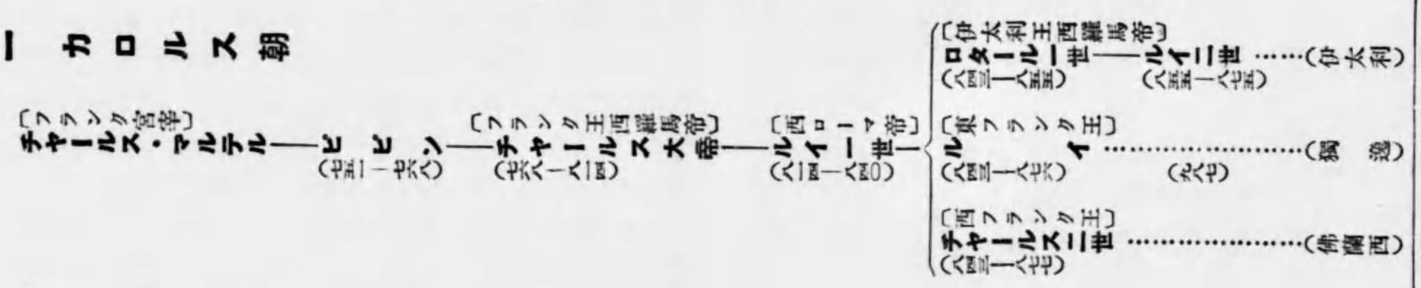
亞米利加合衆國　大統領ウィルソンは國際聯盟規約を作成し、これをヴェルサイユ講和條約の一部として採用せしめたが、本國ではこの規約は、上院議員の反對によつて承認されなかつた。其後に當選した大統領ハーヂングは、獨逸との間に單獨講和條約を結んで兩國間の國交を復し、更に華盛頓で軍備縮小會議を催して多大の功果を收め、次いで中部亞米利加の五共和國の會議を開いて互に攻爭することを中止せしめ、合衆國の勢力をこの方面にも伸張せしめることに成功した。

亞米利加は大戰勃發の後ち中立を守つてゐた間に、莫大な物資を兩交戰國側に供給して巨利を得たゝめ、從來の債務國は一轉して債權國となり、その上內地の資源は開發されて、産業は長足の進歩を遂げたから、最近では盛んに海外に投資するに至つた。

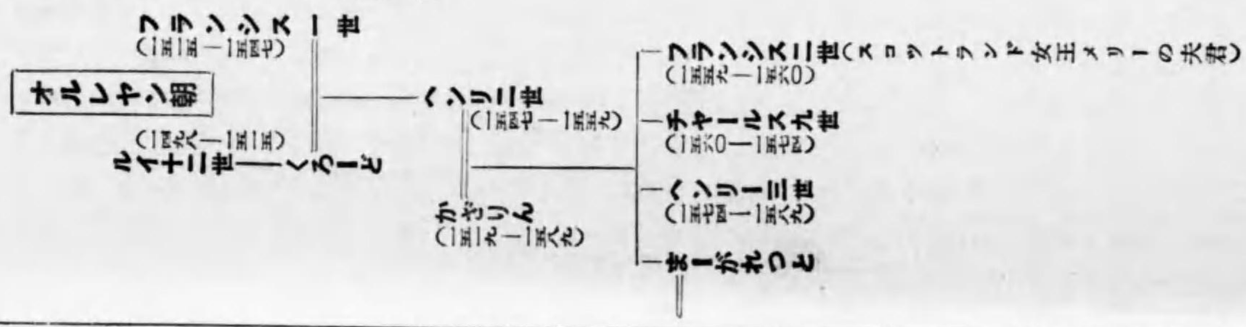
第六章　諸家系圖

（平假名は女性、括弧内は在位年代）

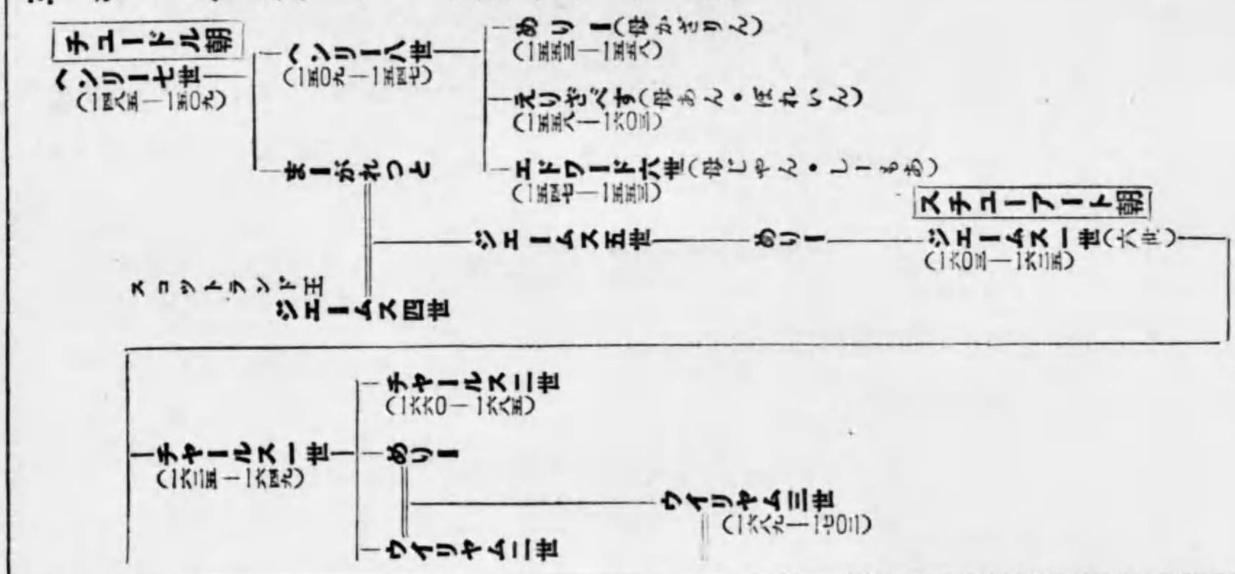
一　カロルス朝

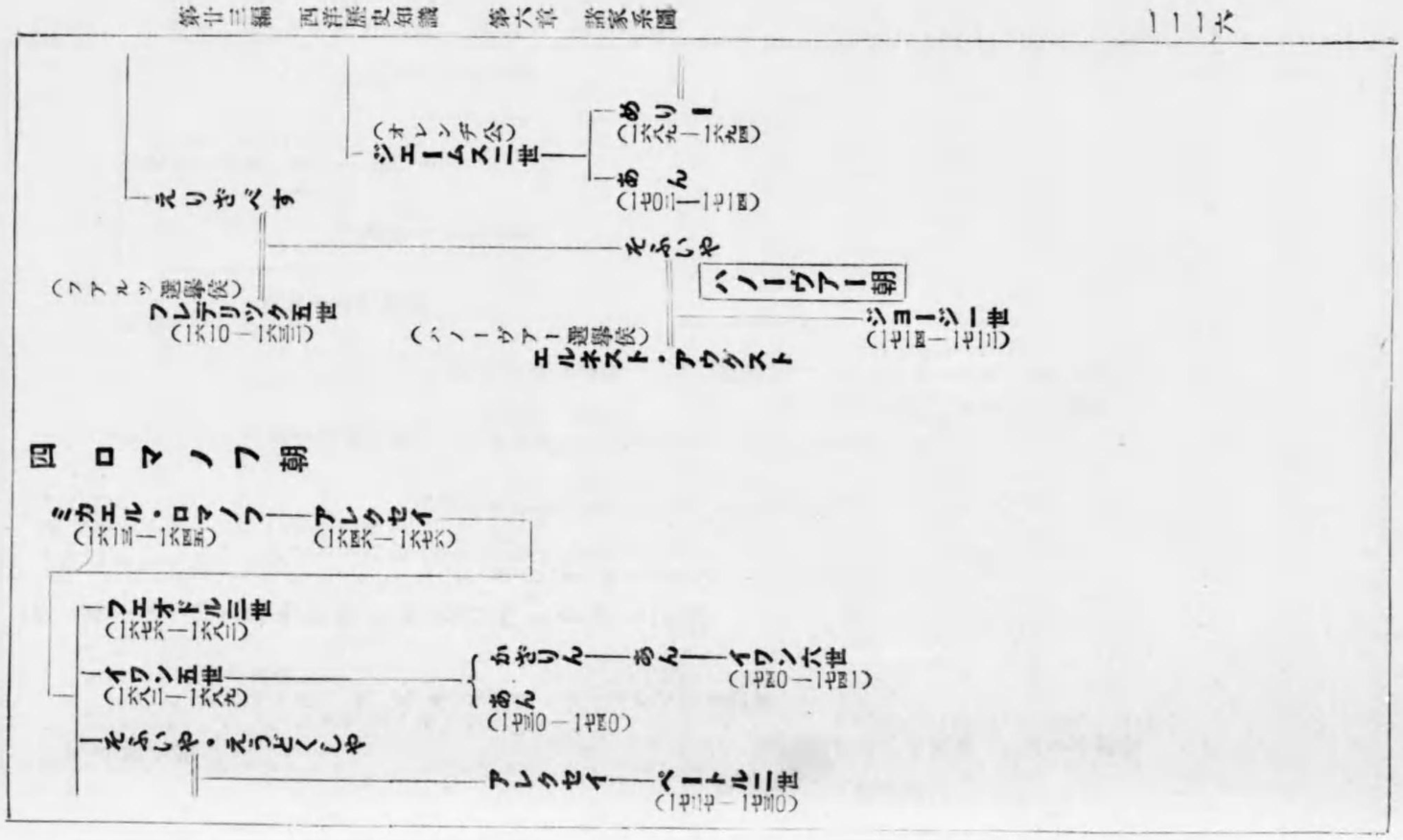


二　オルレヤン及びブルボン朝

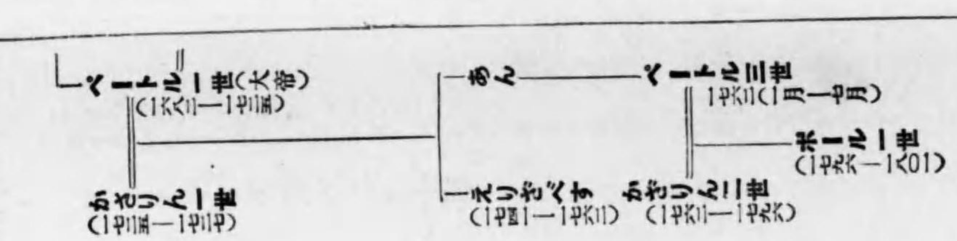


三　チードル・スチーアート及びくゝーウー三朝

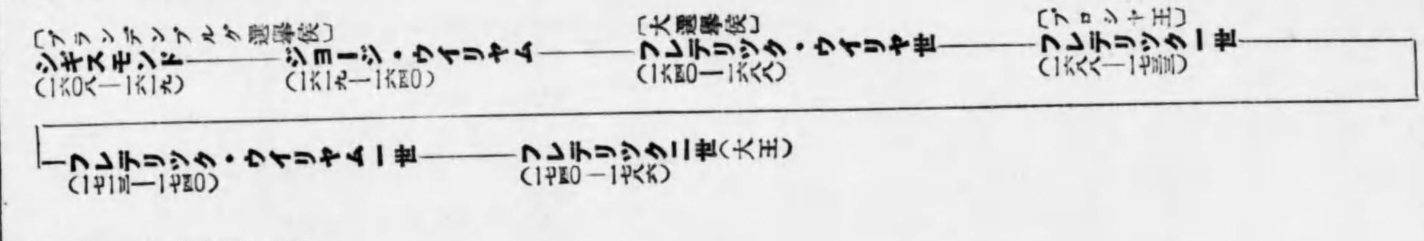




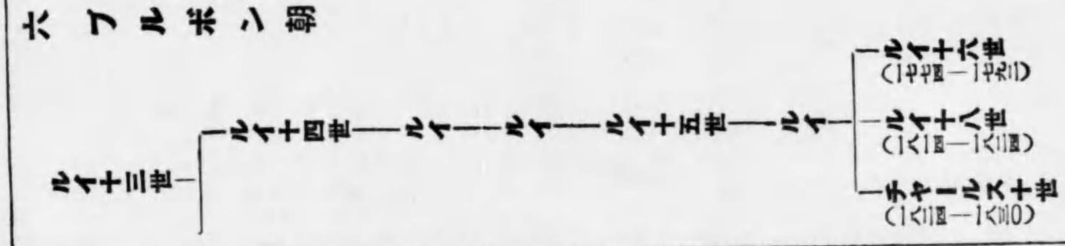
四　ロマノフ朝



五　ホーエンツオレルン家



六　ブルボン朝



ワイリシア〔オルレアン公〕……ルイ・フイリツプ（一七七〇―一八五〇）

七　ボナパルト朝

チャールス・ボナパルト＝れちちや

- ジヨセフ・ボナパルト〔イスパニヤ王〕
- ナポレオン一世＝まりや・るいざ
  - ナポレオン二世〔ローマ王〕一八一一―一八三二
- ルイ・ボナパルト〔オランダ王〕――ナポレオン三世（一八〇八―一八七三）
- かろりん（ナポリ王ミユラー妃）
- ジエローム・ボナパルト（ウエストフアリヤ王）

八　ハノーヴー及びウインソル朝

ジヨージ一世（一七一四―一七二七）――ジヨージ二世（一七二七―一七六〇）――フレデリツク皇太子――ジヨージ三世（一七六〇―一八一〇）

- ジヨージ四世（一八一〇―一八三〇）
- ウイリヤム四世（一八三〇―一八三七）
- エドワード――ゐくとりや（一八三七―一九〇一）

〔サクス・コーブルグ・ゴーダ家〕アルバート皇太子＝ゐくとりや（愛称ウイリヤム二世の母后）

- エドワード七世（一九〇一―一九一〇）――ジヨージ五世（一九一〇）――エドワード（ウエールス親王）（皇太子）
  ウインソル朝祖

九　サヴオイ家

チヤールス・アルバート（サルチニヤ王）（一七三一―一七四九）――ヴイクトル・エマニエル二世（イタリヤ王）（一八四九―一八七八）――ウンベルト一世（一八七八―一九〇〇）――ヴイクトル・エマニエル三世（一九〇〇―）

一〇　ハプスブルグ家

フランシス一世＝まりや・てれさ（ハプスブルグ家皇女）

- ジヨセフ二世（一七六五―一七九〇）
- レオポルド二世（一七九〇―一七九二）――フランシス一世（一七九二―一八〇六）（一八〇六―一八三五）（二重帝）（二世）
  - フエルデナンド一世（一八三五―一八四八）
  - チヤールス――フランシス・ジヨセフ（一八四八―一九一六）――チヤールス一世（一九一六―一九一八）

一一　ホーエンツレルン朝

プロシヤ王フレデリツク一世（一七〇一―一七一三）――フレデリツク・ウイリヤム一世（一七一三―一七四〇）

- フレデリツク二世（大王）（一七四〇―一七八六）
- アウグスツス・ウイリヤム――フレデリツク・ウイリヤム二世（一七八六―一七九七）

- フレデリック・ウイリヤム四世（一八四〇—一八六一）
- フレデリック・ウイリヤム三世（一七九七—一八四〇）
  - 獨帝ウイリヤム一世（一八六一—一八八八）
    - フレデリック三世（一八八八年三月—六月）
      - ウイリヤム二世（一八八八—一九一八）
  - しやーろつと（露帝ニコラス一世の妃）

一二　ロマノフ家

- ポール一世（一七九六—一八〇一）
  - アレクサンドル一世（一八〇一—一八二五）
  - ニコラス一世（一八二五—一八五五）
    - アレクサンドル二世（一八五五—一八八一）
      - アレクサンドル三世（一八八一—一八九四）
        - ニコラス二世（一八九四—一九一七）

一三　オスマントルコ帝

- マームード二世（一八〇八—一八三九）
  - アブヅル・メヂツド（一八三九—一八六一）
    - ムラツド五世（一八七六（六—八月））
    - アブヅル・アミド二世（一八七六—一九〇九）
    - マホメツト五世（一九〇九—一九一八）
    - マホメツト六世（一九一八—一九二三）
  - アブヅル・アジズ（一八六一—一八七六）

第廿四編　動物知識

緒言

英國の動物學者ダーウインによつて唱導された進化論に「現今地球上に生存する動物の種類は非常に多いが、是等の動物が現はれた當初時代には、極めて單純な形質を具へた少數のものに過ぎなかつた。それが地球の變遷や境遇の變化に適應し、動物體にも漸次變化を生じて、下等のものから順次に變遷進化した結果、今日の動物形態を呈するに至つたのである」とある。その進化の狀態は他の學問に讓るとして、こゝには進化の三要件について少しく述べる。

遺傳性　親の形態や性狀は遺傳性によつてその子孫に遺傳するから、その子孫はその種族に通ずる性質を有するのみならず生んだ親動物に特有な性質を與へるを通常とする。

變異性　遺傳性によつて親動物の有する特質は有するが、同一の親から生れる子でも、全然同一の形質を具へるとはいへない。其間常に多少の相異なるものがある。

子の數　動物の生む子の數は何れの動物でも多く生み、その種族をして健全に發達せしめてこれを維持するにある。即ち生存に適するものゝみが永存することになる。

吾人が日常飼養してゐる犬や馬、鷄や金魚などについて見るに、何れも非常に相異した體形を有してゐるものがあるが、これは決して偶然の事實ではない。その原因は飼養者が飼育方法に注意して、幾度かその飼育の選擇を繰返した結果である。是等の現象は要するに生物體が自然と人力によつて變遷發達する可能性を利用して、永い年月の間に人爲的淘汰を行つた結果であるといひ得る。

然し動物は唯人爲的淘汰のみで改良發達するものではない。即ち氣候や風土、周圍の狀態に應じて生存を全うするの外、生存に必要なパンを得んことにつとめ、更に又他からの危害を免れんがために、常に他の動物と激しい競爭が行はれる。これが即ち生存競爭なのである。

自然界に於ても生物は各自の生存を完うするために絶えず競爭が行はれ、適者は生存を完うし、不適者は劣敗の悲運に陷るのである。然し適者必ずしも强者でない。能く外界四圍の狀態に適した性質や形態（昆蟲の保護色、擬態など第三章第二節參

照）を有するものが生存競爭の優勝者となつて生存を完うするものである。即ち生存競爭といふ篩にかけて淘汰し、生存に適するものゝみを生存せしめるのである。これを稱して自然淘汰或は適者生存といはれてゐる。かくの如き徑路によつて變遷發達する諸動物につき少しく筆を染めんとするものである。

第一章　人生と動物

人生と動物との關係は最も密接で、吾人の生活上必要缺くべからざる有益な動物も多數に上るが、その反對に人類に對して害を與へる有害な動物も多數にある。この有益な動物や有害な動物については各々その部に於て述べてあるが、本章に於てはこれを總括して有益な點と有害な點を說明する。

第一節　哺乳類の利害

有益な點　哺乳類が人生に對して有益な點を擧げると、

一食用　牛、豚、馬、羊、兎、鹿、猪、鯨などの肉は食用に供され、牛、山羊などの乳汁は飲用となり、又牛脂や豚脂は食用に供されてゐる。

二衣服　羊、兎、アシミヤ山羊などの毛は洋服地の原料に用ひられ、狐、獅、臘虎、河獺、腽肭臍、豹、貂、熊などの毛皮は外套又は襟卷などに用ひられてゐる。

三使役　牛、馬、水牛、馴鹿、駱駝、印度象、犬などは農耕又は運搬に使役されてゐる。

四工藝　牛、馬、羊、山羊、象、犬、猫の革、牛、水牛、鹿、犀などの角、牛や馬の蹄、骨、象、河馬などの齒、鯨の骨、鬚などは諸工藝に用ひられてゐる。

又狸、鹿、羊、山羊、猫、狐、貂などの毛は毛筆用となり、豚や熊の毛は刷毛の材料に用ひられてゐる。

五香料　麝香鯨や抹香鯨からは麝香をとつて香料としてゐる。

六藥用　犀の角や熊の膽囊は藥用に供されてゐる。

七脂肪　牛、豚の脂肪は食用となり、鯨の脂肪は石鹼製造、機械油などに用ひられてゐる。

八肥料　哺乳類の糞尿、內臟、骨粉などは肥料として用ひられてゐる。

九愛翫　犬、猫、南京鼠、猿、モルモットなどは愛翫用として飼養されてゐる。

一〇醫學上利用　馬からはヂフテリアの血淸、牛からは痘苗を採り、兎、犬、猿、モルモットなどは醫學上研究材料に供されてゐる。

有害な點　哺乳類が人生に有害な點を擧げると、

一危害　猛獸類は人畜に危害を加へ、狐、鼬、河獺などは家畜家禽、養魚などを食し、鼠は器物を嚙み、鹿、野兎、猪などは農村を害する動物である。

二病原傳播　鼠はペスト、犬は狂犬病、豚や牛は寄生蟲を傳播せしめ頗る有害な動物である。

第二節　鳥類の利害

有益な點　鳥類が人生に對して有益な點を擧げると、

一食用　鷄、家鴨、七面鳥、雉、山鳥、鴨、鶉、雁、鳴、鳩などの肉は食用に供され、又鷄、家鴨、鶉などの卵も食用とされてゐる。

二裝飾　鴕鳥、孔雀などの羽毛は裝飾に用ひられてゐる。

三肥料　海鳥類の糞の堆積して層をなしたるものは肥料として用ひられてゐる。

四通信　傳書鳩は通信用として軍事上頗る重要な位置を占めてゐる。

五愛翫　鶯、孔雀、駒鳥、金絲鳥、鸚鵡などは家庭の愛翫用として飼養されてゐる。

六害蟲類の捕食　鳥類中益鳥は農村の害蟲を捕食するものが多い。

有害な點　鳥類の人生に有害な點を擧げると、

一鳥類は穀物や果實類を食するので、是等の收穫を減少せしめるものである。

二鳥類の中で猛禽類は益鳥類を襲つて捕食するものが多い。

第三節　魚類の利害

有益な點　魚類が人生に對して有益な點を擧げると、

一食用　魚肉の多くは食用となり、普通食用に供する主なる魚類は二百種に達してゐる。例へば鮪、鰹、鰯、鰤、鯉、鮎、鯖、鮭、鱈、鰊、鱸、鰯、鰈、鱚、鰻其他多くの魚類の肉は何れも食用とされてゐる。

又鰊の數の子、鮭の筋子、鱈の子なども食用に供されてゐる。

二工藝　鰯や鰊の油は魚油として諸工藝に用ひられ、鮫の皮は研磨用とされてゐる。

三藥用　鱈の肝臟や鮫の肝から肝油を採つて藥用としてゐる。

四肥料　鰯、鰊其他諸種の魚類の內臟や骨などは肥料に用ひられてゐる。

五愛翫　鯉、金魚、丁斑魚などは一般家庭に於て愛翫用として飼養されてゐる。

有害な點　魚類が人生に有害な點を擧げると、

一危害　鮫、鱶などは人に危害を加へることがある。

二中毒　鱈は腦毒を有するので、これを食すると中毒して死亡することがある。

第四節　節足動物の利害

有益な點　節足動物が人生に對して有益な點を擧げると、

一害蟲驅除　鬼蜘蛛、蠅取蜘蛛などは害蟲を捕食する。

二食用　伊勢蝦、車蝦、蟹、鬚蝦、蝦蛄などは食用に供されてゐる。

三肥料　藤壺、兜蟹、鬚蝦などは肥料として用ひられてゐる。

有害な點　節足動物の有害な點を擧げると、

一害蟲、百足、蠍などは人を螫す蟲類である。

二壁蝨、皮癬蟲、虱などは人の體に寄生するが、その多くは不潔より生ずるのである。

有益な點　軟體動物が人生に有益な點を擧げると、

一食用　烏賊、蛸、鮑、蠑螺、田螺、蛤、淺蜊、牡蠣、帆立貝、蛯貝、蜆などは食用とされてゐる。

二工藝裝飾細工　阿古屋貝、螺貝などで眞珠を造り、鮑貝、夜光貝、烏貝などで釦を造る。又寶貝、雲貝、千歲貝などに彫刻して裝飾品を造り、蛤、蝦蛄、帆立貝なども工藝裝飾品の材料とされてゐる。

三玩具　赤螺などの卵囊、寶貝などは玩具に造られてゐる。

有害な點　軟體動物が人生に有害な點を擧げると、

一蝸牛　蛞蝓などは植物を害するものである。

二宮入貝　豆田螺などは病蟲を宿してゐる。

第二章　動物と其分類

一口に動物といふが、鯨や象のやうに巨大なものもあり、蠅や蚊のやうに小さいものもある。又僅か一滴の水の中にも數萬の微小動物が居つて、顯微鏡によらなければ見えぬやうなものもある。是等の動物の種類は實に六十有餘萬の多きに上るといはれてゐる。この六十有餘萬の動物を捕へて、互に相似通つたものを集めつゝ色々の部類に區分したのが卽ち分類である。例へば兎や鷄、蛙や鮒などのやうに脊骨のある動物を脊椎動物といひ、これに對して飛蝗などのやうに脊骨のない動物を無脊椎動物といふのである。こゝに本文に入る前に左にその分類表を示して參考に供して置く。

脊椎動物

哺乳類
- 人類
  - 人。
- 猿類
  - 猿、猩々、狒々。
- 翼手類
  - 蝙蝠。
- 食肉類
  - 猫、犬、熊、獵虎、腦胴獸。
- 齧齒類
  - 鼠、兎。
- 長鼻類
  - 象。
- 有蹄類
  - 馬、牛、犀、豚、駱駝。
- 鯨類
  - 鯨、海豚。
- 食蟲類
  - 土龍、棘鼠。
- 貧齒類
  - 千歲鱶、樹獺、アルマヂロ。
- 有袋類
  - カンガール、子守鼠。
- 單孔類
  - 鴨嘴、棘土龍。
- 走禽類
  - 駝鳥、火喰鳥。
- 猛禽類
  - 鷲、鳶。

鳥類
- 攀禽類
  - 木啄、鸚鵡。
- 鳴禽類
  - 燕、雀。
- 食禽類
  - 鳩。
- 鷄類
  - 鷄、雉。
- 涉禽類
  - 鶴、鳴。
- 游禽類
  - 鴨、雁、ペリカン。

爬蟲類
- 蜥蜴類
  - 蜥蜴、蝘蜓。
- 蛇類
  - 黃頷蛇、玻布。
- 鱷類
  - 鱷。
- 龜類
  - 石龜、瑇瑁。

兩棲類
- 有尾類
  - 蠑螈。
- 無尾類
  - 蛙。

魚類
- 圓口類
  - 八目鰻。
- 板鰓類
  - 乾鮟、赤蝦。
- 硬鱗類
  - 鰹鮟。
- 肺魚類
  - セラトダス。
- 硬骨類
  - 鯉、鮒。

無脊椎動物
- 膜翅類
  - 蜜蜂、蟻。
- 鱗翅類
  - 蝶、蠶の蛾。
- 双翅類
  - 蠅、蚊。

節足動物
- 昆蟲類
  - 鞘翅類
  - 有吻類
  - 直翅類
  - 脈翅類
  - 無翅類
  - 蜘蛛類
  - 多足類
  - 甲殼類
  - 切蟲、蛭。
  - 蟬、浮塵子。
  - 飛蝗、螽斯。
  - 蜻蛉、白蟻。
  - 蠹魚、飛蟻。
  - 蜘蛛、蠍蟲。
  - 百足、馬陸、蚰蜒。
  - 蝦、蟹、宿蟹。

軟體動物
- 頭足類　烏賊、蛸、蛸船、鸚鵡螺。
- 腹足類　蝸牛、蝶螺。
- 斧足類　烏貝、蛤、淺蜊、牡蠣。

環形動物
- 環蟲類　蚯蚓、蛭、沙蟲。
- 圓蟲類　蛔蟲、蟯蟲。
- 扁蟲類　眞田蟲、ヂストマ。

棘皮動物
- 海膽類　海膽、文福茶釜。
- 海盤車類　海盤車、絲卷海盤車。
- 海百合類　海百合。
- 海鼠類　海鼠。
- 蜘蛛海盤車類　蜘蛛海盤車。

腔腸動物
- 珊瑚類　珊瑚樹、磯巾著。
- 水母類　水水母、備前水母。

海綿動物　浴海綿、偕老同穴、海絲瓜。
原生動物　アミーバ、夜光蟲、草履蟲、喇叭蟲、釣鐘蟲。

第三章　脊椎動物

第一節　哺乳類

哺乳類とは全身毛を以て被はれ、その體溫は外界の溫度の昇降に關係なく、各種類毎に一定してゐる動物のことである。この種の動物は多く胎生でその幼時は乳を以て哺育されるのを常とする。而して哺乳類の種類と效用とは次の如くである。

人類　人類は哺乳類の一種であるが、他の動物と異り、早くから森林生活を離れて平地の生活に馴れてゐる。從つてその頭腦の程度も動物中最も能く發達してゐるし、智能もまた最も優れてゐる。故に人類は他の動物の容易に企及し得ない言語を用ひて相互に思想を表現し得るのである。又早くから火を用ひることを知り、器具を製する術を發見したのである。その幼兒は父母に養はれて長い間家族生活を續けてゐるのである。この部門は人類學の範圍でないからこれで筆を擱くことにする。

赤毛猿

猿類　猿類は人類と最も緣の近い動物で亞細亞や阿弗利加、亞米利加の森林に棲み、昆蟲や果實などを常食としてゐる。猿類の體の構造はよく人類に似てゐるが、腦は頗る小さい。幼時は非常な勢ひで智慧が發達するが、成長するに從ひ鈍り終に停止してしまふのである。拇趾は拇指のやうに他の小趾から離れてゐて物がつかめるやうになつてゐる。

猿類の中で最も人類に近いものを類人猿と稱してゐる。阿弗利加の深山に棲む體の小さいゴリラや、ボルネオやスマトラに棲む赤褐色の猩々、怜悧な黑猩々や手長猿は何れも聲を發し、尾が無いので類人猿に屬してゐる。

類人猿以外の猿には何れも尾がある。亞細亞や阿弗利加に棲むものには臀に胝がある。日本猿は我國內地に棲む唯一の猿類であるが尾が頗る短い。而して臺灣には日本猿と異なる手足の黑い猿の種類がある。

かくの如く猿類は人類に似てゐるところから、學術其他の實驗に必要な場合は人類の代用として實驗用に供され、その心の働きなどを研究する材料になるものである。

翼手類　翼手類に屬するものは蝙蝠などの類である。蝙蝠は晝間は暗いところに頭を下にしてぶら下り夕方になると飛び出して昆蟲を捕へて常食としてゐる。手は長く伸び、指の間

蝙蝠

と脚と尾との間に飛膜があつて、鳥のやうに頗る輕快に飛び廻る動物である。又小笠原島や沖繩縣地方に行くと果實を常食としてゐる大蝙蝠がゐる。

食肉類　食肉類に屬するものは獅子、虎、豹、猫、犬、狐、狸、貂、腦脂獸、鼬などの類である。是等の動物の毛皮は一般に防寒用又は裝飾用として使用され、その牙は象牙の代用品として廣く歓迎されてゐる。

腦脂獸

腦脂獸は北海の島に多數群棲し、或る時期になると數千浬の南方に游ぎ下つてしまふ動物である。我國の海豹島は腦脂獸の棲息地として名高い。

齧齒類　齧齒類に屬するものは兎、鼠、栗鼠、鼯鼠、山荒、モルモットなどの類である。

モルモット

兎には野生の野兎と家畜としての飼兎とあり、飼兎はその性質が頗る溫順なので一般に愛玩されてゐる。而してその肉は兩兎とも食用に供され毛皮は加工して毛皮代用として使用されてゐる。

モルモットは南亞米利加の原產で、飼兎の如く一般に愛玩されてゐるが、その特長とするところは醫學用の實驗動物として重要視されてゐることである。

鼠は三歲の童兒もよく知る通り、人類に少からざる害を與へる動物であるから、絕對的驅除法を講じなければならぬ。殊に滿洲には、肺ペストを傳染する鼠に酷似した動物がゐるから、彼地から輸入される貨物に對しては相當の注意を拂はねばならぬ。

長鼻類　長鼻類に屬するものは象の如きである。象の牙は上顎の門齒の伸びたもので、齒質から成つてゐて琺瑯質がない。その鼻は長く伸びて手の役目をつとめ、水を飲むときなど一旦鼻に含んで、後ちこれを口に多すのである。然かしその幼兒は乳を飲むときも鼻を用ひないで口で吸つてゐる。象の種類には印度象と阿弗利加象の二種あり、その牙は美術工藝用材料として重要視されてゐることは一般の知るところである。

象

有蹄類　有蹄類に屬するものは、前肢と後肢の趺が長く伸びてその先端に蹄のあるのがその類であるが、是等の動物は一般に臼齒が複雜になつてゐて、これを奇蹄類と偶蹄類の二つに區分してゐる。

奇蹄類　奇蹄類に屬するものは馬、驢馬、ゼブラ（縞馬）、犀などの如く蹄の數が奇數になつてゐるものがその類である。

縞馬

馬には軍馬、駄馬等種々あるが一般に家畜として飼養せられ、その皮は鞣して革具を製し、毛は筆や刷毛などに用ひられ、蹄は鼈甲の代用品に使用されてゐる。又免疫性を得た馬の血液から血精を採つて醫療上必要缺くべからざるものとされてゐる。

蹄偶類　蹄偶類に屬するものは蹄が二つ若しくは四つあるものをいひ、更にこれを分けて、一旦食したものを再び口に戻して咀嚼し直す類のものを反芻類といひ、食したまゝで口に戻さぬ類のものを不反芻類といふ。

反芻類　反芻類に屬するものは牛や水牛、羊や山羊、鹿や馴鹿、麒麟や駱駝などの類である。

亞弗利加犀

犀は亞細亞や阿弗利加の熱帶地に產する動物で各肢に三本の趾があり、鼻の上に一本又は二本の角がある。

山羊

牛は古來より家畜として飼育されてゐるが、その使用目的によつて種々改良せられ、現今は乳用、肉用、役用などの品種がある。而してその牛乳は飲用又はバタ、チーズなどを造るに用ひ、皮は鞣して靴其他種々の革具材料にされてゐる。殊に厚い革は俗に象皮と稱して靴底に用ひられ、その脂肪からはバタの代用品、石鹼の原料などを採り、更にその蹄から膠を、仔牛からは痘苗を採るなど、その應用範圍は頗る廣汎である。

水牛は支那の南部や臺灣、比律賓諸島に產し、啻に田畑の耕作に使用するのみならず、その角は長大であるから、印材其他工藝品材料とし、毛は織物の原料として重要である。更にその肉は食用に供し、革は手袋となり、腸は外科用の縫絲或ひは樂器の絃にするなどその用途は頗る廣い。

水牛

麒麟

山羊の乳はその成分が人乳に近いので、幼兒の飲用又はバタ、チーズなどを造るのに用ひられてゐる。

鹿の牡（牝は角がない）には角があるが、毎年落ちて更らに新らしく生えるのである。この角は全部が骨質で、その表面に皮を被つてゐるので、最初は袋角といひ、後ちにそれが磨れ落ちて骨質が露出するのである。

馴鹿は牡牝とも角がある。北寒地帶に棲み、冬は雪を掘つて地衣（蘚苔）を食し用途と

鹿

しては運搬用に使役さるゝのみならず、毛皮や肉、乳も共に賤く利用されてゐる。

駱駝

駱駝は乘用又は荷物の運搬用に利用されてゐる柔順な動物である。中央亞細亞產のものは背に瘤が二つあつて丈が低いが、阿弗利加產のものは丈が高くて瘤が一つしかない。その毛は織物材料として重要視さる。

不反芻類　不反芻類に屬するものは猪や豚、河馬などの類である。豚は猪の家畜化されたもので、その種類も色々あるが、主としてその肉は食用に、腿の肉はハムに、背肉と側肉はベーコンに、腸は腸詰（ソーセーヂ）に供せられ、尙はその毛は刷毛に用ひられる。

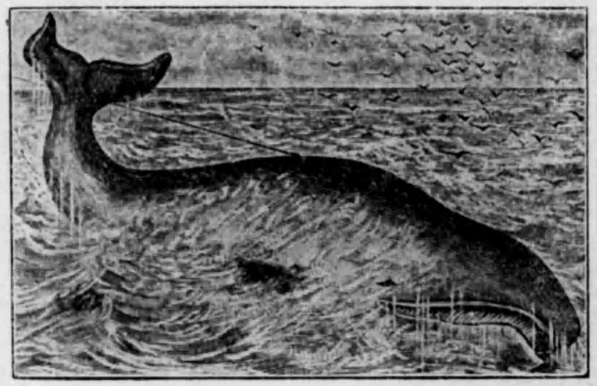
河馬は阿弗利加に產する巨大な動物であるが好んで水中に生活し、その牙は象牙代用として工藝材料にされてゐる。尙ほ海馬の異とするところはその汗が赤いことである。

鯨類　鯨は哺乳動物中最も大きい動物で、その巨大なものになると體內に象が入るのである。鯨類の先祖は小さい陸棲の食肉類であつたのが、漸次海中生活に馴れて、現在の如き巨大な體になつたのである。

鯨の體は魚形をなし、頭は頗る大きいが首がない。前肢は鰭狀をなし後肢は終に退化し、而して尾は鰭の代用をもつとめてゐる。皮膚には毛がないが、皮下には厚い脂肪の層があつて、南極地方の氷海に棲息しながら一定の體溫を保つて居り、その兒に對しては頗る愛情の深い動物である。

鯨の胎兒中には一般に齒があるが成長するに從ひ漸次齒を失ふものが出來る。而して齒のあるものを齒鯨類といひ、鬚のあるものを鬚鯨類と稱してゐる。

齒鯨類　齒鯨類に屬するものには鮒や抹香鯨がその類である。鮒は群をなして游ぐを常とし、その肉は食用に、脂肪は機械油に、皮は靴などを製するに用ひられてゐる。



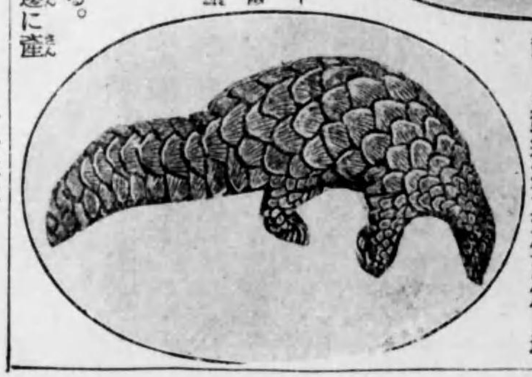
鯨

抹香鯨は體長二十メートル內外に達し、頭が頗る大きい。その頭の中に多量の脂肪を有し、これを精製して鯨腦油を採り、又腸の分泌物はこれを龍涎香といひ香料に用ひられてゐる。

鬚鯨類　鬚鯨類に屬するものは、蟬鯨や體長三十メートル內外に達する長鬚鯨などがこの類である。その肉は何れも食用に、脂肪は石鹼の原料に、鬚は細工物に用ひられてゐる。

昔は鯨を捕獲するには小船に乘つて、銛を手で投げ付けて殺したものであるが、近來は船の舳に取付けられた銃砲から銛を發射して捕獲するやうになつた。かくして捕獲した鯨は船內で直ちに處理する場合と、體內へ喞筒で空氣を吹き入れて膨らませたまま海面に浮べながら曳航する場合とある。

千歳鱈



土龍

食蟲類　食蟲類に屬するものは土龍や棘鼠などがその類である。土龍は眼の發達が不充分な爲、地中に隧道を掘つて棲息し昆蟲の幼蟲や蚯蚓などを捕へて常食にしてゐる動物である。前肢が短かくて掌は外方に向つてゐる。

棘鼠は朝鮮や滿洲、歐洲邊に產

カンガール

し、外敵に遇ふと棘を立て栗毬のやうになつて防ぐ動物である。

貧齒類　貧齒類に屬するものは食蟻獸（千歳蟻）などがその類である。食蟻獸は全身に鱗があり、好んで長い舌で蟻を食ふ動物で、多く中米や南米に棲息する。

有袋類　有袋類に屬するものはカンガールなどがその類である。カンガールは墺太利の產で、他の動物と異り牝の腹に袋があつて、その袋の中で愛兒を育てるのである。

單孔類　單孔類に屬するものは棘土龍や鴨嘴などがこの類である。此種のものは卵生の哺乳動物で、墺太利及びその附近の島嶼に棲息してゐる。

第二節　鳥類

鳥類は何人も知れる如く、一般に羽毛があつて肢は翼になつてゐる。何れも卵生で體溫は哺乳類の如く外界の溫度にかゝはらず常に一定し、その種類は頗る多く約二萬餘種といはれてゐる。鳥類は獸類の如く人を恐れないので、山野といはず海濱といはず、到る處に棲息して人目を樂しましてゐる動物である。而してその種類と效用とを述べると左の如くである。

駝鳥

走禽類　走禽類に屬するものは駝鳥や火喰鳥などの類である。是等の動物はすべて、その翼が極めて小さいか或はまた全然翼がないから飛ぶことが出來ない。

駝鳥は阿弗利加の產で脚に二趾ある。その羽毛が頗る美麗なところから一般に裝飾用として用ひられてゐるのみならず、他國へも移殖して飼養されてゐる。

火喰鳥は墺太利とニューネギヤの產で、頭に角質の突起ある動物である。

火食鳥

鷲

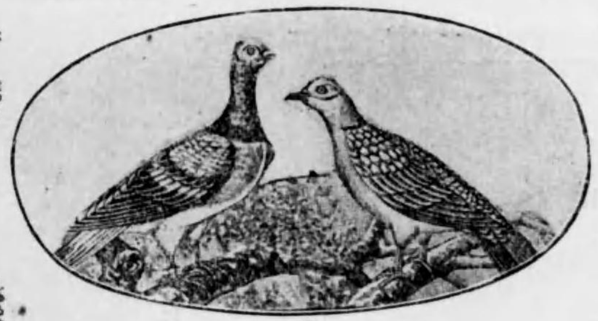
猛禽類　猛禽類に屬するものは鷲や鷹、鳶や梟、木兎などの類である。是等の動物はすべて嘴が鋭くて、爪は鈎狀をなし性質が猛勇で、好んで獸物や魚鳥などを捕へて常食としてゐる。而して猛禽類に屬する動物は晝間に活動するものと、夜間に活動するものとある。

鷲や鷹はこれを馴らして訓練すると、鳥獸をよく捕へるので、人類の事業を援ける上について非常な効果がある。

梟や木兎は晝間は樹木の洞穴などに隱れてゐて、夜間になると飛び出す鳥である。

梟

攀禽類　攀禽類に屬するものは木啄や杜鵑、鸚鵡や鸚哥などの



鳩

類である。是等の動物は一般に趾が二本づゝ前と後に向つてゐる。

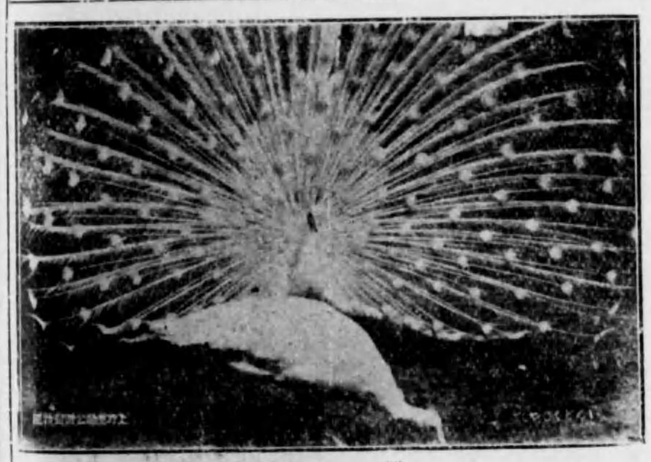
杜鵑は昆蟲を常食とし、自から巣を造らず、鶯や鶺鴒などの巣の中に産卵する鳥である。尙この鳥は他の鳥の喰はない毛蟲などを好んで喰ふので保護鳥となつてゐる。

鸚哥は傳染病の媒介をなす鳥であるから、輸入に際して十分の注意を要する。

鸚鵡は人眞似をする鳥として一般によく知られてゐる。

尙ほ木啄にはいろ〳〵種類がある。

鳴禽類　鳴禽類に屬するものは鶯や雲雀、雀や燕、金絲雀などの類である。是等の小鳥は何れも體が小さくて、可愛らしく囀るところから籠に飼養して愛翫され、人類の日常生活を慰する鳥である。



孔雀

南洋の天燕は海岸の絶壁に巣を造るが、その巣を支那では燕窩と稱し食用として頗る珍重されてゐる。近頃は倉の中で是等の鳥に巣(燕窩)を作らせるが、一つの巣を作るのに二十日もかゝる。この類の鳥は昆蟲を食するものが多いから、害蟲を驅除するに効がある。殊に四十雀の如きは十七時間中に四百七十餘回蟲を捕へて運ぶといはれてゐるほどである。

鳩類　家鳩は河原鳩から變化したもので、食用として珍重され、又籠に入れて愛玩される。傳書鳩は飛翔力と記憶力が良く、通信用として重用な役目に使はれてゐるが、一時間に五十乃至七十キロメートルを飛翔するのである。

鷄類　鷄類は鷄の外雉、山鳥、孔雀、七面鳥、鶉、金鷄、雷鳥などはこの類で、何れも脚が太く地を掻いて穀類や小蟲等を常食としてゐる。

鷄はもと野生のものを飼養し漸次改良されたもので、その品種は頗る多い。今日でも亞細亞の南部に野生のものがある。

七面鳥は亞米利加原産の野生種を歐洲で飼養改良されたもので肉は頗る美味である。

孔雀は印度の産で雄の尾羽が殊に美しく、白色の變種もある。

鶉は卵、肉共に食用として常用されてゐる。

丹頂鶴

雷鳥は高山に棲み夏は羽が褐色で爪は短いが冬になると白色に變じ爪は強大になるのである

涉禽類　涉禽類は鶴、鷺、鳴、水鷄、千鳥、都鳥などがこの類で、嘴、頸、脚は共に長くて淺い水を涉つて魚貝、小蟲などを捕へて常食としてゐる。

丹頂鶴は體は純白色で頭の頂が赤く、翼の先が黑くて尾のやうに見える。朝鮮、滿洲などに多く、地上に巣を造るのである。

鴨

遊禽類　遊禽類は雁、鴨、家鴨、鴛鴦、白鳥、鷗、鵜、ペリカン、ペンギンなどがこの類で、脚が短くて體の後方に位し、

跂間に蹼があつて良く游ぐ。尾端には脂腺があり、その脂を羽毛に塗るのである。この類には肉や卵を常食に供されるものが頗る多いのである。

鴨はその種類が非常に多く、北地に巣を營む候鳥で雛を背に乘せて飛び、その肉は頗る美味である。

家鴨は鴨を家禽化したもので、肉や卵は食用に供せられてゐる。

鴛鴦は雁を家禽化したもので、羽毛は綿の代りに布團に用ひ、卵や肉は家鴨と同樣食用に供されてゐる。

鷗は魚を常食とし海上で魚の群る處に集るので、鷗の群によつて魚群の所在を知ることが出來るのである。陸上では穀物や昆蟲などを食つてゐる。

ペリカン

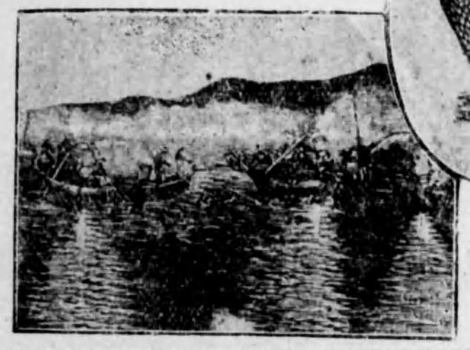
ペリカンハ嘴の下に大きな袋がありこれを用ひて魚を掬ひ捕へるのである。

曖國の海岸に群棲し稀に我國にも飛來することがある。

鵜はこれを訓練して魚類の捕獲用にしてゐる。皷阜縣長良川の鵜飼は有名である。

ペンギンは南極地方に群棲するもので、翼が短く鰭狀をなしてゐる。多くは水中に生活し、卵を孵化する時期になると氷雪の上に棲む鳥である。

鵜飼

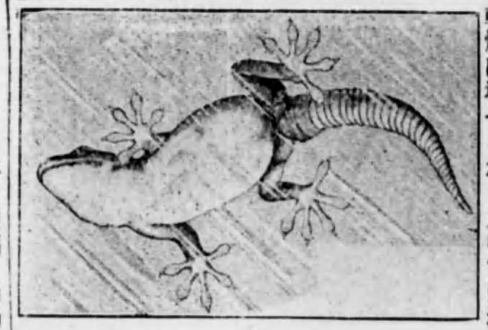


鳥類の保護　鳥類には人生に必要なものが多いので、政府は少數の種類を限り狩獵鳥としてその捕獲を許し、其他は法令で捕獲を禁止又は制限して保護を加へてゐる。又鳥類の多數集る處を禁獵區となし、全く狩獵を禁じてゐる處もある。又或

る時は巣箱を木に附けてその繁殖を計り、或は鳥の胃の中にある食物を檢め、それによつて鳥の好む植物を知り、その植物の種子を播いて鳥を集めたりすることもある。

第三節　爬蟲類

爬蟲類は表皮が變化して鱗となり、多くは卵生で體溫は外界の溫度に從つて變化する動物である。その大部分は陸棲で能く乾燥に堪へるが、水中で生活するものもある。次にその種類と效用とを述べる。



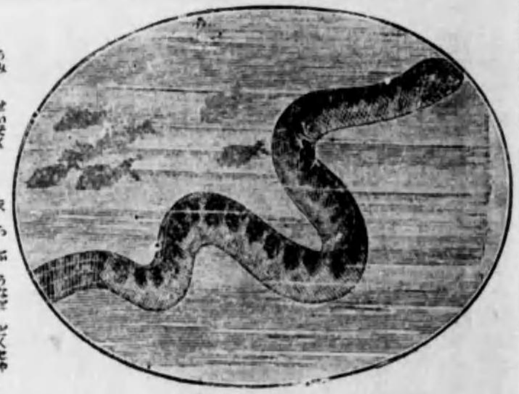
蜥蜴

蜥蜴類　蜥蜴類は蜥蜴、金蛇、蜥蜴等がこの類に屬する。

蜥蜴や金蛇の尾は切れやすいが、切れてもすぐ再生する。南洋や印度などに產する大蜥蜴は食用に供せられ、又皮は鞣して袋物に造られて居る。

蜥は趾端が扁平で裏に襞があつて吸盤の用をなし、壁でも天井でも自由自在に爬ひ廻るのである。

蛇類　蛇類には四肢がなく、陸棲のものは大きな腹鱗を動かして前進する。海中に棲むものは體が左右に扁平で腹鱗がなく體をうねらせて游ぐのである。無毒のものには錦蛇、黃紐蛇などがあり、毒蛇には蝮、波布、がらゝ蛇、眼鏡蛇などがある。



永良部鰻

海に棲息する永良部鰻も毒蛇の一種であるが、その毒は左程強くないが、多くの動物は蛇の毒に遭へば斃れるが、豚や猪はその毒に感染しないのである。蛇に咬まれたときは、直に傷口の少し上を布で固く卷いて、毒が血液に入つて心臟に行くのを防ぎ、次に小刀で傷口を切つて毒を出すのが最も良い療法である。

蛇は鼠を捕食するので、蛇が家に居れば鼠の害を防ぐこと